



サタンの反乱

第四部

サタンの世界システム、過去・現在・未来

Ichthys.com

ロバート・D・ルギンビル博士 著

サタンの反乱 第四部：

サタンの世界システム、過去・現在・未来

(オンラインでもご覧いただけます。www.ichthys.com)

ロバート・D・ルギンビル博士

シリーズの目次：サタンの反乱：艱難期への序章

- 第1部：サタンの反乱と墮落
- 第2部：創世記の空白期
- 第3部：人間の目的、創造と墮落
- 第4部：サタンの世界システム、過去・現在・未来
- 第5章：裁き、回復、置き換え

第4部の内容：

はじめに：サタンの反乱と墮落

I. 悪魔の領域におけるよそ者

- 1. 悪魔の世界の寄留者
- 2. 人生のむなしさ
- 3. この世の敵意
- 4. 戦場
- 5. 敵

II. 墮落後のサタンの立場

III. サタンの戦力編成

- 1. 現在の天界の休戦状態
- 2. 神の国対サタンの国
- 3. 聖なる天使たちの組織
- 4. 墮天使の組織
- 5. 悪霊に対する神の雇用
- 6. 天使の戦闘
- 7. 信じている人と信じていない人

IV. サタンが戦略に使う教義

- 1. 悪魔の嘘その1：「私には神様は必要ない」

2. 悪魔の嘘その 2:「私は神様と同じだ」
3. 悪魔の嘘その 3:「神様は私を必要としている」
4. 統合された悪魔の世界システム
5. 信じる者の視点

V. サタンの戦術的方法論

1. 悪魔の名前
2. 悪魔の影響力: 誘惑の戦術
3. 悪魔の攻撃
4. 悪魔の憑依
5. 信者の告発
6. レジスタンス(抵抗)

はじめに: エデンの園から追放されてアダムとエバが入った世界は、それまで当たり前のように享受していた完璧な環境とは、完全に異なっていました。何でもすぐに手に入る豊かさの代わりに、彼らは制限と不足と欠乏の世界に入ったのです。それは、何もしなくても必要なものがすぐに手に入る世界ではなく、生き延びるためには骨の折れる労働を要し、将来の不安がつきまとうものでした。苦しみ、汗をかき、涙を流し、悩みながら生きていくのです。また、最初の両親は、恐怖、嫉妬、敵意など、破壊的で罪深い感情を初めて経験しました。エデンでは当たり前のように共にあった家庭内の静けさは、怒り、不満、苦味、恨みに侵されることとなります。そして何年も経たないうちに、アダムとエバは、自分たちの子供が兄弟を殺害するのを目にします。そして、彼らとその限りある年月を生き抜いた終わりの虚しい最後の結末は、主なる神が宣言しておられたとおり、土に戻ることでした。死が彼らが悲しみの中で働いて努力してきたすべてのことに終止符を打つのです。

しかし、神は彼らを、すべての希望と主を失った地上の孤児にはされませんでした。最初の両親が死を免れることとなったのと同じ裁きの中で、神は彼らを欺いた蛇に、将来現れることになる女から出てくる子孫が、蛇の頭をいつか砕くために現れると宣告されたのです。また、彼らが考えた体の覆いの代わりに、神は優しく毛皮の衣を彼らに着せてくださいましたが、これは来るべきキリストの犠牲を予見させてくれるものです(第3部で取り上げました)。つまり、神はアダムとエバがエデンの園を出る前に、アダムとエバが見捨てた木に代わる新しい命の木とも言えるもの: つまり(動物の毛皮と「子孫」の預言において予示されていた)イエス・キリストの十字架を備えておられました。このようにして、アダムとエバは、彼らの子孫と共に、墮落によって失われた神との霊的な関係を回復する機会が備えられることとなりました。神ご自身が、罪を帳消しにする約束の犠牲を払ってくださり、悪魔が得ていた優位性は破壊され、十字架でサタンの頭を最初に砕き、歴史の結末にはサタンに最後の終止符を打つことになるのです。あと、私たちの最初の

両親には、無限の恵みを約束された主を信頼することによって、避けられない現実、人生の主要な問題となった「墓場」<死>から解放されることだけとなりました。

霊的な観点から見れば、私たちの人生は、約六千年前に私たちの最初の両親がエデンから旅立った時と基本的に変わりません。すべての人間の肝心な問題点は今でも同じです。つまり、罪と死の問題に対する神の解決策(御子イエス・キリスト)を信仰によって受け入れるかどうかを選択することです。そして、アダムとエバが信仰をもってこの世を生きていくために、この世に残されなければならなかったように、現代の私たちも、救いを受けた後、すぐに天の家に移されるのではなく、自分の信仰を証明し、それを成長させ、他の人も同じことをするのを助けるために、この世界に残るのです。しかし、この世界はエデンではありません。神に従う者、またイエス・キリストを信じる者として、この世界が自分の居場所とは思えず、安らぎを感じられないのは当然です。ここは、神の知識が満ちているわけでも、また神の御心が常になされている場所でもないからです。それどころか、私たちが通過するこの荒涼とした世界は、大体において悪しき者の影響下にあるのです([第一ヨハネ5章 19 節](#))。

I. 悪魔の領域におけるよそ者

1. 悪魔の世界の寄留者: アダムとエバは、主なる神によって迅速で強烈な裁きを下されなかったことに安堵したに違いありませんが、園から追い出された後に行くことになったエデンの東にある新しい世界の厳しい現実には、何の慰めにもならなかったことでしょう。そこは、楽園ではありませんでした。人生はもはや素晴らしいものではなく、特に失ったばかりの恵みとは対照的なものでした。すべてが欠陥だらけで、不思議なほど不満のつものところでした。痛み、窮乏、腐敗、そして何よりも神の不在が、エデンとは対照的であったことは明らかだったに違いありません。

私たちは最初の両親のように、エデンでの完璧さを現在の不完全な世界と比較することができるとは、エデンでの経験を持ち合わせていません。しかし苦難にいくら慣らされ、この悩みと涙の容赦ない世界は恵まれた環境であっても根っからの謹厳な生活をさえ切り裂く傾向があり、私たちの幸福と喜びのために神が設計された楽園ではないことを思い起こさせます。楽園どころかこれは悪魔の世界なのです。

悪魔の不幸な世界が、本質的に腐敗しているということは、人生の節目節目で明らかになる真理です。すべてが朽ち果てます。良いものは何も残らず、罪と悪が蔓延しています。そして、それまでの人生がどれほど幸福であったか、あるいは失望していたか失望させるようなものであったかにかかわらず、個々のすべての人生のそれほど遠くないところで、報酬と遺産として墓が待ち構えているのです。しかし、私たちが神を探求するならば、神だけがこの地上で本当に意味のある存在であるとわかります。

イエス・キリストだけが、私たちが彼を信じさえすれば、人生の無益さと死の宿命を解決してくれる方です。悪魔の世界の欺瞞的な虚栄心よりも、神を選びさえすれば、私たちに代わって御子を犠牲にするほど私たちが愛してくださった神と再会するこの人生の向こう側において、真の

意味、真の充実感、真の永続的な幸福を見出すのです。

それまでは、私たちの最初の両親であるアダムとエバのように、私たちはこの奇妙で異質な世界に取り残されています。ここでは、神のまばゆいばかりの現実はほとんど見えず、神を求める人には神の言葉の中でしか、ほとんど明らかにしてもらえません。それまでの間、私たちは、この世の見解や希望が無価値であり、さらには馬鹿げているとさえ思える中で、宿を持たないさすらい人として、より良いものを待ち望んでいるのです。

そして私たちは、信仰と信仰によって生み出される行動によって、自分達がこの世のものではないこと、この世に未練はないこと、そして自分が世界の中の一部ではないことを示しているのです。

この、人が住めるような所ではない悪魔の砂漠のような世界にあって、神だけは、ずっと私たちの関心の的であり、愛の対象であり続けます(参照:[歴代誌上 29 章 15 節](#); [詩篇 23 篇, 39 篇 12 節, 63 篇 1 節, 84 篇 5-7 節, 119 篇 19 節](#); [へブル 11 章 37-38 節, 11 章 13-16 節, 13 章 13-14 節](#); [第一ペテロ 1 章 1 節, 2 章 11 節](#))。

天では、あなたのほかに、だれを持つことができます。地上では、あなたのほかに私はだれをも望みません。([詩篇 73 篇 25 節](#) 新改訳Ⅲ)

2. 人生のむなしさ: 神様はアダムとエバに対する裁きの中で、園の外での人の基本的な人生の計画を示されました: それは、人は短い一生の間、汗を流し労苦して食を得、その後には塵に戻らなければならないこと([創世記 3 章 16-19 節](#))であり。困難に満ちた人生と避けられない死という呪いは、神が歴史そのものを終わらせたときにのみ取り除かれるということ([黙示録 22 章 3 節](#))です。

それまでの間は、苦しい出産、アザミやイバラの試練の人生、そして最後に土に戻るということ。このサイクルを、私たちは誰もが繰り返すことになっています。

伝道者は言う、空の空、空の空、いっさいは空である。([伝道の書 1 章 2 節](#))

多くの人、達成し得ないものを目指し努力します。桁外れの努力を重ねてもなお、達成は人間の力ではコントロールできるものでないからです。

わたしはまた日の下を見たが、必ずしも速い者が競走に勝つのではなく、強い者が戦いに勝つのもない。また賢い者がパンを得るのもなく、さとき者が富を得るのもない。また知識ある者が恵みを得るのもない。しかし時と災難はすべての人に臨む。([伝道の書 9 章 11 節](#))

自分が希望していたものを達成した人の中でも、この人生は一時的なものなので、そのうちの多くの人はその努力したものを失うことになります(参照:[イザヤ書 40 章 6-8 節](#); [マタイ 6 章 19-21 節](#); [ルカ 12 章 14-21 節, 12 章 33 節](#); [ヤコブ 1 章 10-11 節, 5 章 2-3 節](#); [第一ペテロ 1 章 24 節](#); [第二ペテロ 3 章 10-13 節](#); [第一ヨハネ 2 章 15-17 節](#))。

しかも、人は自分の時を知らない。悪い網にかかった魚のように、罠にかかった鳥のように、人の子らも、わざわいの時が突然彼らを襲うと罠にかかる。(伝道の書 9 章 12 節 新改訳IV)

また、人生をかけて努力したものを維持することができた人でも、最終的には死が、その貴重な成果をすべて奪ってしまいます。死こそ、すべての人間の業績をあざ笑うものです。

たとい人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか。(マタイ 16 章 26 節)

人は誰でも、最終的に命を失うことになります。この死すべき運命という包括的な問題について解決がなければ、どんな史上最高の業績を果たしても意味のないものになります。むしろ、偉業を成し遂げれば成し遂げるほど、死に伴う損失が大きくなるため、無意味であるとさえ言えるでしょう。貧しい人は死によって、命と共に貧しさだけを失いますが、裕福で成功した人は、この虚しい世俗の世界で称えられているものを失うことになります。死はすべての世俗的な業績を本質的に無意味なものにしてしまいます。

人が富を得るときも、その家の栄えが増し加わるときも、恐れてはならない。彼が死ぬときは何ひとつ携え行くことができず、その栄えも彼に従って下って行くことはないからである。(詩篇 49 篇 16-17 節)

私たちのすることには、何も新しいものはありません(伝道の書 1 章 10 節)。私たちのすることは何も、覚えられていることはないでしょう(伝道の書 1 章 11 節)。私たちの努力によって、その場所が自分の名前と呼ばれるようになっても、死は私たちがこの世で得たすべてのものを奪い去り(詩篇 49 篇 11 節後半)、私たちが旅立った後、その大切な財産がどうなるのかは、わかりません(伝道の書 2 章 17-21 節)。確かなものはなく、いつまでも続くものはありません。

このような状況の中で、主は私たちに、現世の空虚な報酬を超えて、神から来る天の永遠に続く真の報酬に目を向けるように命じられたのです。

あなたがたは自分のために、虫が食い、さびがつき、また、盗人らが押し入って盗み出すような地上に、宝をたくわえてはならない。むしろ自分のため、虫も食わず、さびもつかず、また、盗人らが押し入って盗み出すこともない天に、宝をたくわえなさい。あなたの宝のある所には、心もあるからである。(マタイ 6 章 19-21 節)

また、(正直に見るなら)神の視点から離れても、人生の労苦や虚しさを無視したり否定したりすることは難しいです(詩篇 39 篇 4-5 節, イザヤ書 40 章 6 節, ルカ 12 章 14-21 節, 12 章 33 節, ヤコブ 1 章 10-11 節, 5 章 2 節, 第一ペテロ 1 章 24 節, 第二ペテロ 3 章 10-13 節を参照)。

まことに人は影のように、さまよいます。まことに彼らはむなしい事のために騒ぎまわるのです。彼は積みたくわえるけれども、だれがそれを収めるかを知りません。(詩篇 39 篇 6 節)

テクノロジーと豊かさと余暇のある現代社会ほど、この真理がはっきりと現れている時代はなく、無気力、うつ病、自殺などの現象が急増する傾向にあります。本来、人間の生活に恵みをもたらすはずの現代の進歩が、かえって絶望的な結果をもたらしていることは、世俗的な観点からは矛盾しているように見えるかもしれませんが。しかし、聖書の視点から見ると、この相関関係は非常に納得のいくものです。

神なくしては、人生には希望はありません:(本来、人間の生活に影響を与えてきた)日々の必要物を求めて歩くことから解放されればされるほど、その絶望感が大きなものになると明らかに考えられるからです。聖書が指摘している驚くべきことは、こうした虚無感、この世の不信者にとって、より重圧的に感じられないということです。(これは、ひとたび神を拒絶すると、霊的な盲目状態に陥ることに起因する現象です)。

悪魔は人類をコントロールしようとして様々な方法を使います。人が人生の無益さを感じ、そのはかない人生の虚無感に対して永遠の解決策を求めようとすると、人類の関心を(できる限り)別の方向に向けさせることは、明らかに悪魔の手段です。

実際、何千年もの間、神から離れて無意味なものとなった人生において、人は本物の真実を見出そうとしたり、真実によって影響を受けないようにしたり、あるいは真実を完全に否定したりする努力をしてきました(以下の第IV章参照)。実際、人類は人生の辛さを和らげようと、楽しい娯楽や気晴らしを工夫したり発見しようとしてきましたが、それは無駄なことでした。

人生が真にどんなものであるかを、冷静に現実的に見ようとするなら、すべての人は、私たちがアダムから受け継いでいる罪ゆえに、死の苦しみがいつもつきまとっていることがわかります。(第一コリント 15 章 54-57 節)。

アダムとエバを裁くにあたり、神は言葉では言い表せない知恵を用いられました！そして、最後に肉体的な死だけではなく、痛みと苦勞を加えることによって、現生を越えたところに答えを見出すよう励まされたのです。

女から出る子孫(キリスト)と(毛皮の衣で予見された)キリストが備えられる罪のための犠牲についての約束を、彼らは熱心に受け止め、信じました。少なくとも、エデンの園での良い生活を後にした、園の外での生活の完全な無益さと苦難のコントラスト(対比)の中では、そうだったことでしょう。

神様は、私たちをこの残酷な世界の孤児にしたわけではありません。それどころか、その逆です。私たちのために死んで下さった方、すなわち私たちの主であり、救い主であるイエス・キリストを信じることによって、私たちが完全に神のもとに回復するための備えをして下さったのです。この人生の(ほんの一瞬、必要とする期間だけの)苦難と、神から離れることによる本質的な

無意味さは、実は神の恵みの一部であり、神が愛をもって私たちの視線を、目の前の苦渋の人生から、より良いものに向けさせ、求めるようにしてくださっているのです。

死という観点から見ると、(神から離れた)人生は無駄であり、無意味であり、むなしいものです。死は、すべての進歩、すべての達成、すべての富を破壊します。そして、どんなに進歩しても、達成しても、富を得ても、死を避けることはできないのです。

さらに、年月が経つと、死者への記憶はすべて消し去られます。そのため、人の記憶の中に、あるいは「人類全体に生じる意識」の中に「生き続ける」という神話は、か弱いクモの巣のようなもので、少し触れただけで壊れてしまう幻想にすぎません。死者が何世代にもわたって記憶されていたとしても、それは死者にとって何の慰めにもなりません。彼らの灯は消え、彼らはもういないというのが、世界中の全ての人にとっての現実です。

すべて生ける者に連なる者には望みがある。生ける犬は、死せるししにまさるからである。生きている者は死ぬべき事を知っている。しかし死者は何事をも知らない、また、もはや報いを受けることもない。その記憶に残る事がらさえも、ついに忘れられる。その愛も、憎しみも、ねたみも、すでに消えうせて、彼らはもはや日の下に行われるすべての事に、永久にかかわることがない。(伝道の書 9 章 4-6 節)

死者のための追悼の思いがあっても、それは彼らにとって何の利益ももたらしません。葬式や追悼は生きている者のためです。生きている人の人生は、この同じ視点(=死)から見て、エデンの完璧な環境と対比させると、ひどく挫折させられるような経験となります。なぜなら、太陽の下で行われるすべての労苦には、真に説得力のある目的がないからです。

人間のすべての労苦は、最終的には口に食べ物を入れるためですが、その口は決して満たされることはなく、その食欲も満たされることはありません(伝道の書 6 章 7 節)。人が苦労や痛みを耐えて努力しても、満足を与えてくれず、絶えず、達成されていないもの、手に入れることができないものに惹かれるのです。そして、そのようなものであっても、手にしてしまえば価値のないものになってしまいます。

お金が欲望の対象であるならば、いくらあってもそれは決して十分ではなく、富が目的であるならば、いくらあっても、それは満足させるのに十分ではありません(伝道の書 5 章 10 節)。富をため込むなら、それはあなたにとって無用の長物であり、楽しみのために使うなら、あなたはもはやそれを所有しないのです(伝道の書 5 章 11 節)。

また、労苦と努力によって富を得たとしても、富める者は安らかに眠ることができず、労苦して働く者は質素な食事でも安らかに眠ります(伝道の書 5 章 12 節)。

エデンの園から出た後は、労苦と苦痛と努力のやりくり算段の人生となりました。汗を流して労苦しなければ、私たちは食べていくことができなくなったのです。しかし、どんなに長い時間をかけて苦労し成功したとしても、永遠に死を免れることなどできませんし、永続的な満足を得ることもできません。このように人生の究極的な無意味さを考えれば、人類が歴史を通して次の聖句で言われている「<刹那的な>気晴らし」に身を投じてきたことも理解できます：

わたしたちは飲み食いしようではないか。あすもわからぬいのちなのだ。(第一コリント15章32節)

上記の世俗的な結論(永遠の命の希望がない場合の、完全に理に適うこととしてパウロが提示したものは、原則を簡潔に述べたものです。もし、死が避けられず、人生が本質的に退屈で無意味な労苦の連続であるならば、それを「乗り切る」ために、(ある種の)気晴らし以外にも、仕事や何かの達成感といった夢中にさせてくれるものがあります。人生の虚しさを紛らわせるものであれば、何でも「気晴らし」となってくれるものです。

私たち人間は、生まれてから死ぬまでの、この地上で過ごさなければならない間、創世記の呪いの下にあります。私たちはその間の時間を、仕事や人間関係、そして様々な楽しみや追求で満たします。時間つぶしをし、時間を無駄にし、人生の虚しさに襲われないように、必死になって時間を埋めようとします。

(直接的にも間接的にも)自分自身を幸せにすることは、不可能な目標で、それに向けた努力はむなしいものです。一生をかけて地底で宝探しをしようが、街角の居酒屋で日々を過ごそうが、究極の目的は「幸せ」であり、どちらがより愚かな人間であるかは誰にもわかりません。

後者の酒場での場合は、有頂天な気持ちも「ラストコール」で終止符を打たれてしまいますが、前者の場合、大成功を収めれば、苦労の逸脱に終止符が打たれ、金持ちになっても幸せにはなれないということがわかります(そもそもの動機となった、労苦を逸脱できるという妄想は取り去られることになります)。

私たちは楽しみを知らないのでしょうか？ 確かに知っています。人間が園から追放されて以来、人類の創意工夫の多くは娯楽の追及に費やされてきました。そして、ハイテクと豊かさに満ちた現代の西洋世界では、数千年前には想像もできなかった規模で楽しみや気晴らしを得ることができます。かつて、これほどまでに繁栄したことはなく、また、これほどまでに憂鬱に陥ったこともありませんでした。

人間は幸せを追求すればするほど、不幸になってきました。幸せを求めて努力すればするほど、幸せは簡単に手の届かないものになります。生活必需品の取得の緊急性がなくなればなるほど、私たちは落胆するようになりました。創世記の呪いである労働は、人生が無意味であるという厳しい現実から、私たちを効果的に遠ざけることができるものだったのです。働くこと(働くことによる必要物の取得)だけが人生に必要な要素であり、他の幸福の追求とは比べ物にならないほど満足のいく気晴らしです。

見よ、わたしが見たところの善かつ美なる事は、神から賜わった短い一生の間、食い、飲み、かつ日の下で労するすべての労苦によって、楽しみを得る事である。これがその分だからである。また神はすべての人に富と宝と、それを楽しむ力を与え、またその分を取らせ、その労苦によって楽しみを得させられる。これが神の賜物である。このような人は自分の生きる日のことを多く思わない。神は喜びをもって彼の心を満たされるからである。(伝道の書5章18-20節)

しかし、上記の最後の節が示すように、仕事も本質的には気晴らしです。やりがいがあり、時間もかかり、満足感のある仕事は、人生の無益さについて考える暇を取り去ります。日々が(無意味ではあっても)生産的に過ぎていくので、虚しさや無益さの問題が心に重くのしかかることはありません。神がいなければ、人類が日の下での無意味な毎日に望むことができる最善のことは、力を出し尽くして、生ける者に衣食住を提供するやりがいのある職業につくことであり、限られた生の現実を忘れていく心の状態です。つまり、死を意識せずに生きるための糧と快適さを追求し、取得しようとする動物のようになることが一番の望みなのです。

わたしはまた、人の子らについて心に言った、「神は彼らをためして、彼らに自分たちが獣にすぎないことを悟らせられるのである」と。人の子らに臨むところは獣にも臨むからである。すなわち一緒に彼らに臨み、これの死ぬように、彼も死ぬのである。彼らはみな同様の息をもっている。人は獣にまさるところがない。すべてのものは空だからである。みな一つ所に行く。皆ちりから出て、皆ちりに帰る。だれが知るか、人の子らの霊は上にのぼり、獣の霊は地にくだるか。それで、わたしは見た、人はその働きによって楽しむにこした事はない。これが彼の分だからである。だれが彼をつれていって、その後の、どうなるかを見させることができようか。(伝道の書 3 章 18-22 節)

クリスチャンの視点から見ると、人生は実に大きな意味を持ちます。人は生きている間にのみ、イエス・キリストに従うことを選ぶことができます。そして、神の無比の恵みと知恵の中で、人生の虚しさに襲われても、他のどんな解決策にまさって、私たちは神に向かいます。

クリスチャンには、人生の虚しさ、つまり神に関係のない人生のあらゆる事柄も、それについて理解し、感謝することは、より重要なこととなります。クリスチャンである私たちは、イエス・キリストによって神のもとに来たのですから、日々、イエス・キリストの中で成長し、他の人々がキリストに立ち返って同じように行動するのを助けることを使命としています。世俗的な生活の無意味さを認識し、世が追い求めている欲望の代わりにイエスに従うことを選んだ私たちにとって、「心の中でエジプトに戻らない」(使徒行伝 7 章 39 節)こと、キリストのために拒絶した「良い生活」への欲求に支配されないこと(出エジプトの最初の世代が悲惨な目に遭ったように)は、どれだけ重要であることでしょうか。(詩篇 78 篇と 106 篇; 第一コリント 10 章 1-5 節; ヘブル 3 章 16-17 節; ユダ 1 章 5 節)。

この人生は横切らなければならない砂漠のようなものですが、その向こう側には乳と蜜の流れる地、主ご自身が住まわれる地があります。その旅路には、試練や苦難がありますが(第二テモテへの手紙 3 章 12 節)、神は必ず、神に委ねる心を新たにしてくさし、よみがえらせ、満足させて下さるのです。

金銭を愛することをしないで、自分の持っているもので満足しなさい。主は、「わたしは、決してあなたを離れず、あなたを捨てない」と言われた。(ヘブル 13 章 5 節)

私たちクリスチャンは、天の市民権がこの世のすべての富よりも価値があるという確信に基づいて、バランス、方向性、真の優先順位を維持することが大切です：

しかし、わたしにとって[以前の神を信じない生活の中で]益であったこれらのものを、キリストのゆえに損と思うようになった。わたしは、更に進んで、わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、いっさいのものを損と思っている。キリストのゆえに、わたしはすべてを失ったが、それらのものを、ふん土のように思っている。それは、わたしがキリストを得るためであり、[モーセの]律法に[従うこと]による自分の義ではなく、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基く神からの義を受けて、キリストのうちに自分を見いだすようになるためである。(ピリピ 3 章 7-9 節)

クリスチャンである私たちは、まだこの悪魔の世界に生きています。主には私たちをここに残された目的があり、この地上では私たちの霊を脅かすものがあることを、完全に認識しておられました。私たちはこの世で生きていく上で、クリスチャンとしての方向性や勢いを保ち、この世が神の代わりに高めてしまった価値観や優先順位、欲望や願望に戻って行くことがないようにすることが大切です(ローマ 12 章 2 節; 第一ペテロ 4 章 3 節; 第二ペテロ 2 章 20-22 節)。

この世で生きていくためには、(この世における正当な喜びと満足を得るために)クリスチャンも働いたり食ったりする必要があります。クリスチャンは、家族関係を保ったり、世俗がリラックスや娯楽のために行っている多くの罪とは直接関係のない活動をするを禁じられているわけではありませんが、自分の主要な関係、すなわち、私たちの主である御子イエス・キリストへの信仰を通して、父なる神の家族の一員であることに直接関係のないあらゆる活動が、はかなく取るに足らないものであることを認識する必要があります。世界、特に現代の西欧諸国には、私たちの霊的成長を妨げる可能性のあるもの、つまり、神との関係を損なう可能性のある偶像で溢れています。

サタンは、自分の世界支配のシステムに、できるだけ多くの物質的な気晴らしを組み込んでいます(詳細は後述の第IV章を参照)。豊かさ、富の増加と普及、通信と技術は、ある視点から見ると、悪魔が人間を支配する上で非常に有益な要素です。

恐怖心は、悪魔が人間を操るための大きな要素であり、人間が幸福や安全のためにこれらのものを享受し、それに依存していればいるほど、それを失うことへの恐怖心が一種の束縛となり、悪魔はすぐにそれを利用します(原理は、ヘブル 2 章 14-15 節参照)。

私たちがこの世の楽しみ(必要なものも含めて)の奴隷にならないようにするためには、悪魔がよく知っているように、この世の本当の姿を十分に冷静に理解することが必要です。この世の本質的な虚しさ、その気晴らしや気晴らしの無意味さをしっかりと認識する必要があります。私たちは、人生のプレッシャーや厳しさ(喜びや楽しみも含めて)を、適切な視点で捉えることができなければなりません。

この世で大切なのは神であり、神は決して私たちを見捨てません。神を知り、神に仕えることが、私たちがここにいる理由です。それ以外のことは、単なる舞台背景に過ぎません。私たち

は、この世のものに喜びや楽しみを感じることなく、人生を過ごすことを求められているわけでも命じられているわけでもありません。また、私たちは、この世の圧力や問題を避けて、生涯を生きていくことはできません(特にクリスチャンとして)。

しかし、私たちが手放さなければならないのは、これらの余計な事柄であって、神ではありません。私たちは、神を「箱」に入れて、世間が重要だと見なすもの(しかし、キリスト教の観点からは、最終的には取るに足らないもの)を優先し、私たちを造り、私たちを贖って下さった方であり、私たちの主人であられる方をないがしろにしてはなりません。人生における「雑草」が高く伸びるのを許して、信仰の手入れを怠ると、必ず自分の霊的成長を危険にさらすことになります。必要に思えたりさえする雑草、良い雑草、悪い雑草、それが何であれ神の真理の光を遮るものは、神から与えられた使命を果たすためには、取り除けられなければなりません([マタイ 13 章](#)、[マルコ 4 章](#)、[ルカ 8 章](#)の種蒔きの例えを参照)。¹

皮肉なことに信者は、楽で豊かな時よりも、厳しい試練の時の方が霊的にうまくやっている傾向があります([申命記 8 章 10-20 節](#)参照)。クリスチャンの視点から見て、特に危険な「雑草」の一つは、「繁栄の雑草」です。この終末の日に、クリスチャンにとって特に重要なことは、同じように危険な以下の二つの思い込みを避けることです：

1) 豊かさは、神が祝福していることのしるしであり、したがって、もし私たちが祝福されているのであれば、私たちの霊的生活はうまくいっているに違いないという思い込みです。神は格別な物質的な祝福をくださることがあります。

例えば、アブラハムやダビデには豊かさを与えましたが、洗礼者ヨハネや主は、物質的に贅沢な生活をしていただけではありません。世界の歴史の中で、多くの未信者が特別な物質的豊かさを経験してきたことを考慮するとよいでしょう。ですから、豊かさが霊的な成熟の指標だと考えるのは間違いです。

この問題に関してもう一つ指摘しておく、この国<米国>に住んでいる恵まれた私たち(その結果、世界のほとんどの地域よりも高い物質的な生活水準を享受している)は、この点で生活が厳しい世界の他の地域にいる兄弟姉妹よりも、自動的に「優れた」クリスチャンではありません。

2) 霊的成長と神との豊かな関係の結果として、物質的な豊かさが伴うという思い込み(すなわち、「繁栄の福音<プロスペリティ・ゴスペル prosperity gospel>」)があります。事実はその反対であることを、前例からも言うことができます。(例えば、ヨブの試練やエリヤの窮乏を考えるなら)、霊的に成熟した人は、この点でより大きな試練に遭遇するということです。物質的な繁栄を過度に求めることは、人類によく付きまってしまうものですが、歴史の終わりに近づくほど、この問題はクリスチャンの霊的成長を脅かすものとなっていくことが予想されます。教会の最後の時代であるラオデキヤ時代には、富や豊かさを霊的な成功と同一視する傾向が、ますます強まるこ

¹ 種まきのたとえと霊的成長の問題についての詳細は、第 12 課から始まるペテロの手紙シリーズの # 1 2 以降のレッスンを参照のこと。

とが運命づけられています(黙示録 3 章 14-22 節)。

神は、物質的な繁栄も含めて、私たちのすべての祝福の源です。しかし、物質的な所有物だけに基づいて、自分が霊的に成熟していて安全だと誤って思い込むことは、非常に危険です。これには多くの理由がありますが、その中でも、物質的な繁栄が霊的な成熟のしるしであるとし、クリスチャンとしての歩みに自己満足してしまう傾向があまりにも多く見受けられます。²

わたしはあなたのわざを知っている。あなたは冷たくもなく、熱くもない。むしろ、冷たいか熱いかであってほしい。このように、熱くもなく、冷たくもなく、なまぬるいので、あなたを口から吐き出そう。あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、なんの不自由もないと[自分自身に]言っているが、実は、あなた自身がみじめな者、あわれむべき者、貧しい者、目の見えない者、裸な者であることに気がついていない。そこで、あなたに勧める。富む者となるために、わたしから火で精錬された金を買ひ、また、あなたの裸の恥をさらさないため身に着けるように、白い衣を買ひなさい。また、[物事を正しく]見えるようになるため、目にぬる目薬を買ひなさい。(黙示録 3 章 15-18 節)

この世は素晴らしい場所であり、様々な楽しみに満ちていて、それを楽しむためにここに置かれているという考え方は、明らかにキリスト教的ではありません。ここはエデンの園ではなく、(現在)悪魔の世界なので、私たちは自分の視点と優先順位を整理する必要があります。物質的な豊かさは、たとえそれが神に由来するものであっても、真の霊的な豊かさとはかけ離れており、誤った霊的な安心感をもたらしやすいものです。クリスチャンとしては、私たちの主であり師である方が提供する本物の「金」、すなわち主の真理の言葉を尊重するように気をつけなければなりません。

そして、この世のはかない金に過度に気を取られて、私たちと主との関係の基礎となる神の言葉の真理を損なうことは、危険であり、最終的には無意味であることを覚えておく必要があります。この問題は、物質的に繁栄しているこの教会の終わりの日の世界では、より重要な意味を持っています。(＜目に見えるものも＞確かに人間が生きていく上で必要ではあるものの)豊かさは霊性ではありません。物質的な成功によって、神と神の言葉への献身を怠るようになったら、そのような繁栄が本当に祝福であったかどうかを問う価値があります。

豊かさの中でののんびりとした生活は、クリスチャンの生活の規範でも目的でもありません。私たちが神と共に歩めば歩むほど、その歩みはサタンとその御使いたちからの反発を受けることとなります:

いったい、キリスト・イエスにあって信心深く生きようとする者は、みな、迫害を受ける。(第二テモテ 3 章 12 節)

² ヨハネの黙示録 2-3 章に登場する 7 つの教会と教会史の各時代との関係については、「来るべき患難期」シリーズの第二部 A で詳しく取り上げています。

このように、成長している信者は、サタンの反対に遭うことが予想されます。進歩を遂げている信者が、物質的な繁栄に与っているとしても、悪魔がその人のクリスチャンとしての歩みに、戦いを仕掛けてこないなどと考えるべきではありません：

イエスは言われた、「よく聞いておくがよい。だれでもわたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、もしくは畑を捨てた者は、必ずその百倍を受ける。すなわち、今この時代では家、兄弟、姉妹、母、子および畑を**迫害と共に**受け、また、きたるべき世では永遠の生命を受ける。[\(マルコ 10 章 29-30 節\)](#)

このように、クリスチャンの成熟と継続的な霊的進歩は、豊かさを伴うかもしれませんが、伴わないかもしれません(ただし、上記の箇所では、キリストの教会の一員であることの「豊かさ」を指しています)が、試練や苦難は確実に伴います。

愛する者たちよ。あなたがたを試みるために降りかかって来る火のような試練を、何か思いがけないことが起ったかのように驚きあやしむことなく、むしろ、キリストの苦しみに[本当に]あずかればあずかるほど、喜ぶがよい。それは、キリストの栄光が現れる際に、よろこびにあふれるためである。[\(第一ペテロ 4 章 12-13 節\)](#)

私たちが霊的な進歩を遂げようとする際、この世からの反対に遭遇するのは、例外ではなく普通のことです。そして、そのような試練にうまく対応することによって、私たちは、この世に対する神の視点の真実を理解するようになるのです。その報酬は永遠の報酬であり、決して色あせることなく奪われることのない祝福に比べれば、小さな結果であるということです(また、この永遠の大きな報酬を失ったり、損失を被ることに比べたら、<地上で受ける反対は小さなこと>)：

わたしの兄弟たちよ。あなたがたが、いろいろな試練に会った場合、それをむしろ非常に喜ばしいことと思いなさい。あなたがたの知っているとおりに、信仰がためされることによって、忍耐が生み出されるからである。だから、なんら欠点のない、完全な、でき上がった人となるように、その忍耐力を十分に働かせるがよい。[\(ヤコブ 1 章 2-4 節\)](#)

このように、この世の物質的な繁栄は、イエス・キリストに従うことを選んだ人にとっては、最終的にはほとんど本当の意味での価値はありません。試練と苦難の中で、物質的な豊かさがあってもなくても、私たちは主の優先順位を第一にすることを選んだのです。私たちは、この世が神として宣言する物質的な繁栄よりも、神とその御子を選んだのです：

だれも、ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛し、あるいは、一方に親しんで他方をうとんじるからである。あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない。[\(マタイ 6 章 24 節\)](#)

信じない者にとっても、問題は単純なものです。神を拒絶した(また神の存在さえ否定した)人は、現世に誤った重点を置き、<現生を>過度に重要視せざるを得ないのです。このような盲目、自己欺瞞、神についての真実の抑圧によって、信じない者にとって、世界とその現在の支配者が「神」の領域にまで引き上げられていくことになります。

神の怒りは、不義をもって真理をはばもうとする人間のあらゆる不信心と不義とに対して、天から啓示される。なぜなら、神について知りうる事がらは、[日毎の体験からも]彼らには明らかであり、神がそれを彼らに明らかにされたのである。神の見えない性質、すなわち、神の永遠の力と神性とは、天地創造このかた、被造物において知られていて、[本当に]明らかに認められるからである。したがって、彼らには弁解の余地がない。なぜなら、彼らは神を知っていながら、神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いは[この世の虚しさによって]むなしくなり、その無知な心は暗くなったからである。彼らは自ら知者と称しながら、愚かになり、不朽の神の栄光を変えて、朽ちる人間や鳥や獣や這うものの像に似せたのである。(ローマ 1 章 18-23 節)

これが、信じない人の霊的退化が始まる経緯です。上の聖句が明らかにしているように、誰もがほとんどの場合、人生の早い時期に創造主の存在を理解するようになります。世界の歴史上、大多数の人々が神を拒絶し、思考の中で神を他の対象に置き換え、神の存在を完全に否定するようになったとしても、この原則の真理は変わりません。いったん神が拒絶されると、究極の真理の代わりに、必然的に何らかの代替物が受け入れられるようになります(第二ペテロ 2 章 21-22 節; マタイ 7 章 6 節参照)。

このように、この世の関心事を神の代わりにしてしまう過程は、不信仰がたどることになる道です。キリストにあって神との関係を選ばずに、この世の虚栄心を選ぶことで生じる螺旋(らせん)下降に陥らないように、クリスチャンはこの点に関して間違った見解を持たないことが大切です。

そこで、わたしは主にあっておごそかに勧める。あなたがたは今後、異邦人がむなしい心で歩いているように歩いてはならない。彼らの知力は暗くなり、その内なる無知と心の硬化とにより、神のいのちから遠く離れ、自ら無感覚になって、ほしいままにあらゆる不潔な行いをして、放縦に身をゆだねている。(エペソ 4 章 17-19 節)

真理を拒み、神に背を向けると、頑なさ、盲目、自己欺瞞は避けられない結果となります。³そして、「この世の神」がこのように不信者の心を盲目にしてしまうと(第二コリント 4 章 4 節)、神への探求はすぐに幸福の探求に取って代わります。(主以外の)史上最も賢い人物であるソロモンは、どのような活動も、どのような成功も、どのような富の蓄積も、真の幸福をもたらすことはできず、その「風を追うような」ことは結局無意味であると言っています(伝道の書 1-2 章)。皮肉に

³ 不信心者の心を堅くする原理については、出エジプト記 14 章シリーズの第 2 部「パロの心を堅くする」を参照。

も、不信者がまがいものの幸福を求めて、神を否定するなら、(神とともに否定された)真の霊的な幸福という観点からも、人生は本当に無意味で無駄なものです。しかし矛盾しているようですが、この「どうにもならない無益さ」は、信じない人達がこのはかない人生で幸福と安心を得ようとする努力を、さらに強めることになるのです([マタイ6章32節](#)参照)。

信じない者のライフスタイルの特徴である、現生における安定と偽りの幸福の虚しい追求には、ゆがんだ論理があります。一つには、この二つの空想に基づいた実体のないゴールを達成しようとする努力や苦勞が、現実に迫っている死に対して思いを曇らせてしまうことです。

死という問題は、不信者にとっては、あまり綿密によく調べたりすることは不快なものです。(悪魔が何千年にもわたって広めてきた死に関する多くの嘘に騙されている場合は別として：後の第IV章を参照のこと)。死の問題を深く内省することは(キリストに解決を見い出せない人にとっては、人生の状況によっては、正当化されることもあります)、ほとんどの人にとっては負担です。

このように、私たちの極めて限られた寿命と、私たちの存在の脆弱さは、間違いなく誰にとっても最も差し迫った関心事であるにもかかわらず、ほとんど(そして愚かにも)無視されているのです。特に、イエス・キリストに永遠の命を見出していない人にとって、死は不快な話です。しかし、死は、信じない者が努力しているすべてのものをあざ笑っています。数日、数ヶ月、数年のうちに、死がそれらを奪い去ってしまうのであれば、業績や富に何の意味があるのでしょうか。

世界が安定していると仮定しても(これも不確かな話ですが)、人間はいつまでも生きることはないのです。富、名声、栄光、快樂、財産を求めて狂奔することが、園の外での人生の主要な真実、つまり瞬間に私たちは塵に帰してしまうので、これらすべてのものは虚しいという真実から不信者の注意をそらしてしまうことが多いのは、悲しく皮肉なことです。

神を恐れずにまがいものの幸福(と偽の安定)を追求しても、死の苦しみを取り除くことはできませんが、それに夢中になっている人にとっては、近づく死から気をそらすことはできます。不信者には、自分が思っている以上に死を恐れる理由があります。したがって、死が近づいているという現実から目をそらさせ、ありとあらゆる代用品によって、忙しく動き回っているのを見ても、驚くことではありません。

信じない者は、死すべき存在であるにもかかわらず、あたかも不死であるかのように振る舞いますが、それがその愚かさの本質です。彼は、自分が永遠に享受できるかのように富を蓄え、自分の死が近づいても衰えないかのように栄光、名声、功績を求め、墓が彼の楽しみを終わらせないかのように、あらゆる快樂に浸るのです。

聖書は、不信者が仕事や日毎の糧を必要なものとして楽しむことは、正当な楽しみであるとも告げています([伝道の書2章24-25節](#), [3章12-13節](#), [3章22節](#), [9章7-10節](#))。それによって、普段、死を過度に考えたり、また、まがいものの幸福や偽りの安定を必死になって探したりしないで過ごすようにです。つまり不信者が望める最善のことは、動物のように、死については意識しないということです。動物は食物を得、神が与えたものを楽しみ、死の日のことは考えません([伝道の書5章18-21節](#))。

しかし、神から離れて解決策を求めるすべての人のため、悪魔は、中毒性の強い薬物のように、また獲物を放さない動物のように、犠牲者をしっかりと嘘によって捕えます。悪魔の嘘とは、神から離れてもこの世で幸せになることができ、十分な努力をすれば、しっかりとその保証がされるというものです。

エデンの外の世界での人生が、本質的にどのようなものであるかを正直に評価しようとするすべての人にとって、死はこうした嘘を最初から完全にあざ笑うものであるということ、私たちは十分、明確にしてきたと思います。しかし、こうした事実にもかかわらず、人類の大多数が偽りの幸福、偽りの安定の罠に陥ってきました。神の真実を拒否した世界の歴史上のほとんどの人々は、本当の幸せがいつまでも続くという神話を喜んで受け入れてきました。この「神話の幸福」の具体的な姿は、もちろん様々な形態をとり、様々な方法で求められています、達成されることはありません。

この短い人生の中で、どんなに裕福になっても、有名になっても、成功しても、権力を得ても、いつも漠然とした未来形のままです。「もし私が___を手に入れたら/ をしたら/ やれたら、幸せになるだろう」。この空欄を埋めても、実際には達成されていない架空の幸福を手に入れるために必要な、他の空白が開くだけです。

このように、神から離れて幸せを求めてきた人間が、捉えることのできない幸せ、たどり着くことのないゴールに向かっているのだということにほとんど目覚めることがないという事実は、架空の幸せの麻薬がいかに強力であることを示しています。

先に述べたように、自分の仕事、家族、日毎の食物のために自分が関与するという、シンプルな生き方には、一定の満足感と安心感があります([詩篇 127 篇 3-5 節](#); [箴言 5 章 18 節](#); [伝道の書 9 章 7-10 節](#)) が、現実には、悪魔の世界では、自分のための夢のエデンの園は実現できません。

もちろん、神を人生の中心に据える信者にとって、(これまで見てきたように、)キリストの光の中で、永遠の栄光を期待して生きる人生には豊かな喜びがあります([ヒリピ 4 章 4 節](#); [ヤコブ 1 章 2-4 節](#)) が、すべての喜びを現世に見出さなければならないとする世俗的な見方は、これまで世界を奴隷にしてきた神なき神話です。

この異教の「架空の幸せ」の探求、つまり神から離れた人生での満足を求めることは、主に二つの理由でむなしいものです。1) 神から離れては、本当に満足できるものはほとんどない、2) 神から離れては、安定は決して保証されない。家族、労働、食事といった神から与えられた単純な喜びを超えて、富、名声、権力、快樂といった次々と現れる高みに到達することは、一時的には楽しませてくれるかもしれませんが、満腹の人にとってのごちそうのように、すぐにその魅力を失ってしまい、達成のいかがわしい無限サイクルへと幸せ神話の信奉者を駆り立てます。

- ・ 名声は衰える: 誰もいつまでも世間の注目を浴び続けることはできません。すべての栄光はつかの間のものであり、死ぬとすべては塵に変わります([伝道の書 1 章 11 節](#))。

- ・ 快樂はすぐに飽きてしまいます。涙を瓶の中にとっておいて永遠に味えるというような経験はありません。また、正確に繰り返したり、将来にわたって正確に繰り返すことのできるような体験はありません。今まで経験したことのない領域に楽しみを押し広げることができたとしても、そのような領域でさえも結局は人を失望させることとなります。体験した後には満足感が失われ、死によって快樂は完全に終わります。
- ・ 権力は、人間の限界によってどうしても制限されてしまいます(特に、[使徒 17 章 26-27 節](#))。その増大は、人の傲慢を養うかもしれませんが、傲慢の渴望は、底なしの海のように決して満たされることはありません。そして死は、最も強力な支配者をも押し流します。
- ・ 富も同様に、決して十分なものではありません。富を持てば持つほど、その所有者にとっては、最初の興奮の後には、名声、快樂、権力のすべてが最終的には永続的な満足をもたらさないことが明らかになります。おとぎ話のような幸福を保障してくれるはずの富は、増えれば増えるほど、喜びが得られず、そのフラストレーションは大きくなり、富の増大は、幸福を保障してくれると謳う「幸せの神話」のこの世の世俗的解決策であり、増大とともに喜びが得られないとフラストレーションは大きくなり、富はそれ自体悩みをもたらします([箴言 13 章 8 節](#); [伝道の書 5 章 10-15 節](#))。

前述の第二の点、すなわち、世俗的な人間が自分自身、自分の業績、自分の所有物についていつまでも確保できないという点は、同様に痛烈であり、おとぎ話で謳われているような幸福は、それが得られたように思えても、無益であるという本質的な事実を突きつけています。

名声は与えられ続けなければ消えていくものであり、名声の頂点に到達することは、人を転落させるだけであるという皮肉なものです。権力や富についても同様で、どちらも絶対的に存続させることはできません。世界の歴史を簡単に振り返ってみると、(より顕著で一般的な不安定要因のいくつかを挙げると)戦争、不況、革命、気候変動による大惨事などの不安定要素が、多くの支配者を退位させ、多くの大富豪を困窮させてきたことは、はっきりとわかります。

人はその時を知らない。魚がわざわいの網にかかり、鳥がわなにかかるように、人の子らもわざわいの時が突然彼らに臨む時、それにかかるのである。([伝道の書 9 章 12 節](#))

富を得ようと苦勞してはならない、かしく思いとどまるがよい。あなたの目をそれにとめると、それはない、富はたちまち自ら翼を生じて、わしのように天に飛び去るからだ。([箴言 23 章 4-5 節](#))

金銭を好む者は金銭をもって満足しない。富を好む者は富を得て満足しない。これ(= 富を求めて奮闘すること)もまた空である。([伝道の書 5 章 10 節](#))

働く者は食べるのが少なくても多くても、快く眠る。しかし飽き足りるほどの富は、彼に眠ることをゆるさない。わたしは日の下に悲しむべき悪のあるのを見た。すなわち、富

はこれをたくわえるその持ち主に害を及ぼすことである。またその富は不幸な出来事によってうせ行くことである。それで、その人が子をもうけても、彼の手には何も残らない。(伝道の書 5 章 12-14 節)

富はその人のいのちの身代金である。しかし、貧しい者は脅しを聞くこともない。(箴言 13 章 8 節 新改訳IV)

快樂は富よりもさらにはかないものです。霧のように、つかみ取ることも保持することもできないので、それを繰り返して楽しめるように確保しようとしてもできません。もちろん、人類がこれまでに、よりエキゾチックで楽しい遊びを考案するために、膨大なエネルギーを費やしてこなかったわけではありませんが、このこと自体が、地上の快樂(これもまた、神に仕えるような単純なものを除いて)は、真の幸福や真の心の満足を与えることはできないという聖書の主張を支持するものです。もしそれらが満足を与えることができたのであれば、現在の西欧世界は歴史上最も幸せなはずでしょう。しかし、現実には、これほど多くの人々が精神的に完全に破綻し、その場の娛樂が過ぎ去った途端に完全な空虚感に襲われることなど、かつては見ることがありませんでした。これほど多くの憂鬱、多くの自殺者が起こり、世界のまがいものの楽しみを、かつてないほど極端に推し進めようとした場所も時代も今までありませんでした。確かに、人々は抱えきれない幸福の上に幸福を築いているのではなく、むしろ、発案を重ねるたびに前のものと同じように空虚になっているからです。

人の労苦は皆、その口のためである。しかしその食欲は満たされない。(伝道の書 6 章 7 節)

快樂、富、権力、名声、あるいはイエス・キリストの真理を離れたこの世の幸福を追求する他のどんな手立てであろうと、死は最終的にそれらすべてをあざむく事になります：

彼は母の胎から出てきたように、すなわち裸で出てきたように帰って行く。彼はその労苦によって得た何物をもその手に携え行くことができない。(伝道の書 5 章 15 節)

人は榮華のうちに[地上においていつまでも]長くとどまることはできない、滅びうせる獣にひとしい。(詩篇 49 篇 12 節)

死後の人生という確信に満ちた希望がもなく、結局死んでしまうというのなら、長生きして繁栄することに何の意味があるのでしょうか。長い人生と物質的な繁栄の経験は、不信心な人にとって、いよいよ訪れた時の死の打撃を本当に和らげることができるのでしょうか。長生きをして、富んだ状態で安らかに死んでいった人を見送る人達の哀悼の想いは軽減されるかもしれませんが、過去の経験がどんなに幸せなものであっても、すべてを失うことは、やはり受け入れるのは

辛いものでしょう。一般的に信仰を持たない人は、自分の死の可能性を無視する習慣がありますが、一つだけ確かなことは、どれだけの功績や富を築いても、避けられないものを防ぐことはできないということです。

わたしをしえたげる者の不義がわたしを取り囲む悩みの日に、どうして恐れなければならぬのか。彼らはおのが富をたのみ、そのたからの多いのを誇る人々である。まことに人はだれも[神の手から]自分をあがなうことはできない。そのいのちの価を神に払うことはできない。とこしえに生きながらえて、墓を見ないためにそのいのちをあがなうには、あまりに価高くて、それを満足に払うことができないからである。(詩篇49篇5-9節)

しかし、人間は他人の死という概念はいとわず受け入れる一方で、自分の人生を見つめるときには、自分はいつまでも死なないというような感覚、より正確に言えば、死を受け入れるということは、死の瞬間まで先延ばしにすることが普通です。

「他人事」では不安が少ないように、死という事態も、実際に人生を終えるまでは、常に他人事なのです(死に直面して、終わりある人生を熟考や再検討しても、言うまでもなく遅すぎます)。莫大な富は、避けられないことを先延ばしにするのに役立つかもしれませんが(少なくとも人々はそう考えているようです)、私たちが自分の命や人にどんな細心の注意を払ったとしても、稼ぐことができたと思った時間は笑えるほど短いものです(マタイ6章27節)。

このように、人間がいかにはかないものであるかが人生の主要な教訓であるにもかかわらず、人は自分のための架空のエデンの園が達成されるまで、富や業績を追い求め続け、その短い瞬間が永遠に続くかのように、自分の利益や自分自身を守ろうとし続けるのです。

しかし信仰を持たない人にとっては、復活の希望がない中で、空虚な幸福感を達成し、維持しようという望みが、聖なる究極の目的であり続けるのです。それは、真鍮(しんちゅう)の指輪をわずかな時間でも手にするなら、死の痛みを和らげることができるという、むなしい望みを抱くようなものです。

世の中で評価されている目標や願望を達成することは、人生の辛くてはかない性質に対して麻薬のように作用するかもしれませんが、すべての麻薬のように、努力や達成にはさらに大きな暗黒面があります。富や達成感が増すと、心配も増えます(マタイ13章22節参照)。

世の中の進歩というものは、この世の性質上、失われやすいものであり、細心の注意を払って知的に対応しようとしても、その本質的なもろさはどうしようもありません。このことは、虚構の幸福のための闘争にはまり込んだすべての人(特に、ある程度の成功を経験した人)を、なんでも失う可能性に対して、より過敏な状態にさせます。「失うことは、最初から持っていないよりも悪い」という考え方は、奴隷化効果、つまり麻薬依存と同じくらいの依存性を生み出します。成功者の人生を支配している失うことへの恐怖は、世俗的な成功を目指す人達の利得追及の欲求よりも、もっと強烈なものです。架空の幸福感の「耐性」(麻薬のように、新たな利得や成果を得るたびに、

その満足感は回数を重ねるごとに薄れていくという原理)も働いて⁴、失うことへの恐れは、無益なサイクルを絶えず加速させることとなります。⁵

このような人生の本質的な現実を正直に直視するなら、ソロモンのように「すべての事は人をうみ疲れさせる、人はこれを言いつくすことができない」(伝道の書1章8節前半)と容易に結論づけることができます。新しいものは何もありません(伝道の書1章9-10節)。永続するものはありません。もし橋を架けても、いずれ落ちる時がきます。もし命を救ったとしても、永遠に死を食い止めたわけではありません。今日の喜びやスリルは、明日あなたを支えることはできません。かつての達成を越えなくては気持ちが収まらなくなるのです。

(生活に必要なもの以上の)利益や達成は、最終的に他人の利益や達成に対する嫉妬や羨望が動機でないものはありません(伝道の書4章4節; 箴言14章30節後半参照)：もし金やダイヤモンドが泥のように豊富で誰でも所有できるなら、誰もそれらに価値を見出さず、欲しがることはないでしょう。しかし、所有することの喜びや体験することの楽しさは早くにも失われ、すぐに別の所有物や娯楽への貪欲に取って代わるものです。

新聞には毎日のように、金持ちや権力者、有名人の不幸な話が掲載されていますが、そのような教訓的な話を聞いても、人類は一向に同じ無駄な道を突き進むのを変えようとはしません：まずは他の人が持っているものを自分も持つことができさえすればいいのであって、どうにかして自分は同じ目にはならないと思うのです。

知識が増えれば増えるほど惨めになり(伝道の書1章18節)、医者や医療技術が増えれば増えるほど苦しみが増し、世界の富が増えれば増えるほど貧困が増し(伝道の書5章11節参照)、情報が増えれば増えるほど無知が支配するという、終わりのないサイクルが繰り返されているのです。

物質的に豊かになり、技術が進歩し、平和と安全が拡大すればするほど、私たちは自己満足に陥り、人生の本質的な無意味さや虚しさが無視されやすくなります。そして、神とその神聖な視点を失った不信者は、たいてい「わからず」じまいで、まるで時間の経過から遠ざかっていけるかのように、日々が過ぎ去っていく中で、まるで後ろ向きに未来へと転がり続け、死という究極の現実をただ表面的に捉えるだけで、真に向き合うことをしません。彼らは人生の雑事で一日を一杯にして、死の目が容赦なく近づいてきていることから気をうまく紛らわせるのです。

⁴ というのも、人がどんなに成功を自分の努力のおかげだと思おうとも (伝記 3:14; 9:11)、すべての達成において最も重要なのは、神の導きのもとでの「時と状況」という要素だからです。

⁵ ソロモンは、これまで生きてきた中で最も賢い罪人であり、快樂を探求するためのより多くの手段を持ち、個人的な業績において、後にも先にも生きていた誰よりも多くの成功を取めた人物ですが、どんなレベルの進歩や繁栄も、この根本的な方程式を変えることはないことを明確に示しています (伝道の書参照)。

誰もが死にます。この言葉はありふれているようでいて、とても深いものです。アダムの罪の結果として、私たちが受けた共通の遺産であるこの基本的な人生の意味とその結果を、世界が必死になって無視しようとする要因があるのです。人類は何千年もの間、この単純な真実に対して心を硬くし、貴重な時間の大半を、生命の基本原理である「死」を完全に否定することに費やしてきました。この点では、信仰を持たない人は動物とそれほど変わりありません。自分の避けられない恐ろしい運命を前もって知り、自分の死を意識したからといって、何も良いことはないというわけですから。

アダムとエバによってルールは変わってしまいました。墮落以前は、どんな快樂も繰り返すことができ、達成された仕事は永続し、どんな達成感も永遠に続き、いつまでも楽しむことができました。しかし、彼らの子孫はそうではありません。何をしても、何を手に入れても、何を成し遂げても、最終的には塵となり、私たちのすべての業績に先んじて私たち自身が先に墓に収まることは確かです。

死が私たちが(そして私たちの行いを)あざけることは、神の計り知れない恵みの一部であるという深い意味があります。もし神が創世記3章で私たちの最初の両親に対して裁きを即座に執行していたら、悔い改める機会はなかったでしょう。逆に、罪深い状態で命の木を食べ続けることが許されていたら、神に立ち返るきっかけはなかったでしょう。悔い改めて、イエス・キリストへの信仰による救いと永遠の命という神の恵みの提供をつかむ機会と動機は、限られた寿命の人生においてしか得られないのです。

園の外での生活は困難であり、挫折を伴うものです。人が死に対して心を固くすることは可能ですが、すべての人生において束の間であっても、人生の無益さと死の必然性に対する唯一の解決策として、神は求め見出される存在としてご自身を明らかにして下さいます([ヨブ記 37 章 6-7 節](#), [詩篇 19 篇 1-4 節前半](#), [使徒行伝 17 章 26-28 節](#), [ローマ 1 章 18-22 節](#))。

わたしは神が人の子らに与えて、ほねおらせられる仕事を見た。神のなされることは皆その[限られた]時にかなって美しい。神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。[神はそうされたのに]それでもなお、人は神のなされるわざを初めから終わりまで見きわめることはできない。(伝道の書 3 章 10-11 節)

全人類の受け継ぐ祝福は、人生のはかなさを実感し(死すべき運命が裁かれる罪の確実な兆候)、永遠への渴望の中で、神を認め、私たちの主イエス・キリストの復活を通しての不死に導かれた際に、人が正しい反応することにかかっています。

わたしは知っている。すべて神がなされる事は永遠に変わることがなく、これに加えることも、これから取ることもできない。神がこのようにされるのは、人々が神の前に恐れをもつようになるためである。(伝道の書 3 章 14 節)

クリスチャンの視点から見ると、人生はまったく別なものです。なぜなら、人生には目的があるからです。私たちのこの世での時間は、無意味でも無駄でもありません。私たちは、神のしもべとして、キリストに従う者として、悪魔の世界にとどまっています。人が、自分の死すべき運命と罪深さを認識し、神を認め、主イエス・キリストを通して神に立ち返った時、世間が見ていた(あるいは世間が無視してきた)運命の死のその裏側に、自分の永遠の命があったことがわかるのです。私たちにとって、何をするにも究極的な意味がないのではなく、何をするにも大きな意義があることを知っています。

私たちは、イエスを信じる者として、神の道具として、キリストの体の一員として、神の御心を行うためにここにとどまっているのです。それは、他の人々が同じようにキリストを通して神に立ち返り、同じように神の言葉によって日々霊的に成長するためです。

しかし、主は仰せになった、「さあ、行きなさい。あの人は、異邦人たち、王たち、またイスラエルの子らにも、わたしの名を伝える器として、わたしが選んだ者である。(使徒行伝 9章 15節)

わたしは彼らに御言を与えましたが、世は彼らを憎みました。わたしが世のものでないように、彼らも世のものではないからです。わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることです。わたしが世のものでないように、彼らも世のものではありません。真理によって彼らを聖別して下さい。あなたの御言は真理であります。あなたがわたしを世につかわされたように、わたしも彼らを世につかわしました。また彼らが真理によって聖別されるように、彼らのためわたし自身を聖別いたします。(ヨハネ 5章 14-19節)

あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい。(第一コリント 6章 19-20節)

また、あなたがたの肢体を不義の武器として罪にささげてはならない。むしろ、死人の中から生かされた者として、自分自身を神にささげ、自分の肢体を義の武器として神にささげるがよい。(ローマ 6章 13節)

兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である。(ローマ 12章 1節)

クリスチャンだからといって、一生働くことと、その後には死が待ち構えているという二重の普遍的な呪いから免れるわけではありません。実際、悪魔は信者たちの霊的な進歩に激しく戦いを挑んでくるため、信仰を持たない人達に比べてこの世界は、信者にとってはエデンの園からか

け離れているものです。しかし、信仰を持たない人達とは対照的に、イエス・キリストに信仰を置いている人は、自分の人生が無駄なものではなく、非常に深い意味を持っていることを確信できます。私たちにとっては日毎の必要な糧のために働いて得る幸せは単に虚しい厳しい現実から逃れるだけのものではないのです。私たちが仕事、食事、家族を楽しむ時、人生の根本的な現実から目を逸らしているではありません。そうではなく、それは、死は終わりではなく始まりに過ぎず、<地上の営みも>等しく確かな永遠の命の光の下でなされているからなのです。

しかし、もっと大いなることは、イエス・キリストを信じて永遠の命を受けることで、未信者の人生の虚しさ、無益さ、真の意味での無意味さが完全にひっくり返るだけでなく、未信者が想像したどんな幸せよりも、信者としての喜びが勝る新しい人生の次元へと導かれる可能性です。

神は光であり、命であり、真の喜びであり、至福です。神にあって、神の一部、御子の体の一員として、神の霊で満たされた器として、私たちが見たり触れたりするすべての良いことや、私たちが考えたり話したり、行なったりするすべての正当なことは、神の関与の下、たとえ悩みや悲しみの中にあっても、この上ない喜びをもたらすことができるのです。私たちが成長すればするほど、主と親しく歩めば歩むほど、主の御言葉の種が私たちの心に豊かに蒔かれれば蒔かれるほど、私たちは内なる平安と喜び、すべてに打ち勝つ静かな幸福を見出すことができ、それはありきたりのもの、恐ろしいもの、はかない喜びといった、この世のどんな経験をも超越したものとなるのです。⁶

わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。(ヨハネ 14 章 27 節前半)

あなたがたは、主にあっていつも喜びなさい。繰り返して言うが、喜びなさい。(ペリピ 4 章 4 節)

あなたがたは、イエス・キリストを見たことはないが、彼を愛している。現在、見てはいないけれども、信じて、言葉につくせない、輝きにみちた喜びにあふれている。それは、信仰の結果なるたましいの[永遠の]救を得ているからである。(第一ペテロ 1 章 8-9 節)

私たちクリスチャンがこの悪魔の世界で経験できる幸せは、言葉に尽くせない幸せではありませんが、アダムとエバがエデンの園で享受した終わることのない至福の世界とは、かなり違うものです。

出産を前にした女性のように、私たちは現在の痛みをこらえながら、来るべき祝福を待ち望んでいるのです。人生の経験は時に耐え難いものですが、私たちの希望はじきに歓喜に変わるといって確信に満ちています(ヨハネ 16 章 21 節; イザヤ書 54 章 1 節, 60 章 1 節参照)。したがって、クリスチャン生活は「足し算」であり、「引き算」ではないのです。つまり、私たちも人類が引き継いでしまったすべての試練と苦難に遭います。それに加えて、悪魔の反対もあります; しか

⁶ 霊的成長とクリスチャンの歩みに関するより詳細な議論については、それぞれペテロの手紙シリーズ (特に#10 から#14)、および聖書の重要な教理 (Essential Doctrines of Bible) の第 6 部 B を参照してください: 周辺神学

し、もう一方では、私たちも仕事、食事、家族といった単純な喜び(究極的に無意味であるという煩わしさはありません)、それに加えて、永遠の命、永遠の報い、復活、主と永遠に共にあるという希望を享受することができるのです。

クリスチャンの生活は、禁欲主義でも快樂主義でもありません。私たちは、この世から完全に逃避しようとしているのではなく([第一コリント5章9-10節](#))、またこの世を利用できるだけ利用して堪能するためにいるのでもありません([第一コリント7章29-31節](#))。私たちは神のしもべとして、神の代理人としてここにいます。神の恵みと神の善意のおかげで、私たちはサタンの世界に広まった痛みと悲しみの中で、常に神の中に慰めを見出し、避難所と回復、希望と幸福を得ることができるのです([マタイ5章3-12節](#); [ルカ6章20-23節](#))。

どうか喜ばせてください。私たちが苦しめられた日々とわざわざにあった年月に応じて。(詩篇90篇15節 新改訳)

あなたがた貧しい人たちは、さいわいだ。神の国はあなたがたのものである。

あなたがたいま飢えている人たちは、さいわいだ。飽き足りようになるからである。

あなたがたいま泣いている人たちは、さいわいだ。笑うようになるからである。

人々があなたがたを憎むとき、また人の子のためにあなたがたを排斥し、ののしり、汚名を着せるときは、あなたがたはさいわいだ。

その日には喜びおどれ。見よ、天においてあなたがたの[将来]受ける[ことになる]報いは大きいのである。彼らの祖先も、預言者たちに対して同じことをしたのである。(ルカ6章20-23節)

クリスチャンの人生は、試練の荒野を通る長い旅です([使徒行伝14章22節](#))。私たちは、ヨルダンの向こう側に乳と蜜の流れる地があることを確信していた荒野のイスラエル人のように、約束の地に向かって行進しています。しかし、私たちが渡っているのは、文字通りの砂漠ではなく、悪魔の世界です。そこでは蛇やさそり、困難と不意打ちが様々な姿をとって待ち受けています。

しかし、そのような困難があっても、私たちは旅を楽しむことができます。私たちは、永遠の未来の光を受けながら一日一日を生き、この敵地での短い滞在期間中、神が私たちが養ってくださっていることを信頼し、将来の復活と報酬の日を確信して待ち望むことができます。

一日一日を大切にすることは、聖書に書かれていることではありますが、確かに継続するのは難しいことです([マタイ6章34節](#))。私たちは「計画を立てすぎて」(多くの場合、単なる心配事)、地上で起こっていることに対する神の視点を失ってしまうことがよくあります([ヤコブ4章13-17節](#)を参照)。結局のところ、神にあっては、一日も千年もあまり違いはないのです。(詩篇90篇4節; [第二ペテロ3章8-9節](#))。なぜなら神にとって不可能なことはなく、神は時間に左右されることもないからです。この世とその粗末な形態は、過ぎ去る過程にあるということを決して忘れてはいけません。

...この世の有様は過ぎ去るからである。(第一コリント7章 31 節)

世と世の欲とは過ぎ去る。(第一ヨハネ 2 章 17 節前半)

ですから、私たちは何としても、思いを何よりも神と私たちの主イエス・キリストと永遠に共にいることに集中し、不信者が陥る病的な魅惑や危険なサタンの世界との交渉に陥らないようにし、「寄留者の精神」を獲得し、維持する必要があります。

私たちは目に見えるものを超えて、将来成就する輝かしい未来を待ち望んだアブラハムの足跡を、日々たどっていく必要があります：

信仰によって、アブラハムは、[神から]受け継ぐべき地に出て行けとの召しをこうむった時、それに従い、[正確な]行く先を知らないで出て行った。信仰によって、他国にいるようにして約束の地に宿り、同じ約束を継ぐイサク、ヤコブと共に、幕屋に住んだ。彼は、ゆるがぬ土台の上に建てられた都を、待ち望んでいたのである。その都をもくろみ、また建てたのは、神である。(ヘブル 11 章 8-10 節)

これらの人はみな、信仰をいだいて死んだ。まだ約束のものは受けていなかったが、はるかにそれ[らの約束されたもの]を望み見て喜び、そして、地上で[生きている間は]は旅人であり寄留者であることを、自ら言いあらわした。そう[全世界に]言いあらわすことによって、彼らがふるさとを求めていることを示している。もし[その信仰者らが]その出てきた所のことを考えていたなら、帰る[十分な]機会があったであろう。しかし実際、彼らが望んでいたのは、[自分達が手に入れた場所よりも]もっと良い、天にあるふるさとであった。だから神は、彼らの神と呼ばれても、それを恥とはされなかった。事実、神は彼らのために、都を用意されていたのである。(ヘブル 11 章 13-16 節)

このような寄留者の足跡をたどるためには、私たちは日々、神の言葉の真理を通して成長し続け(聞き、学び、信じ、生き)、一日一日、一打一打を効果のあるものにするという理想に向かって成長する必要があります。

神様は、そうするように命じてくださっただけでなく、その手段と動機も与えてくださいました。なぜなら、私たちは、神が私たちに注いでくださった聖霊の力によって、この世のものをはるかに超える報酬、復活、そして神との永遠の関係が与えられる天の国に向かって進軍しているからです。

あなたがたは知らないのか。競技場で走る者は、みな走りをするが、賞を得る者はひとりだけである。あなたがたも、賞を得るように走りなさい。しかし、すべて競技をする者は、何ごとにも節制をする。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするが、わたしたちは朽ちない冠を得るためにそうするのである。そこで、わたしは目標のはっきりしないような走り方をせず、空を打つような拳闘はしない。すなわち、自分のからだを打ちたたいて服従させるのである。そうしないと、ほかの人に[福音を]宣べ伝えておきながら、自分は失格

者にな[って皆が求めている賞を受け損なうことにな]るかも知れない。(第一コリント9章24-27節)

今の時を生かして用いなさい。今は悪い時代なのである。(エペソ5章16節)

今の時を生かして用い、[キリストの体の]そとの人に対して賢く行動しなさい。(コロサイ4章5節)

私たちは皆、時折、この陰しく狭い道から外れてしまうことがあります。私たちは罪を犯しますし、失敗し、倒れます。しかし、私たちは転げまわって汚れるのではなく清めるように、神を遠ざけるのではなく神に近づくように召されています。

私たちの罪の性質は、実際には敵の最強の協力者です。私たちの墮落した体に浸透している「肉の欲、目の欲、自慢する人生の誇り」は、私たちの人生を無意味なものにさせる永遠の敵であり、もしそれを制御下に置くことをしないなら、私たちはイエス・キリストによる神の恵みによって逃れてきた、元の虚栄と無益な人生に引き戻されてしまいます(第二ペテロ2章20-22節; 第一ヨハネ2章16節参照)。クリスチャンとして、私たちはこの世を愛するために世にいるのではなく、神を愛するためにここにいるのです。また、世に倣って自分を形成するためではなく、神に倣って自分を形成するためにここにいるのです。

世も世にあるものも、愛してはいけません。世を愛する人がいれば、御父への[真の]愛はその人の内にありません。(第一ヨハネ2章15節 新共同訳)

あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって(つまり、神の御言葉への従順を通して:1節も参照のこと)、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ[すべき]全きことであるかを、わきまえ知るべきである。(ローマ12章2節)

クリスチャンである私たちは、神様が私たちの人生に与えた目的を果たすために、この悪魔の世界で生きていかなければなりません。すべての人間がそうであるように、私たちもまがいのものの幸福に魅了されています。それは、私たちの多様な欲望の向こう側にある、神から離れたら手に入れることのできる満足があるという嘘です。

しかし、神の助けがあれば、神の言葉の真実と聖霊の油注ぎによって、私たちは知識と力の両方で、嘘に抵抗する十分な資質を持っています(ヨハネ8章31-32節、ガラテヤ5章16-17節)。このような行動は、私たちの周りにはいる不信心な人たちには全く理解できません(第一ペテロ4章4節)。

しかし、悪魔はわかっています。私たちが悪魔の大敵であることを。なぜなら、私たちは悪魔自身が逆らってきた神に従い仕えようとしているからです。この理由だけで、サタンが少しでも支配力を持っている限り、私たちはこの地上で決して安住することはできないのです。この地上が

何らかの意味で「悪魔の世界」である限り、イエス・キリストに忠誠を誓った者にとっては、この地上は敵の領域なのです。

3. 世の敵意: 私たちは、代々受け継がれてきた中途半端な生き方から離れ([第一ペテロ1章18節](#))、御子イエス・キリストを信じることによって生ける神に立ち返った瞬間に、神と和解するだけでなく、この世から疎外されることとなります。中途半端はありえません。私たちは神の友であるか、世の友であるかのどちらかです([ヤコブ4章4節](#))。

サタンは、自分が推し進めようとしている活動や価値観に人間を巻き込ませようと、自分の王国を構築するために最善を尽くしました。しかし、神は聖なるお方です。神は正しい方です。神は絶対的な存在であり、神が私たちに突きつけている課題(まず救いを受け入れ、その後はずっとイエス・キリストに従うこと)も同様に絶対的なものです。

確かに、クリスチャンは罪を犯し、つまずき、失敗します。しかし、私たちが完全な従順を保てないからといって、神の基準が曲げられたり、汚されたりすることはありませんし、あらゆる点で完璧であるという事実を変えるものではありません。

不貞のやからよ。世を友とするのは、神への敵対であることを、知らないか。おおよそ世の友となろうと思う者は、自らを神の敵とするのである。([ヤコブ4章4節](#))

この世界は、新約聖書ではしばしばギリシャ語のコスモス(κ ο σ μ ο ς)という言葉で呼ばれていますが、アダムとエバの墮落以来、神の価値観や神の生活に反した場所であり続けています。⁷ このような理由もあって、聖書では物理的な地球、そこに住む者達、そして現在の極悪非道な統治システムをしばしば「コスモス」、つまり「この世」という包括的な名称で呼んでいます。

「この世」とは、地球という物理的な惑星とそこに住む人間だけでなく、原初の両親が初めて罪を犯した日以来、悪魔が人類を操ってきた悪魔的な影響力のあるシステム全体を意味しています。この聖句による呼称は、適切かつ重要なものです。なぜなら、一方を他方から切り離すことは本当に不可能であり、クリスチャンがそれを試みることは極めて危険だからです。神だけが、悪魔の影響力と管理のシステム(この研究では「サタンの世界システム」と呼びます)と人類学的な地球との間の途方もない癒着を断ち切ることができます。

この二つの関係を断ち切るのは、イエス・キリストが戻ってきてサタンをその足の下に打ち砕くという、イエスご自身の力によるしかありません([黙示録20章1-10節](#))。その将来の時まで、世界のすべてのものは、キリストを信じる人たち、すなわち悪魔ではなく神に従う人たちにとって脅威です。

多くのクリスチャンは、世界が本質的に悪であり、自分たちに敵意を持っているという現実を危険なまでに無視しています。

⁷ つまり、エデンから追放され、悪魔が事実上のクーデターを起こし、人類の歴史が始まる前の天国のエデンでの行動と非常によく似た方法で、地上を支配する「支配者」としての地位を確立して以来です：このシリーズの第一部から三部までと、以下の第II項を参照のこと。

後でさらに記しますが、サタンの支配は絶対的なものではなく、神に課せられたある制限の下で活動が許されているというのが現実です。そうでなければ、サタンはとっくの昔に地球上のすべての真理と、真理を信じるすべての人々を一掃していたことでしょう。

神がこの地上で起きていることに無関係ではないという事実を考慮しても、私たちはサタンのやり口の広汎性と力を過小評価すべきではありません。なぜなら、「世」という言葉は本質的にこれらのやり口を説明し、要約したものだからです。

悪魔によって設計され、管理されているシステムとして、世界は、神と真理と信じる者すべてに対して、頑なに、どうしようもないほどの敵意を持っています。この真理は、特に信者にとって大きな意味を持っています。悪魔が設立し、管理する世界システムに妥協できないだけでなく、そのようなシステムを「修正」したり「修復」したりすることも不可能です。

私たちが知っている世界は、罪と悪のない場所にはなり得ません。それは、世界には罪深い人々が住んでおり、その大部分が本来の創造主とその主権を認めていないからだけでなく、さらに重大なのは、世界はサタンによって運営されているからです(もちろん、神が定めた範囲内ではあります)。

人類が「より人間的な」世界を作ろうとする努力は、事実上、失敗に終わるだけでなく、実際には悪魔の手に落ちることになるのです。世界は、悪魔のシステムとして、本質的に真理と真理を認める人に敵対しています。

サタンのシステムは、宇宙を改善しようとする無神論的な試みを奨励するように設計されています。そして、サタン自身も、できるだけ多くの油断している犠牲者を捕らえるために、そのような偽りの改善策を奨励し、促進しています。

悪魔の世界は決して癒されることはありません。悪魔のシステムは、神から離れた完璧な環境を作ること、つまり「エデンの再現」に成功することはありません。それどころか、できるだけ多くの人々を奴隷にして惑わすという悪魔の計画を進めるために、人類の向上を第一の目的と見せるように作られているのです。

光の王国を装っていますが、サタンの世界は完全に暗黒の王国であり、聖書はそのように表現しています。来たるべき神の世界と現在の悪の宇宙との違いがはっきりと示されています([使徒行伝 26 章 18 節](#))。

こういう人々にはせ使徒、人をだます働き人であって、キリストの使徒に擬装しているにすぎないからである。しかし、驚くには及ばない。サタンも光の天使に擬装するのだから。[\(第二コリント 11 章 13-14 節\)](#)

しかし、あなたがたは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である。それによって、暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを、あなたがたが語り伝えるためである。[\(第一ペテロ 二章九節\)](#)

[父なる]神は、わたしたちをやみの力から救い出して、その愛する御子の支配下に移して下さった。[\(コロサイ 1 章 13 節\)](#)

この世界がどれほどむなしく無意味であるかということだけでなく、完全な悪であるということを理解するために、聖書における光と闇のテーマは非常に重要です。光り輝く宇宙が、サタンの墮落によって文字通りの闇に落ちたように(本シリーズ第2部参照)、私たちの最初の親の墮落(これには悪魔が大きく関わっています: 本シリーズ第3部参照)に続いて、現在の世界は道徳的に暗黒となり、取り返しのつかない状態になりました。

人類が墮落してエデンから追放された後、この世界は霊的な暗闇に陥りました([ローマ 5 章 12 節](#))「罪がこの世(コスモス)にはいり」参照)。その結果、この邪悪な世界は悪魔の「暗黒の王国」となり、神から離れてそこには「光」は一切存在しません。聖書の言葉で言えば、光は真理と神聖さを表す非常に明確で強力なたとえであり、一方、闇は嘘と神に反した罪深いすべてのものの強力なシンボルです。

このような完全な闇からは、何も良いものは生まれません。世界の唯一の希望は、神の恵みによって、どうかして光が再び入ることです。光のないサタンの世界にあっても、神はその恵みの中で、御子のうちにある変わらない真理の光を具現化し、人類に見えるようにし、利用できるよう提供してくださいました:

この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。光はやみの中に輝いている。
そして、やみはこれに勝たなかった。(ヨハネ 1 章 4-5 節)

イエス・キリストは世の真の光であり、すべての真理の体現者であり、神の生きた言葉であり、罪深い闇をまばゆいばかりの聖なる光で照らして下さるお方です。

わたしは世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう。(ヨハネ 8 章 12 節後半)

わたしは光としてこの世にきた。それは、わたしを信じる者が、やみのうちにとどまらないようになるためである。(ヨハネ 12 章 46 節)

この点で、キリストが、悪と闇が支配する敵の王国に侵入する姿がはっきりと描かれています。キリストは世の救い主として「つかわれ」([第一ヨハネ 4 章 14 節](#))、真の光として「世に来られ」([ヨハネ 1 章 9-10 節](#))、「世を征服し」([ヨハネ 16 章 33 節](#))、最終的に「勝利する」([黙示録 5 章 5 節](#))のです。私たちが今住んでいる世界と正反対の存在であるキリストを象徴する聖書の言葉は、光と闇という印象的で確固としたものです。この象徴の意味するところは重要です。それは、私たちがこの章(そしてこの学習)の最初から言ってきたことを、更に補足し、確証するものだからです。神なしの人生が本当に無意味なのは驚くに及びません。私たちが生きているこの世界は暗く悪に染まっているからです。神によってのみ、この世の真の光であるイエス・キリストによって暗きを脱することができるのです。

ですから、「主にあって光」([エペソ 5 章 8 節](#))となった者は、救われた時点から、その歩む世界との共通点がほとんどないのは当然のことなのです。先に述べたように、キリストを信じる私た

ちは、もはや「世のもの」([ヨハネ 17 章 14-16 節](#))ではなく、不慣れで過酷な環境の中の寄留者、異邦人なのです。

世をこのように捉えると、この世の反応について合点がいくようになります。私たちが世よりも神を選んだように、世は世を拒んだ私たちに、価値を見出せないのです。([ヨハネ 15 章 18-20 節](#))。現在の宇宙(kosmos)が悪魔の影響下にあるという事実は、この事態をより理解しやすくしています([第一ヨハネ 5 章 19 節](#))。私たちがサタンのルールに従うのをやめた途端、私たちはもはやサタンの統治下にある者ではなく、サタンの領域の邪魔者でしかありません。そのため、私たちは世とその支配者に注意を惹かれなくなります。キリストを選ぶことによって、私たちは自分の命を得ますが、世界を失い、その絶えまない敵意を買うこととなります([マタイ 16 章 26 節](#))：

わたしは彼らに御言を与えましたが、世は彼らを憎みました。わたしが世のものではないように、彼らも世のものではないからです。わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることです。わたしが世のものではないように、彼らも世のものではありません。([ヨハネ 17 章 14-16 節](#))

このように、信者に対する世からの敵意はとても徹底したものです。神の真理の光を反映する者として([第二コリント 3 章 18 節](#))、信者は当然、悪の行いをする者、つまり闇を愛し光を憎む者の恨みを買うのです([ヨハネ 3 章 19-20 節](#)、[第一ヨハネ 3 章 12 節](#))。

真の光であるイエス・キリストほど、この世とその悪に挑戦した人はいませんでした。そして、悪魔の王国が私たちの主と師にしたことは、悪の組織であるこの世が癒しがたいものであるという事実をこれほども良く示してくれる実例は他にないでしょう。事実を明らかに示すことになりました。イエス・キリストは世の真の光であり、真理を語るだけでなく真理そのものでした。彼はご自身のもとに来る全ての人を救うために世に来られたにもかかわらず、世によって十字架につけられたのです([使徒 3 章 13 節](#)、[13 章 27-28 節](#)；[ローマ 3 章 11 節](#)；[第一コリント 2 章 8 節](#)、[2 章 14-15 節](#)；[第二コリント 4 章 3-4 節](#)；[第一ヨハネ 3 章 1 節](#)参照)。世の光であられる主は、この世が全く悔い改めようとしないう悪であることを暴露されたため、世の敵愾心を掻き立ててしまったのです。

そのさばき[の根拠]というのは、光がこの世にきたのに、人々はそのおこないが悪いために、光よりもやみの方を愛したことである。悪を行っている者はみな光を憎む。そして、そのおこないが[本当はどのようなものであるかが]明るみに出されるのを恐れて、光にこようとはしない。([ヨハネ 3 章 19-20 節](#))

私たちクリスチャンは主に従う者として、主が歩まれたように主の光を映し出して歩むとき、この世からは、主と同じように敵意を向けられます：

もしこの世があなたがたを憎むならば、あなたがたよりも先にわたしを憎んだことを、知っておくがよい。もしあなたがたがこの世から出たものであったなら、この世は、あなたがたを自分のものとして愛したであろう。しかし、あなたがたはこの世のものではない。

かえって、わたしがあなたがたをこの世から選び出したのである。だから、この世はあなたがたを憎むのである。(ヨハネ 15 章 18-19 節)

あなたがたは、世の光である。山の上にある町は隠れることができない。また、あかりをつけて、それを柵の下におく者はいない。むしろ燭台の上において、家の中のすべてのものを照させるのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい。(マタイ 5 章 14-16 節)

[あなたのする]すべてのことを、つぶやかず疑わないでしなさい。それは、あなたがたが責められるところのない純真な者となり、曲った邪悪な時代のただ中であって、傷のない神の子となるためである。あなたがたは、いのちの言葉を堅く持って、彼らの間で星のようにこの世に輝いている。(ヒリピ 2 章 14-15 節)

神様と関わりたいとは思わない罪にまみれた人たちが大半を占め(エペソ 2 章 1-3 節参照)、悪魔に支配されているこの世は、イエス・キリストに従うことを選んだ人たちにとっては、決して「快適」でも「友好的」な場所でもあり得ません。このことを私たちは確信しなければなりません。クリスチャンがこの世や悪魔の支配者との間に、真の平和が得られると考えることほど、大きな思い違いはないでしょう(ヤコブ 4 章 4 節; 第一ヨハネ 2 章 15-17 節)。

これが、平和と繁栄においてクリスチャンが霊的なバランスを失ってしまう可能性がある理由の一つです。悪魔は「うまくいっている時代」にも忙しくしているからです。実際、悪魔はそのような時に最も効果的な働きをするものです。キリスト信者は、世界は悪いことがたまにしか起こらない、本質的に「友好的な」場所であると思うべきではありません。むしろ世界は、闇が支配する悪の宇宙体であり、決して飼いならすことができず、滅ぼす他ない狂獣なのです(神はやがてそうされるでしょう: 第二ペテロ 3 章 10-12 節を参照)。

私たちの時代に聖なる制御<口語聖書では「阻止するもの」>の恩恵に与っていることに、私たちは確かに神に感謝すべきです。しかし、大艱難(このシリーズで紹介している未来の終末論的出来事)の期間には、世界とそれを支配している者の本当の姿がすべての人に明らかになります。その時まで、私たちクリスチャンは「平穏な時代」に惑わされて、私たちとこの世との関係が本当はどういうものであるかを見失わないように注意しなければなりません。主がそうであられたように、私たちも敵の領域を旅して渡っているのです(第一ヨハネ 4 章 17 節)。

神は私たちの命であり、愛であります。世は神を知りません(ヨハネ 17 章 25 節)。そのため、私たちのことを理解出来ず、弱くて愚かな者と思われ(第一コリント 1 章 28-29 節, 3 章 18-19 節参照)、私たちに憤りさえ感じるので(ヨハネ 15 章 18-19 節, 17 章 14 節; 第一ヨハネ 3 章 13 節)。私たちは現在の邪悪な「世のもの」ではなく(ヨハネ 17 章 14-16 節)、キリストにあって悪の世から解放され(ガラテヤ 1 章 4 節; コロサイ 1 章 13 節)、悪の世に対して十字架につけられた者達です(世も私たちに対して十字架につけられました: ローマ 6 章 2-4 節, 7 章 4-6 節; ガラテヤ 6 章 14 節; コロサイ 2 章 20 節)。

天の国の市民として、またキリストの大使として、私たちはまだこの世にとどまっていますが([ヨハネ 17 章 15 節](#); [第二コリント 5 章 20 節](#); [ピリピ 3 章 20 節](#); [第一ペテロ 2 章 11 節](#)参照)、この世と妥協すべきではありません([ローマ 12 章 2 節](#))。神から見れば、この世は霊的な汚染と道徳的腐敗に満ちており([第二ペテロ 1 章 4 節](#), [2 章 20 節](#); [ヤコブ 1 章 27 節](#))、私たちがその中にいる限り、試練や苦難がありますが([ヨハネ 16 章 33 節](#))、神によってこの世に打ち勝ち([第一ヨハネ 4 章 4 節](#), [5 章 4-5 節](#))、この世を裁くようになります([第一コリント 6 章 2 節](#))。

私たちは、かつては世と同じように歩いていましたが([エペソ 2 章 1-3 節](#))、キリストの兵士として、今はキリストが示された道を歩んでいます。現在の、道徳的に醜い世の状態が長くは続かないことを確信し([第一コリント 7 章 31 節](#))、その悪から目をそらし、代わりに私たちの命である真の光を常に見つめるのです。

不貞のやからよ。世を友とするのは、神への敵対であることを、知らないか。おおよそ世の友となろうと思う者は、自らを神の敵とするのである。([ヤコブ 4 章 4 節](#))

世と世にあるものごとを、愛してはいけない。もし、世を愛する者があれば、父の愛は彼のうちにない。([第一ヨハネ 2 章 15 節](#))

光のある間に、光の子となるために、光を信じなさい。([ヨハネ 12 章 36 節](#))

4. **戦場**: クリスマンである私たちは、本当の意味でその一員となることができない世界、虚栄の世界、果てしのない追求の世界、もともと私たちに対して敵愾心を抱いている世界、キリストが再臨するまでその傷が癒されることのない世界、未来の日に唯一の真の光が来るまで、神の言葉の真理(とそれを信じる人たち)だけが唯一の光となる暗黒の世界に寄留しているのです。

しかし、考慮すべきもう一つのことがあります。それは、私たちがこの世から疎外され、この世が本質的に無益であり、この世と私たちの間には敵意があるということ以上に、(悪魔が墮落して以来ずっとそうであるように)世界は、現在のサタンの王国と来るべき天の御国との間の戦いが、真剣に繰り広げられ続ける戦場でもあるということです。

わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの[天使の]支配と、[天使の]権威と、[現在の]やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである。([エペソ 6 章 12 節](#))

つまり、この世界は、改善や更生を考えていられるようなものではなく、悪魔と、目に見えるこの世界の悪魔の手下どもや見えない世界にいる悪魔の手下どもによって、神の御計画に歯向かう戦いが繰り広げられている戦場なのです。したがって、イエス・キリストによって神を選んだ私たちは、好きであろうとなかろうと、またそのように思えなくても、目に見えないこの大規模な紛争の戦闘員なのです。

私たちは、このひと時の肉における人生を戦場で生きているのであり、この〈人生と戦場〉

の二つを切り離すことはできません。私たちはこの戦いにおいて、できるだけ戦いを避けようとして貧弱な兵士であることを選ぶかもしれませんが、また、(過去に多くの人がしてきたように、そして今後もさらに多くの人がすると予測されるように)「無断離隊」したり、敵側へ寝返ったりするかもしれません。しかし、私たちがどのような生き方を選んでも、この世界が神と悪魔の戦いの主要な戦場であるという事実は変わりません。この真実は、私たちの目に見えるものや、またこの世界で重要だと言われていることよりむしろ、私たちクリスチャンの一人ひとりの人生の質、進路、目的に関係しているものなのです。

キリスト・イエスの良い兵卒として、わたしと苦しみを共にしてほしい。(第二テモテ 2 章 3 節 [ピレモン 1 章 2 節](#)参照)

サタンは、これまでも、そしてこれからも、神の救いの計画をあらゆる方法で妨げ、反対するという目的を見失うことはありません(このシリーズの第3部で見てきたように、それは必然的なサタンの置き換えに伴う反抗です)。悪魔の戦略と戦術については、この研究の後半とシリーズの最終回で見直しますが、ここでは、神の御子の軍隊における兵士として、私たち信者がサタンにとって無関心ではいられない存在であることを指摘しておけば十分でしょう。⁸

身を慎み、目をさましていなさい(警戒していなさい)。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししののように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている。この悪魔にむかい、信仰にかたく立って、抵抗しなさい。あなたがたのよく知っているとおりに、全世界にいるあなたがたの兄弟たちも、同じような苦しみの数々に会っているのである。(第一ペテロ 5 章 8-9 節)

私たちは、サタンの領域に入り込んだ、ただの侵入者ではありません。私たちは、神に選ばれた者であり、神を選ぶ者であり、最終的には悪魔の従者どもと場所を置き換えられることになる者達です。私たちは神の子であり、この地に存在し続けることは、神の力と忠実さの証しであり、悪魔に対する絶え間ない非難でもあります。私たちは、真理を知り、生き、宣べ伝える真理の兵士であり、この地上に存在すること自体が、悪魔の嘘に反対することであり、悪魔が成し遂げようとするすべてのことを脅かす兵士なのです。光ほど闇の力を打ち砕くものはないからです。

夜はふけ、日が近づいている。それだから、わたしたちは、やみのわざを捨てて、[代わりに]光の武具を着けようではないか。(ローマ 13 章 12 節)

⁸ このシリーズの IV と V 項では、悪魔の戦術と戦術目標について詳述しています。このシリーズの第 5 部「悪魔の反乱」： 艱難時代の背景 審判、回復、置き換え」では、人類の歴史の中で用いられた悪魔の戦略と戦術目標について詳しく述べています。

このように、目に見えない争いから私たち信者が隔離していられると考えるのは愚かなことです。特に、(目を開いて見さえすれば)サタンのシステムは世界中で躍動しているのを目の当たりにします。さらに、悪魔とその勢力は、人間と天使の両方を含めて、あらゆる手段を用いて天の御国に対抗するという明確な目的を持って活動しており、究極の決着の日が近づくにつれて、ますます強い目的意識を持ってそうするでしょう。

それゆえに、天とその中に住む者たちよ、大いに喜べ。しかし、地と海よ、おまえたちはわざわざいである。悪魔が、[残されている]自分の時間が短いを知り、激しい怒りをもって、おまえたちのところに下ってきたからである。(黙示録 12 章 12 節)

...しかし、人の子が来るとき、地上に信仰が見られるであろうか。(ルカ 18 章 8 節)

私たちは、複雑に絡み合った人間(と天使)の関係の中で、敵の狡猾な戦略を具体的に常に正確に理解できるわけではありません。色々と起こる個々の事柄について、私たちは詳細まで知る由もありませんが、聖書は、私たち信者があらゆる戦局において、悪魔の主要な標的であること、それに対して私たちは、自分の生活を備えるべきであることをはっきり言っています。

この世の危険性や、クリスチャンとして世にある立場について無頓着になったり、あるいは最悪な場合は、「悪魔的なこの世」⁹を改善させるという悪魔の罠に捉えられると、私たちはクリスチャンとしての信仰の歩みに危機をもたらしてしまいます。¹⁰私たちは、イエス・キリストの軍隊に入隊しており、イエス・キリストが私たちを天に呼び戻すまで、あるいは最後のラッパが吹かれるまで、敵の領域で戦っている最中なのです。

信仰の戦いをりっぱに戦いぬいて…(第一テモテ 6 章 12 節前半)

わたしの子テモテよ。以前あなたに対してなされた数々の預言の言葉に従って、この命令を与える。あなたは、これらの言葉に励まされて、信仰と正しい良心とを保ちながら、りっぱに戦いぬきなさい。(第一テモテ 1 章 18 節)

わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。(第二テモテ 4 章 7 節)

このように、以上、この世における私たちの人生を見てみると、サタンの世界が何であるかがよく見えてきます。それは私たちの敵である悪魔によって、数多くの要塞、地雷、ブービートラップ(仕掛け罠)が設置されている危険な戦場です。闇の勢力が居座る危険な場所であり、砲火を浴

⁹ L.S.チェーフアーの『組織神学』第2巻、77-78頁における「cosmos diabolicus」の議論は、この問題をうまく説明しています。

¹⁰ ペテロの手紙シリーズ#27、信仰を脅かす3つの偽りの教えを参照。

びるエリアで、その場所で私たちは戦闘員なのです。

したがって、世界はその支配を争っている敵が完全に打ち破られない限り、戦闘地域が「修復可能」ではないのと同様に、何をしても「修復」することができないことは、何度強調しても足りません。再臨の際には、イエス・キリストが栄光のうちに戻って来られ、人間、または天使を介してのサタンの力を完全に打ち負かします。その日まで、私たちがこの悪魔の地で戦闘している限り、私たちは神の言葉である「御霊の剣」を使って、霊的な次元で戦いをしなければなりません([エペソ 6 章 17 節](#))。

わたしたちの戦いの武器は、肉のものではなく、神のためには要塞をも破壊するほどの力あるものである。わたしたちはさまざまな議論を破り、神の知恵に逆らって立てられたあらゆる障害物を打ちこわし、すべての思いをとりこにしてキリストに服従させ、([第二コリント 10 章 4-5 節](#))

墮落の後、私たちの最初の両親が神の恵みある救いの申し出を受け入れたとき、彼らはいわば、悪魔の領域を侵略するために「反撃」に出たようなものです。この時点から、悪魔は、できるだけ多くの人類を自分の支配下に置くために作り上げた嘘のコントロール・システムに、反抗して、神に従い、考え、行動することを選ぶ者たち全員を敵とみなしているのです。

挫折や試練、そして涙の最中で、また悪魔の領域においてクリスチャン人生を歩むという厳しい現実の最中で、私たちクリスチャンが兵士としての根本的な原則を学ぶことは、非常に重要なことです。その原則は何があっても物事を個人的にとってはならない、ということです。

イエス様が非常にわかりやすい言葉で私たちに語っておられたように、世はイエス様に敵対したので、イエス様に属するすべての人に対しても敵対することになりました。([ヨハネ 15 章 18-19 節](#))。

地を治めるために、闇の中を歩く人々の救いのため、キリストに従うすべての人の霊的な進歩と成長のためのこの戦いは、私たち個人の戦いではなく、イエス・キリストの戦いなのです。現代を特徴づける経済的・技術的な「繁栄」にもかかわらず、霊的な観点から見ると、私たちは教会がこれまでに経験したことのない厳しい時代に生きています。悪魔のシステムが世界の思考と文化を支配し、コントロール下に置く寸前に来ているのです。

バベルの塔以来、今ほどサタンの(彼の複雑で多様な嘘に基づいた)世界的な単一文化が構築されようとしている状況に近づいたことはありません。真理に関連するすべてのものは、悪の世の力からますます激しい攻撃を受けています。このような状況下で、真理を信じ、真理を愛し、真理に仕え、真理を求める私たちは、悪魔の攻撃を個人的に受け止めないようにすることが絶対に必要です。¹¹ この世界が私たちが奮闘している戦闘地帯である以上、また私たちがイエス・キリストに従う者である限り、艱難は当然のことであると予期し、想定外の出来事とみなすべきではありません。

¹¹ 苦悩という聖書のテーマについては、ペテロの手紙シリーズの第1課から第6課、特に第26課を参照のこと。

[彼らは]弟子たちを力づけ、信仰を持ちつづけるようにと奨励し、「わたしたちが神の国にはいるのには、多くの苦難を経なければならぬ」と語った。(使徒行伝 14 章 22 節)

わたしがあなたがたに『僕はその主人にまさるものではない』と言ったことを、おぼえていなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害するであろう。(ヨハネ 15 章 20 節)

いったい、キリスト・イエスにあつて信心深く生きようとする者は、みな、迫害を受ける。(第二テモテ 3 章 12 節)

愛する者たちよ。あなたがたを試みるために降りかかって来る火のような試練を、何か思いがけないことが起ったかのように驚きあやしむことなく、むしろ、[本当に]キリストの苦しみにあずかればあずかるほど、喜ぶがよい。それは、キリストの栄光が現れる際に、よろこびにあふれるためである。(第一ペテロ 4 章 12-13 節)

この「キリストの苦しみにあずかる」(ローマ 8 章 17 節、第二コリント 1 章 5-7 節、ピリピ 3 章 10 節、コロサイ 1 章 24 節、第一ペテロ 4 章 13 節参照)ということについては、キリスト教徒であるからという直接の理由で迫害を受けるというのはまれなことです。多くの場合、目に見えない悪魔的なものによるものや人間の手による迫害は、あからさまにキリスト教徒であるからというものとはならないでしょう。サタンはその王国にいる多くの手下どもを使って、サタンの嘘にもかかわらずキリストに従うことを決意している人たちに、圧力を加えるあらゆる手段を持っているからです。

身を慎み、[勤務に携わっている者として]目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている。この悪魔にむかい、信仰にかたく立って、抵抗しなさい。あなたがたのよく知っているとおり、全世界にいるあなたがたの兄弟たちも、[あなたがたと]同じような苦しみの数々に会っているのである。(第一ペテロ 5 章 8-9 節)

キリストを信じる者、キリストに従う者、またキリストの大使として、そしてクリスチャンという名が示すように、まさに「キリストの家族の一員」として、敵である悪魔から受ける抵抗や攻撃や迫害は、通常の戦闘地において、敵による砲撃が特定の兵士に向けられたものではないのと同じように、個人的なものではないことを理解しておく必要があります。

もちろん、私たちを落胆させ、誘惑し、さらには滅ぼそうとするサタンの試みが個人的なものではないからといって、それが致命的なものではないというわけではありません。しかし重要なのは、戦闘中の熟練した兵士のように、私たちは感情的にならずに「銃声と砲弾」に対応できなければならないということです。

悪魔から必ず受けることになる攻撃によって、私たちの士気が大きく損なわれたり、破壊されたりすることを許していることはできません。私たちには特別免除はありません。先に引用した第一ペテロの箇所では明らかなように、**すべての**信者が同じような試練をくぐります。

悪魔の攻撃は、はっきり言って、クリスチャンの生活の中では普通のことであり、絶えずあるものです。確かに、このような攻撃は様々な形態をとり、時と場所と個人によって大きく異なります。しかし、これらの攻撃があることは変わらぬ事実なのです。私たちがこの戦場を進軍していく限り、私たちは敵の砲撃を受けることになります。

私たちがクリスチャンとしての生活の質を高めれば高めるほど(つまり自ら霊的に成長して他の人が同じことをするのを助けるようになればなるほど)、敵の攻撃は、より集中的かつ強烈になります。

この戦いにおいては、私たちが主役なのではありません。ただ私たちが、地上でこの立場を保持している限り、全面的に巻き込まれてしまうことは避けられないのです。

私たちの王子であり指揮官であられるイエス・キリストの十字架と復活と昇天、そしてセッション<御座につかれたこと>によって、悪魔は、私たちの主を直接攻撃することはもうできません([ヘブル 2 章 10 節](#), [12 章 2 節](#))。私たちは、<腹いせに>攻撃される次善の策なのです。(後述の第IVと第Vで触れることとなりますが) 私たちはこの世での悪魔の活動の唯一の標的ではありませんが、それでも私たち信者は特別な「格好の標的」であり、悪魔は信者をつまづかせては、それを神のみ前で告発することを常としているのです([黙示録 12 章 10 節](#))。

挫折や苦しみ、災害に見舞われたとき、私たちは非常に感情的になり得るため、「物事を個人的にとらえない」ようにしなければなりません。ヨブのように、私たちは一人ひとりが通過する苦しみが、神のご計画の中でどのような目的を持っているのかを現時点では知ることもできません。

また、エリシャには顕されましたが、見えない霊の戦車のように、神が私たちを守り、支えるために配置している天の軍勢を見ることもできません。私たちの仕事は、神から与えられた丘に向かって進撃し続けることであり、敵が撃ち返してくることも想定しなければなりません(反撃してこないことがあるでしょうか?)

しかし、私たちは、敵の反撃にあって、「何か思いがけないことが起ったかのように」驚いたり([第一ペテロ 4 章 12-13 節](#))、あるいは自分達が悪魔の砲火の下で、攻撃を受ける最初の者であるかのように([第一ペテロ 5 章 8-9 節](#)) 混乱して、敵の反撃を個人的に受け止めてしまうことがないようにしなければなりません。

いつもそういう思いを持っていることは簡単な事でないことは確かですが、それでもやはり、とても大切であることに変わりはありません。聖書の中でこの主題について最もわかりやすい例として記されているのがヨブです。

ヨブは途方もなく、とてつもない予想外の苦しみを、そして、ことわざになるほどの忍耐力で耐え抜いた後(慰めようとしてきた友人ということになっていた人たちから感情を逆なでされ)、ついにその降りかかってくるものを個人的なものとして受け止めてしまうという過ちを犯してしまいました。

私たちはヨブの反応、つまり「神よ、どうして私に？」という憤慨を理解することができます。しかし、神が私たちのためにヨブの物語を残してくださったのには、とても大切な理由があります。私たちは、自分自身が原因不明の説明しがたい重圧にさらされていることに気づいたとき、神を非難しないように本当に気を付ける必要があるということです([第一コリント 10 章 11-13 節](#))。

私たちが自分の置かれている状況についてうめき、嘆き、不平を言うのは、「塹壕足くざんごうあし:第一時世界大戦の際、塹壕戦に従事した兵士らが不衛生のため足に罹った病気>は敵が自分を苦しめるための策略だ」とか「自分の陣地を砲撃している敵は、自分を特に意識している」と思い込んでいる兵士と大差ありません。

このような考えは馬鹿げています。しかし、神を信頼していると公言し、神の憐れみと恵みについて何かを知っていると主張する信者が、「神は私の話を聞いてくれない！」と泣き言を言ったリ、「なぜ神は私にこのようなことをさせたのか？」と問うことは、どれほど馬鹿げていることでしょうか。ヨブは、自分が強いられている激烈な苦しみが、実は最高の栄誉であることに気づいていませんでした。なぜなら、神は悪魔を非難するために、当時のすべての信者の中から彼を選んでおられたからです。

主はサタンに言われた、「あなたはわたしのしもべヨブのように全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者の世にないことを気づいたか」。[\(ヨブ 1 章 8 節\)](#)

ヨブのように私たちもまた、私たちの周りで繰り広げられている目に見えない争いの詳細については、わからないままです。しかし、天国や目に見えない天使の領域で何が起きているのか、ほとんど知らないからといって、私たちの問題や困難の原因が、私たちを地獄から救うために御子を犠牲にされた神の無関心にあるとするのは、とても愚かな結論です(言うまでもなく、間違っています)。

神は、私たちを救うために最高のことをしてくださったのですから、私たちの他のすべての問題にも注意を払っておられるはずです([ヘブル 13 章 5-6 節](#)、[ローマ 5 章 8 節](#)参照)。私たちは、主が私たちを養い、守ってくださるという知識に基づき、それを基本的に信じているということになっていますが、私たちが敵の集中砲火を浴びるときに、この真実を適用するかどうかは、確かに別の課題です。

人は容易に、自分自身と自分の問題(巨大で解決できないように見える問題)に集中してしまい、自分がなぜここにいるのか、誰のためにここにいるのかも忘れてしまいます。苦しみを個人的にとってしまうのはあまりにも容易で、気をつけていなければ、しまいには神を責めてしまうことになりかねません。

私たちがここにいるのは、神のため、御子であられる私たちの主イエス・キリストのためであり、神に仕えるためです。私たちは、神に仕えるためにここにいるのです。私たちは神に忠誠を誓ったのです。そして、私たちは次の人生を心待ちにしています。私たちの内に住まわれる聖霊を通して、父と子が誓約して下さった永遠の命を、私たちは待ち望んでいるのです([エペソ 1 章 13-14 節](#))。

死が必ずつきまとう、神なしでは欺かれてしまうこの地上の人生は、もはや私たちにとって何

の恐れももたらさないと私たちは断言します。私たちにとって死ぬことは益であり([ピリピ 1 章 21 節](#))、死ぬことは、切望している真の永遠の命を得、父なる神と私たちの主イエス・キリストとの永遠の交わりに入ることであり、報われ、新たにされる時であり、最終的な復活という祝福された入り口なのです。

もし、悪魔と悪魔の世界が私たちにもたらす最悪のことが、涙の人生から喜びと栄光に満ちた新しい人生へ移るのを早めることだとしたら、なぜ私たちは、この世界とここでの生活が永遠に続くかのように振る舞うのでしょうか？ 私たちは、主のために命を捧げると言っているが、自分の期待に反するようなことが起こったときに、主を責めるべきでしょうか？

この世と来世の狭間において、私たちは、神の望まれることを行って神に仕えるためにいるのです。地球が造られるはるか昔から、神が知らずにおられた問題も災害も、心の痛みもありません。人が地を歩くはるか昔から、神が備えておられなかった状況もありません。主は完璧であられ、主の御計画も、主の備えも完璧です。これらは、信じる者にとっては、単なる事実です。

神は、私たちがイエス・キリストを信じることによって神の家族になった時点で、すぐに私たちを神のもとに連れて行くこともできましたが、私たちをここ、悪魔の世界、地球という名のこの戦場に残され、私たちに託された御言葉に従って戦うようにされました。

世の中が(私たちが見てきたように)こうした状態であるように、また私たちの敵である悪魔の無慈悲な性質を考えると、反対、抵抗、苦しみはクリスチャンにとって意外なことではなく、当たり前のことなのです。この旅、この任務を押し進める中で、私たちが犯してしまう大きな過ちは、私たちがどこにいるのか(この世)、なぜここにいるのか(神に仕えるため)、そしてクリスチャンとしての成長に何が必要なのか(敵対者からの妨害の激化)を忘れてしまうことです。この危険な敵の領地において、このような狡猾な敵を前にして、悪魔の嫌がらせを個人的に受け止めている余裕はありません。

私たちがここにいるのは、自分の意志を貫くためでも、自分の道を歩むためでも、神がさせようとしていることとは別の人生の道を選ぶためでもありません。個人的な考えに支配されて、神の計画の中での自分の位置を見失ってしまうと、私たちの霊的生活は苦しいものになってしまいます。

私たちは、家族や仕事など、世間とのつながりを持たざるを得ません。だからこそ、私たちの思考、会話、そして実生活の中で、神を第一に保ち、(嫌がらせであれ、誘惑であれ)気を逸らせるものに対して、適切な、熟練したキリスト教徒の見解を持って対応していくように努めなければならないのです。

わたしがこう言うのは、あなたがたの利益になると思うからであって、あなたがたを束縛するためではない。そうではなく、正しい生活を送って、余念なく主に奉仕させたいからである。(第一コリント 7 章 35 節)

兄弟たちよ。わたしの言うことを聞いてほしい。時は縮まっている。今からは妻のある者はないもののように、泣く者は泣かないもののように、喜ぶ者は喜ばないもののように、買う者は持たないもののように、世と交渉のある者は、それに深入りしないようにすべきである。なぜなら、この世の有様は過ぎ去るからである。わたしはあなたがたが、思い煩わないようにしてほしい。(第一コリント 7 章 29-32 節前半)

私たちは集中力を欠いて、ここに残された本当の理由や本来仕えるべき方から、この世のことで気が逸らされてしまうことは、あまりにも簡単で、あまりによく起こってしまうことです。大切な仕事をやり遂げようとする際によくあるように、神の言葉とその真理から目を逸らしてしまうことは、容易に起こることです。

マルタは、自分が当然すべきだと思った奉仕に気を取られて、主の御言葉の教えをないがしろにしてしまい、さらに妹を同じ過ちに引きずり降ろすところでした(ルカ 10 章 38-42 節)。私たちは神から、あるいは神を知り、神に近づくための唯一の手段である神の言葉から、何にも気を取られている余裕はありません。

生きていくために、私たちは様々なことをすることになりますが、それが人生において当然なことだとしても、私たちを本当に重要なことから遠ざけてしまうなら、果たして意味があるでしょうか？ そもそもクリスチャンのすべき奉仕の目的は、未信者が主との関係を持つように助け、最終的に仲間となった信者が主との関係を深めていくために、神の御言葉を受けとることができるようにすることです。

人生の真の核心から気を逸らせば逸らすほど、私たちは、自分達が戦場にいること、私たちの戦争の目的、そして私たちの最高司令官であるイエス・キリストを見失いがちになります。サタンはこのことをよくわかっています。さらに、悪魔は私たちが苦しめることに長けています。彼はすべての信者の膨大な「ファイル」を持っていると言っても過言ではありません。彼は、あなたが最も傷つきやすい一つ一つの「弱み」を知っています(平均的な知性の人でも、あなたをいつも密かに尾行しているなら、そうできることでしょう)。

サタンがあなたに「試した」ことで効果があったことは、何度でも(少なくとも効果がなくなるまでは)使うことになるでしょう。巧妙な待ち伏せと共に、サタンは人類に対してよく、私たちが(病気や災害などの)身体的打撃という強力なボディ・ブローをもって真っ向から攻撃してくることもあります。そう、私たちが従事している戦闘の性質上、神は私たち全員に「事が起こるのを許される」のです。

もしそうしなければ、それは善悪を知る木を園から消滅させてしまうようなもので、私たちの自由意志を排除してしまうことにつながり、私たちがこの世の何よりも神を本当に尊敬していることを世間や悪魔に、そして神に証明する機会を失ってしまうこととなります。

要するに、神は「まことの礼拝をする者」(ヨハネ 4 章 23-24 節)を望んでおられるのです。神の意思を拒むという機会が与えられている状況でなければ、イエス・キリストに従うという選択肢が与えられていることにはなりません。神は「事が起こるのを許される」のですが、すべての事は

目的があって神の栄光のため、そして私たちの究極の利益のために起こっていることを忘れてはなりません。

神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。(ローマ人への手紙 8 章 28 節 新改訳IV)

あなたがたはわたしに対して悪をたくらんだが、神はそれを良きに変らせて…(創世記 50 章 20 節前半)

神は私たちの岩ですから、何も恐れることはありませんし、心配する必要もありません。ですから、逆境をあまりに個人的に受け止めてしまって、自分がこの世に寄留している状況を忘れ、神を疑うようなことがあってはなりません。どんなに悪い状況にあっても、神は私たちを忘れず、見捨てることはされません(マタイ 6 章 25-34 節、ヘブル 13 章 5-6 節)。

神の御性格はあらゆる点で完全であり、その御性格のどの面から見ても、神がどのような方で、何者であるかを考えるとき、このような愛と恵みに満ちた忠実な神は、私たちの最善の利益を念頭に置き、私たちの限られた人間の知覚の範囲を超えて、私たちの究極の利益のためにすべてを解決するためにのみ、働かれていることを認めざるを得ません。¹²

神は昔から私たちにとって何が最善か知っておられます。神は、私たちの人生に起こるすべてのことを知っておられます。事実、永遠の昔にすべてを最善のために計画しておられました。また、私たちが必要とするものをすべて用意して下さっています。神が私たちをとても大切に思っておられることは、私たちの罪深さ、反抗、悪のために神が用意して下さった、つまり私たちのためにひとり子を送って死なせてくださったこと以上に、このことをはっきりと示すものはないでしょう。そして、キリスト・イエスにある神の愛から私たちを引き離すものは、この世には絶対にありません(ローマ 8 章 38-39 節)。他に私たちが知るべきことがあるでしょうか？

神がどのような方であられるのかを信じ、神が私たちのためにイエス・キリストを犠牲にしてくださいましたことを信じるならば、これ以上知ることはありません。これらの本質的な現実、世間が否定する信仰の事実は、私たちにとって、目に見えるものよりも現実的でなければなりません。そして、それよりさらに現実的なことですが、クリスチャンは、この世という名の戦場を、毎日遭遇する小競り合いにおいて、信仰によってその戦いの現実を確認していかなければならないのです。

そのためには信仰が必要です。そして、信仰を高め成長するには、神の言葉を毎日熱心に取り入れ、常に人生に適用していくことが必要です。このかけがえのないプロセスを継続することによってのみ、天の現実、私たちの目に映るはかない「現実」よりも現実味を帯びてくるのです。

¹² この点は、神の性質と性格について聖書が述べていることをしっかりと把握することが、クリスチャンにとって極めて重要である多くの理由の一つに過ぎません。これらのトピックについては、『聖書の重要な教理』の第 1 部「神学 神の研究」で詳しく取り上げています

そして、このような視点を持つようになれば、ヨブのように「主は与え、主は奪う。主の御名に祝福あれ」(ヨブ記 1 章 21 節)と素直に言えるようになります。

イエス・キリストの兵士として、私たちは悪魔に対抗することになりますが、もし私たちが自分の立場を守り立ち上がるなら、勝利は私たちのものです(ヤコブ 4 章 7 節)。イエス・キリストの兵士として私たちは試されますが、神は私たちが実際に耐えられる以上のプレッシャーを与えることはありません(第一コリント 10 章 13 節)。また、イエス・キリストの兵士として、私たちは悲しみや苦しみを知ることになりますが、神は決して私たちがたくさんの慰めなしに残してはおかれませんが(ヨハネ 16 章 7 節; 第二コリント 1 章 3-7 節)。

イエス・キリストの兵士として、最後にレースを走り終えたとき、私たちはこの短い人生を振り返って、使徒パウロのように、「わたしたちは、四方から患難を受けても窮しない」、「途方にくれても行き詰まらない」、「迫害に会っても見捨てられない」、「倒されても滅びない」と言うことができるでしょう(第二コリント 4 章 8-9 節)。この世は、人にとってエデンの園ではなく、敵である悪魔が支配する戦場です。私たちはこの人生において、御自分の血によって私たちに仕えて、私たちに召してくださった方に、立派に、いや、優秀なほどに立派に仕えたと言っていただくことができますように。

キリスト・イエスの良い兵卒として、わたしと苦しみを共にしてほしい。兵役に服している者は、日常生活の事に煩わされてはいない。ただ、兵を募った司令官を喜ばせようと努める[ために、そのようなことを避けます]。(第二テモテ 2 章 3-4 節)

5. 敵: かつて完璧であった人生が、むなしく意味のないものになったのは偶然ではありません。私たちの最初の両親は、紛れもなく罪を犯してしまい、悪魔に操られて罪深い行動に出、これが神の正当な裁きをこの世に招くことになりました。この世が、神の言葉の真理に少しでも関係を持ち、認めたりするすべての人やものに敵意を抱いているのは偶然ではありません。悪魔は現在、この世に対して少なからぬ影響力を持っており、人類の窮状を非常に効果的に利用した世界支配のシステムを構築しています(私たち一人ひとりに宿っている罪の性質を最大限に利用しています)。

私たちクリスチャンが、世界の敵意と悪魔の怒りの特別なターゲットであることは偶然ではありません。悪魔が無関心であるわけがありません。彼の主張にもかかわらず(ルカ 4 章 5-7 節)、世界は彼の独占的な領域などではありません。神はこの世界に証人をおかずに放置したことはありません(使徒 14 章 17 節)。そして、神は、イエス・キリストの勝利によってすでに世界をどの点から見ても事実上取り戻され、あとは、神の再臨の際に、ご自分のものとされるだけです(ヨハネ 16 章 33 節, 第一コリント 15 章 57 節)。

したがって、この最後の日に、サタンはますます神によってしっかりと「閉じ込められていく」ことに気づきます。サタンの時代の終わりは迫っています。十字架の後、神の御計画は、サタンとその従者たちの最終的な処分に向けて、容赦なく進んでいます。彼らが神の家族に完全に取って代わられ、この世から完全に追い出されるのは、もはや遠いことではありません。このように、神の御計画を阻止するための後手後手の対抗しかできなかった悪魔は、自分に残されている時間が短くなるにつれて、その選択肢が日に日に減っていることに気づきます。したがって、私たち、つまり神の側に立つすべての者に対して、悪魔が、怒りの火がますます燃えるのは当然のことでしょう(黙示録 12 章 12 節参照)。

このシリーズは、聖書に書かれている歴史の最後の出来事に重要な背景情報を提供することを目的としています。この地球の最終章と、現代の衰退期における私たちの役割は、サタンの反逆と、それが人類の歴史の中でどのように展開してきたかを踏まえて、初めて完全に理解することができます。

私たちは、地上におけるキリストの代表、兵士、代理として、サタンの怒りの矛先を受けることになります。悪魔の主要な標的として、聖書がこの重要なテーマを扱っている範囲で、悪魔の策略を理解することは必要でしょう。ですから、これから悪魔の世界管理(およびそのごまかし)のシステムの学びに入ります。イエス・キリストの良き兵士として、私たちは、自分が従事している戦闘と、今戦っている戦場について認識するだけでなく、敵の組織、教義、方法、戦術について聖書が語っていることを理解しなければなりません。

II. 墮落後のサタンの権限

これまでのシリーズでは、サタンの反乱と墮落の後、主なる神は地球を再創造し、アダムを新しいエデンの責任者とされたことを見てきました。しかし、アダムは自らの罪と墮落によって、地球を支配する立場を喪失し、楽園から追放されました¹³。

多くの聖句が、悪魔が地球の新しい支配者であるという事実を支持しています([ルカ 4 章 6 節](#); [ヨハネ 12 章 31 節](#), [14 章 30 節](#), [16 章 11 節](#); [第二コリント 4 章 4 節](#); [エペソ 2 章 2 節](#); [第一ヨハネ 4 章 4 節](#), [5 章 19 節](#)など)。さらに多くの聖句(その多くは以下の第Ⅲ、第Ⅳ、第Ⅴで取り上げられます)が、サタンの人類に対する大きな影響力について詳しく述べています。しかし、サタンの具体的な「公式」の権利に関しては、それほど単純ではありません。

神は地球の支配を「公式」に放棄したことはなく、悪魔をその支配者に任命したこともないからです(神がアダムに対して明確に行ったように: [創世記 1 章 26-28 節](#); [詩篇 8 章 5-8 節](#); [ヘブル 2 章 5-9 節](#)を参照)。

現在の地球の支配者の複雑な権限を説明するのに役立つ一つの事件は、荒野でのキリストに対する悪魔の誘惑です。主を誘惑する際に、サタンは世界の支配権をキリストに渡すことができると主張しました(その代償として、キリストが悪魔を崇拝するという、傲慢で非常識な考えを持っていました:[ルカ 4 章 6 節](#)参照)。この点における悪魔の正確な権威と、この地球上の生命をどの程度支配しているかを説明するのに、マルコの福音書に記録されている別の一節の簡潔な分析が役に立つでしょう。

また、エルサレムから下ってきた律法学者たちも、「彼[イエス]はベルゼブル(悪魔)にとりつかれている」と言い、「悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出しているのだ」とも言った。そこでイエスは彼らを呼び寄せ、譬をもって言われた、「どうして、サタンがサタンを追い出すことができようか。もし国が内部で分れ争うなら、その国は立ち行かない。また、もし家が内わで分れ争うなら、その家は立ち行かないであろう。もしサタンが内部で対立し分争するなら、彼は立ち行けず、滅んでしまう。([マルコ 3 章 22-27 節](#))

このイエスの回答には、律法学者による誹謗中傷に対しての、簡潔で効果的な反論だけにな

¹³ このシリーズの「第 3 部: 人間の目的、創造と墮落」を参照してください。

く、アダムとエバがエデンの園から追放された後の悪魔の地位と権威について、いくつかの重要で基本的な啓示が含まれています。

まず第一に、イエスの発言は、悪魔が地上で組織的に悪魔憑き(これは実際に起こっている)を促進しているという権威ある証拠を与えています。第二に、このたとえ話の中で主が用いた参照点は、悪魔が実際に持っている組織(つまり「王国」と、彼に従うある種の支配エリート(つまり「家」として表現されている組織))を所有していることを示唆しています。

第三に、イエスの主張は、悪魔がこの組織(ひいては地球の支配)を継続的に支配するには、悪魔が利用できる霊力を持続的かつ賢明に使用することが必要であり、そのためには、悪魔はその霊力を無分別に使用する(つまり、「分裂」している)ことはできないということです。

第四に、コントロールを失うことは、支配を失うだけでなく、個人的な危険を意味します(そうなれば、彼は「おしまい」になってしまいます)。最後に、神はイエス・キリストと彼に従う者の働きを通して(サタンが悪霊を追い出すことによって)、悪魔の支配能力を直接攻撃して、悪魔が自分の領域において機能できなくしているのがここに見られます。

このように、悪魔が地上を支配していることは、公式的なものでも、絶対的でも、無期限でもありません。上に挙げた箇所以外にも調べてみると、次のような見解が得られます。

1. エデンの園では、サタンが誘惑者の役割を果たすことが許されていました: 前シリーズでは、エデンの園で悪魔がエバを誘惑し、人類の墮落を招いたことを詳しく考察しました。

サタンは、自分と自分の従事者に代わるという運命の新しい生き物を観察するだけでなく、彼らに誤った情報を与えることも許されていました。サタンはターゲットと嘘を慎重に選び、人類を墮落させる機会を最大限に利用し、最初の両親が、神に敵対する愚かな選択をするよう仕向けることに成功したのです¹⁴。

2. アダムは墮落によって、神から与えられたエデン/地球の支配権を失いました: 彼らの行いによって生じたまづい結果は、アダムとエバがエデンの園から追放され、死を免れないという呪いをかけられたことだけではなく、アダムが、神から委任された権威、つまり主が再創造された地球の紛れもなく正当な支配者としての地位を失うことでもありました。¹⁵

3. サタンは、人間の墮落を引き起こして、地球の支配権を奪いました: これまで見てきたように、アダムが神の代わりに地球を支配する権利は主から与えられたものです([創世記 1 章 26-28 節](#)、[詩篇 8 章 5-8 節](#)、[ヘブル 2 章 5-9 節](#)参照)。聖書には、悪魔にそのような権利が与えられたことは記録されていません。実際、サタン自身、自分が現在世界を支配しているのは、アダムの権利の喪失と墮落の結果として生じたものであるということに同意しています。悪魔はキリストに「自分を拝め」と説得する過程で、主に世界のすべての王国を見せて、こう言いました。

「なぜなら、それは私に委ねられたものであり、私が望む者に与えることができます。」([ルカ 4 章 6 節](#))

¹⁴ このシリーズの「第 3 部： 人間の目的、創造と墮落」を参照してください。

¹⁵ このシリーズの「第 3 部： 人間の目的、創造と墮落」を参照してください。

この箇所<「委ねられた」>で使われているギリシャ語の動詞パラディドミ(παράδιδωμι「降伏する/明け渡す」)は、サタンの地上への支配が、神から奪ったものでも、悪魔に与えられたものでもなく、むしろアダムが放棄したもの、辞退したもの、戦わずして横取りできたもの、つまり「明け渡されたもの」であることを示しています。

したがって、悪魔は地球の支配権を一時的に篡奪(さんだつ)したことになります。法律用語で言えば、サタンの地球の支配は事実上(デ・ファクト)の支配に基づいているだけで、彼の支配は正当なもの(デ・ジュール)であったことはなく、今後もそうなることはないでしょう。

4. サタンは人類に対してより広い範囲で影響力を持つようになりました: 現在、悪魔が地上で活動している範囲は、エデンの園での場合よりもはるかに広いです。人類の心を試す木は一本ではなく、私たちは様々な誘惑に満ちた世界に直面しています。また、(エバを誘惑した輝く蛇のような)悪魔の嘘の影響力は限られたものではなく、悪魔の嘘や影響力は、あからさまなものから目に見えない巧妙なものまで、私たちが住むこの世界の至る所に存在しています。

サタンにとってエデンの園では機会が限られていましたが、アダムを通して人類を墮落させるためには、十分なものであったことは明らかになっています。悪魔の人類へのアクセスが飛躍的に高まり、その影響力を行使する自由度が高まったために、全世界は「悪しき者(サタン)の支配下にある」([第一ヨハネ5章 19節](#))のも不思議ではありません。

悪魔は人類を迷わせるために特別な強みを持っています。それは、現在、アダムとエバの子孫全員(キリストは唯一の例外)の肉に宿っている罪の性質につけ込むことです。¹⁶ 人類の心がよく捉われてしまう「肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢」([第一ヨハネ2章 16節](#)新改訳IV)は、悪魔がつけ込むための打って付けのものです。

確かに、悪魔は人間の罪深い傾向を念頭に置いて、世界規模の誘惑と欺瞞と支配のシステムを構築していると言っても過言ではありません。人間の心の中にある悪と、その悪をうまく利用しようとうかがうサタンの能力を考えれば、世界がこのような恐ろしい場所になっても驚くに値しないでしょう。

5. サタンが世界を支配する限界: 悪魔の世界に対する支配は、ある意味では、長期戦の戦争において、略奪した地域の一時的な支配者になることに似ています。ナチスの下でフランスが占領地になった時も、征服されたからといって抵抗勢力がいなくなったわけではありませんでした。また占領もいつまでも続いたわけでもありません。

それと同じように、サタンも地上での支配は一時的なものであり、警戒と強引な武力によって維持しようとしています。しかし、過去の戦争を引き合いにしたたとえには限界がありますので、この時点で、悪魔の世界の支配は手広く恐ろしいものではあるものの、その支配をけん制するどんな制限があるかということについて、詳細に検討していくことが重要になってきます。

¹⁶ キリストの罪のない完全性、処女懐胎、次位結合については、「聖書の基本」のパート 4A で取り上げています: 罪の問題は、「聖書の基本: ハマルティ論」のパート 3B で詳しく扱われています。

第一に、サタンの地上における支配は、神の意志によって制限されています。悪魔は、神が許可したことのみ行うことができます。サタンがヨブに指一本触れることも、神からの明確な同意を得るまで許されませんでした。また、ヨブはその非常な苦しみに遭っても、完全に滅ぼされることを神は許しませんでした(ヨブ記 1 章、2 章と 42 章 12 節～)。

ペテロと弟子たちを「小麦のようにふるいにかける」というサタンの申し立ては、主のとりなしの結果、却下されました(ルカ 22 章 31-32 節)。また、新約聖書では、反抗的な信者が「サタンに引き渡された」ケースが少なくとも二件あり、悪魔が自由に行動できるためには、使徒の悪魔に許可を与える祈りによって神の保護が撤回されなければならなかったことが明示されています(第一コリント 5 章 5 節; 第一テモテ 1 章 20 節; 詩篇 78 篇 49 節, 109 篇 6 節参照)。

これらの文章や他の多くの考察は(以下の第 IV、第 V で見るように)、悪魔のこの世での行動範囲は絶対的なものではなく、特に神に従う者たちが関係しているところでは、制限されていることがはっきりしています。

サタンの悪意が神の恵み深い御心により制限されている主な理由は、私たちの自由意志です。このシリーズの三部まで長々と考察してきましたが、人類の存在はサタンの神への反逆を抜きにしては語れません。私たちが創造された主要な目的は、神の家族において、従おうとしない墮天使たちを、神を喜んで礼拝する人間に置き換えることでした。¹⁷

サタンにとって意外だったのは、最初の両親を誘惑できても、下された判決を回避することはできなかったということです—ただ、人類の中から真心をもって礼拝する人たちが選抜される、その時期と事態が引き延ばされ変更されただけでした。¹⁸

言うまでもなく、もし人類が地上から消滅されたり、神への自由意志による選択が不可能になるほどの高度な操作を受けることになれば、神の計画(言うまでもなく私たちの永遠の未来)は危機に瀕することになります。したがって、神はサタンに彼が自分のものだと言主張するこの世界において、手広く行動することを許してはいますが、神に従うことを選んだ私たちに対しては、より制限されたものとなっており、サタンに従う者を操るサタンの影響力はより大きなものとなります。

ここで重要なことは、現在の世界の混乱は、二つの要因の結果であるということです: 1) 人類の罪深さと死すべき運命(最初の両親のように、人類が自由意志で負うことになったもの)、そして 2) 悪魔の現在の支配と影響力です。ですから、私たちが見たり体験したりする問題や災害を、どんな形でも神様のせいにするのは、大きな間違いであるだけでなく、物事を全く逆に捉え

¹⁷ 異邦人の数の満ちること(この全体象の一部だけですが、この時点では非常に重要なこと)については、[ルカ 21 章 24 節](#)と[ローマ 11 章 25 節](#)([創世記 1 章 28 節](#)参照)を参照。

¹⁸ 特にこのシリーズの第 1 部と第 5 部を参照してください。もし人類がエデンの完璧な環境の中で、悪魔の干渉を受けずに生きていたなら、完全な置き換えは明らかに起こっていたことでしょう。婚礼の宴のたとえば(厳密には、喜んで応じる異邦人と応じようとしないうイスラエルに適用されていますが)、神の入れ替わりの仕組みについて、良い類似性を提供しています([マタイ 22 章 1-14 節](#); [ルカ 14 章 15-24 節](#))。

ることとなります。

神は私たちにイエス・キリストによる救いという二度目のチャンスを与えて下さったお方であり、神の恵みによる抑制がなければ、人類はとっくに絶滅していたでしょうし、悪魔が私たちを滅ぼさなくとも、自滅していたことでしょう¹⁹。

私たちに自由意思を行使する機会があり、選択肢に幅があること自体、神の恵みによるものです。「神は何故このようなことをお許しになったのだろうか？」という問いは愚かなもので、それはアダムが墮落し、サタンが地上を支配するようになってからの地球上の本当の状況を、全く理解していないことからきています²⁰。むしろ、「神様、このような罪と邪悪さの中にあってもなお私たちをお守り下さりありがとうございます」と言うべきです。

なぜなら、今の世界の悪魔的な現状は、罪と悪と災いがあたりまえとなっており、それに対して救いと祝福は恵み深く、恩恵に富み、寛容な神様からの例外的な贈り物だからです。私たちが生まれながらにして罪深いにもかかわらず、また、私たちが犯す罪や悪にもかかわらず、神はひとり子の犠牲をもって、その差し出された恵みに応答するすべての人に救いをもたらしました。そして、世界を完全にご自身のために取り戻す過程において、サタンの「頭を砕いて」、キリストの再臨という最終段階に入ることになるのです。

現在のサタンの支配について話を戻すと、実際のところ、聖書ではサタンが「地の支配者」と言っていないことは興味深い(参考になる)点です。この事実は重要です。悪魔は「宇宙=世 *kosmos*([ヨハネ 12 章 31 節](#), [14 章 30 節](#), [16 章 11 節](#))の支配者」ですが、その支配は物理的、物質的な支配ではなく、目に見える肉体的な侵略軍が現場にいて、地上を支配しているという意味での支配ではありません。

私たちの身の回りを見るだけで、この明白な事実を確認することができます。人類の世界に対するサタンの支配は、悪魔の影響や憑依によって、主(おも)に人間を通して行われているのです²¹。このことは、悪魔が現在世界を支配していることを述べているいくつかの聖句を説明するのに役立ちます：

- [エペソ 2 章 2 節](#)は、サタンを「空中の権を持つ君」と呼び、「不従順の子らの中に今も働いている霊」と呼んでいます。この説明は上記で述べたことと合致します。悪魔の勢力範囲は、物質的で目に見える地上の存在ではなく、私たちの周囲の空間から生じているのです。彼と彼に従う者たちは霊であり、彼らが人間に及ぼす影響は、主に非物質的な性質を持っています(影響を与えたり、時には憑依によって強制したりしますが、まったく目に見えません)。

- [エペソ 6 章 12 節](#)には、「私たちの戦いは、血肉に対する戦いではなく、天上の悪の霊に対する戦いである」とあります。この箇所では、悪魔の力と影響力の領域が、物理

¹⁹ 固有法とナショナリズムについては、すぐ下の論説を参照してください。

²⁰ 悪魔の影響を強く受けた現代では、こうしたメッセージが氾濫しており、時にはさりげなく、またしばしばあからさまに宣言されています。

²¹ この四部の後半の V. 項目(サタンの戦術的方法論)を参照してください

的な地上から離れたところにあることが示されています(それにもかかわらず、強力な影響力を持っています)。

- [第一ヨハネ 4 章 4 節](#)は、私たちのうちにおられる方は、「この世のうちにいる、あの者(すなわち悪魔)よりも力がある(新改訳Ⅲ)」と教えています。サタンはこの世で大きな力を発揮していますが、地球を直接、物理的に支配しているわけではないからです。

- [第一ヨハネ 5 章 19 節](#)には、「全世界は悪しき者の配下にある」と書かれています。つまり、悪魔の肉体的な支配下ではなく、非物質的な影響下にあるということです。

- [第 2 コリント 4 章 4 節](#)では、サタンを「この世の神」と呼んでいます。これも彼の支配が非物質的であることを強調しています。さらに、サタンは「不信者の者達の思いをくらませて」とも言われていますが、これはサタンの影響力の手段と方法を示しており、一般的には肉体的な強制ではなく、人間を唯一の真の神から離れさせる霊的な惑わしです。

このように、悪魔の王国は主に非物質的(または「霊的」)なものであり、この世の人間の国民の上に「漂い」、あらゆる度合の影響力を駆使して目的達成を謀ります。人間は、ある意味ではまだ物理的な地球を「預かって」はいますが([詩篇 8 篇 4-8 節](#)、[115 篇 16 節](#)参照)、天使の存在に比べれば、力も知性もはるかに劣っています。

人間が自分達だけで、(悪魔がもし私たちを攻撃することが許されて)準物質的な戦いをするなら、優位に立つことを期待することはできないことでしょうし、まして完全な霊の戦いにおいては望みはありません。しかし、神は、悪魔の巨大な霊力にもかかわらず、私たちの存在とこの世界で私たちが自由意志を行使する能力を守るために、非常に具体的な境界線をうまく定めてくださっています。

悪魔が目の前に現れたり、物質的な形をとったりすることは許されないという一般的な規則の原則に対する例外は確かにありましたが、ほとんどの場合(特に現在)、サタンは影響力や憑依、そして神が時折許す物質的な干渉の内にとどまって、自分の「王国」を管理することで満足していなければなりません。²² そういうわけで、悪魔の支配のやり口は、私たちを説得して彼の意志を行わせることです。

私たちの生来の罪深い傾向、悪魔の巧みな欺瞞、そして悪魔が自由に使える膨大な力を考えれば、神の恵み深い保護がなければ、世界はさらに大きな悪の影響下におかれてしまうと理解するのは、難しいことではありません。

このように、サタンの行動範囲がこのように大きく制限されていたとしても、サタンの意のままに全てを任せておいたら、人類は簡単に始末されてしまう可能性が高いのです。しかし、またも神

²² 聖書の中で起こっているこれらの一般的な特徴の最も顕著な例外は、ヨブの家族と財産が悪魔が破壊したことと、大洪水前に侵入して人類を完全に滅ぼそうとしたことです(創世記 6 章-このシリーズの次回最終回で詳しく取り上げるエピソード)。私たちはまた、サタンが荒野で主を誘惑した際に、目に見える形で現れたことも知っています([マタイ 4 章](#)、[ルカ 4 章](#))。

の恵みのおかげで、人類には悪魔の影響力にブレーキをかけ、悪魔による世界の支配を制限する、さらなる安全装置があるのです。

6. 悪魔の影響を抑制する良心 : これらの安全装置のうち、一つ目は、(少なくとも最初のうちは)すべての人間に共通するもので、今日ではよく「良心」として知られているものです。これまで見てきたように、善悪の知識の木を食べた後、アダムとエバは、善と悪を区別することができる、より鋭い内面的、精神的、感情的な感受性を身につけることになりました。²³ 神は、彼らが従順のテストに落ちた場合に備えて、内面的羅針盤が彼らに与えられるように、テストを恵みのうちに組み立てておられたのです。この装置なしでは罪ある人間が、サタンの世界において道徳的に歩いていくことは不可能なことでしょう。

完璧な保護が与えられていたエデンの園が取り払われ、世界全体がいわば一つの大きな試みる木に変わってしまうと、人類にとって「内的なナビ」が必要不可欠なものとなりました。というのも、エデンの園では、神が具体的に与えられたテストはたった一つしかありませんでしたが、悪魔の世界では、あからさまなものから巧妙なものまで、様々なテストや誘惑があります。

自分の行動の善し悪しを判断する方法がなければ、私たち人間は、騙しの達人である悪魔のなすがままになってしまうことでしょう。善悪の知識の木を食べた最初の両親は、まさにそのような能力を身につけましたが、すべての子孫がその能力を物理的に引き継ぐことになりました([ローマ 2 章 12-16 節](#))。

つまり、良心とは、この世で遭遇する様々な状況の中で、特に自分自身の行動に関しての善悪を判断することができる、神から与えられた人間の性質です。良心は独立した器官ではなく、心の(身体と精神の完全な組み合わせとしての人間の内部にある)一面なのです。

旧約聖書には「良心」という言葉は出てきません。これは、古代ヘブル語の文化と言語は、古代ギリシャ語(新約聖書の言語と文化の環境)と比べて、より具象的で<ヘブル語の文字は、羊飼いの杖の形や幕屋などの形などからきています>、抽象的ではない表現が特徴的であったことを考えると合点がいくでしょう。

旧約聖書に「良心」という概念を表す名詞がないからといって、その概念がないわけではありません。それは、善悪を知る木の存在や、アダムとエバがその実を食べた結果、そして墮落がその後の人間の行動に与えた影響からも明らかです。

私たちは、死すべき体に内在する罪の結果として「間違っただけをする」のですが、少なくとも良心に焼き印が押され、その機能が失われ、損なわれてしまったりするまでは、間違っただけをした時には**気づく**ことができるのです([第一テモテ 4 章 2 節](#)参照)。

しかし後になって、ダビデはサウルの上着のすそを切ったことに、心の責めを感じた。
([第一サムエル記 24 章 5 節](#))

²³ このシリーズの前回の論説を参照してください。

新アメリカ標準語訳では、上記の部分を「彼の良心が彼を悩ませた」と直訳していますが、これはその感情を正しく捉えており、現代の表現にも通用する優れた訳です。私たち(そしてギリシャ人)が、人間の本質の重要な特徴を表す専門用語を持っているという事実は、旧約時代の人々に(私たちが呼ぶところの)「良心」がなかったことを示すものでも、(さらに重要なことに)良心が提供する善悪に関する内なる導きを認めなかったことを示すものでも、決してありません。

英語の「conscience」の語源は、新約聖書に出てくる「良心」を意味するギリシャ語(syneidesis)と正確に一致していることもあり、また、どちらの場合も語源が実際の機能を指し示していることもあって、参考になります。

英語の語源はラテン語で、「知る」という意味の語幹(scientia<scio)と「ために、これをもって」という意味の接頭語(con <cum>)に由来します。ギリシャ語では、eidesis(oida から)と syn がそれぞれ同じ意味を持っています。そして、「これをもって一知る」ということは、私たちが熟考することについても、自分が行うことについても、何が行われているかについて、まさに良心に基づいて、知り、意識します。良心はこれらのことを真理の観点から鑑定するのです。良心は(より重要な道徳的観点をもって)知っており、その知識を私たちに知らせてくれるのです。

言うまでもなく、私たちがより多くの真実を心に持ち、それに敏感に反応し、それに応えようとすればするほど、私たちの良心はより研ぎ澄まされ、よりの確なガイドとなります。

すべての人には、善悪に対する感覚、すなわち「良心」が生まれながらに備わっており、正しい方向に導く(間違った方向には警告する)ことができます。成人した後、悪や犯罪、罪深い行為に至るのは、まずこの神から与えられた内的な防壁が壊されてしまった結果です([申命記 1 章 39 節](#), [イザヤ 7 章 15-16 節](#))。

しかし、この心の一面が、時が経つにつれて、より敏感になり、神の真の善悪観とより正確に結びつくようになるか、または逆に、自己満足に陥ったり、効果がないほどに「焼き印が押される<無感覚な状態になる>」かは、(神の「善」を追求する信者には)聖書の中にある真理、あるいは、神が全人類のために与えてくださった善悪の具体的な指標(社会的な慣習、民法や刑法、負の例として教える非道な行動の事件など)にある真理のどちらかにかかわらず、各人がその真理に対してどんな態度をとるかに完全に關係しています。

現実において、私たちが自分の良心を純粋に保ち、神の真の基準に合わせるための努力をして初めて、堂々と「自分の良心に従う」ことができるのです。

神の言葉の真理を取り入れ、従うことで良心は強くなりますが、その導きを無視したり拒絶したりすると、「心の硬化」、別の言い方をすれば「良心に焼き印が押された」([第一テモテ 4 章 2 節](#))状態につながります。²⁴ 最初のうちは、良心は押しつぶされることに抵抗しますが、罪深い無法な行動が続くと、良心は弱まり、極端な場合にはほとんど機能しなくなります。

²⁴ 硬化のプロセスについてのより詳細な考察は、ペテロの手紙シリーズ #21、#26、#27、および出エジプト記第14章「パロの心を頑なにさせる」シリーズを参照してください。

私が見出した次のことだけに目を留めよ。神は人を真っ直ぐな者に造られたが、人は多くの理屈を探し求めたということだ。(伝道者の書 7 章 29 節 新改訳IV)

常に真理が核心です。人間として、私たちは生まれながらにして善悪を区別する能力を持っています。この能力(良心)は、時間が経つにつれ、鈍くなることがあります。この鈍さは個人的な罪ある行為によるものだけとは限りません。多くの場合、私たちは周囲の悪(世の知恵)に説き伏せられて、元々「心の中で間違っていると知っていた」にもかかわらず、誤った基準を身につけてしまうことがあります。

聖書の真実がない場合、こうしたことが起こるのは、非常によくあることです。洗練され、教養と影響力ある世論形成者は、現代社会において、教養のない聴衆の傲慢さをおだて上げ(あおり)、悪のご用達とならせることがよくあります(この点については、以下の IV 項で詳しく再検討することにします):その大義名分が世界平和であろうと、貧困の撲滅であろうと、あるいは崇高な動機を持つことに聞こえる色々なことでも、結局のところ、戦争があり、貧困があり、悪の大義名分だけが促進されているのです。

しかし、あからさまな罪悪であろうと、巧妙な人間的な欺瞞であろうと、悪が私たちの心に巣くうには、まず良心が抑えつけられなければなりません。(最初は善悪を知る木を通して、その後は最初の両親から受け継いで)生まれつき罪人である私たちは、間違った方向に向かう傾向がありますが、神の恵みのおかげで、内なる羅針盤を持って生まれています。

その羅針盤を意図的に非磁気化しない限り、それは、通常、良い方向へ導いてくれます。そして神の真理に同調するための意識的な努力をするならば、とても明確で具体的な導きを受けることができます。悪魔がその影響力と意志を行使するには、まずこのすべての人間の心の中にある普遍的な防壁である良心が、取り壊されなければなりません。

7. 悪魔の影響を抑制するものとしての法律とナショナリズム(国民主義): 悪魔の人類の操作に対し、良心がもたらす内的な制限に加え、神はサタンの人に対する支配を国の法律によって(参照:[ローマ 2 章 14-15 節](#),[13 章 1-5 節](#); [テトス 3 章 1 節](#), [第一ペテロ 2 章 13-17 節](#)参照)、またナショナリズム(国家主権)を使って([創世記 11 章 6 節](#),[申命記 32 章 8 節](#), [ヨブ記 12 章 23 節](#), [詩篇 74 篇 17 節](#), [エレミヤ 18 章 7-10 節](#), [使徒行伝 17 章 26-28 節](#)参照)、そして神の直接介入(例えば、主がイスラエルの敵を直接消滅させた無数の機会)によって制御します。

多くの場合、聖霊と選ばれた天使によってなされますが(主の直接の監督下にあると記されていることもあります:[エゼキエル 32 章 3 節](#)~参照)

悪魔の活動を妨げるために、神が人間の問題に直接介入することについては、このシリーズの第 5 部で取り上げます(以下の第IVと第Vも参照)²⁵

神がバベルの塔を破壊して以来([創世記 11 章 6 節](#)参照)、法律とナショナリズムは、サタンが世界を完全に支配することを妨げる二つの大きな、立ちどころの障壁なのです。

²⁵ このシリーズの第 2 部、II.4 項の聖霊の抑制の働きに関する説明も参照してください。

法は良心の産物であり、正しいことを守り、間違っことを抑制しようと、我々が共有する欲求を社会全体で成文化したものであり、伝統、経験、実歴に基づいて構築されていますが、全体的には常に善という目的がそこにあります。ただし、いかなる法制度も完全であったわけではありません(唯一の例外は、神ご自身によってモーセに伝えられた律法です)。

不完全な人間は、不完全な統治システムを生み出しますが、秩序のある法的権力が大抵善良な目的を持っているという事実は、全ての正当性のある場合において、間違いなく神からのものです(すなわち、犯罪が禁止、また罰せられ、一方で善良な行動が保護され報われるような場合です)。

すべての人は、上に立つ[すべての]権威に従うべきである。なぜなら、神によらない[で立てられた]権威はなく、おおよそ存在している権威は、すべて神によって立てられたものだからである。したがって、権威に逆らう者は、神の定めに従う者である。従う者は、自分の身にさばきを招くことになる。いったい、支配者たちは、善事をする者には恐怖でなく、悪事をする者にこそ恐怖である。あなたは権威を恐れないことを願うのか。それでは、善事をするがよい。そうすれば、彼からほめられるであろう。彼は、あなたに益を与えるための神の僕なのである。しかし、もしあなたが悪事をすれば、恐れなければならない。彼はいたずらに剣を帯びているのではない。彼は神の僕であって、悪事を行う者に対しては、怒りをもって報いるからである。だから、ただ怒りをのがれるためだけではなく、**良心のため**にも[権威に]従うべきである。(ローマ 13 章 1-5 節)

どの国のどの時代にも、法制度を運営する人間の変わらない罪深さと同様に、悪用も必ず起こるでしょう。しかし、組織化された社会で、重大な悪を罰し、防止するための何らかの対応に欠いたことがないという事実は、またそれが家父長の伝統の下でしか存在しない場合であっても、(例えば、万国共通の殺人や窃盗に対する処罰や、結婚や子供の保護に現れているように)人類が本来共有している良心が、善と悪の一般的な概念の法律に反映されていることを明らかに示しています。

また、ナショナリズムは、悪魔の地上での動きを阻止する機能として重大な役割を果たします。²⁶ 明白な例として、大洪水前の世界が陥っていた恐ろしく邪悪な状態が挙げられます。同一の文化と言語を持った万民共通の社会(先史時代の世界がそうであったように)を悪魔が支配し操るのは、はるかに容易でした。単一の生物体にウイルスが侵入すると、生物全体にすぐに病気が広がり感染します。このように統一国家では、巨悪が一度侵入すると、それに対する抵抗ができ

²⁶ 国家は神によって造られています(創世記 11 章 6-9 節、申命記 32 章 8 節、ヨブ記 12 章 23 節、使徒行伝 17 章 26-28 節参照)。しかし、「ナショナリズム」という用語は、比較的近代(つまり 18 世紀以降)にしか当てはまらないと考える人もいます。しかし、どのような用語を好むにせよ、(言語、文化、地理などによって)民族を区別することは、何千年も前(具体的には、バベル後の民族のディアスポラ-分散)までさかのぼる現象です。

ません。

しかし、多国籍の世界は、その多様性ゆえに、サタンの影響に対してより抵抗力があります。共産主義やナチズム、あるいは性的自由主義などは、それぞれの国で個別に導入・推進されなければならず、悪魔が現在広めようとしている、新しい悪の系統に抵抗するための、時間と空間のすきまが与えられます。

いと高き者は人の子らを分け、諸国民にその嗣業を与えられたとき、イスラエルの子らの数に照して、もろもろの民の境を定められた。<いと高き神が国々に嗣業の土地を分け／人の子らを割りふられたとき／神の子らの数に従い／国々の境を設けられた。-新共同訳 七十人訳は「神の御使いたちの数に従い」> ([申命記 32 章 8 節](#))

また、[神は]ひとりの人[アダム]から、あらゆる民族を造り出して、地の全面に住ませ、それぞれに時代を区分し、国土の境界を定めて下さったのである。こうして、人々が熱心に追い求めて捜しさえすれば、神を見いだせるようにして下さった。事実、神はわれわれひとりびとりから遠く離れておいでになるのではない。([使徒行伝 17 章 26-27 節](#))

この最後の一節は、地上で人の命を維持するためだけでなく、人類が常に維持される必要性がある、より主要な目的、すなわち、私たちの主イエス・キリストを通して神を求め、見出すため、ナショナリズムが必要であったことを明らかにしています。

サタンは自らを「世界の支配者」と称しており、実際その通りなのですが、制限されていないわけではありません。サタンは、(墮落したアダムから)権力と権威を奪い、またその結果、世界を支配していると思いが上がっています([ヨブ記 1 章 7 節](#), [2 章 2 節](#)参照)。

また、神と「対等」な地位を持つようとしており、それは確かに自己を過大評価し傲慢ではあるのですが、(あらゆる面で一時的な立場ではあっても)彼の力と影響力は広範囲に実在していることには間違いありません。

例えば、[ヨハネの黙示録 13 章 2 節](#)には、大艱難時代に、悪魔が自分の持っている「力と位と大いなる権威と」をアンチ・キリストに与えることが記されています。その結果、現在は隠されている広範なサタンの領域が、その時には目に見える世界規模の暗黒の王国が出現することを、十分に示唆しています。

悪魔の最終的な世界統一政府が出現するその時までの悪魔の策略の一つは、(自分のしようとしていることに対する主要な障壁をできるだけ取り除くため)ナショナリズムを弱めて、国際主義を支持することです。

究極的には国々の歴史を支配しておられるのは神ですが([イザヤ 10 章 5-7 節](#), [10 章 15 節](#); [エレミヤ 10 章 7 節](#); [ダニエル 2 章 21 節](#)参照)、悪魔は(神の許された意志の範囲内で)国家間を隔てる防壁を崩そうと躍起になっているのです:

お前を見る者は、まじまじと見つめ／お前であることを知って、言う。「これがかつて、地を騒がせ／国々を揺るがせ／世界を荒れ野とし／その町々を破壊し／捕らわれ人を

解き放たず／故郷に帰らせなかった者か。』([イザヤ 14 章 16-17 節](#) 新共同訳) <英文で引用されている訳では「国々を揺るがせ」が「国々を弱体化させ」となっています>

8. サタンは今、守勢：悪魔の王国の支配は、完全なものでも自動的でもありません。支配を維持するためには、サタンとその従者たちが、神の計画に反して絶えず働きかけていなければいけません(たとえそのような行動が最終的には無益になるとしても)。悪魔が世界を支配し続けるためには、一方では未信者の目をくらませて可能な限り悪を行うようコントロールし、他方では信者を殺し、破壊し、あるいは信者の信用性を傷つけることで、少なくとも無力化することが必要不可欠なのです。悪魔の世界支配は制限されているだけでなく、一時的なものでもあります。アダムの不従順は、サタンにこの世の権威の多くを奪う機会を与え、サタンを事実上の「この世の支配者」とさせましたが、最後のアダムであるイエス・キリストの従順は、(神に逆らうことを選んだ悪魔とその手下に代わって)神を選んだ(そしてこれから選ぶ)人々の救いを実現し、確立しました。

すなわち、ひとりの人[アダム]の不従順によって、多くの人が罪人とされたと同じように、ひとり[イエス・キリスト]の従順によって、多くの人が義人とされるのである。(ローマ [5 章 19 節](#))

アダムとエバが園を出てから、イエス・キリストによって悪魔を倒して人間に置き換えるという神の御計画は、絶え間なく前進しています。さらに、主イエス・キリストが(その神性を損なわず)人間の形で到来したことにより、神の国が差し迫ったものとなって以来、悪魔の働きは一段と強化されており([マタイ 11 章 12 節](#))、悪魔が最後に天から排除される大艱難期には、さらに激化することになります([黙示録 12 章 7-17 節](#))。

このように、これは決して悪魔の不戦勝ではありません。実際、イエス・キリストの手によるサタンの最終的な敗北は、エデンの外での人類の歴史の開始前から、神によって預言されていたことです：

主なる神はへびに言われた、「おまえは、この事を、したので、すべての家畜、野のすべての獣のうち、最ものろわれる。おまえは腹で、這いあるき、一生、ちりを食べるであらう。わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼[キリスト]はおまえのかしらを砕き[真正面から攻撃しておまえを滅ぼし]、おまえは彼のかかとを砕く<彼の背後から襲う>であらう」。([創世記 3 章 14-15 節](#))

キリストによるサタンとその王国に対する「真正面から頭への」攻撃は、十字架で始まり、神の子が神に代わって「神人」として、地上での完全で直接的支配を人類に取り戻すために再臨するその時に、事実上完了します。それまでの間も、キリストは全世界を支配する正当な権威者です([詩篇 110 篇 1 節](#), [82 篇 8 節](#); [ヨハネ 5 章 27 節](#); [第一コリント 15 章 27 節](#)を参照)。

すると、イエスがやって来て、彼らに言われた、「天と地におけるすべての権威が、わたしに与えられた。だから、行って、すべての国々をわたしに従うものにして、彼らを父のペルソナ[すなわちその「御名」<=位格>]と子のペルソナと聖霊のペルソナの中にバプテスマし<三位一体の神の御性格に浸透させ--水の洗礼のことではない>、わたしがあなたがたに命じておいたことをすべて守るように、彼らを教えなさい」。(マタイ 28章 18-20節 聖書の英訳文に従って直訳しました。強調のための斜体字や[]は著者によって付加された註です。< >は訳者によるもの)

キリストの種の成長のたとえ(マルコ 4章 26節～)とからし種のたとえ(マルコ 4章 30～)は、地上で闘争する神の国の描写です。この世の者でもサタンの臣民でもない、子羊の血によって天の国の市民となった信者によって、悪魔の領域は文字通り侵略されているのです(ヨハネ 17章 16節; エペソ 2章 19節; ピリピ 3章 20節; 第一ペテロ 2章 9節と 11節)。

天の御国が間近に迫っているということは、それに伴って悪魔が除かれる時も間近に迫っているということでもあります。キリストは「悪魔の働きを滅ぼす」ために来られ(第一ヨハネ 3章 8節後半; ヘブル 2章 14節参照)、十字架の上で犠牲になる前から、サタンが天から落ちるのが近いことを話されていました(ルカ 10章 18節)。私たちの敵である悪魔が敗れる寸前であるというこの保証は、クリスチャンにとって日頃の励ましの一つです(ローマ 16章 20節)。これはまた、サタンが最初に墮落したときの、神のサタンに対する裁きの宣告の成就でもあります。

さばきについては、この世を支配する者が[すでに]さばかれたからです。(ヨハネ 16章 11節 新改訳IV)

キリストの勝利が確かなものとなった今、サタンが完全に追い出されるまで、私たちはただ、キリストの教会の選民の数が満ちるのを(そして終わりの日の預言された出来事を)待つだけです。

今、この世に対するさばきが行われ、今、この世を支配する者が追い出されます。(ヨハネ 12章 31節 新改訳IV)

悪魔がこの世から取り除かれるまで(そして人類から罪が取り除かれるまで)、世界は決して真の意味で「良い」場所にはなりません(マタイ 12章 29節参照)。実際、キリスト御自身が支配する千年後でさえ、サタンは人類に対して最後の試みをするのが許されており、比較的短期間のうちに、救い主の完璧な体制に対して、地球上の人口の大部分を反抗に導くでしょう(黙示録 20章)。これが、罪とサタンが手を組む最後の時となります。この時点から後、神は、悪魔も罪の性質もない「義が宿る」新しい天と地を創造されます(その時の人類は、復活した完全な状態のみ存在します)。神は、現在の世界を「修復」するのではなく、罪と悪の痕跡が永遠に焼き払われた、新しい完璧な世界を創造されるのです。

その日、天は焼け崩れ、自然界の諸要素は燃え尽き、熔け去ることでしょう。しかしわたしたちは、義の宿る[世界]、**新しい天と新しい地**とを、神の約束に従って待ち望んでいるのです。(第二ペテロ 3:12-13 後半 新共同訳)

その祝福された未来の日に、この世で最後のアダム(私たちの主イエス・キリスト)を信頼した最初のアダムの子孫である私たちは、彼に与った者として、来るべき新しい祝福された世界も分け与えられ、サタンとその従者に代わって、回復された完全な神の家族の一員となるのです。キリストが悪魔を完全に打ち負かし、その王国を父に委ねられるとき(第一コリント 15 章 28 節、黙示録 21 章 1~参照)、新しい地球上での神の支配がついに始まり、二度と損なわれることはありません。

以上、この世の本質(第Ⅰ)と悪魔の権威(第Ⅱ)を説明しましたが、次にサタンの軍勢(第Ⅲ)、この世を支配するための全体的な戦略(第Ⅳ)、そのためにサタンが用いる戦術(第Ⅴ)について説明します。

III. サタンの戦闘序列

「戦闘序列」とは、一般的に、ある軍事作戦における特定の戦闘員の編成を意味する軍事用語です。天使は一般的に「軍勢」(ヘブル語の **צבא**, *tsabha*: 例えば [士師記 9 章 29 節](#)と [列王記上 22 章 19 節](#)と比較のこと)に組織されており、神の天使の軍勢はいつかサタンの天使の軍勢 <万軍>と「戦い」、サタンの軍勢を敗かすことを考えると、この用語はこのテーマにふさわしいと言えるでしょう([黙示録 12 章 7-17 節](#))。

悪魔の力を研究する上で、選ばれた天使たちと合わせて考察を進めると、最も効果的でしょう。サタンの天使たちは、墮落していても、天使であることに変わりはありません。聖書には彼らの肉体的な外見や能力、本質的な性質が、創造された時から変化したと記していません。ただ、神との関係が変わっただけで、彼らは神を拒絶して現時点での「君 <悪魔>」に従ったのです。

1. 現時点での天の休戦: 大艱難の最中に、神は悪魔とその天使たちを天から決定的に追い出します([黙示録 12 章 7-17 節](#))。しかし、それまでの間、神とサタンの天使たちとの争いは、地上に限定されているようです。例えば、選ばれた天使たちは、ある決められた時に神の前に現れます(いわゆる「聖なる者たちの集会」、すなわち天使たちの集会です; [ヨブ記 15 章 8 節](#), [38 章 7 節](#); [詩篇 29 篇 1~](#); [エレミヤ書 23 章 18](#), [22 節](#)参照)。

主よ、もろもろの天にあなたのくすしきみわざをほめたたえさせ、聖なる者(すなわち、選ばれた天使たち)のつどいで、あなたのまことをほめたたえさせてください。大空のうちに、だれか主と並ぶものがあるでしょうか。神の子ら(天使たち)のうちに、だれか主の

ような者があるでしょうか。主は聖なる者の会議において恐るべき神、そのまわりにあるすべての者にまさって大いなる恐るべき者です。(詩篇 89 篇 5-7 節)

しかし、墮落した天使たちも、決められた時に、選ばれた天使たちと一緒に神の前に姿を現しているという記録があり、墮落する前と同じ組織形態をとっていると推測されます(列王記上 22 章 19-22 節, ヨブ記 2 章 1 節, ゼカリヤ 3 章 1 節参照)。

ある日、神の子たち(すなわち、選ばれた者も墮落した者も含めたすべての天使たち;創世記 6 章 4 節参照)が来て、主の前に立った。サタンも来てその中にいた。(ヨブ記 1 章 6 節)

サタンとその反逆者の天使たちが集まり続けていることは、他の多くの聖句でも裏付けられていることを明示しています。すなわち、天使の領域には、悪魔とその従者に課せられている、神に対するある種の必然的な従順が存在しているのです(ヤコブ 2 章 19 節; 第一ペテロ 3 章 19-20 節; 第二ペテロ 2 章 4 節; ユダ 6 節参照)これは決して心から神を選んでいるのではなく、(悪魔は、地上での活動を制限する規則に従わなければならない)強制されてしていることなのです。(ヨブ記 1 章 12 節と 2 章 6 節参照)。

悪魔とその勢力が、これらの強制的な抑制と命令を遵守しているという事実は、神の偉大な力と圧倒的な権力をよく知っていることを表しています。このシリーズの最初の部分で指摘したように、サタンの(誤った)願望は、神を打ち負かすことではなく(悪魔はこれが不可能だと知っていて、これについては思い違いをしていません)、むしろ、人類に対する巧妙な攻撃(アダムとエバの誘惑はその最初の、そして多くの意味で最も明確な例です)を通して、神にとって不可能な倫理的ジレンマを人類によって作り出し、神がサタンの反逆を、無条件に許さなければならないような状況に陥らせることでした。

しかし、このようなことも同様に馬鹿げています。なぜなら、神の神聖さと義は決して損なわれることがないからです。エデンの審判の時に予告されていたように、神は私たちの解決できない問題をすべて十字架で解決されました。一方では神の巨大な力を評価しながらも、神の無限の知恵と非の打ちどころのない性格を過小評価するのは、悪魔らしい(悪魔にとって典型的な)間違いです。

ここで、要点から少し逸れますが、簡単な考察をしましょう。もし、すべてのクリスチャンが、神の計り知れない力と能力への悪魔が持っている程の確信を、少しでも共有できたら、素晴らしいことになることでしょう。

私たちは、神の全知全能の原則を忘れてたり、適用しなかったりすることがよくあります。もし私たちが本当に信じているのであれば、全能の神に不可能なことはないという事実を再確認するのに最も効果的です(たとえ今、私たちの目がこれらの現実を見ることができず、今のところは信仰の目に頼らなければならないとしても)。

結局、神は私たちが見ているすべてのものを、イエス・キリストを通して造られ(ヘブル 1 章 2 節)、神がイエス・キリストを通してそれを維持し続けていなければ、私たちが見ているものは何

一つ存続せず([ヘブル 1 章 3 節](#))、イエス・キリストの日に神がすべてを造り直される日が来るのです([第二ペテロ 3 章 10-13 節](#))²⁷。

2. 神の国とサタンの国：神の国は、天地創造のときから存在しています。さらに、現時点で地上に物質的・物理的に見えていないからといって、過去におけるその霊的な役割や、さらに重要な現在の(この地上にあって神の国の市民であるすべての人々、すなわち、イエス・キリストを信じキリストが宿っている人々を通してなされる証の)役割が損なわれることは決してありません。

神の世界的な王国の地上での実際的な確立は、洗礼者ヨハネ(最初にその到来を予告した人：[マタイ 11 章 12 節](#))の時まで預言されていましたが、人としてのイエス・キリストを通して現わされ(そして、同胞によって拒絶されました：[ヨハネ 1 章 11 節](#))、<この王国は>主の再臨までは確立されず、最終的には父が再来し、新しい地で新しいエルサレムにおいて、その子らと共に住まわれるときに、永久不変のものとなり、すべての敵は最終的に打ち破られ、根絶やしにされることとなります([第一コリント 15 章 24-28 節](#), [黙示録 21 章 1~](#))

現在、この世界は悪魔の世界です。つまり、サタンとその勢力の暗黒の影響下にある罪深い人間の世界です。聖書は、この現在の罪深い世界の状態を神のせいだと表現しないように、細心の注意を払っています。

絶対的な意味で、この世界は主のものであり、悪魔の<支配する>この世での主の権威、証し、影響力は決定的であることは確実です(例えば、[ヨブ記 41 章 11 節](#); [詩篇 24 篇 1 節](#), [29 篇 10 節](#), [33 篇 10-11 節](#), [イザヤ 40 章 22 節](#))。

しかし、これまで見てきたように、すべての道徳的価値観を持つ被造物に自由意志を持たせ、神に従うことを選ぶ機会を与えるという神の計画に沿って、サタンは現在のところ、罪深い人間の心を試すために、かなりの行動範囲を許されています。

そのため、キリストはよく「世界」はサタンの影響力と支配の下にあると述べています([ヨハネ 12 章 31 節](#), [14 章 30 節](#), [15 章 18-19 節](#), [16 章 11 節](#)など)。したがって、この世を「悪魔の世界」として語るのは、神の世界の隅々までに及ぶ絶対的な主権を、否定するものでも損なうものでもありません。

しかし、悪魔が現在地球に及ぼしている広大で悪質な影響力を認めないのは、神の言葉の教えを誤って伝えることになるだけでなく、その影響により私たちを取り巻く危険性に対して警戒心を失わせることになります。

悪魔の地上の「支配」に関して、覚えておくべき重要な点は次の事柄です： 1) (アダムが失墜させられて)篡奪(さんだつ)した支配権、 2) 神の許可の下に許された(選択自由のある)支配、 3) 神とその意志にではなく、悪魔とその意志に従うように、人間に影響を与えることが主な

²⁷ 神の性格と本質については、『聖書の重要な教理』の第 1 部 神学：神の研究 を参照してください。

理由で許されている支配、4) 一時的な支配であり、間もなくイエス・キリストの再臨で撤廃される支配です。

神は現在、完全に絶対的な形で、世界を神権的に支配しているわけではありません。過去(サタンの墮落や、アダムとエバの墮落以前の再創造された地球において)にはそうしていましたが、未来(キリストの千年王国支配の間、そしてそれに続く永遠の状態において無限に)もそうするでしょう。しかし、エデンからキリストの再臨までの六千年の間、罪深い人々が住むこの世界は、完全に神のものではないほぼすべての心が、広範囲で強力な影響力を持つ、悪魔の支配下に置かれています。

悪魔は、神の支配と神の国に対する対照的な形として、自分の支配と王国を構築したのは明らかです。サタンは、「覆いのケルブ」の地位では満足してられず、先史時代のクーデターで神に取って代わろうとした時から、「取って代わる領域」を確立することが計画の一部となっています(このシリーズの第1部で詳しく取り上げています)。

悪魔はいと高き方の御前に呼ばれると、あたかも自分が神と対等であるかのように歩き回ります([ヨブ記 1 章 7 節](#), [2 章 2 節](#))。悪魔は「この世の支配者」と自称し([ヨハネ 14 章 30 節](#), [16 章 11 節](#))、地上で自分自身が神であるかのように振舞います([第二コリント 4 章 4 節](#))。

悪魔は地上に「玉座」や礼拝堂を持ち([黙示録 2 章 13 節](#))、地上のしもべや([第二コリント 11 章 15 節](#); [第一テモテ 5 章 15 節](#)参照)、戦いのために組織された天使の軍団を持っています(続く III.3 を参照してください)。

大艱難時代には、悪魔は地上で偽のメシアを立てて、世界規模の悪魔の王国を支配しますが、キリストの再臨の時に滅ぼされることになっています([ダニエル 2 章 44 節](#), [7 章 27 節](#), [黙示録 11 章 15 節](#))。

悪魔の支配下にあるこの世界では、悪魔の最も恐ろしい力、すなわち不信心な人の目をくらませて破滅に導く力から、悪魔の国ではなく神の国を選んだ私たちだけが解放され、キリストを信じた人だけがサタンの領域から救い出されているのです。

それは、彼らの目を開き、彼らをやみから光へ、**悪魔の支配から神のみもとへ**帰らせ、([使徒行伝 26 章 18 節](#))

神は、わたしたちを**やみの力から**救い出して、その愛する御子の支配下に移して下さった。([コロサイ 1 章 13 節](#))

キリストは、わたしたちの父なる神の御旨に従い、わたしたちを**今の悪の世から**救い出そうとして、ご自身をわたしたちの罪のためにささげられたのである。([ガラテヤ 1 章 4 節](#))

悪魔の力や能力には限界があるという考察に沿って、サタンの領域と神の国の間にあるいくつかの重要な違いに注意することが大切です:

- 神の国は永遠の王国である([ダニエル 2 章 44 節](#))のに対して、悪魔の国は一時的なものであり、その終焉が迫っています([ヨハネ 12 章 31 節](#), [16 章 11 節](#); [ローマ 16 章 20 節](#))。

- 神の王国は普遍的なものです([詩篇 47 篇 2-3 節](#))が、悪魔の王国はこの世に限定されており、その支配力は限られています([黙示録 11 章 15 節](#))。

- 神の王国は永遠の命を持つものですが([黙示録 21 章 6-7 節](#))、悪魔の王国では死の恐怖がサタンの継続的な支配の重要な要素となっています([ヘブル 2 章 14-15 節](#))。

キリストは初降臨の時に、ご自分の王国が文字通り世界を支配するのは、定められた時になってからであることを証言されました([マタイ 25 章 34 節](#), [26 章 29 節](#), [ヨハネ 18 章 36 節](#); [使徒 1 章 3-8 節](#); [ダニエル 7 章 22 節](#)参照)。

主が再び来られるまでは、世界の国々はしばしば悪魔に大きく影響され、名目上、彼の支配下にあります。しかし、悪魔がかなりの影響力を持っているにもかかわらず、歴史は最終的に主の御手に委ねられていることを忘れてはいけません。

サタンが行うことはすべて、神の許可の下によってのみ行われ、結局、神の御計画の不可逆的な進行を微塵も妨げることにはできないのです。全能の主なる神は、歴史の中で起こるすべてのことを真に支配しておられる方であり、国々の真の支配者です([出エジプト記 19 章 5-6 節](#); [詩篇 9 篇 7-8 節](#); [イザヤ 40 章 23 節](#)参照)。

万国の王であるあなたを、恐れない者がありますでしょうか。あなたを恐れるのは当然のことです。([エレミヤ 10 章 7 節](#))

...この決定は聖者たちの言葉によるもので、いと高き者が、人間の国を治めて、自分の意のままにこれを人に与え、また人のうちの最も卑しい者を、その上に立てられるという事を、すべての者に知らせるためである』と。([ダニエル 4 章 17 節後半](#))

...こうして七つの時が過ぎて、ついにあなたは、いと高き者が人間の国を治めて、自分の意のままに、これを人に与えられることを知るに至るでしょう。([ダニエル 4 章 25 節後半](#))

...その主権は永遠の主権、その国は世々かぎりなく、地に住む民はすべて無き者のように思われ、天の衆群にも、地に住む民にも、彼はその意のままに事を行われる。だれも彼の手をおさえて「あなたは何をするのか」と言いうる者はない。([ダニエル 4 章 34 節後半-35 節](#))

3. 天使の組織:

a. その軍事的性質： 墮落天使や聖なる天使について聖書が述べている事柄の多くは、軍事的な言葉や専門的用語で表現されています。これは驚くべきことではありません。大人でない天使はいませんし、年をとることもありません。さらに、「4-F(兵役適正試験での失格者)」の天使はいないので、すべての男性天使が恒久的に軍事的な機能を持たない理由はありません。²⁸

イスラエル人の集会は、戦争に出ることのできる者が「数えられた」ように(民数記 1 章 2 章; [申命記 1 章 15 節](#)参照)、天使が神のしもべであることを考えれば、同じように分類されるのは当然です([詩篇 104 篇 4 節](#); [へブル 1 章 7,14 節](#))。さらに、神はイスラエルの軍勢の主であり([ヨシュア 5 章 13-15 節](#); [サムエル記上 17 章 45 節](#))、国々の王であるだけでなく([ヨブ記 12 章 23 節](#); [エレミヤ 18 章 7-10 節](#))、「万軍の主」、つまり天使の軍隊の司令官でもあります([詩篇 84 篇 3 節](#); [イザヤ 6 章 5 節](#); [アモス 5 章 14-16 節](#); [ゼカリヤ 1 章 3-17 節](#)など)。

..わたしは主がその玉座にすわり、天の万軍がそのかたわらに、右左に立っているのを見た... ([列王記上 22 章 19 節](#))

「万軍」の他にも、「軍勢」([ルカ 2 章 13 節](#); [黙示録 19 章 19 節](#))、「軍団」([マタイ 26 章 53 節](#); [マルコ 5 章 9 節](#); [ルカ 8 章 30 節](#))、「隊(band)」([詩篇 78 篇 49 節](#))など、天使の集団を表すのに使われる軍事用語があります。また、天使の行動も軍事用語で表現されることが多いです。

1) 集結 ([列王記上 22 章 19 節](#); [ヨブ 1 章 6 節](#), [2 章 1 節](#); [ダニエル 7 章 10 節](#); [マタイ 16 章 27 節](#); [へブル 12 章 22 節](#); [ユダ 14 節](#); [黙示録 5 章 11 節](#))

2) 軍需品(馬や戦車の使用): [列王記下 6 章 17 節](#))

3) 陣営 ([創世記 32 章 1-2 節](#))

²⁸ 女性の天使がいるかどうかという疑問は、聖書では特に扱われていません。しかし、[ゼカリヤ 5 章 9 節](#)では、二人の翼のある女が、「邪悪」という女を籠に乗せてバビロニアに連れ去っています。この文脈では、「邪悪」が真の人ではなく擬人化されているのは事実ですが、彼女を運ぶ二人の生き物は天使のようで、典型的な天使の働きをしており、明らかに女性として描写されています。イエスは、復活の時には私たちは結婚しない ([ルカ 20 章 36 節](#)) と言っておられますが、これは性別がなくなるという意味ではありません。同様に、天使は天使の子孫を残すことはできませんが、これは天使に性別がないという意味でもありません。また、天使たちは一般的に「神の子ら」と表現されますが(後述する軍隊の集団を指す: [ヨブ記 38 章 7 節](#)参照)、これは「イスラエルの子ら(息子たち)」という同様の表現がユダヤ人女性の不在を意味するものでないと同様、女性の天使が存在しないという意味ではありません。[創世記 6 章 1 節から 4 節](#)では、墮落した天使の一部が半人半天使の子孫を残す場面があります(神の秩序に違反したため、彼らはその後底知れぬ所に落とされます。)

4) 攻城戦装備 ([創世記 28 章 12 節](#):注:「はしご」は文字通り、天に向かって傾斜している攻城用の梯子です。

5) 指揮系統(命令の授与:[詩篇 91 篇 11-12 節](#); [マタイ 13 章 41 節](#); [黙示録 7 章 2 節](#))

6) 合図(ラッパによる合図。[マタイ 24 章 31 節](#); [第一テサロニケ 4 章 16 節](#); [黙示録 8 章 2 節](#), [9 章 1 節](#); [第一コリント 14 章 8 節](#)参照)

7) 戦闘([士師記 5 章 20 節](#); [ヨブ記 19 章 12 節](#); [黙示録 12 章 7](#))

b. その具体的な階級 : 天使の組織と階級の具体的な内容に関する聖書の記述は、一般に考えられているよりも少ないものです。天使の組織構造の配列に関する多くの一般的な推測は、聖書自体がこの問題について述べていることよりも、聖書外典等の情報源に基づいています。²⁹ 以下は、神の選ばれた天使の階層構造について確かな情報の概観です。

*) 主の天使 : 主イエス・キリストは、その神性に加えて、処女降誕以来の真の人間であり、天使ではありません。しかし、教会の頭であると同時に([エペソ 1 章 22 節](#); [4 章 15 節](#); [コロサイ 1 章 18 節](#))、すべての天使の頭(創造主)でもある([エペソ 1 章 21 節](#); [コロサイ 1 章 15-20 節](#), [2 章 10 節](#); [ヘブル 1 章 1-4 節](#))ことを、この時点で覚えておくことが重要です。

イエス・キリストは「主の天使」(すなわち、神の最高の天の「使者」[ヘブル語とギリシャ語の両方の天使の意味]であり、イエスの場合は実際の天使ではありません)として、受肉に先立って、神の目に見える代表者として現れる権限を合わせ持っていました。³⁰

人の子である方([マタイ 8 章 20 節](#), [9 章 6 節](#), [26 章 64 節](#); [マルコ 14 章 62 節](#)など)は、人間のすべての王の王であり、天使の主の主でもあり([黙示録 17 章 14 節](#), [19 章 16 節](#), [第一コリント 8 章 5 節](#), [第一テモテ 6 章 15 節](#)参照)、「すべての創造物に先だって生まれたかた」で([コロサイ 1 章 15-18 節](#); [ローマ 8 章 29 節](#); [ヘブル 1 章 6 節](#); [黙示録 1 章 5 節](#)参照)、その称号と権威は十字架上の勝利によって確認されました([マタイ 25 章 31 節](#), [28 章 18 節](#), [エペソ 1 章 20-21 節](#), [3 章 10 節](#); [ピリピ 2 章 9-10 節](#); [コロサイ 2 章 15 節](#))。

階級の称号:

1) ケルブ: このシリーズの最初の部分で詳しく説明したように、ケルブ、セラフ、「生き物」は、すべて同じ(天使の)階級を指しており、神の戦車兼御座の四人の従者でもあります(「悪魔の反

²⁹ アポクリファルの『十二族長の書』は、このテーマに関する古代の推論であり、神の靈感によらない顕著な例であり、他にもそうした類のものがああります(聖書外典の『エノク書』も参照)。

³⁰ キリストが旧約聖書の「主の天使」という呼称で現れたことについての詳しい論議は、『聖書の重要な教理』第1部のII.C.3節神学: 神の研究を参照してください。

乱」を参照。患難の背景、第1部:サタンの反乱と墮落、III.i 参照)。これは天使の最高位です。サタンは「覆いのケルブ」、つまり究極の「近衛兵」であり、神の絶妙なる神聖さから不敬なものをすべて遠ざける役目を担っていました。サタンは「明けの明星」であるルシファーであり、彼の高位に代わって「輝く明けの明星」である人の子(また真の神)、イエス・キリストがその位に就きました。〈注意:かつてイエス・キリストとルシファーが同じ位にいたと言っているわけではありません〉サタンの特有な守衛としての〈以前の〉役割は、ケルブ、セラフ、生き物などと表現されている四つの天使の生き物が〈現在〉担っています(第1部での考察を参照)。

2)長老たち : ケルブの次に位が高いのは、天使の長老たちです(ギリシャ語で Presbyteroi π ρ ε σ β ū τ ε ρ ο ι)。物理的な位置としては、ケルブの次に父に近いところにいます(ケルブが担っている神の戦車兼御座の周りに座っています)。そして、彼らは神の御座と関連して描写されています([イザヤ 24 章 22-23 節](#), [黙示録 4 章 4](#), [4 章 10 節](#), [5 章 5-6 節](#), [5 章 8 節](#), [5 章 11 節](#), [5 章 14 節](#), [7 章 11 節](#), [7 章 13 節](#), [11 章 16 節](#), [14 章 3 節](#), [19 章 4 節](#)参照)。

[コロサイ 1 章 16 節](#)で、〈神によって造られたものの中に〉「王座」とあることから、サタンもその組織において、(王族のような)長老たちに相当する権威ある位を真似て設けていることが考えられます。〈コロサイ 1 章 16 節(口語訳):万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、位(欽定訳では王座)も主権も、支配も権威も、みな御子にあって造られたからである。〉

決して決まった数ではありませんが、イスラエルには、十二部族の多数の長老達、部族の長ら、また「貴族」らが昔から存在していました。このシリーズの前半で述べましたが、守護ケルブとしての地位のサタンが、イスラエルの大祭司の胸当てにあった十二個の宝石と相応的な九つの宝石で飾られていたことを思い出してください。それらの十二個の宝石は、レビ族を除く、兵役に服するイスラエルの各部族を象徴するものでした。同様に、覆いのケルブが持つ九つの宝石は、(第1部で示唆されたように)天使軍団の元の九師団を表していました

さて、[ヨハネの黙示録 12 章 4 節](#)には、大きな龍(悪魔)が天の星の三分の一を掃き寄せ、それらを地に投げ落したと書かれています。多くの注釈者はこの星たちは天使ではなく、人間であるという意見を持っています。(確かに、聖書のある箇所では、信者を星として表現しています。[ダニエル 12 章 3 節](#); [ピリピ 2 章 15 節](#); [黙示録 12 章 1 節](#)参照)。しかし、実はこの聖句は〈天使と人間の〉両方に当てはまるのです。

[ダニエル 8 章 10-13 節](#)にあるこの「反逆」の出来事([ダニエル 8 章 12 節](#)と [13 節](#): *pesha*, פשע-背き、反逆)で投げ落とされたのは、信者であることが理解できます。この解釈は、艱難期に背教が起こるといふ預言とうまく重なります。³¹ これは守護ケルブが身につけている九つの宝石についての話に結び付きます。

[黙示録 12 章 4 節](#)の最も適切な解釈は、これは、悪魔の反乱とその人類への攻撃についてで

³¹ 大いなる背教の概要については、来たる艱難期第三部 A の第 II 項、またペテロの手紙シリーズ # 26 を参照してください。背教のプロセスについては、BB 3B 罪についての神学 Hamartiology の IV 項 6、またペテロの手紙シリーズ # 27 章を参照してください。

あって、天使と信者の両方にまつわる歴史の始まりから大艱難期の始まりまでの闘争全体の主要な点すべてを網羅しているパノラマあるということです([黙示録 12 章 1-17 節](#))。

龍と女の象徴的な話の中で、龍の尾が「天の星の三分の一を掃き寄せ、それらを地に投げ落した」と語られているとき、これは信者(特に[ダニエル 8 章 10-13 節](#)と[12 章 3 節](#))だけでなく、天使(例えば、[士師記 5 章 20 節](#); [ヨブ 38 章 7 節](#); [イザヤ書 40 章 26 節](#); [ルカ 2 章 13 節](#))にもあてはまると理解できます。³²

したがって、この記述は、(艱難期にサタンと共に地に投げ落とされる)サタンを選んだ天使と、大いなる背教と呼ばれる事態において恵みから落ちた信者(この意味で、悪魔とその地上の子分である反キリストによって投げ落とされる:[ダニエル 8 章 12-13 節](#); [マタイ 24 章 10-13 節](#); [第二テサロニケ 2 章 3 節](#); [第一テモテ 4 章 1 節](#)参照)の両方に当てはまると思われます。

このように、艱難期中盤において、地に投げ落とされる墮天使と、大いなる背教時代において、その背教ゆえに投げ落とされる墮落した信者の意味も含蓄した比喩的な表現は、悪魔と、その地上の代理者(反キリスト)の行動が記述されている以下の代表的な二つの節を見ればわかるでしょう。

そして(小さな角 [= 反キリスト] は)天の軍勢(両カテゴリー < 天使達と信者ら >)に対して自分を大きくし、軍勢の一部(墮落した信者)と星の一部(墮落した天使)を地に投げ落とし、彼らを足で踏みつけた(つまり、彼とのかかわりが破滅へと導く)。([ダニエル書 8 章 10 節](#) ESV 訳直訳)

(龍の)尾が天の星の三分の一(墮落した天使と墮落した信者の両方)を押し流して、地に投げつけた(つまり、彼らの反抗または背教と、彼らとのかかわりが彼らの没落につながる)。³³ ([黙示録 12 章 4 節](#)前半)

天使の構成が氏族や部族のような形で造られているのであれば(今取り上げているイスラエルでのあの宝石のように: また、ソロモンの死後の十部族の反乱も参照のこと: [列王記上 11 章 26 節](#)~)そして、元々の九つの天使の氏族のうち、(黙示録 12 章 4 節に「三分の一」とあるように)三つの氏族の反乱があったと仮定すると、六つの忠実な氏族が残り、(合計二十四人の長老がいるということは: [黙示録 4 章 4 節](#)参照)神に忠実で、悪魔の反乱の扇動に乗らなかった六つ

³² Robert H. Mounce, *The Book of Revelation* (Grand Rapids 1998) 184-185 は、この箇所は意図的に黙示録 9 章 1 節の「落ちてくる星」の天使を連想させると指摘し、他の関連箇所にも言及しています: [ルカ 10 章 18 節](#)、[イザヤ 14 章 12 節](#)参照。

³³ [ダニエル書 7 章 7 節](#)と [8 章 7 節](#)では、「地に投げつける」(後者の箇所のみ)と「踏みつける」(両方の箇所)は、破壊と同化の両方を同時に示しています。墮落した天使や背教した元信者が悪魔と手を結び、天の市民権を失い(=「地上に投げ落とされ」)、その結果、悪魔と結ばれて永遠の苦しみを受けます(=悪魔とその手下に「踏みつけられる」: [黙示録 11 章 2 節](#)を参照してください)。

の天使の部族のそれぞれに、四人の長老がいることとなります。「四」という数が天使の中で特によく使われる重要な数であることを考慮すると、この解釈はもっと受け入れやすくなるでしょう。

a) 四つのケルブ: [エゼキエル 1 章 4-28 節](#), [10 章 1-22](#) (また、四つの生き物 [[黙示録 4 章 6-9 節](#), [5 章 6-8 節](#), [5 章 14 節](#), [6 章 1 節](#), [15 章 7 節](#), [19 章 4 節](#)] もありますが、これもケルブ、セラフとともに同じ(天使の)階級であるということについては、すぐ前の 1) のセクションを参照してください)。

b) 四つの戦車: [ゼカリヤ 6 章 1-8 節](#)

c) 四人の風の制御者: [黙示録 7 章 2 節](#)

d) 四人の滅ぼす天使: [黙示録 9 章 13-15 節](#)

e) 四人の鍛冶(新改訳では職人): [ゼカリヤ 1 章 18-21 節](#)

さらに、前に記したように大祭司の胸当ての宝石が軍事的な順序で配置されていると仮定すると(すなわち、[民数記 2 章 1-31 節](#), [10 章 11-36 節](#); [出エジプト 28 章 17-21 節](#), [39 章 10-14 節](#) 参照)、守護ケルブに象徴されていない<三つの>宝石からなる列は<[エゼキエル 28 章 13 節](#) 参照>、ラケルの息子であるエフライムとマナセ<正しくはこの二人はラケルの息子ヨセフの子ら>、そしてベニヤミンの三部族と一致します(ヤコブは、この同じ二倍の分け前の原則に基づいて、ヨセフの二人の息子を自分のものとして受け入れました。[創世記 48 章 5 節](#); [申命記 21 章 15-17 節](#); [サムエル記上 1 章 5 節](#); [列王記下 2 章 9 節](#); [ヨブ記 42 章 10 節](#); [イザヤ 61 章 7 節](#); [ゼカリヤ 9 章 12 節](#); [第一テモテ 5 章 17 節](#) 参照)。³⁴

これらの三部族は、ヤコブの最愛の妻、つまり晩年まで胎が閉ざされていたラケルの子として、またヤコブの最後の子らとして、天使に対応するイスラエルに与えられた分け前、ひいては全体的にも神の特別な賜物としての人間の家族となる可能性が高いでしょう([黙示録 21 章 12-14 節](#) 参照)。³⁵

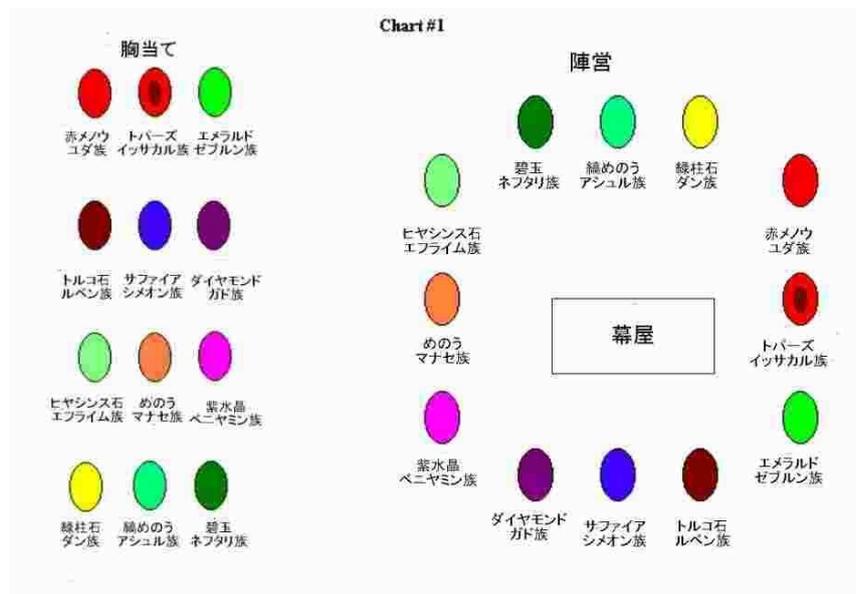
十二の根本的な区分を持つ神に属する人間の家族<イスラエル十二部族>は、選ばれた天使の残りの六つの師団の二倍になり(反逆した三つの師団の四倍)、神がのろいを多くの祝福に変えるという原則を実証し([出エジプト 22 章 4-9 節](#); [サムエル記下 12 章 16 節](#); [ヨブ記 42 章 10](#)

³⁴ このシリーズの第一部のⅢ項 f. を参照ください。

³⁵ 二倍分けの原則については、同じく愛された二番目の妻ハンナの物語を参照してください。ハンナも元々は不妊であり、二倍の分け前を受けました: [第一サムエル 1 章 1 節](#) ~. (参照: [創世記 48 章 22 節](#); [申命記 21 章 15-17 節](#); [列王記下 2 章 9 節](#); [ヨブ 42 章 10 節](#); [イザヤ 61 章 7 節](#); [ゼカリヤ 9 章 12 節](#); [第一テモテ 5 章 17 節](#))。イスラエルが神の家族の中心的根源であるという事に関しては、来たる『聖書の基本教理』第 6 部 B: 教会論 Ecclesiology で扱われます。

節; [イザヤ 40 章 2 節](#), [61 章 7 節](#); [ヨエル記 2 章 25 節](#); [ゼカリヤ 9 章 12 節](#); [マタイ 19 章 29 節](#); [マルコ 10 章 30 節](#); [ルカ 8 章 8 節](#), [18 章 30 節](#) [19 章 8 節](#))、暗闇から光をもたらす神であることを表します。また、宝石の相対的な位置関係には以下のような意味があります。

<チャート#1: 宝石の名前は、新改訳IVに使われている言葉に統一しました>



a) 大祭司の胸当ての第三列目の<宝石が>象徴する、後に加えられた三部族(前述の二倍の分け前)に相応する、元の天使の師団はありません。1) ヒヤシンス石 (Heb. שבו, shebho)はエフライム、2) めのう(またはヒヤシント、Heb. לשם, leshem)はマナセ、3) 紫水晶 (Heb. אַחַלְמָה, 'achalamah)はベニヤミンです。十二部族の宿営順([民数記 2 章 3-23 節](#))では、この三つの部族は幕屋の後方(すなわち西)、これはランクづけでは第三番目になります(胸当ての上から三列目に相当)。野営地での位置的な順位は、胸当ての列の順位に対応しており、(幕屋の契約の箱の上の贖罪所が象徴している)天の御座におられる全能の主なる神の前における優位順を表しています。

1) 第一の宿営:王座(幕屋)の正面:東(主の部族であるユダが率いる宿営)。

2) 第二の宿営:王座(幕屋)の右手:南(長子のルベンが率いる宿営)。

3) 第三の宿営:王座(幕屋)の後方:西(エフライムを中心とした宿営。兄であるマナセは差しおかれて、特別にヨセフによって祝福された部族)。(攻撃を受けやすい箇所)後陣は、特別な守護の役割を示すという点で、左手よりも象徴的に優れています(サタンは、キリストの「かかと」を攻撃する「守護のケルブ」でした:[創世記 3 章 15 節](#))。

4) 第四の宿営：王座(幕屋)の左手：北(ダンが率いるグループで、この部族から反キリストが起こることになっている)。³⁶

b) 天使の序列を胸当ての序列と比較すると、エゼキエルの二列目にあたる順位で挙げられている宝石<[エゼキエル書 28 章 13 節](#)>は、胸当てでは第四列目に降格されています(すなわち、縞めのおう[Heb. תרשיש]、緑柱石[Heb. שהם]、貴かんらん石[Heb. יִשְׁפָּה]という宝石)。天使の階層において、この列は、先史時代のサタンのクーデターの際に、神の家族と権威から離脱してサタンに従い、反逆した<天使>三師団を表していると思われます。

第四列目<の宝石>は、大祭司の胸当てで最下位であるだけでなく、それに表されている三つのヘブル人部族は、十二部族の宿営順でも最も不名誉な位置に定められています(すなわち、ダン、アシェル、ナフタリが宿営していたのは幕屋の北側、左手の位置です)。二位から最下位への降格(そして天使の仕組みでは、どこにも降格しない)もまた、重要な事です。というのも、二番目というのは必然的に「嫉妬」の位置であり、本当は自分が一番であるべきだと考える人の嫉妬心を最もかきたてる位置なのです。

サタンは、被造物の中で最も位が高いにもかかわらず、受肉前のキリストである主の天使に対しては自分が「二番」であることを知り、その地位を欲して、神に対する致命的な反逆を敢行したのでした(皮肉なことに、この反逆により、サタンと彼に従う者たちは完全に入れ替えられる運命にあります)。この最後の列が最も地位の低いものであることを示す他の証拠として、(悪魔に身を投じた三師団の天使への降格命令・追放に該当する)以下の事柄があります。

1) このダン、アシェル、ナフタリのグループは、行進中は最後に続くこと([民数記 2 章 31 節](#))。

2) この三部族だけが、行進中には幕屋のどの部分とも接触しないという事実(契約の箱は第一の部の前に、幕屋は第二の部の前に、幕屋の調度品は第三の部の前に)。<[民数記 10 章 14~25, 33 節](#)参照のこと>

3) ダン、アシェル、ナフタリは、モーセの相続の祝福でも、最後に言及された三部族であること([申命記 33 章 1-39 節](#))。³⁷

³⁶ このように、メシヤの部族と反キリストの部族は地理的に正反対である。反キリストとダン部族との関連については、シリーズ「来たる艱難期」の第3部 B、II 項 1.a 「反キリストの母方の出自(しゅつじ)」で詳述します。

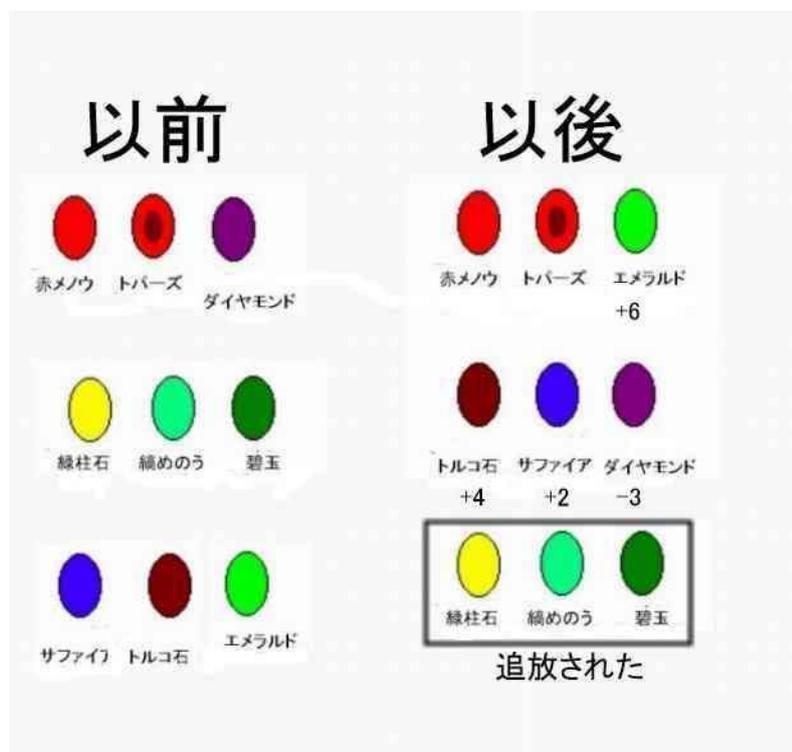
³⁷ この点に加え、反キリストの部族であるダン(前注参照)に関連する数々の否定的な要素に加え、これら三部族はすべて物質主義に関連しているという事実もあります：ダンは「金の石」またはタルシシュ(バビロンの別名である商業娼婦ツロを指す名前)に代表され、アシェルは[創世記 49 章 20 節](#)で「珍味」に、ナフタリは[創世記 49 章 21 節](#)で「美」に恵まれている([申命記 33 章 22-25 節](#)も参照)。さらに、これらの三部族は、ヨセフの正妻ではなく、正妻の侍女から生まれた四人の子

c) エゼキエル書にある守護ケルブが身につけている宝石の順序<エゼキエル 28 章 13 節参照>が、大祭司の胸当てでは新しく配列し直されたことから考えると<出エジプト 28 章 17-20 節にある祭司の胸当ての宝石順と、民数記2章の十二部族の宿営順を参照>、神に忠実であり続けた六つの天使師団の地位が入れ替えられたと推測することができます。この再配置(すぐ下の図を参照)は、サタンのクーデターの企ての後、これらの六つの忠実な天使の師団がそれぞれ残した、あらゆる功績の結果であることは間違いありません。

- 1) 最高位の一番目と二番目(ユダに相当する *odhem*-赤メノウとイッサカルの *pitedhah*-トパーズ)は、その地位を保持しています。
- 2) 三番目(ガドに相当する *yahalom*-ダイヤモンド)は、位が三つ下がって六番目(最後)になりました(列と位において絶対的にも相対的にも降格)。
- 3) 七番目(シメオンに相当する *sappir*-サファイア)は、二つ順位を上げて五位になりました(三つの師団が除名されたことにより、列としては相対的に昇格しましたが、他の順位との関係では位が一つ下がりました)。
- 4) 八番目(ルベンに相当する *nophekh*-トルコ石)は、四つ順位を上げて四位になりました。
- 5) 九番目(ゼブルンに相当する *bareqeth*-エメラルド)は、六つ順位を上げて三位になりました(最後尾から一列目への最も素晴らしい昇進です)。

[チャート#2 を参照ください: angelic.jpg; available at ICHTHYS.com]

供のうちの三人を表している (四人目はガド族で、忠誠を誓う氏族の中で最も劇的な降格を受けた天使の氏族である碧玉族に相当する)。



残った六つの天使団と追放された三つの天使団の名前は知らされていませんが、少なくとも、悪魔が神に代わって宇宙の支配者になろうとした先史時代の出来事の経過において、何かを得ることができます。

いくつかの師団が神から亡命したという事実は十分に明らかですが、興味深いのは、忠実な師団の中で神のために献身的かつ精力的に功績を残した度合いは、それぞれ違っていたということです。ある者(赤メノウとトパーズ)は、その地位の期待された役割を果たし、またある者(エメラルド、トルコ石)は、その地位の役割において期待をはるかに上回りました。そして、他の者(最も顕著なダイヤモンド、相対的にサファイアも)は、はっきりと熱意のなさを示しました。このようなことはよくあるのです。

近い将来、ヨハネの黙示録の七つの教会に代表される、七つの教会時代の歴史を研究する機会があると思いますが、その際、歴史の中で起こった(そして現在起こっている)それぞれのいくつかの傾向に注目することにします。神につくことを選んだ天使たちにも様々な献身レベルがあるのと同様に、教会の中の個人においても、神の期待と与えられた機会に応える者、任務を超えて応える者、また期待にそむく者も出てきます。³⁸ すべての人が神の家族の一員であること

³⁸ もちろん、三つの天使団が集団として追放されたからといって、個々の天使がその流れに反する決断を下す可能性が排除されるわけではありません(アメリカ南北戦争の際の州の分離独立に似ています。) ノアの三人の息子はもう一つの適切な例証を与えてくれます。次男のハムは反抗的な振る舞いをしましたが、三男のヤベテは長男のセムと共に潔白な振る舞いをしました(創世記 9:19ff)。その結果、ヤベテは増やされて、靈的祝福の継承者セムとの関係で祝福され、ハムの子カナンは呪われました(天使の集団の三分の一が追放されたことに似ています)。しかし、言うまでもなく、人類の

で報いを受けますが、神が与えた恵みの機会に、任務以上に応える者には大きな報いがあるのです。

多くの先の者はあとになり、あとの者は先になるであろう。(マルコ 10 章 31 節)

3) 大天使：「大天使」はギリシャ語で、arch-(支配者)と angel-(天使)という二つの語源からなるもので、王子や族長を意味するヘブル語のサール sar の訳語であることはほぼ間違いありません。³⁹ 聖書で大天使として言及されているのはミカエルだけ(ユダ 9 節)ですが、ダニエル 10 章に記されているように、他にも名前では呼ばれていません(「天使の長」「君」)大天使は多数いることがわかります(ダニエル 10 章 13 節, 10 章 20, 21 節, 12 章 1 節)。⁴⁰

ダニエル書 10 章における用法(旧約聖書の他の箇所でも人間の指導者にサールという言葉が使われていることと同様)から、サール(「王子」または「大天使」)は軍事的な役職であることが分かります。この印象を裏付けるような箇所がダニエル書以外の書にも記されています。

a) 第一テサロニケ 4 章 16 節の大天使は、死者のよみがえりを命じて叫ぶ(その後、集合を命じる軍隊のトランペットの音が続く)。

b) ユダ 1 章 9 節のミカエルは、モーセの体をめぐってサタンと戦う。

c) 黙示録 12 章 7 節では、ミカエルは「ミカエルの御使いたち」を率いて悪魔とその軍勢と戦い、悪魔を天から地に投げ落とします。

最後の二つの例が示すように、イスラエルに関連する大天使としてのミカエル(ダニエル 10 章 13 節「あなたたち[複数形=イスラエル]の王子ミカエル」;ダニエル 10 章 20-21 節, 12 章 1 節; ユダ 9 節、そして、「女」としてたとえられているイスラエルの話の中に、悪魔に対するミカエルの勝利が記述されている黙示録 12 章 7 節を参照)は、選ばれた者と墮落した者の両方の、名前では呼ばれていない無数の大天使達(または「君たち」)の中において、特有な地位を占めているのがわかります。

大天使ミカエルは：

歴史の中で、信者は(そして未信者も)これら三つの血統から出てます：神は個人の心を見ておられます。

³⁹ ダニエル書 10 章では、ミカエルはヘブル語で何度も sar サルと呼ばれており、この言葉は七十人訳のギリシャ語では、アルコン archon とアンゲロス angelos と交互に表現されています。

⁴⁰ ガブリエル(ダニエル 8 章 16 節, 9 章 21 節; ルカ 1 章 19 節, 1 章 26 節)と並んで、ミカエルは聖書で名前が言及されている唯一の選ばれた天使です。このため、また、ルカ 1 章 19 節では、黙示録 8 章 2 節の大天使たちと同じように「神のみまえに立つ」と言われていることから、ガブリエルも大天使であることは間違いないでしょう。

- a) 神の選ばれた民(私たち異邦人は恵みによって接ぎ木された民:[ダニエル 12 章 1 節](#); [ローマ 11 章 11-24 節](#))の守護者で、
- b) 唯一名前と呼ばれている大天使[サール sar]であり([ダニエル 12 章 1 節](#), [ユダ 1 章 9 節](#))、
- c) 「天使の長のひとり」([ダニエル 10 章 13 節](#))と呼ばれるだけでなく、「あなたの民を守っている大いなる君」([ダニエル 12 章 1 節](#))とも呼ばれています。

最後に、パウロの書簡に出てくる天使的な「支配者」や「支配-archai」も大天使として理解すべきです([第一コリント 15 章 24 節](#); [エペソ 1 章 21 節](#), [3 章 10 節](#), [6 章 12 節](#); [コロサイ 1 章 16 節](#), [2 章 10 節](#), [2 章 15 節](#), また、[第一ペテロ 3 章 22 節](#)の「天使」では、逆に arch-(支配者)の部分が省かれています)。引用されたすべての例で、彼らは他の天使や天使の階級と一緒に言及されているので、それらの称号の「angelos-(天使)」の部分は不要(混乱を招く可能性がある)として省略されています。⁴¹

- 4) **権威**： 次の二つのカテゴリーと同様に、これらの天使の役職についての聖句の大部分は墮落した天使についてですが、これらの呼称は選ばれた天使にも当てはまり(例えば、[エペソ 1 章 21 節](#); [第一ペテロ 3 章 22 節](#))、本来の階級構造の一部と捉えることができます。

「権威」(ギリシャ語: $\epsilon\kappa\upsilon\sigma\iota\alpha$, *exousia*)は、大天使よりもやや低い階級ですが、その名が示すように、これらの天使は重要な分野での権限を与えられています。([大天使]アーカイは[権威]エクソシアと一緒に言及されていることがほとんどです。[第一コリント 15 章 24 節](#), [エペソ 1 章 21 節](#), [3 章 10 節](#), [コロサイ 1 章 16 節](#), [2 章 10 節](#), [2 章 15 節](#) [第一ペテロ 3 章 22 節]においては、大天使が天使として言及されています])大天使の下位にある司令官と考えられますが、かなりの数の部下を持っていることとなります。黙示録で、風を抑え、最初の四つのラッパの裁きを行う四人の天使は、この階級に属すと考えられます([黙示録 7 章 1-3 節](#), [8 章 7-12 節](#))。

- 5) **権力**： 三箇所([第一コリント 15 章 24 節](#), [エペソ 1 章 21 節](#), [第一ペテロ 3 章 22 節](#))で、天使の第三の階級として、「権力」(ギリシャ語で「 $\delta\upsilon\nu\alpha\mu\iota\varsigma$ ダイナミス」)が挙げられています。

これらの天使は、かなりの能力と指揮権を持った天使で(間違いなくかなりの数の部下を持っています)、階級的には上位ですが、「権威」よりは下位です。[エペソ 6 章 12 節](#)では、これらの天使は(少なくともサタンの階層の中では)「世の主権者」(ギリシャ語で、 $\kappa\omicron\sigma\mu\omicron\kappa\rho\acute{\alpha}\tau\omicron\rho\epsilon\varsigma$, *kosmokratores*)と呼ばれ、支配圏は悪魔の「天(kosmos)」に限定されていることを強調しています。

⁴¹ ギリシャ語のアルケ ($\acute{\alpha}\rho\chi\eta$) は、パウロ (とルカ) は人間の権威に対して使っています ([ルカ 20 章 20 節](#); [ローマ 8 章 38 節](#); [テトス 3 章 1 節](#))。

6) 霊: 下士官天使、つまり特別な階級や地位のない天使は、単に「天使」や「霊」と呼ばれることが多いです(「悪霊 demon」という用語は、悪魔の下士官兵に使われているもので、「権勢 キリオテス *kyriotes*」、あるいは「主(君)」も同じです。このことは、以下の III.4.6 節を参照してください。) 神に仕える天使も墮落した天使も大多数はこのカテゴリーに属します。

神に仕える天使においては、「下士官兵」と言っても重要ではないということではなく、キリストの体と同じように、神の計画を達成する上で重要であることに変わりはありません([第一コリント 12 章 12 節](#)~参照)。単に「天使」と呼ばれる個々の霊に委ねられている役割や一般的な奉仕のいくつかを並べると、さらに明らかになります。

選ばれた天使の特有の役割:

1) (神の代理人としての)抑制: 風の抑制など。黙示録 7 章([ダニエル 12 章 1 節](#)のミカエル参照)。

2) (神の代理人としての)監視: ゼカリヤ 1 章の騎手の見回る者と、ゼカリヤ 6 章の四台の戦車の地をあまねくめぐる者は、主に代わって地上の出来事を監視します(この役目は、[ダニエル 4 章 13 節](#)、[17 節](#)、[23 節](#)にも記されており、アラム語で「見張りの者(新改訳)/警護者(口語訳)/見張りの天使(新共同訳)」「iyar」という言葉で呼ばれています。)

3) (神の代理人としての)裁き: 七つのラッパを持った七人の天使([黙示録 8 章 6 節](#)~)と黙示録 15-16 章の鉢を運ぶ天使は、主が定めた破壊を実行する天使の典型的な例です([創世記 19:1](#)~、[エゼキエル 9 章](#)、[黙示録 7 章 3 節](#)、[14 章 18 節](#)、[16 章 5 節](#)も参照してください)。

選ばれた天使たちの一般的な役割:

1) 地方教会への奉仕(神の使者として): [黙示録 2-3 章](#)によると、それぞれの地方教会には、見張り、導き、保護のために天使が割り当てられていることがわかります(七つの教会での文脈にて)。

2) 信者への奉仕(神の使者として): 守護天使については、聖書外典に基づいて多くの考察がなされています。聖書では保護、導き、見張るなどの役目を天使の務めとしているということは確かなことです。(特に、[創世記 32 章 1 節](#)、[列王記下 6 章 16-17 節](#)、[詩篇 91 篇 11-12 節](#)、[ダニエル 6 章 22 節](#)、[マタイ 4 章 11 節](#)、[18 章 10-11 節](#)、[ルカ 16 章 22 節](#)、[使徒行伝 12 章 15 節](#)、[ヘブル 1 章 14 節](#)を参照してください)。

3) 特別な任務のため(神の使者として): 天使は主なる神のしもべとして([詩篇 103 篇 21 節](#)、[ヘブル 1 章 7 節](#)、[14 節](#))、主の御心を実現するために様々な仕事を任されています。聖書に記録されているものには、次のようなものがあります。

- a) 信者の霊を天国に連れて行く(キリストが昇天する前の時点では、アブラハムのふところとされる地の下の楽園に連れて行く)([列王記下 2 章 11-12 節](#)、[ルカ 16 章 22 節](#))。
- b) キリストの再臨の際に、キリストに会い、よみがえる時、信者を護衛する([マタイ 24 章 31 節](#); [ルカ 17 章 35 節](#)と[第一テサロニケ 4 章 16-17 節](#)を参照してみてください)。
- c) 靈感を受けた信者を幻の中で案内する([黙示録 17 章 3 節](#); [21 章 9-10 節](#); [第二コリント 12 章 4 節](#); [黙示録 4 章 1-2 節](#)参照)。
- d) 出エジプトの際にマナを提供する([詩篇 78 篇 25 節](#))
- e) 信者を救出する([列王記下 6 章 16-17 節](#); [ダニエル 6 章 22 節](#); [使徒行伝 5 章 19 節](#); [12 章 1 節](#)~.)
- f) 神に代わって信者に宣言し、伝える([マタイ 28 章 5-7 節](#)、[ルカ 2 章 8-15 節](#))。
- g) 神を賛美する([ネヘミヤ記 9 章 6 節](#)、[黙示録 5 章 11 節](#)~.)

選ばれた天使と墮落した天使について、聖書は豊富な情報を提供していますが、完全に網羅してこのテーマを取り上げているわけではありません。私たちが知りたいと思うことはもっとたくさんありますし、できることなら聞きたいこともたくさんあります。

聖書が天使について情報を開示しない理由は確かにあります。聖書に基づかない考察が原因で、いつの時代でも、天使崇拝が広く本格的に行われるようになってしまいました。古代のグノーシス主義から現代の「公認の」宗教に至るまで、真のキリスト教以外では、天使をあがめる傾向が常にあり、結果的に天使崇拝になってしまっています(まさに、かつて天使であったサタンが常に切望していたものです)。コロサイ人への手紙とエペソ人への手紙の多くは、グノーシス的な教えに反論することに費やされています(例えば、[コロサイ 2 章 8-10 節](#)、[エペソ 1 章 23 節](#)、[3 章 19 節](#)、[4 章 10 節](#)、[コロサイ 1 章 19 節](#)、[1 章 25 節](#)~、[2 章 2 節](#)、[2 章 20-23 節](#)参照)。また、ヘブル人への手紙は、キリストが天使よりも優れていることを強調するために、紙面を割いていません(特に 1-2 章参照)。

要するに、この話題に興味を持つ人がいるかもしれませんが、天使は私たちより優れているとはいえ、被造物であって、すべての栄光は創造主に帰すべきことを忘れてはいけません([ローマ 1 章 25 節](#))。

あなたがたは、わざとらしい謙そんと天使礼拝とにおぼれている人々から、いろいろと悪評されて[彼らのとりこされて]はならない。彼らは幻を見たことを重んじ、肉の思いによっていたずらに誇るだけで、キリストなるかしらに、しっかりと着くことをしない。このかしらから出て、からだ[なる教会]全体は、節と節、筋と筋とによって[真に]強められ結び合わされ、神に育てられて成長していくのである。([コロサイ 2 章 18-19 節](#))

これらのことを見聞きした者は、このヨハネである。わたしが見聞きした時、それらのことを示してくれた御使の足もとにひれ伏して拝そうとすると、彼は言った、「そのようなことをしてはいけない。わたしは、あなたや、あなたの兄弟である預言者たちや、この書の言葉を守る者たちと、同じ僕仲間である。ただ神だけを拝しなさい」。(黙示録 22 章 8-9 節)

4. 墮天使の組織:

悪魔の天使についての最初のポイントは、その創られた様においては、選ばれた天使たちと何の違いもないように見えることです。一方が合わせ持っている性質、能力、また特徴は、他方も完全に類似したものを、合わせ持っているようです。悪魔とその悪霊が恐ろしい姿を持っているという考えは、聖書的な裏付けの全くない空想です。それどころか、聖書には、悪魔は可能な限り自分を真の神の奉仕者に見せかけようとするのが、悪魔の常套手段であり、その手下が同じようにするのも驚くにはあたらなと書かれています(第二コリント 11 章 14-15 節)。

この二つのグループの違いは、その道徳的な性格にあるだけですが、これは小さなことではありません。選ばれた天使たちは神に忠実で神に仕えることを選んだのに対し、サタンに従う者たち(通常、「墮天使」と呼ばれる)は、神に反抗し、サタンに仕えることを選んだ者たちです。

人間の場合もそうですが、善(神様ご自身のご性質と、神の被造物に映し出されるモラル)を拒絶することを選んだ人達と、それを尊重し、従い、受け入れることを選んだ人達との間の溝は、実に深いものです。聖なる天使の働きと、ならず者である悪霊の攻撃との違いは、誰に忠義を尽くしているかの違いにあり、前者は神に、後者は悪魔に忠誠を誓っているのです。

したがって、選ばれた天使と墮落した天使の間には、基本的な性質において大きな共通点がある一方で、行為においては途方もない違いがあります(以下で詳しく説明しますが、神に対する行為の違いがあると同時に、現在の二つの対立する人間の心の戦場に対する働きかけにも違いがあります)。このような違いは、二つの陣営の方針(一方は神に仕え、他方は神に対抗する)が大きく異なっているだけでなく、(神の創造による完璧な組織とは対照的に)悪魔の再編成された軍は、まったく不完全なものだからです。

このシリーズの第一部で取り上げたことを覚えていると思いますが、サタンは、神に反抗してクーデターを起こそうとする際に、二つの戦略を用いて支持者を集めました。それは(神の自然の摂理や特定の命令に反して)自分に従うすべての人に擬似的な再生を提供するだけでなく、自分の支配の恩恵に与ることを約束しました。

この第二の要素である地位と領域における昇進の約束は、彼の現在の組織計画の下で、少なくとも形の上で、彼から栄誉を受けることになっていたのは間違いないでしょう。

悪魔がその部下に褒美を与えようとしていたこと(またその必要もあったでしょう)から、その軍の階層、士官の数が増加したと仮定することができます。これは、主君が有能な部下に報酬を与えるのと同じように、サタンの従者の中で力のある者や影響力のある者に、適切な褒美を与えた

と考えられます。このような推察をさらに推し進めるなら、特にある領土がその主君の管轄下になり、新しく昇進した副官にその領土を管理させることは、便宜上得策であることでしょう。

悪魔もそのように地球を分割したようです。したがって、ダニエル書([ダニエル 10 章 13 節](#)と[20 節](#))には「ギリシャの君」と「ペルシャの君」について書かれていますが、文脈上、これらの存在が敵陣の天使の存在について言及していることであることは明らかです(下記参照)。

主に、サタンが彼の重要な部下の幾人かに与えた何らかの(一時的にすぎないものであったとしても)報酬について扱っていることには間違いありません。(おそらくとても政治的な理由で、それゆえに完璧ではない方法で)この宇宙の王国と領域はサタンによって分割され、彼の手下に分け与えられています。

地球上の個々の地域に対する支配の維持と程度は、多くの要因に左右されますが、その中でも特に重要なのは、悪魔の従者たちの能力、機知、決意です。だからこそ、サタンがキリストに向かって、世界のすべての王国は自分に「渡された」ので、誰にでも自由に与えることができるという趣旨の発言をしたのです([マタイ 4 章 8-9 節](#)、[ルカ 4 章 5-7 節](#))が、多くの悪魔の嘘と同様に、(全体としては巧妙な嘘ではありますが)ある意味真実も含んでいます。

アダムの墮落は、確かに神から与えられた地上の支配をサタンが奪うための扉(チャンス)を開けてしまい、悪魔はかなり篡奪(さんだつ)してきたので、主はサタンを「この世の君」(「この世」= *kosmos*: [ヨハネ 12 章 31 節](#); [第二コリント 4 章 4 節](#)参照)とまで呼ぶこととなります。

しかし、これまで何度も指摘してきたように、悪魔がこの支配を行使できる程度は、絶対的なものではありません。それは、神の包括的な意志、(神の多様な恵みによって常に保護されている)人間の自由意志、そして、悪魔とその従者、そして彼らの全体的な組織、戦術、戦略の不完全さによって影響されます。

完璧な神によって完全に創造された悪魔とそれに従う天使たちは、神への反逆によって自らを墮落させ、(彼らの総合的な行動に現れている罪深い傾向の一部である)傲慢さ、嫉妬、貪欲などの影響下で行動していますが、これら三つの分野全てにおいて深刻な欠点を持っています。このシリーズの第5部では、悪魔の全体的な戦略(神の計画とどのように合わさるか)を説明します。悪魔が採用した戦術については、以下の第4部後半と、第5部で取り上げます。

悪魔の組織は、聖書の証拠に基づいて可能な限り再現すると、次のようになります:

1) サタン(ケルブ階級) : 悪魔はもともとケルブで、選ばれた天使の階層の中では最高位を占めており、三位一体の二つ目の位格の神示、すなわち「主の天使」として現れる主イエス・キリストに次ぐ存在でした。⁴² 神の組織では、サタンは神に仕える四つのケルブにとって代えられました。悪魔の組織では、自分自身を神だと主張します。このことは、神に取って代わろうとした最初のクーデター(このシリーズの第 1 部を参照)から、現在自分をこの世の神であると自称している悪魔のすべての言動から明らかです([第二コリント 4 章 4 節](#); [ヨハネ 12 章 31 節](#)、[14 章](#)

⁴² キリストの顕現<Christophany>に関しては、『聖書の重要な教理』の第1部「神学： 神の研究」の II.C.3 節で取り上げられています。

[30 節](#)、[16 章 11 節](#)、[エペソ 2 章 2 節](#)参照)、そして、自らを神と称して、一時的に地上を支配する獣である反キリストを任命し、指導すると予測されています([第二テサロニケ 2 章 4 節](#); [エゼキエル 28 章 2 節](#) 参照)。

彼の従者にとってサタンは「悪霊たちの支配者」([マタイ 12 章 24 節](#))であり、天の父の真理を拒む者たちの「父」([ヨハネ 8 章 44 節](#))であることは明らかです。

悪魔は、常に地上に本部を置いているようです。紀元 67 年頃、その本部はペルガモにありました([黙示録 2 章 13 節](#))。本部はローマかと予想するかもしれませんが、1 世紀のペルガモが皇帝崇拝と異教の偶像崇拝の現地として有名であったことを考えると、なぜこの地点なのか、より合点がいくことでしょう。

すでに述べたように、悪魔の人間に対する支配力のほとんどは、人間の行動に影響を及ぼすことに由来しています。悪魔の成功の鍵は、自分自身への崇拝(すべての偽宗教)と生身の人間への崇拝(アンチキリストで最高潮に達する)という、特に致命的な組み合わせであり、今後もそうであり続けるでしょう。

聖書には、過去の悪魔の本拠地について、具体的に記しておらず(バベルの塔の時代はバビロンが拠点であったという説が有力ですが)、それ以降の数世紀については推測するしかありません。ただ、人間が神々として崇拝され、偶像崇拝の精神があらゆる形で高揚している場所には、悪魔が近くにいる可能性が高いとだけ言っておきましょう。([エペソ 5 章 5 節](#)、[コロサイ 3 章 5 節](#))。

2) 王座(長老階級): これらの「王たち」は、サタンの領域を管理するための世界的なネットワークの長であると思われます。このような悪魔の最高位の部下たちは、(神の)選ばれた長老たちに比べて、はるかに数が多いと思われます。⁴³ なぜなら、これらの「王」たちは、全能の神の前に座し礼拝を捧げるのではなく[[黙示録 4 章 4-10 節](#)、[5 章 6-14 節](#)、[11 章 16 節](#)、[19 章 4 節](#)参照]、世界の国々で神を装って王座に着いているからです。異教の神々を装って、サタンの側近であるこれらの高い地位の霊は、(神に捧げる代わりに)人間から礼拝を受けます。

[ダニエル 10 章 13 節](#)の複数形(KJV のようにヘブル語では複数形、NIV は間違い)で明らかに、異教の国々は必然的にこのような複数の「王」を所有しています。⁴⁴ [第一コリント 8 章 5 節](#)でもこのような「神々」が複数いることが記されており、異教の宗教の背後には、高い地位の悪霊がいるという事実を確証しています。

例えば、[アモス 5 章 26 節](#)は、偽りの神々、偶像、そして「王」をこの意味で同一視していません。真の神以外のいかなる崇拝も偶像崇拝であることから([エゼキエル 14 章 3 節](#)～、[エペソ 5 章 5 節](#)、[コロサイ 3 章 5 節](#))、これらの「王座」の数は実に多く、人間の過度の熱狂が偶像崇拝に近づくところでは、権威と影響力を持って存在していると予測できます。

⁴³ [コロサイ 1 章 16 節](#)では、最初に「(王) 位<英語では thrones>」と「主権<英語では lordship>」に触れており、それぞれ最高位と最低位の悪魔の位を示しています(「主権」については後述)。

⁴⁴ モレクとミルコム(マルコム)の名前は、セム語の「王」の語源であるマラハ(ヘブル語: מלך)に関連しています。

3) 君たち(大天使階級): 上記で検討したサリムに当たります。[ダニエル 10 章 13 節](#)と [10 章 20-21 節](#)には、「ペルシャの君」と「ギリシャの君」が登場しますが、新改訳や口語訳で「君」となっているこの「サル」というヘブル語は、新共同訳では「天使長」、欽定訳では「prince(君)」と訳されています。文脈から見て、悪鬼ランクのものではなく、ダニエルと話す天使と同等のランクにあると思われます。

また、大天使ミカエルに匹敵する力を持っていることは確かです。ダニエルの使者が(戦いを)離れるためには、彼(ミカエル)の助けが必要だったのです([ダニエル 10 章 20-21 節](#))。選ばれた大天使のように、これらの「君」は、かなりの数の部下を持つ軍の高級将校です。アバドン-アポリオンもこのカテゴリーに入ると考えられます([黙示録 9 章 11 節](#))⁴⁵

4) 権威(権威階級): これは、選ばれた天使と墮落した天使の両方が、聖典上で共通の呼称を持つ唯一の階層です。そして、はっきり言えることは、権威は下層の高官というわけではありませんが、かといって聖書の記述によれば特別に注意を引くほどの高位でもないということです。このランクは、他の悪魔の高官と一緒に言及されるだけで、最もよく見かけられるのは、大天使に相当する悪霊、「君(アーカイ)」のすぐ下に続くもので、「権威(*exousiai* エクソーサイ)」は「君」の下役です。([第一コリント 15 章 24 節](#); [エペソ 1 章 21 節](#); [3 章 10 節](#); [6 章 12 節](#); [コロサイ 1 章 16 節](#); [2 章 10 節](#); [2 章 15 節](#); [第一ペテロ 3 章 22 節](#))。

5) 世の支配者たち(権力階級): これらは、悪魔の「権力(ダイナマイオス)」に相当します。実際、彼らに言及しているほとんどの箇所では、彼らは「権力」と呼ばれています([第一コリント 15 章 24 節](#); [エペソ 1 章 21 節](#); [第一ペテロ 3 章 22 節](#))。例外は [エペソ 6 章 12 節](#) で、彼らは「闇の世の主権者(コスモクラトレス *kosmokratores* κοσμοκράτορες)」と呼ばれています。

「世の中で力を行使する者」という名称の意味するところは、彼らが持っている中堅の指揮権に加えて、ある種の特別な力を行使しているということです。彼らは、偽りの奇跡や悪魔の力を誇示する悪霊である可能性が高いです([黙示録 13 章 13 節](#)参照)。[エペソ 6 章 12 節](#)で名称が「この世」(闇の世の主権者)に限定されているのは、もともと神から与えられていた彼らの力や権威は、今は現世界の悪魔の領域でその働きをすることに限られていることを示しています。

⁴⁵ [黙示録 9 章 11 節](#)で、アバドン=アポリオンが「王」と呼ばれているのは事実ですが、ヘブル語のサルのギリシャ語訳が標準的でなかったこと(この単語は、少なくとも一度、「王」バシレウスを含め、文字通り数十の異なるギリシャ語で訳されている)、軍事的な文脈を考慮すると、この特定の悪魔の司令官は、(宗教的、偶像崇拝的な文脈を期待すべき)「王座」ではなく、「王子」と考えるのが最善と考えられます。重要なことに、彼はまた「底知れぬ所の天使」と呼ばれていますが、私たちは [ユダ 6 節](#)と [第二ペテロ 2 章 4 節](#)などから、奈落には多くの天使がいることを知っています。「天使」が一般的な天使以上の意味を持つ他の聖句では、「大天使」([1 ペテロ 3 章 22 節](#))の略称で呼ばれる場合もあります。

6) 君主ら(霊レベル)。これは墮天使の下士官兵の階層であると同時に、墮天使の共通の名称でもあります(サタンのシステムにおける「過剰なランクづけ」を示しています)。みだらな神(レビ記 17 章 7 節)、悪霊(ルカ 7 章 21 節、使徒行伝 19 章 13 節)、汚れた霊(マタイ 10 章 1 節、マルコ 1 章 27 節)、悪魔(ヨハネ 6 章 70 節)など、さまざまな名前で呼ばれています。コロサイ 1 章 16 節などでは「主権」という言葉が使われています(参照:黙示録 17 章 14 節、19 章 16 節)⁴⁶
イエス・キリストは、地上の王の王であるだけでなく、選ばれた者にとっても墮落した者にとっても、最も高い者から最も低い者まで、すべての天使の主でもあります(黙示録 17 章 14 節; 19 章 16 節)。

追補

1) 現在、悪霊の多数は自由ではありません：天の使いの三分の一は、サタンが神に反抗したとき、サタンに従いました(上記の「選ばれた天使」の「長老たち」の内容を参照のこと)。しかし、現在は、その時、悪魔に従った者達よりも少ない数で活動しています。大洪水の前に人類の純粋な血筋を汚染そうとした結果(神がサタンの人間への攻撃に関して定められた条件に違反したことについて第5部で詳しく扱います：創世記 6 章 1-13 節、ユダ 6 節参照)、多くの悪霊が、タルタロスやアビス(底知れぬ所)と呼ばれる地下のハデスのある区画に拘束されています(ルカ 8 章 31 節、第二ペテロ 2 章 4 節、黙示録 9 章 1 節、20 章 1 節)。これらのうちの特定の悪霊は、艱難の時に一時的に解放されることになっています(黙示録 9 章 1-12 節)。悪霊の「レギオン」が主に「底知れぬ所に投げ込まないでくれ」と頼んだことから、設けられた条件を超えて行動をした者がいつでも底知れぬ所に投獄され得ることは、サタンとその従者どもが、神が設けられた規制の枠を超えるのをけん制することになっていると言えます(ルカ 8 章 31 節)。

これに加えて一つの大きな悪霊の軍団が、現在、拘束されていることが分かっています。四人の悪霊の將軍とその約二億の大群です(黙示録 9 章 13 節～)。これらのサリム(と彼らの軍隊)は現在、アビス(底知れぬ所)に「拘束」され(さらに鎖でつながれ)ています(彼らの仲間の多くは、閉じ込められているものの、鎖でつながれていない状態です)。ユーフラテス川は、歴史的に(古代)バビロン(黙示録全体を通してバビロンの象徴するものが述べられていて重要な意味があります)に近いことから、彼らが将来解放される場所とされています。彼らが二重に厳重に拘

⁴⁶ より一般的な'adon' (詩篇 136 篇 3 節参照<アドン「主」と訳されている>)とともに、この語に相当する詩的なヘブル語のひとつに'el'<エル「神」>または "mighty one"<力ある者> (詩篇 8 篇 5 節; 82 篇 1 節と 6 節; 138 篇 1 節;参照ヨハネ 10 章 34 節)があります。この単語は「<神々の>神 god」を意味することもあるし、時には(主に詩的な文脈で)「神 God」を意味することもあります。神の言葉を託されたからこそ、すべての人間が「神/力ある者」であるという意味があります。御言葉と力を託されたからこそ、すべての天使が「神/力ある者」であるという意味があります。御言葉と力を使って何をすることが重要です。

束されている理由や、将来解放される場所についての理由は明記されていませんが、創世記6章に記されていることによれば、人間を試みる際に超えてはいけなかった神の基本的な定めに対する言語道断な違反が根本的な原因にちがいません。さて、ユーフラテス川近辺で行われた最も重大な神への反抗と言え、バベルの塔の建設があげられます<創世記11章1-9節>。この世界統一の計略は、悪魔が創世記6章において生物学的な浸蝕によって成し遂げようとしていたことを、政治的・社会的に達成するために計画されたものです。つまり人類が神を求める道を根絶やしにすることでした。ヨセフスは「ユダヤ人の古代史」の中で、バベルの塔を、ニムロデが神の住居を襲撃するための天への階段と表現しています。また、ヤコブの「はしご」が実際には上に昇っていく一連の石段、つまりスロープであり、それによって(選ばれた)天使たちが天から地にやって来て、また戻っていくと言っているのは興味深いことです。⁴⁷ バベルの塔は、「すべてのジグラット/ピラミッドの原型」で、後のこれらの形態のインスピレーションの元となったことは明白でしょう。しかし、バベルの塔に関しては、その目的はまさに誇大妄想的なものでした。天を強襲するためではないにしても、少なくとも、悪霊の助けのもと、世界がこれまでに見たことのないような巨大な建造物で不滅のものにして、神の名に代えて人類の名を高くすることが目的だったので(創世記11章3-4節)。この神を冒瀆するような発想、その事業、そしてその達成のための意気込みは、確かに悪魔の影響を受けたものでした。神の人類に対する裁きは、世界共通の言語(当時)を混乱させることによって、人類を分散させることでした(創世記11章5-9節)。この作戦に関わった悪魔の軍勢に対する神の裁きは、黙示録9章に記されている場所で解放されるようになる時まで彼らを投獄し、幽閉しておくことでした。その時、新しい「普遍的な」バビロン(反キリストの王国)は再び、邪悪な目的のもと、全人類を強制的に統合しようとするのです(ダニエル2章42-43節参照)。

2) 悪霊は、悪さの度合いで互いに異なる : 前述の選ばれた長老たちの話で、忠実な天使の師団の成果には、程度が異なることを指摘しました(サタンのクーデターの試みに直面して、それぞれの個人や師団が主への熱心な支持から生ぬるいものなど、様々な献身のレベルがあったように)。墮天使の場合も、個人差があるという点では似たような状況です。

悪霊の中にも、様々な程度の墮落があり(マタイ12章45節、ルカ11章26節)、その悪行の徹し方も様々です(マルコ9章29節)。これに関連して指摘しておきたいのは、「さほど悪くない」悪霊は、その悪の程度が少ないからといって、その分、永遠の天罰の裁きにおいて免れるということは決してないということです: 悪は悪です。同じように、永遠に地獄にいるのは、桁外れな悪行のために注目された人物であるカリギュラやヒトラーだけではありません(相対的な「善」は何の役にも立ちません。ただキリストを信じる信仰を通して与えられる義によってのみ救われるの

⁴⁷ 創世記28章12節: 「はしご」と訳されているスラム *sullam* という語は、ヘブル語の語根サラール *salal* (סלל) に由来し、ソレラ *solelah* (包囲塚) という語に近い形をしている。したがって、「はしご」は、敵の都市を包囲するために使用される攻城塔に似ている可能性が高いです(階段の上昇を意味するマンダ語の *semalah* を参照してください)。

です)。(神の御子を拒絶することによって)神を拒絶した者は、その生き方にかかわらず、天の御国にふさわしくないのです。

永遠の安全は、天使の領域では、サタンではなく、神を選ぶという決断に基づいており、人間の領域では、悪魔の世界ではなく、イエス・キリストを選ぶことに基づいています。

5. 神は悪霊を用いる：サタンとその悪魔の力は、神の許可された範囲内でしか何もできません。神の目的は、神の栄光と、人間と天使の自由意志の原則(このシリーズの第3部で詳しく説明しました)に関連しており、その目的のため、神は悪魔がある特定の制限範囲内で活動することを許可しています。

では、神がご自身の計画を推進するために、サタンとその手下を使うという事はどのようなことでしょうか？ある意味では、起こるすべての事は、最善なことのための神のご計画の一部なのです(ローマ 8 章 28 節)。ですから、神がご自身の完全な意志を達成するために、悪霊を特別に利用することを選んだとしても、それは大きな問題ではありません。キリストが、動機が何であれ、神の御心を行う者を妨げてはならないと指示したように(ルカ 9 章 50 節; ピリピ 1 章 18 節参照)、また使徒パウロが、神の目的のために悪魔の力を利用することがあったように(第一コリント 5 章 5 節; 第一テモテ 1 章 20 節)、聖書の中には、神がご自身の完全な目的のために悪魔の手先を明らかに利用し、他の方法では許さないような悪事を働くのを許す場合もいくつもあります。

- a. 神が許されたヨブの試練(ヨブ 1 章 12 節、2 章 6 節)。
- b. 神がアビメレクとシケムの市民に送った悪霊(士師記 9 章 23 節)。
- c. 主が送られたサウルを悩ます悪霊(サムエル記上 16 章 14 節、18 章 10 節)。
- d. 主はサタンを通して、ダビデに民を数えるように仕向けられました(サムエル記下 24 章 1 節、歴代誌上 21 章 1 節)。
- e. ミカヤは、王を欺こうと志願した悪霊の話をしています(列王記上 22 章 19-23 節)。
- f. 艱難期の間、地上に警告と罰を与えるために悪魔の力が解き放たれます(黙示録 9 章 1-19 節)。

サタンとその配下の者たちがこれまでにとった行動は、すべて神が予期しており、実際に神の計画に完全に組み込まれています。その計画を推進するために、神の宿敵でさえも自由に使うことができるという事実は、神が世界で起こっている(今までも、これからも)すべての出来事を、完全にコントロールしていることを示しています。

6. 天使の戦闘：サタンとその天使たちが天から追い出されて地上に投げ出される(黙示録 12 章 7-9 節)艱難期の半ばまでは、天では明らかな交戦は起こりません。現在、天では休戦状態が続いています。地上では天使の争いが絶えないよう(ダニエル 10 章を参照)、選ばれ

た天使と墮落した天使が目に見えない戦いを繰り広げていますが([列王記下 6 章 17 節](#))、サタンとその従者たちは現在、自由に神にまみえることができます(悪魔はこの機会を最大限に利用して、信者を非難します。[ヨブ記 1 章 6-12 節](#)、[2 章 1-7 節](#)、[ルカ 22 章 31 節](#)、[黙示録 12 章 10 節](#))。

サタンの反乱の実際の経過と、それを神が打ち負かすことについては、このシリーズの第 5 部で説明しますが、ここでは天使の戦法について、聖書が述べていることを知っておくとよいでしょう。そもそも天使は肉体を持たない存在であり、人間のように殺されることはありません。このようなことに対する私たちの地上の考え方は、神の宇宙が実際に機能する方法とは(当然のことながら)全く異なっています。

すべての人間とすべての天使は、創造された時点から永遠に存在し続けます。天使の場合は、霊的な存在として存在し続けます。人間の場合は、肉体と霊的な存在として存続しますが、その肉体は、最終的に復活するまでの間、(天国であれ地獄であれ)中間的な段階を経て、破壊できない永久的な肉体を持つようになります(この事実は、永遠に火の池に住む運命にある不信者にも、永遠に神と共に新しいエルサレムに住む運命にある信者にも当てはまります)⁴⁸人間は戦いで傷つき(一時的で明らかな影響を受け)、殺されることもあります。しかし、神が悪魔を徐々に征服していくという、人類の歴史の背景となる出来事の中では、死は私たちの存在の一段階(時間-神とその御子に対して重要な選択をするところ)から次の段階(永遠-永遠の命か第二の死のどちらかの存在)への移行なのです。

たとえ生前に神を拒絶していたとしても、死後その人達が存在しなくなるわけではありません(ただし、神から離れて永遠に過ごす恐怖を考えるなら、すべての信者に個人伝道の動機を与えるべきです)。私たちは、死んだ後は、肉体が損なわれることを心配する必要はありません。天使もそのようなものです。天使はすべての戦いと葛藤の中で、破壊されることはありませんし、傷を受けることを示唆する聖句もありません。

したがって、天使の戦いは、お互いを破壊したり傷つけたりするのではなく、むしろ、お互いの行動を妨げたり、逆にある行動を強要したりすることで成り立っています。ダニエル書の 10 章でダニエルを訪れた天使は、最初は悪魔の反対に遭って来られなくなり([ダニエル 10 章 13 節前半](#))、次にミカエル(間違いなく彼は自分の指揮する部隊を連れてきていたことでしょう)によって助けられます(つまり、妨げられていた悪魔が降参せざるを得なくなったのです:[ダニエル 10 章 13 節後半](#); [10 章 21 節](#))。

アラムの王に対して、エリシャを支援した目に見えない天使たちの行動([列王記下 6 章 17 節](#); [ダニエル 11 章 1 節](#)参照)、主が指揮する天使の軍団の行動([マタイ 26 章 53 節](#)—この例では実現していない)、あるいは聖書に記録されている多くの実際の天使の出現と活動(そして人類の歴史の中で記録されていない無数の事例;[詩篇 91 篇](#)を参照)は、すべて選ばれた天使た

⁴⁸ 天神的体質と人間的体質の区別については、このシリーズの第 1 部 (I.3.b) を参照してください。復活については、ペテロの手紙シリーズ # 20 参照ください。

ちの、神の意志に背く悪魔の勢力に対する戦闘を示唆しています。例えば、ミカエルは戦わずにモーセの遺体を回収することはできませんでした([ユダ 9 節](#))。⁴⁹

地球は、今、より正確には、人類は、問題を抱えており、サタンと悪魔は人の心を支配しようとして、神の選ばれた天使と争っています。ヤコブが見た天使の攻城用梯子または軍事用ハイウェイ(脚注 47 参照)が、神の臨在される天まで伸びているというビジョン([創世記 28 章 10-19 節](#); [ヨハネ 1 章 51 節](#)参照)は、状況を非常に明確にしています:争われているのは天ではなく地上なのです。⁵⁰

世界は、非常な邪悪の影響下にあるという意味では、悪魔の力の中にあるかもしれませんが、神の包括的な支配は絶対的なものであり(上記 III.2 節参照)、神は天の使いを用いて地上を注意深く見守っておられます(例えば、[詩編 91 篇 11-12 節](#)、[ゼカリヤ 1 章 9-17 節](#)、[6 章 1-8 節](#)、[黙示録 7 章 1-4 節](#);前述の III.3 項「選ばれた天使たちの一般的な奉仕」も参照してください)。艱難期の中に、サタンとその従者たちは、ミカエルの命令を受けた選ばれた天使たちによって、天から追い出され、地上に落とされます([黙示録 12 章 7-17 節](#))。

現在、サタンの使いたちにとって、投獄されることは最悪の運命です。ガダラの悪魔憑きから、主によって追い出されそうになった悪霊の「レギオン」は、底知れぬ所<アビス>に閉じ込めなideくれと、キリストに必死になって嘆願しています([ルカ 8 章 31 節](#): 不完了形で、繰り返し行動すること<この聖句では嘆願を繰り返すこと>を示しています)。これまで見てきたように、かなりの数の悪霊が(底知れぬ所に)幽閉されており、主の再臨後にはサタン(とその従者)も加わります([黙示録 20 章 1-3 節](#))。最終的には、火の池が神の敵でいっぱいになります([黙示録 20 章 10 節](#))。墮落した人間と同様に、悪魔とその天使たちも滅ぼされることなく、永遠にこの恐ろしい場所に追いやられます。

私たちの主は十字架の勝利と復活によって、その人間性において、あらゆる点ですべての天使に勝る者となりました([エペソ 1 章 20-21 節](#); [コロサイ 1 章 16-17 節](#), [2 章 9-10 節](#), [2 章 15 節](#); [第一ペテロ 3 章 22 節](#); [ヘブル 1 章 1 節-2 章 18 節](#)参照)。主のからだである教会として、私たち信者はこの優位性を地位的に共有しており、復活の際には行使することになります。

⁴⁹ モーセの肉体の保持と保存は、二人の証人の預言が最終的に成就するために不可欠でした ([ゼカリヤ 4 章 14 節](#); [黙示録 11 章 1-12 節](#); [申命記 18 章 15-16 節](#)と [マラキ 4 章 5-6 節](#)を参照)。もう一人の証人であるエリヤの通常ではない旅立ちとも比較してみてください([列王記下 2 章 11 節](#))。イスラエルでも独特な、遺体が「天に葬られた」モーセとエリヤは、艱難時代に再び召されることとなります。

⁵⁰ [創世記 32 章 2 節](#)で、パレスチナに戻ったヤコブの経験を比較してみてください。神の天使たちがヤコブを迎え、彼はその地を「マハナウム」、すなわち[軍の]野営地と呼びました。

この優位性は、地位だけではなく、能力の面でもそうです。私たちの将来の優れた地位についてですが、私たちは個々の墮落した天使たちの上に立って、裁きを下すこととなります(第一コリント 6 章 3 節; 黙示録 20 章 4 節; マタイ 19 章 28 節も参照のこと)。

将来の優れた能力という点では、私たちは個々の墮落した天使を、キリストの再臨の際に実際に底知れぬ所に沈める「裁き」を実行することとなります。そして、裁きがなされる時、選ばれた天使もまた、それにかかわることについて聖書に記されています(黙示録 20 章 1-3 節; 黙示録 9 章 1-3 節; 12 章 7-9 節参照)。私たちの復活した体の優れた特性を考えれば、私たちがこのようなことができるのは当然のことでしょう。

その日(=再臨)が来れば、主が罰せられる／高い天では、天の軍勢(=墮天使)を／大地の上では、大地の王たち(=反キリストのエリート信者)を。彼らは捕虜が集められるように、牢に集められ／獄に閉じ込められる。多くの日がたった後、彼らは罰せられる。(イザヤ 24 章 21-22 節 新共同訳)

7. 信者 vs. 不信者：最後に、悪魔の戦いの序列に含まれるのは、膨大な数の生存している人間です。悪魔とその手下がこの世で力を発揮する主な方法は、世に住む人達に影響を与えることであることは、前述のとおりです(以下でも詳しく説明します)。悪魔が憑依して特定の人を絶対的に支配することは、確かに極端な支配の一つですが、悪魔の狡猾で広範な支配の方法とは、個人の意志を揺さぶり、それによって出来事の流れに影響を与えるという悪魔の影響力なのです。悪魔の影響(以下の第 V 章で説明)とは、悪魔の教義(これに続く第 IV 章で説明)を広めることです。このような影響は、直接的である必要はありません。サタンとその仲間たちが、明らかに反神的な考え方を広めようとしているのか(例えば:異教)、単に微妙な偽情報を広めようとしているのか(例えば:人文主義哲学)、対象者が悪魔に耳元で囁かれたのか、単に本を読んだりテレビ番組を見たりしたのかは、ほとんど問題ではありません。いかなる場合でも、嘘の情報源が何であれ、その嘘を信じた人は皆、悪魔の援軍入りという結果になります。しかし、戦線はそれほど明確ではないことも多いです。例えば、不信者であっても、道徳的で法を遵守する市民である場合、悪魔にとってはほとんど役に立ちません。悪魔は、彼らをキリストから遠ざけ、彼らのふるまいや影響力を使って他の人々の救いを妨げることしかできません。一方で、名目上の信者で、グローバリズムの政治や社会的な問題に対して、自分で生み出した解決策を信じている者であれば、悪魔にとっては非常に便利な存在です。どんなに長く入隊していても、どんなに熱烈な忠誠心を持っていても、悪魔は自分のできる範囲で誰でも利用し、自分に仕える者への真心など持たず、自分に利益をもたらした者を滅ぼすことへのためらいは皆無です。

[主のしもべは]反対する人たちを柔和に教え導きなさい。神は、彼らに悔い改めの心を与えて、真理を悟らせてくださるかもしれません。悪魔に捕らえられて思いのままにされている人々でも、目を覚まして、その罠を逃れるかもしれません。(第二テモテ 2 章 25-26 節 新改訳IV)

あなたがたは**自分の父**、すなわち、悪魔から出てきた者であって、その父の欲望どおりを行おうと思っている。(ヨハネ 8 章 44 節)

さてあなたがたは、先に[靈的に]は自分の罪過と罪とによって死んでいた者であって、かつてはそれらの中で、この世(*kosmos*)のならわしに従い、空中の権をもつ君[私達の周りをうろつく(たとえば悪魔)]、すなわち、**不従順の子らの中に今も働いている靈**に従って、歩いていたのである。(エペソ 2 章 1-2 節)

彼らは神の真理を変えて虚偽とし(悪魔の言葉を信じて)、創造者の代りに被造物[サタン]を拝み、これに仕えたのである。創造者こそ永遠にほむべきものである、アメン。(ローマ 1 章 25 節)

私たちは主の軍隊の兵士として、次の事柄を心に留めておく必要があります。この悪魔の捕虜になっているのは私たちの同胞である人間であって、彼らのためにキリストが死なれ、神が救われることを願っている男女であるということです。(エゼキエル 18:23; マタイ 18 章 14 節; ヨハネ 12 章 47 節; 第一テモテ 2 章 4 節; 第二テモテ 2 章 24-26 節; 第二ペテロ 3 章 9 節)。

一方が他方を滅ぼそうとするありきたりの人間同士の争いに見られることとは違って、神の願いは、悪魔に徴集されたすべての人々がイエス・キリストの愛に気づくようになることです(私たちの願いもそうでなければなりません)。

...キリストに代って願う、神の和解を受けなさい。(第二コリント 5 章 20 節)

IV. サタンの戦術的教義

サタンの世界システムは、サタンとその追従者を置き換えることになる神の計画に、対抗するために、人類に対するサタンの支配を確実にし、拡大するための管理哲学です。神の計画の実現と、それに対する悪魔の対抗策については、このシリーズの第5部で取り上げます。このセクションでは、最大の誘惑効果を発揮するように慎重に練られた包括的な嘘のシステムであるサタンの世界観、つまりエデンから追放されて以来、人類を欺き、奴隷にするために悪魔が採用してきた教義、教え、アイデアの集合体について具体的に説明していきます。私たちは、これを「サタンの世界体制(世界システム)」と呼んでいます。これは、ギリシャ語の「*kosmos* コスモス」(「世界」)という言葉とのつながりに注意を惹くためです。「コスモス」は、聖書の中で最も頻繁に言及されている、真理に反する悪魔のシステムを指す言葉です。

この世において、私たちクリスチャンは、生きた言葉であられるイエス・キリスト(ヨハネ 1 章 1-5 節)と、書かれた言葉である聖書(第二ペテロ 1 章 19-21 節)の両方の神の御言葉に焦点を当てていなければなりません。真理こそが私達の地上の生命の中心にあるもので(詩篇 119 篇)、

この世のすべてのものは過ぎ去っていきますが、神の御言葉は永遠([イザヤ 40 章 6-8 節](#); [第一ペテロ 1 章 23-25 節](#))なので、私たちは目で見るものではなく([第二コリント 5 章 7 節](#))、神が私たちに真実だと告げるものに従って歩みます。したがって、真実は私たちの地上の人生において核心たるものです。サタンの世界システムは、キリストを中心とする全ての正統的な教えである(神の言葉は永遠であるという)基本的な教義に反対するという立場にあります。なぜなら、悪魔のシステムの主な目的は、この<神の言葉は永遠であるという>見解を逆転させることであり、人類の焦点を完全に变えて、この地上の生活にしっかりと固定させることだからです。サタンにとっては、人間が神から離れてこの世に目を向けさせることが勝利であり、反対に、神にとっては悪魔の暗黒の世界からイエス・キリストに目を向けさせることが勝利なのです。

『[わたしは…あなたを彼らにつかわす…] それは、彼らの目を開き、彼らをやみから光へ、悪魔の支配から神のみもとへ帰らせ、また、彼らが罪のゆるしを得、わたしを信じる信仰によって、聖別された人々に加わるためである』。(使徒行伝 26章18節)

身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのよ
うに、食いつくすべきものを求めて歩き回っている。(第一ペテロ 5 章 8 節)

仲間の多くの天使を巧みに誘惑したことでわかるように、サタンは他の被造物を食い物にするやり方をよく心得ています。彼は自分の部下ども(天使も人間も)を知っていて、そのあらゆる弱点を大胆に利用することを躊躇しません。彼のやり口に共通していることは、その被害者の弱みに付け込むことです。天使に対しては、彼らは肉体がなかったので、それをエサにしたのです(肉体を手に入れても期待外れだったということに<騙された天使らが気づくことになるとしても>悪魔はちっとも気にしません。ただ嘘を信じ込ませて欺けたらいいのです:このシリーズの第一部を参照のこと)。アダムとエバに対しては、彼らには善悪の具体的な知識がなかったので、悪魔はそれを得るように誘惑したのです(それが彼らの究極の肉体の死を意味していたとしても構わないのです:本シリーズ第3部参照)。墮落の後、人間は多くの点でサタンの標的になりやすくなりました。天使には肉体が、楽園の完全な人間には善悪の知識が、というように、必要性とは無関係な狭い範囲での誘惑ではなく、エデンの園の外に出ることになった人間は、今や普遍的な死生観と神が地上に課した呪いの結果として、様々な不足や必要性に直面しています。これに加えて、悪魔は私たち一人一人の内側には味方(すなわち私達に入った罪の性質)を持っているという有利な事実があります。というわけで、サタンの偽りの約束と嘘のシステムが、人類の歴史の中で多くの改宗者を作ることができた理由を理解することは難しくありません。しかし、神は常にご自身のための証人を持っておられました。すべての人には選択の余地があり、どの世代においても、真理の小さな静かなみ声を聞いて、悪魔のシステムから神のもとに立ち返った人がいたのです([列王紀上 19 章 12 節](#)、[使徒行伝 14 章 17 節](#)、[17 章 27 節](#))。

しかし、信者であっても生涯を通して、悪魔のシステムからもたらされる次のような問題があります: 1) 罪の性質からの圧力: 救いは罪の赦しをもたらしますが、私たちの墮落した肉に宿る罪の性質を根絶することはできず、この地上の人生を通じて私たちは、霊的な弱さを抱え続けるこ

とになります([創世記 8 章 21 節](#)、[列王紀上 8 章 46 節](#)、[詩篇 130 篇 3 節](#)、[ローマ 7 章 18 節](#)、[24 節](#)、[ヤコブ 1 章 13-15 節](#))

2) 墮落した世界からの圧力: 内的な墮落の最終的な結果として、私達は肉体的な死を遂げる運命にあり、エデンの外での本質的な状態(園とは対照的に、神の呪いの結果、欠乏状態であり、供給のために重労働を要する)は、緊急事態なのであり、物質的また精神的なプレッシャーを常に受けています。

現世での人間の行動を大きく左右するこの二つの要素だけを見ても、人間の歴史における、墮落した、神を恐れない行為の多くは、悪魔がいなくても生じていたことだとわかります。しかし、自分の領域で、神の影響に反対することが自分の利益になるので、サタンは、1) 真理から遠ざかり、神から遠ざかるように、2) 神の代わりに自分の(サタンの)意志を行うように、人間の目を見えなくさせて、この世界を管理するという戦略的計画と哲学を開発しました。このセクションでは、悪魔のシステムそのものについて説明し、次のセクション(第V)では、そのシステムがどのように運営されているかについて説明します。

悪魔が主に目ざしているものは、(個人的にも集団的にも)人間に対する自分の影響力と支配力を高めることであり、そのためにはあらゆる機会や弱点を容赦なく利用します。サタンのやり口は、人間の心の戦いの場(心と霊の接点: [第III参照](#))にまき散らす「嘘」で、これはサタンの第一の武器です。サタンは、全世界を欺く者([黙示録 20 章 1-3 節](#))であり、嘘の父([ヨハネ 8 章 44 節](#))でもあります。サタンがこれらの名前と呼ばれているということは、真実をあらゆる手段を用いて不明瞭にするという、彼の主要な戦術的目標を示唆しています。しかし、サタンの世界システムは、単なる情報操作ではありません。悪魔は、すべての人間の「心と精神」を勝ち取ろうとすることを目的としています(常にそうです)。悪魔は人間を、肉体的にも感情的にも影響を与えたり、圧力をかけたりして、誘惑することができることをよく知っています。彼のシステムは、心に影響を与えることを目的として、まず身体に向けられています。悪魔の世界システムは、嘘、感情的な訴え、肉体的な圧力が相互に結びついたネットワークであり、最も効果的に作用しているときには、それを切り離すことは困難です。

サタンの世界システムは、大きな嘘で、クモの巣のように地球の隅々まで、人間の活動のあらゆる分野に広がっています。その結果として、(悪魔が実現できる範囲で)人間の一人一人の心に入り込み、いつでもどこでも神の真理を妨害し、否定し、反対します。最初に注意しておきたいのは、悪魔の世界システムは、誰もが、いや、ほとんどすべての人が悪魔的と見なす行動や、一般的に罪深いと認められている分野だけでなく、通常は「善い」と見なされる分野にも非常に深く関係しているということです(下記 IV.3 項参照)。悪魔は手段を選びません。悪魔は、神の真理を阻み、この世での自分の影響力を高めるためには、人が良いと思いつけている行動と共に、悪いと見なされている行動もすべて、どんな行動をも煽ることをするのである。

墮落以来、人間が体験してきた三つの確固たる事実があります。

1) 普遍的な死:すべての人は死ぬという現実([創世記 3 章 19 節後半](#))

2) 普遍的な墮落:すべての人に罪があるという現実([創世記 2 章 17 節](#)[靈的死-第 3 部参照])。

3) 万人の誘惑:悪魔がすべての人に敵対しているという現実([創世記 3 章 15 節](#))。

アダムの罪のために、私たちは皆、肉体の死を遂げることとなります。アダムが罪を犯したため、私たちは皆先天的な罪、すなわち「罪の性質」を肉体に持って生まれます(処女から生まれたイエス・キリストの場合を除いて、その罪の性質はあらゆる面において現れています)。また、アダムの統治がサタンに篡奪され、私たちは皆、悪魔の攻撃にさらされています。

アダムとエバがエデンから追放されたときにも明らかにされた、これらの人生の三つの事実は、神との関係を回復し構築するための三つの重要な基礎となっています。

1) 私たちは神を必要としている(死を命に変えることができない)。

2) 私たちは神ではない(自分の罪を償うことはできない)。

3) 神は私たちが必要としていない(神を助けるため、神の言葉に代わるものがない)。

このような人間存在の基本的な計算式は、最初の両親が墮落の時に明らかにされ、その真実を受け入れたしるしがいくつもあります。神はその素晴らしい恵みのうちに、私たちの罪を背負って死を拭い去るための身代わりを約束し、その約束を果たされました。--このような、神に代わるものはありません。アダムとエバは、1) 自分たちが神を必要としていることを知り、2) 自分たちが犯した罪を贖うことができないことをすぐに認識し、3) 自分たちの行動で問題を解決しようとするのではなく、自分たちの代わりに死んでくださる方の約束を受け入れました(特に、象徴的な犠牲によって提供された毛皮を受け取ったことで証明されています。[創世記 3 章 21 節](#))。

しかし、人類のほとんどは、上記の三つの基本原則の**逆**のことが真実であるかのような生活をしてきました。その理由は、サタンが構築したシステムにあります。それは、人間の存在に不可欠なこれらの真実をひっくり返し、代わりに、真実から目をそらすための嘘のシステム、そして、できるだけ多くの人類を捕らえて魅了するために設計された世界システムに置き換えられているからです。サタンの世界観は、サタンとその悪鬼どもが、世界中で展開する複雑なプロパガンダのシステムに基づいています。それは巧妙で精巧な嘘のネットワークですが、その根底にあるのは、1) 私たちは神を必要としている、2) 私たちは神ではない、3) 神は私たちが必要としていない、という基本的な真理に対する単純な反論です。

1. 悪魔の第一の嘘：「私は神を必要としない」

悪魔のプロパガンダの第一の嘘についての一覧

真実：私たちは神を必要としている

嘘：私は神を必要としない

要するに、真実は：力はあなた(主)のものです

要するに、この嘘は：神の力を否定し、疑うこと

何を否定しているか：死ぬ定め

何をもたらすか：心配

どのように表に現れるか：貪欲

聖書の参照事項：

主の試練：人はパンだけで生きるのではない。

主の祈り：私たちの日用のパンを今日もお与えください。

第一ヨハネ 2 章 16 節：肉の欲。

対抗する美德：信仰(反徳：神ではなく持ち物 への信仰)

礼拝の対象：物

主な問題点：どのような地上の利益も死の問題を解決しない

第一の真実：私には神が必要としている。神は、私たちが本当に必要とする唯一の方、唯一の個人です。神は、私たちが神を必要とし、感謝し、崇拝し、楽しむように創られました。神を離れては、本当の充足感も、真の喜びも、永遠の平和ありません。私たちは、死の力から解放してくださる神の必要性を認めることによって、イエス・キリストを信じる信仰によって永遠の命に導かれます。そして、私たちが信仰者として、この世で神を必要とし続けることを完全に認めるとき、神は私たちの焦点となり、私たちの支えとなり、私たちの力と喜びの根本的な源となります。

第一の嘘：私は神を必要としない。

神を必要としていることを認めない人は、この最も基本的な悪魔の嘘の影響を受けやすくなります。エデンの外の世界では、生命を維持するためには汗と努力が必要です。神からの独立（神に背を向けた人の思考の中にのみ存在する現実）は、生活に必要なものを提供する苦勞の中で、神の供給の誠実さを疑い、代わりに自分を信じる時に始まります。キリストは、まず神の国と神の義とを求めなさい、そうすれば他のものはすべて添えて与えられると言われました（[マタイ 6章 33節](#)）。私たちがまず神を求めるならば、神は私たちを世話して下さいます（[マタイ 6章 26節](#)、[30節](#)）。実際、神はその無比の恵みによって全世界を養い、不信心な者を正しい者と共に支え、彼らにも悔い改めの機会が与えられるようにされています（[マタイ 5章 45節](#)、[第一テモテ 2章 4節](#)、[第二ペテロ 3章 9節](#)参照）。偽善的に、悪魔はできることなら私たちを滅ぼしたいと思っており、神は頼りにならないと主張します。神を必要としないと信じる最初のステップは、神が必要なものを提供してくれないので、代わりに自分に頼らなければならないと信じることです。「私には神はいらない、私に必要なのはお金と〇〇だ。」「神様とは関係なく、私には〇〇が必要です」というのは、「神様は必要ありません」というのと同じことです。なぜなら、私たちが神に対する真の必要性よりも、物事に対する感覚的な必要性を優先させるとき（またそれらに対する欲求を優先するようになります。必要として認識する事には相対的な要素があり、必ずしも絶対的ではないことから）、私たちは悪魔の第一の嘘を信じることになるからです。

要するに第一の真実は：力はあなた<主>のものです。 私たちは神なしではこの地上で一分たりとも生きられません。神は私たちを創造され、私たちに命を与えて下さいました。神は私たちを支え、その義の右の手で私たちを支えて下さいます（参照：[詩篇 3章 5節](#)、[18章 35節](#)、[37章 17節](#)、[37章 25節](#)、[41章 3節](#)、[54章 4節](#)、[63章 8節](#)、[イザヤ 41章 10節](#)）。主は私たちを愛し、私たちのためにひとり子イエス・キリストを犠牲にして下さいました（[ヨハネ 3章 16節](#)）。ですから、私たちが必要とするすべてのものを惜しまずくださるのではないのでしょうか（[ローマ 8章 32節](#)）。天地を造られた方が、私たちのわずかな必要を満たすことができないということはありませぬ。全能の神には力があり、神に不可能なことはないのです（[ルカ 1章 37節](#)）⁵¹。

要するに<サタンの>第一の嘘は：神の力を否定し、疑うことです。 福音書の中でイエスがこの問題を取り上げたとき、イエスは神が十分に供給することができるということを受け入れようとしなない人々を「信仰の薄い者たちよ」という言葉で非難しました（例えば、[マタイ 6章 30節](#)）。神を必要としていることを認め、神とその供給に信頼することは、信仰の最も小さなステップです。神に信頼をおかず、現世において神が供給して下さることや、（イエス・キリストにある）永遠の命を信じないことは、はじめは疑いを抱くだけのこともかもしれませんが、最終的には、（あからさまにではなくても、実際には）私達の命を保たれる神の力と能力を否定することにつながります。いったんこのような疑惑に駆られると、自己努力が新たな焦点となり、この世のものを必死になって追い

⁵¹ 神の全能性については、『聖書の重要な教理』神学 神の研究 第1部の I.A.5節で詳しく述べられています：

求める異邦人(ギリシャ語のエピ・ゼテオ:[マタイ6章32節](#))のように、地上のものを手に入れることが神を求めることよりも優先されるようになります([ヘブル11章6節](#)参照)。

否定の第一:死ぬ定め 何の理由もなく死という現実を直視することは、神から与えられた性質を持つ私たち人間にはできないことです。死は人生の究極の問題であり、究極の関心事です⁵²。自分の最終的な死を意識することは、私たちと動物を区別する最も重要な現象の一つであり、悪魔の世界の真っ只中に生きる救われていない人々にとって、それは神の恵みの明確な現れです。なぜなら、自分の死が近づいたことを悟ることによって、私たちは、唯一の解決策として神を求めるように駆り立てられるからです(あるいは駆り立てられるべきだからです)。神だけが死の問題の解決策を持っており、すべての人間が初めから本能的に認識しているように、永遠の命の鍵を持っているのは神だけです(この第1部2章で取り上げたように:[伝道の書3章11節](#)、[使徒行伝17章26-27節](#)参照)。しかし、全人類に(私たちを贖って下さった主イエス・キリストを信じることによって)赦しと永遠の命の道を与えてくださった主の、息を呑むような恵みにもかかわらず、ほとんどの人間が神に立ち返り、神を求めようとしないという、恐ろしく、ひどい、不可解な真実があります。この世に蒔かれた神の言葉の種のほとんどは、固い心に落ち、悪魔は真理の言葉をすぐに奪い去ります([マタイ13章19節](#)、[マルコ4章15節](#)、[ルカ8章12節](#))⁵³。そして、神の恵みからのこの最も明確な訴えと警告に反応しないすべての人々のために、サタンは不快な真実をより受け入れやすい嘘にねじ曲げ、歪めるたくさんのプロパガンダをすでに用意しています。実際、死という普遍的な問題に対する唯一の真の解決である神が拒絶されると、死の恐怖は人類を操り、自分の意志に従わせるためのサタンの第一の武器となるのです:

このように、子たち(すなわち、神によってキリストに与えられた信者たち:13節)は血と肉とに共にあずかっているのです、イエスもまた同様に(すなわち、処女で生まれたので原罪がないという点だけではなく)、それら[共通の要素]をそなえておられる。それは、**死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた者たちを、解き放つためである。**([ヘブル2章14-15節](#))

[ヘブル2章14-15節](#)の文脈から明らかなように、悪魔の「死の力」は、死からの解放を神に委ねようとする大多数の人間にとっては、「死の恐怖」を感じるように定められています。この解決策のない死の恐怖は(神の代替案を拒否した後は)、実に強力な操る糸となります。(神を除外するなら)悪魔は、死の恐怖を使って人類を奴隷状態にすることができるのです。サタンの「解決策」は、人にさらに罪を犯させることなので、いったん神が死から解放してくださる存在として拒絶されると、悪魔の代替案は、蟻地獄のように、犠牲者をさらに深みへと飲み込んでいきます([ヨブ18章14節](#)、[イザヤ14章17節](#)、[61章1節](#)、[ルカ4章16-21節](#); [ヨハネ8章34節](#)、[ローマ6章16節](#)、[第一ヨハネ3章8節](#)、[黙示録1章5節](#))。(人の心にある思いは多様で、しばしば複雑

⁵² 上記I.2項「人生の虚栄」参照:

⁵³ 種まきのたとえについては、ペテロの手紙シリーズ#12に詳しく書かれています。

なものなので、この一覧は包括的なものではありませんが)これらの死に対する<悪魔の>まがいのものの解決策を、以下で詳しく説明します:

1) 問題を無視する: 問題を完全に、あるいは部分的に否定することは、サタンが頻繁に用いる「対処法」です。この「死への後ろ歩き」は、極度のストレスや危険にさらされているときや、人生の終わりに近づくほど困難なものになります。しかし、心が硬くなっている人が、人生の究極の関心事を「区分け」する能力は、本当に驚くべきことです(そして、救われていない人の死後に待ち受けている現実を理解している人にとっては、恐ろしいことです)。

2) 忘却: 永遠の忘却はエピクロス主義の特徴であり、今でも多くの文化や哲学で好まれています。この嘘によれば、死の後には「何もない」ので、死を恐れる必要はないということです。亡くなった人が「世界の魂」に合流しようが、文化的、生物学的な領域において自分の居場所を得ようが、重要ではありません。死には何の恐怖もないという二重の虚構(これは来るべき神の普遍的な裁きの否定です:[使徒行伝 24 章 25 節](#)参照)と、どんなに信じられないことであっても、亡くなった人は何らかの形で記憶されたり、集団的な形で継続して存在しているという虚構が、この特定のサタンの嘘を受け入れた人々に偽りの安心感を与えているのです。

3) 偽りの永遠の命: もし人が神の方法で救われなければ(イエス・キリストへの純粋な信仰こそが真の永遠の命への唯一の道です)、代わりに従うのはサタンが提供する偽りの選択肢のうちのどれか一つです。どんなに「善良な」団体、人物、宗教であっても(「キリスト教徒だ」と主張しているかもしれませんが。また、自分たちの働きによる救いの目論見に、キリストについての何かを混ぜている場合もあります)、イエスへの純粋な信仰による神の救いの提供を除いては、永遠の命はありません。

私たちの社会では、この疑似代替案はしばしば「神との契約」という形をとっています。つまり、「神のために」何かをすることで、死後に天国の門が開くとされているのです。いずれにしても、悪魔の代替案によって提供される擬似的な永遠の命がどのような形であっても(例えば、より高い精神的な境地、輪廻転生など)、イエス・キリストのいない永遠の命は、悪魔の犠牲者を現世での(現実には)どうしようもない状況に浸かっただまにさせて、彼らが立ち返って、悔い改め、神を求め、それによってサタンの力から逃れることができないようにするために仕組まれた、悪魔のもう一つの嘘に過ぎないのです。

恐れに関してですが、もし私達が真に神を畏れているなら([詩篇 19 篇 9 節](#); [箴言 1 章 7 節](#))、地上の人生において何も恐れることはありませんが、神に対する真の畏れを持っていないなら、恐れる理由は十分にあります([ヘブル 10 章 31 節](#); [12 章 29 節](#); [第一ヨハネ 4 章 17-18 節](#))。

要因その 1: 心配。 神から与えられた永遠の命を拒否し、代わりにサタンの居心地良い毛布に包まれていることを選んだ人たちは、このはかない人生に対する見解が完全にゆがんでしま

います。悪魔が提供する慰めの代替案は、どれも完全に納得させることができないので(結局のところ、それらは嘘であり、影響を受けたすべての心の奥底に消すことのできない疑念を残す)、日常生活の諸々の事柄に翻弄させられることとなります。絶え間なく執拗にからみついてくる罪を押さえつけながら主に耳を傾けることは、信仰者にとって非常に困難なことです。神は私たちに気にかけてくださり、私たちの世話をしてくださるので、心配してはいけないと言われました(確かに神はいつもそうしてきてくださいました:[申命記 31 章 6 節](#); [詩篇 37 篇 25 節](#); [マタイ 6 章 25-34 節](#); [ヘブル 13 章 5-6 節](#); [第一ペテロ 5 章 7 節](#); [第一コリント 7 章 29-31 節](#) を参照)。

だから、(24 節、前節で言われた真理に基づいて)あなたがたに言う。自分の体について、つまり、何を着なければならないかについて心配するのをやめなさい。あなたの人生は、食べ物よりももっと[意味]があるのではありませんか?そして、あなたの身体は衣服よりももっと[有意義]ではないでしょうか? 空の鳥を見なさい。彼らは種も蒔かず、刈り入れもせず、穀倉に集めることもしない。それなのに、あなたがたの天の父は彼らを養っておられる。あなたは彼らよりも大切な存在ではないか?あなたがたの中で、心配したからといって身長を一尺半も伸ばすことができる者がいるだろうか。それならどうして着物のことで思い悩むのか?⁵⁴ 野の百合をよく考えてみなさい。労苦もせず、紡ぎもしないのに、なんと成長することか。しかし、栄光のソロモンでさえ、これらのような服装をしていなかった。もし、今日はここにあって、明日は炉に投げ込まれる野草をそのように神が着飾って下さるのなら、信仰の薄い者よ、あなたがたのために、なおさらそうなさらないであろうか。だから、「何を食べようか」「何を飲もうか」「何を着ようか」と心配するのをやめなさい。これらは、異邦人(=救われていない人)が必死になって追い求めているものだから。あなたの天の父は、あなたがこれらのものをすべて必要としていることを知っている。だから、まず御国とその義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、あなたがたに追加で与えられる。だから、明日のことを心配するのを止めなさい。明日は明日のことで[あなたが前もって付け加えておかなくても]、どんな日にも十分な悪が[すでに]あるのだから。(英訳 マタイ 6 章 25-34 節)

顕れ方 その 1: 貪欲 お金では安心を得ることはできません。神を離れては、真の安心はありません。しかし、神が必要なものを与えてくださらない(だからあなたは神を必要としない)という悪魔の嘘を信じることの主要な顕れは、神から離れたら将来にわたり、必要物の豊富な供給に

⁵⁴ 古代世界では、衣服は現代よりも供給量が少なく、消耗が早く、確保するためにはより多くの労力、あるいはより多くの金銭が必要でした。同じように、私たちの文化において必要不可欠なカロリーの供給は、イエスの時代よりもはるかに少ない問題です。現代において生計を立てるために必需品とみなされることの多い住宅費や個人の交通費は、現代の経済で必要とされる収入の割合という点では、古代の衣類に相当するでしょう。重要なのは、私たちが「心配」したくなるような必需品は常に存在するということです(たとえ私たちが衣食のことで思い悩む必要がないほど幸運な者であったとしても)。

与り、安全であるという虚しい期待を持つことになります。地上の呪い、つまりエデンの時代以降、人は汗水流して生計を立てなければならなくなったにもかかわらず、神は人間と地球に、この主要な営みをなしていくための十分な恵みを残してくださっています。実際、真に必要なものに事欠くという厳しい困難は、例外的な神の裁きの場合においてのみ生じるものです(申命記 28章 15節～、列王紀上 17章 1節参照)。それにもかかわらず、この世のものを造られ、供給してくださる神を信頼する代わりに、この世のものを所有することに信頼を置く人々の間には、愚かな世俗的な所有欲が蔓延しています(愚かな金持ちのたとえ:ルカ 12章 14-21節を参照)。今、多くの獲得欲が生活の贅沢品に向けられる(あるいは消費される)のは事実ですが、必要なものまで(あるいはそれ以下に)減ってしまうことに対する神経をすり減らすほどの恐怖が、欲の核心にあります。そして、欲の背後にある苛烈な恐怖を鎮めるほど、欲を完全に満たすことのできるものは決してなく、ありえないのです。なぜなら、欲の表面下には死への恐怖があり、「十分に」さえ手に入れば、死そのものを回避できるという狂気の希望があるからです。

人は栄華のうちに長くとどまることはできない、滅びうせる獣にひとしい。(詩篇 49篇 12節)

神に対して、人はく財宝を頼みとし、富の力を誇る者でも>兄弟をも贖いえない。神に身代金を払うことはできない。魂を贖う値は高く[この世の貨幣をもって]とこしえに、払い終えることはない。(新共同訳 詩篇 49篇 8-9節)

それから[イエスは]人々にむかって言われた、「あらゆる食欲に対してよくよく警戒しなさい。たといたくさんの物を持っていても、人のいのちは、持ち物にはよらないのである」。(ルカ 12章 15節)

たとい人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか。(マタイ 16章 26節)

キリストはこの原則を、愚かな金持ちのたとえ話で説明されました。愚かな金持ちは、豊かさに恵まれ、遠い将来の計画を立てていたまさにその夜に、神が自分の命を取り去ることを予期していませんでした(ルカ 12:13-21)。神ではなく、物質的な所有物を信じるという考え方は、必然的に食欲と欲望につながります。この基本的な欲望が達成されると、その結果、今までとは反対の反応をし始めます。神から離れた人々が物質的な豊かさと偽りの安心を得れば得るほど、しばしば不安を感じ、少なくとも安心するためにはもっと所有しなければならないと考えるようです(超金持ちが食欲にさらなるものを求める現象を思い出してください)。だからこそ、主は弟子たちに、「金持ちの青年」が自分の財産を手放そうとしないのを見て、「富んでいる者が天国に入るのは、むずかしいものである」(マタイ 19章 23-24節)と告げられたのでしょう。神は「人をかたよりにみない」方であり(使徒 10:34、ローマ 2:11、エペソ 6章 9節、コロサイ 3章 25節)、財産を持つこと自体は罪ではありませんが、財産を多く持つほど、神よりもその財産に依存する傾向が強くなることは確かなことです。だからこそ、イエスはこの金持ちの青年に、自分の持っているものを

すべて手放して、イエスに従いなさいと言ったのです。つまり、物質的な富に対する忠誠が(神への忠誠を損なわせてまで) 支配的なものになり得ることを示されたのです。聖書は食欲の問題とその根本原因(すなわち、神の代わりに物質的な所有物を信頼し、架空の安全を求めて、さらにもっと求め続けること)について多くのことを語っているので、ここでいくつかの箇所を引用しておくことにします:

- 1) 真に神に忠誠を誓いながら、物質的な利得に頼ったり、その欲望に駆られていることはできません-神と「マモン」を同時に崇拝することはできません([マタイ 6 章 24 節](#)、[ルカ 16 章 13 節](#))。
- 2) 私たちは、何ひとつ持たないでこの世に来ました。また何ひとつ持たないでこの世を去っていくのです([第一テモテ 6 章 7 節](#))。
- 3) 物欲は悪魔の攻撃を受けやすくし、私たちの救いを脅かします([第一テモテ 6 章 9 節](#))。
- 4) 金銭を愛することは、あらゆる悪の根源であり、私たちを信仰から遠ざけ、苦しめます([第一テモテ 6 章 10 節](#))。
- 5) 食欲は本質的に偶像崇拝であり([コロサイ 3 章 5 節](#))、その実践者たちは偶像崇拝者です([エペソ 5 章 5 節](#))。
- 6) お金に対する食欲によって、神との関係を捨てたバラムは、富がいかに欺くものであるかのことわざになりました([第二ペテロ 2 章 15 節](#)、[ユダ 11 節](#))。
- 7) ねたみは、所有欲の真の根源です([伝道の書 4 章 4 節](#))。
- 8) 富に対する欲望は、どんな成功を収めても満たされない([伝道者 5 章 10 節](#))。
- 9) 富は、私たちを神から遠ざける、重大な欠点となり得る([ルカ 18 章 23-25 節](#))。
- 10) あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるのです([マタイ 6 章 19-21 節](#)、参照:[ルカ 12 章 32-34 節](#))。
- 11) 世を得ても命を失うなら、その人に何の益があるのか。([マルコ 8 章 36 節](#)、[ルカ 9 章 25 節](#))。
- 12) あなたの命は、財産の豊かさに依存するものではない。([ルカ 12 章 15 節](#))
- 13) 神に対して豊かになろうとしないで、物質的なものを蓄えるのは愚かなこと([ルカ 12 章 21 節](#))。
- 14) 弟子となるには、財産よりも神を優先させる意志を要する([ルカ 14 章 33 節](#))。

15) 富は人の見方をゆがめ、霊的成長を妨げる([マルコ 4 章 19 節](#))。

16) 永久なものは一つとしてありません。巨大な富も、所有者をより大きな誘惑とより厳しい裁きにさらすことになるだけです([ヤコブ 5 章 1-6 節](#)、[ルカ 12 章 48 節](#))。

17) 貪欲は第十戒で禁じられている([出エジプト記 20 章 17 節](#)、[申命記 5 章 21 節](#))。

聖書の参考文献その 1:

主のテストその 1 : 人はパンのみにて生きるにあらず。人間の最も基本的な物質的欲求は食べることであり、口を満たすことは人類のほとんどの努力の根底にあるものです。いくら富を築いたとしても、この必要性和欲求は日々の関心事であることに変わりはありません([伝道の書 6 章 7 節](#))。しかし、私たちの真のパン、真の食べ物は神の言葉です([申命記 8 章 3 節](#))。神はこの教訓を教えるために、イスラエルの子供たちを謙遜にし、そしてマナを食べさせました。そして、主はこの教えを完全にマスターされたことを、四十日間無食で耐え、悪魔の誘惑に対して「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つの言葉で生きるのです」([マタイ 4 章 4 節](#))と答えることで示されました。なぜなら、神の口とそこから出る命の言葉こそ、私たちの最大の関心事であり、自分の口を満たす事ではないからです。物質的な必要性の領域における試練と誘惑は、悪魔の世界で私たち人間が受けなければならない試練の中で、最も基本的で最も一般的なものです。しかし、私たちの主は、私たちに道を示してくださいました。荒野に出て行って、この極端な窮乏を味わうことは、主の選ばれたことではありませんでした。聖霊がそうするように導かれたのです([マタイ 4 章 1 節](#)、[マルコ 1 章 12 節](#)、[ルカ 4 章 1 節](#))。これは父なる神からの試練であり、たとえ極限状態にあっても、キリストが肉体的な幸福よりも神のみ旨を優先させる意志を示しただけでなく、それはこれからの宣教のためにキリストを準備させるものでした。それに続く三年間は、主にとって、しばしば物質的安全の「ない」場合が多々あります([マタイ 8 章 20 節](#)；[ルカ 8 章 3 節](#)；[9 章 58 節](#)参照)。そして、激しく消耗する働きの中で、前例のない反対勢力に囲まれていました([マルコ 8 章 31 節](#)；[ルカ 2 章 34 節](#)；[ヨハネ 15 章 18 節](#)；[15 章 25 節](#))。彼は物質的なもの全てよりも神の言葉を優先し、最後には私たちのために、ご自分の命を犠牲にすることさえ、完全に覚悟しなければなりませんでした([ローマ 5 章 8 節](#))。もし私たちが物質的なものの奴隷になるなら、私たちが仕えるのは物質的なものとなります([ローマ 6 章 16-18 節](#))。しかし、私たちの主であり救い主である生ける御言葉の足跡に従うなら、神が言われることを第一に考えます([詩編 138 篇 2 節](#))。そうすることによって、神が備えて下さることに恐れる必要は決してありません。神は忠実であられるからです([申命記 7 章 9 節](#)；[第一コリント 10 章 13 節](#)；[第一テサロニケ 5 章 24 節](#)；[第二テサロニケ 3 章 3 節](#)；[第二テモテ 2 章 13 節](#)；[ヘブル 10 章 23 節](#)；[13 章 5-6 節](#))。

主の祈りその1: 私たちの日々の糧を今日もお与えください。荒野で四十年間、神様は忠実にイスラエルの子供たちにマナを食べさせました。このマナは規則正しく降って来て、彼らの飢えを癒し、必要を満たしました。(このマナは、安息日の前日に二倍の量を集めることを除いては、貯蓄することはできませんでした。[出エジプト記 16 章 4-5 節](#))。出エジプト世代にとって、将来の必要を予期することはできませんでした。彼らは毎日、神に信頼しなければならず、神は毎日、忠実でした。主は私たちに「来るべき日のために、私たちのパンを今日もお与えください」([マタイ 6 章 11 節](#)、[ルカ 11 章 3 節](#)参照)という祈りを教えられたとき、私たちが目の前の一日を超える資源を持っていると思っても、何が起るかは神のみが知っていることを思い起こさせたのです。神の現実の中で、私たちは一度に一日しか与えられておらず、毎日同じように神の備えが必要なのです。その日以外に使うために蓄えておいたマナはすぐに腐ってしまいました(ただし、安息日の分は例外でした:[出エジプト記 16 章 20 節](#))。同じように、すべての地上の富は腐ってしまいます(すぐには腐らないかもしれませんが、最終的には腐ります:[ヤコブ 5 章 2-6 節](#); [第二ペテロ 3 章 7-13 節](#))。私たちが本当に必要としているものは、豊富な富や物理的な生活手段ではありません。神は私たちがこれらのものを必要としていることを知っておられ、日々自由にそれらを生供給して下さいます。私たちに必要なのは、すべての備えの源である神を思い出すことなのです。さらに、文字どおりのパンが生命を維持するために重要であるのと同様に、イエス・キリストに従う者として、真の命のパンであるイエスの必要性はさらに大きいのです。食べ物以上に、私たちは、命のパンである主イエス・キリストについて教え、私たちをより親しい関係に導いてくださる神の言葉という日々の糧を必要としています([ヨハネ 6 章 32-58 節](#))。神はイスラエルの子供たちにマナを降らせましたが、彼らはそれを与えられた方を愛することを学びませんでした([詩編 78 篇 32 節](#))。イエスはわずかなパンと魚で何千人もの人々を養われましたが、食べた人々は食べ物を与えてくださった方に感謝しませんでした([ヨハネ 6 章 60-66 節](#))。天地の創造主にとって、私たちの肉体的な生活を日々提供することは、とても簡単なことなのです。カラスに命じて肉を運ばせることは必要かもしれませんが、主にとって不可能なことはありません([創世記 18 章 14 節](#)、[ヨブ記 42 章 2 節](#)、[エレミヤ 32 章 17 節](#)、[マタイ 19 章 26 節](#)、[ルカ 1 章 37 節](#)、[18 章 27 節](#))。それ以上に、私たちに真のいのちのパンであるイエス・キリストを与えてくださり、その方によって私たちは永遠のいのちを得ることができるのです。問題は、私たちの反応です。私たちは、パンよりも主が必要であることを学ぶのでしょうか？ 私たちのすべての必要を満たすために、忠実である主に信頼することを学ぶのでしょうか。私たちはついに、霊的な糧が、この世の物質的なものよりもはるかに重要であることを学ぶのでしょうか。

朽ちる食物のためではなく、永遠の命に至る朽ちない食物のために働くがよい。これは人の子があなたがたに与えるもの[食物]である。父なる神は、人の子にそれをゆだねられたのである」。([ヨハネ 6 章 27 節](#))

第1ヨハネ 2 章 16 節 #1:肉欲 私たちの体には必要なものがあり、それについて伝えることは恥ずかしいことはありません。私たちは皆、罪深い本性を持っているので、私たちの罪深い肉からの圧力が常にあり、それが抑制されないと、あらゆる種類の欲望と貪欲に駆り立てられます

([ローマ 6 章 11-14 節](#))。サタンは私たちの罪深い傾向を熟知しており、彼のシステムは私たちの中にあるあまりにも自然な欲望反射への誘惑を最大化するように構築されています。サタンとその代理人は、この基本的な弱点に付け入ろうとして、魅惑的な誘惑というエンジンと、欠乏への恐れという棍棒の両方を用いて、私たちに攻撃を仕掛けるのです。

対抗する美德その 1: 信仰(対抗悪:神ではなく、所有物への信仰)。悪魔は、物を所有することが真の安全の基盤であり、個人的な満足の基礎であると世間に信じさせようとしています。クリスチャンである私たちは、これが嘘であることを知っています。なぜなら、どんなに豊かでも、安心は得られず、私達すべての者は死んでしまうからです。そして、神の被造物である私たちは、物質的であると同時に霊的な存在であり、神、神の真理、神の子だけが、私たちの心の奥底にある霊的な必要を満たすことができるからです。神がいなければ、超富裕層であっても欲求不満が生じるだけです。少なくともあるレベルでは、その所有者は、その恩恵が墓の向こうには移せない短命なものであり、最大規模の富であっても、心の空洞を埋めることはできないことを自覚しているのです。このことを私たちは**信仰**によって知っており、信仰によって最も価値のある財産を心の奥底にある霊的な必要に>充当しているのです。それは、神であり、壊れることのない、いつまでも満足を与えてくれるパンであり、神の言葉であるイエス・キリストを信じる信仰によるのです。短期的な生命を支えるだけでなく、永遠の生命を与えてくれるパンです([ヨハネ 20 章 31 節](#))。

礼拝の対象その 1: 物 神は私たちが神を礼拝するように造られ([イザヤ 43 章 7 節](#); [ヨハネ 4 章 23 節](#); [エペソ 1 章 6 節](#)、[12 節](#))、私たちは永遠に神を礼拝し、すべての人が永遠の命を得るように運命付けられています。しかし、悪魔は自ら神に背を向けて、私たちが代わりに彼を拝むことを望んでいます。サタンは私たちがどのように造られているかを知っており、私たちの内側にある崇拝の対象への深い欲求を知っているので、代用品を提供するのです。マモン、お金、所有物、富、あるいは単に「物」と呼んでいます。私たちの自然な賛美と礼拝を、神から単なる物質に移すことは偶像崇拝の本質です。貪欲は偶像崇拝であり、私たちの霊の創造者である神よりも物質の創造物を崇拝することです([コロサイ 3 章 5 節](#)、[エペソ 5 章 5 節](#)、[ローマ 1 章 25 節](#)、[ヘブル 12 章 9 節](#)を参照)

主要な問題点その 1: 死の問題を解決しても利点はありません。サタンの第一の嘘は、私たちの普遍的な死について「嘘をつく」のです。私たちは神を**必要**とします。私たちが死ぬという事実は、私たちが死から救い出してくれる誰かを必要としていることを明白に示しています。明らかに、神以外の誰も私たちを救えないのです。ですから結局のところ、すべてが終わったとき、どんなに物や財産を豊かに持っていたとしても、それは**命<を得る助け>**とはなりません。どんなお金も、どんな財産も、私たちが死から救い出すことはできませんし、ましてや永遠の命を保証することはできません。それができるのは、神だけなのです。私たちはお金をほとんど持っていないかもしれません。財産もほとんどないかもしれません。しかし、もし私たちがイエス・キリストにある

永遠の命という神の贈り物を持っているなら、私たちは実に豊かなのです。そして、救い主を受け入れた者は、永遠に神の王国の食卓につく場所を失うことはないのです。

2. 悪魔の第二の嘘：「私は神のような存在だ」(前半)

悪魔のプロパガンダの第二の嘘についての一覧：

真実：私たちは神ではありません。

嘘：私は神のようなものです。

要するに真実は：栄光は神のものです。

要するにこの嘘は：神から頂いている祝福を認めず、自分自身の栄光を求めることです。

何を否定しているか：罪と罪深さ。

何をもたらすことになるか：主観的な傲慢さ。

どのように表に現れるか：神の権威の拒絶。

聖書の参照箇所：

主の試練：神だけを崇拝しなさい。

主の祈り：私たちの負債を赦してください。

第一ヨハネ 2 章 16 節：目の欲。

対抗する美德：愛(反徳悪：神への愛に代わる自己への愛)

崇拝の対象：自己。

主な問題点：どんな業績もあなたを神にはしない。

第二の真実：私たちは神ではありません。原理的にこれほど明白な真理が、日常生活においてほとんど心に留められていないのが、人間の状態について言える極めて深刻なことです。もし私たちが本当に「私たちは神ではない」という明白な事実を受け入れるなら、それは自分達の行動になって現れてきます。そもそも、私たちは神ではないので、神の権威を疑ったり、挑戦したりする権利は間違いなくないのです。悪魔が最初に反逆した背景には、神の権威の下から逃れ、

自分自身が権威者となり、最終的には神に代わって宇宙の支配者となりたいという願望があったことを忘れてはなりません。しかし、仲間の天使たちに対して神に取って代わろうとする前に、サタンはすでに自分の心のうちで神となっていたのです。これこそ、私たちがここで指摘している「主観的高慢<思い上がり>」と呼ぶものの本質です。つまり、自分の思いから神を排除する内なる傲慢さであり、高慢な者が神を宇宙から排除することです(詩篇 10 篇 4 節[NASB; NIV 訳は異なっています])。このような思考は、確かに狂気の沙汰ですが、しかし悪魔の世界ではよくあることです。実際、歴史を通じて人類の大多数は、このようにして神を拒否し、サタンの暗闇の道に従ってきたのです。彼らが「神」の代替者を表明しようがしていまいが、真の神が人の心の思いにおいて、自己という神に取って代えられているなら、神の権威は、その人の思考の中で覆されているのです。私たちがこの世で「自分の道を行く」ことを決め、神の意志を無視し拒絶し、自分の意志でこの真理は受け入れるが、あれは拒否するとか、この戒めには従うけれど、あれには従わないということをしているとき、事実上、自分自身が真理の裁定者となっていて、少なくとも自分の心の中では、神に取って代わり始めていることになるのです。これは思い上がりであり、全人類の共通の遺産である自由意志の傲慢な乱用です。自由意志を使って、慈悲深い主の恵みに応え、キリストを受け入れ、この世で主に仕え、主が命じられたことに注意深く従おうとするのではなく、神の権威を故意に拒否するなら、悪魔の手中に陥ることになるでしょう。いったん神の言っておられることを疑って拒否し始めると、私たちは本当にまっすぐ破滅に向かう滑りやすい坂道にいるのです。悪魔の原罪である高慢は、実際、神に背を向け、神と神が私たちに望まれること(それが私たちの最善の利益であるとしても)に背を向けて真反対に向かうことと同じことなので、それはひどく破壊的なものとなるのです。そして、神の意志よりも自己の意志を選ぶというこの思い上がりは、皮肉なことに、真の解放をもたらすどころか、罪と、必然的にサタンとその意志への完全な隷属状態に陥ることになるだけです。もし私たちが神に仕えようとせず(神の存在や、神の意志を無視し)、代わりに自分の心の中で自分自身を神とするなら、私たちは必然的に悪魔に仕えることになるのです。

第二の嘘：私は神のようなものだ。この思いは、その程度や表現がどうであれ、神との関係にとって致命的なものです。私たちの力は、決して神の力のようなものではありません。私たちの栄光は、神の栄光と比較することはできません。私たちの意志は、いつになっても、主の意志に匹敵するようにはなれません。神の力、神の栄光、神の意志こそが、この人生において重要なのであって、私たちの栄光ではありません。私たちは非常に限定され、制限された被造物です。どうして私たちは、神のようになれるといくらかでも思えるのでしょうか。しかし、神に従わないとき、神を無視するとき、また自分の意見が神より優れていると主張するとき、自分にできないことをすると主張するとき、事実上、神が存在しないかのように人生を送るとき、私たちは自分自身を(少なくとも自分自身の心の中で)神々と同等の者としていることになるのです。

真実その二、要するに：栄光はあなた(主)のものであります。私たちは脆く、はかない被造物です(詩編 144 篇 4 節)。やがて私たちが朽ち果て塵にかえるように、私たちの最も偉大な業績も塵のようなものになります。さらに、私たちが持っているもの、私たちが成し遂げることができるものはみ

な、その栄光は神に帰するのです。私たちの命と息も、またどんな才能も、どんな肉体的な力も、どんな人格的な強さも神が与えてくださったものです。私たちが、たちまち地上から消し去られてしまいうる戦いの中にあっても生きていられるのは、神の慈悲深い保護があるからです。神の最初の、そして継続的な恵みがなかったら、私たちは大小にかかわらず、どんな達成も成功も獲得もなかったことでしょう。これは信者だけでなく未信者にも等しく当てはまります。悪魔が存在し続けていることさえも、神の寛容と宇宙の維持に依存しています([ヘブル 1 章 3 節前半](#))。主に齒向かうために使う能力も、主に与えられたものであって、([エゼキエル 28 章 12-15 節](#))それゆえ、どんな被造物にも自分を誇る理由はありません。私たちにふさわしい唯一の誇りは、私たちが造られた方について誇ることです([詩 44 篇 8 節](#)、[エレミヤ 9 章 23-24 節](#)、[ローマ 4 章 2 節](#))。なぜなら、永遠にいつまでも、栄光は主、ただ主に帰するものだからです。

わたしは主である、これがわたしの名である。わたしはわが栄光をほかの者に与えない。また、わが誉を刻んだ像に与えない。([イザヤ 42 章 8 節](#))

第二の嘘、要するに： *神の下さっている祝福を認めず、自分の栄光を求めている。私たちの限られた手段、一時的な業績、そして神に完全に依存している(最初の能力も継続的な存在も)ことを考えると、神でない私たちは、神の能力や属性を一切持っていないため、賞賛、名誉、栄光を受ける価値は当然ありません。言うまでもなくこれらはすべて、神のものなのです。もし私たちが御心の外で何かを成し遂げたとしても、それは実際には私たちの大きな恥であり、御心の内に成し遂げたことがあれば、実際には、見えるものも見えないものも含めて、御心の恵みによるものなのです。したがって、すべての栄光は神のみに属します。もし私たちが、成功や達成、あるいは天賦の才能を自分から出たものとみなすなら、私たちは神の栄光を奪っているのです。神がなさったことを自分の手柄にする権利が、どうして自分達にあると思うのでしょうか。これはまさに、神の意志を無視して自分の好き勝手なことをしていることです。私たちは神ではないのに、神の権威を拒否し、神を認めぬ行為をしながら栄光を求めることは、自分を神にしているようなものです。私たちが神の恵みを善のために使うにせよ、悪のために乱用するにせよ、私たちの行動のすべてにおいて与えられている神の助けを認めず、自分の栄光を求めようとするとき、神への恐れというものがありません。主を畏れることはすべての知恵の基(もと)です([箴言 1 章 7 節](#))。ですから、有名になろうとすることや権力、名声、成功、あるいは人生の様々な功績の中で自分を高め、自己宣伝しようとするとき、自称せずとも、事実上、自分を主と同一視する最も愚かな行為に走っていることになるのです。聖書はこのことについて非常に明確に語っています。私たちの存在も(悪を除けば)、私たちの持つもの(どんな形であれ良いもの)も、すべて神から出たものであり、私たちが神の前で誇れるものではないのです。*

あなたがたは重ねて高慢に語ってはならない、たかぶりの言葉を口にするをやめよ。主はすべてを知る神であって、もろもろのおこないは主によって量られる。…主は貧しくし、また富ませ、[ある人を]低くし、また[ある人を]高くされる。貧しい者を、ちりのな

かから立ちあがらせ、乏しい者を、あくたのなかから引き上げて、王侯と共にすわらせ、栄誉の位を継がせられる。(サムエル記上 2 章 3 節, 7-8 節)

わたしは、誇る者には「誇るな」と言い、悪しき者には「角をあげるな、角を高くあげるな、高慢な態度をもって語るな」と言う。上げることは東からでなく、西からでなく、また荒野からでもない。それはさばきを行われる神であって、神はこれを下げ、かれを上げられる。(詩篇 75 篇 4-7 節)

だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう。(マタイ 23 章 12 節)

いったい、あなたを偉くしているのは、だれなのか。あなたの持っているもので、[神から]もらっていないものがあるか。もしもらっているなら、なぜ[神から]もらっていないもののように誇るのか。(第一コリント 4 章 7 節)

主はこう言われる、「知恵ある人はその知恵を誇ってはならない。力ある人はその力を誇ってはならない。富める者はその富を誇ってはならない。誇る者はこれを誇とせよ。すなわち、さとくあって、わたしを知っていること、わたしが主であって、地に、いつくしみと公平と正義を行っている者であることを知ることがそれである。わたしはこれらの事を喜ぶと、主は言われる」。(エレミヤ 9 章 23,24 節) (第一コリント 1 章 31 節; 第二コリント 10 章 17 節参照)

すると、どこにわたしたちの誇があるのか。全くない。なんの法則によってか。行いの法則によってか。そうではなく、信仰の法則によってである。(ローマ 3 章 27 節)

兄弟たちよ。あなたがたが召された時のことを考えてみるがよい。人間的には、知恵のある者が多くはなく、権力のある者も多くはなく、身分の高い者も[キリストに召された者は]多くはない。それなのに神は、知者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選び、有力な者を無力な者にするために、この世で身分の低い者や軽んじられている者、すなわち、無きに等しい者を、あえて選ばれたのである。それは、どんな人間でも、神のみまえに誇ることがないためである。(第一コリント 1 章 26-29 節)

何を否定しているか その 2: 罪と罪深さ。人間が、自分自身が神になれるという誇大妄想的な仮定に必要な第一歩は、人間の罪深さを否定することです。というのも、明らかに生まれながら罪があり、邪悪なことがいたるところで行われるには、どうしても、真の神が邪魔になります。⁵⁵ 人

⁵⁵ 神の神聖さについては、『聖書の重要な教理』第 1 部の I.B.2 項「神学： 神の研究」をご覧ください：

間として、私たちは自己認識を持っており、神に応答し、神を求め、神に仕えるために神が私たちに与えて下さった自由を知っています。⁵⁶ しかし、この自由を使って、神に仕えるのではなく自分自身に仕え、神を高める代わりに自分自身を高めるためには、私たちは真実に対して無知となる必要があるのです：生まれながらの罪びととして、また行いからしても、また（私たちが神から自分自身に目を向けるならば）その働きからしても私たちは罪人であり、まったく崇拝に値しない存在です。万が一、アダムとエバの原始的な状態に戻ったとしても、私たちはどういう意味でも「神」になるというわけではありません（もちろん不可能です）。しかし、私たちは決して神ではないだけでなく、むしろ罪に染まっているという事実が、悪魔の第二の戦略的嘘をより一層息を飲むほど恐ろしいものにしてしています。神は聖なる存在なのだから、罪深く、腐り果てることになっている肉なる者が、どうして神の前に出ることができるでしょうか、ましてや、神と自分を比較することができるでしょうか。したがって、罪深さを否定することは（罪深いと表明してもそれは口先だけで）、人類を自己崇拝に巻き込もうとする悪魔の必然的計画であり、強力な第一歩なのです。死すべき運命と同時に、罪を認識することによって、私たちは神を求めるようになり、神だけが提供できる助けを切実に必要としていることをはっきりと示すこととなります（[ローマ 3 章 19-20 節](#)；[7 章 24-25 節](#)；[ガラテヤ 3 章 22-25 節](#)）。しかし、思い上がり、神に背を向け、独りよがりの究極の傲慢さ、神と対等の立場に立てるという狂気の信念は、不快感を催す罪意識を拒絶することになり、（上記で扱ったように、神を求める代わりに物質的なものを必死に求めることの先にある）サタンの世界システムへの道をまっしぐらに進んでいくこととなります。結局のところ、高慢が悪魔のもともとの罪でした。彼は物理的な必要性（上記で扱った彼の最初の嘘の原動力）の圧力下にあったわけではありませんが、自分を高め、自分に栄光と権力、支配力を求め、神ご自身に取って代わることさえ望むことが、彼の思い上がった罪の求める事柄だったのです。このように考えるには、神の権威や神の意志を拒否し、またそうした罪深い反抗心に対して盲目的になっていなければなりません。自分の行為を罪として受け入れることは、悔い改めの第一歩となります。神の被造物である私たちは、真理に惹きつけられるか、あるいは真理を撥ね退けるかするようにできているのです。神に逆らい、自分を神と同等に考え、自分自身を神とするような生き方は、まさに自己美化であり、自分の罪深さを認めることと全く相容れないものです。確かに、このサタンの戦略的嘘の第二弾との関わり方は様々ですが、すべてに共通していることは、事実を否定しながら、罪に仕えることです（[ヨハネ 8 章 34 節](#)、[ローマ 6 章 16 節](#)、[7 章 14 節](#)、[第二ペテロ 2 章 19 節](#)）。このような態度は、以下のような破壊的な三段階に至らせます。

1) 私たちは本来罪深いものであるという基本的な真理を否定すると、霊的な盲目に至ります。（[マタイ 6 章 22-23 節](#)、[マルコ 4 章 12 節](#)、[ルカ 8 章 10 節後半](#)；[マタイ 15 章 14 節](#)；[23 章 14-26 節](#)などのイエス様の語られた譬えを参照；また[ヨハネ 12 章 40 節](#)参照）。

⁵⁶ 自由意志とは、私たちが神の権威に応え、その権威を委譲された形で行使することを可能にする、私たちの霊性の特質であるという点については、このシリーズの前の第 II.1 項「神の像と似姿」をご覧ください。

そこでイエスは言われた、「わたしがこの世(原語では kosmos)にきたのは、さばくためである。すなわち、見えない人たちが見えるようになり、見える人たちが見えないようになるためである」。そこにイエスと一緒にいたあるパリサイ人たちが、それを聞いてイエスに言った、「それでは、わたしたちも盲なのでしょうか」。イエスは彼らに言われた、「もしあなたがたが[実際の]盲人であったなら、罪はなかったであろう。しかし、今あなたがたが『見える』と言い張るところに、あなたがたの罪がある。(ヨハネ 9 章 39-41 節)

もしわたしたちの福音がおおわれているなら、滅びる者どもにとっておおわれているのである。彼らの場合、この世の神が不信の者たちの思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光の福音の輝きを、見えなくしているのである。(第二コリント 4 章 3-4 節)

2) 罪のもつれがひどくなると、神に立ち返るのをためらうようになります(エペソ 5 章 6-14 節)。

そのさばきというのは、光がこの世にきたのに、人々はそのおこないが悪いために、光よりもやみの方を愛したことである。悪を行っている者はみな光を憎む。そして、そのおこないが明るみに出されるのを恐れて、光にこようとほしない。(ヨハネ 3 章 19-20 節)

3) 個人の罪深さを否定すると、必然的に個人的な救い主の必要性も否定することになる(ヨハネ 7 章 7 節)。

もし、罪を犯したことがないと言うなら、それは神を偽り者とするのであって、神の言はわたしたちのうちにない。(第一ヨハネ 1 章 10 節)

私たちの罪深い性質、過去の罪、そして神のきよめの必要性を否定することは、私たちを神から遠ざけることにほかなりません。私たちが罪人であるという不快な現実を受け入れることは、霊的回復の第一歩です。しかし、この事実を受け入れないと、傲慢な盲人になってしまうのです。

何をもちたらすことになるか その 2: 思い上がり。私たちは自分自身を良く思いたいものです。それは人間の生まれながらの傾向です。神に喜ばれる歩みには大きな満足感があります。なぜなら、私たちが造られたのはこのためであり⁵⁷、私たちにとって主は、この世でもあの世でも、他の何にも勝る喜びだからです(詩篇 37 篇 4 節; ピリピ 1 章 25 節; コロサイ 1 章 9-12 節; 第一テサロニケ 4 章:1 節; 第一ペテロ 1 章 8 節; ユダ 24 節)。しかし、(サタンの最初の大きな嘘によって)私たちの神を求める思いが物欲によって逸らされてしまったように、この第二の嘘において、悪魔は、神への自然な喜びと当然の従順を、自分の満足を求めることに取って換えるように欺いているのです。内なる驕(おご)りと認められたいという欲求は、この悪魔の足跡に倣っていく時、神に従順について行き主ご自身と主のみ業を喜ぶ代わりに、自分の思いのままに行動し、

⁵⁷ 本シリーズの第 3 部「人間の目的、創造と墮落」をご覧ください。

自分を尊び、自分の栄光を求め、自分を認めてもらうことに心を費やすという、空虚で充足感のないものに方向転換させるのです。私たちがこの地上にいるのは、神を求めるためであって、自分の栄誉を求めるためではないのです。

どのように表に現れるか その2: 神の權威の否定。傲慢の本質、いや、すべての罪の本質は、神の權威、神の言葉、神の意志を拒否し、神が望んでいることを自分の望むことに置き換えることです。ですから、もし私たちが神を知ったり感謝することに関心がなく、代わりに自分の栄光を求めることにしか関心がないならば、神の御心をほとんど顧みないのは当然のことでしょう。私たちが「神のようだ」というサタンの嘘を信じるなら、その必然の結果として、主の主権を拒否し、創造主の私たちに対する本質的な権利を拒否するという必然の結果をもたらすこととなります。もし私たちが主と同等であるなら、主が言っておられることに対して注意を払うことも大切なことではなくなります。「神々」として、私たちは好きなことをすることができるのです。この論理は「私は自分のしたいことができる、私は自分以外のどんな權威にも服従しない」というふうに、しばしば逆に表現されるときも、人類の大部分にとって、これが本当の現状なのです。法律、状況、物理的な制限などが、この宇宙に行きわたった嘘第二号の本質的心情をある程度抑制するかもしれませんが、そうした思いは常にそこにあり、煽り立てられたりするなら燃え広がる可能性があるのです。

聖書の引用 その2 :

主の試練 その2: 神だけを崇めよ。サタンはイエスに、(イエスが自分<サタン>を崇拝することを条件に)世界のすべての王国を支配することを提案しましたが、主は次のように答えました、「あなたはあなたの神、主を礼拝し、主にのみ仕えなさい」。(マタイ4章10節、参照:申命記6章13節)。ちょうど私たちがその支配を受ける日を待ち望むように(黙示録3章21節参照)、主も神がご自分を世界支配に導く日を待ち望んでおられたのです。自分の予定表に従って、自分のやり方で昇進しようとする、必ず神の計画に反し、必然的に悪魔に仕えることになるのです。イエスは宣教の間、同じような試練に直面します。聖書の中で最も顕著な試練は、イエスがパンと魚を与える奇跡を経験した人々が、イエスをローマ当局に対する反乱の先頭に立たせようとしたことでした(ヨハネ6章15節)。イエスは神のみ心を行うために、この冠の申し出を断っただけでなく、最後にはご自分の命さえも捨てなければなりません。そうすることによって、イエス様は、ご自分の栄光を求めるためではなく、神様を礼拝し、その御心に従い、行うために来られたことを、はっきりと示されたのです(ヨハネ12章28節;13章32節;17章1節)。

主の祈りその2: 私たちの負債をお赦してください。私たち生ける神の被造物は、自らが「半神」であるどころか、罪の束縛を受けているため、神の助けを途方もなく必要としている状態にあります。主イエス・キリストの血による罪の赦しなしには、私たちは完全に、そして回復不能なまでに失われてしまうでしょう。日々の食物以上に重要なのは、キリストが十字架上で私たちのためにしてくださったことに基づく、神の継続的な憐れみと清めなのです。もし私たちが人の一生と自分の個人的な人生を正直に見るなら、私たちがどれほどあらゆる面で必死に神を必要としている

か、私たちの主イエス・キリストによる神の贖いにどれほど依存しているかを理解することができます。神は私たちを創造されただけでなく、私たちの主である神のひとり子の犠牲の死によって、私たちを死と地獄の力から買い戻してくださったのです。私たちが毎日、主の祈りのこの部分を祈るとき、私たちの弱さと脆さ、そして神が私たちのためにしてくださったことを離れては罪に対処することができない完全な無力さを思い起こさせるはずで、盲目的な思い上がりは、罪の問題を過少視させ、神の恵み深い解決策をつまらないものと見なさせるようになるのです。

第1ヨハネ2章16節 その2: 目の欲。私たちの肉における罪が、物質欲を自然に駆り立てるように、私たちが見る世界に反応して、世間からの賞賛を求めるようになります。そして、悪魔はこの罪の性質を使って、容易に私たちを正しく敬神的なチャンネルから外れるように仕向けるのです。罪深い人間である私たちは、魅力的であったり、有名であったり、影響力があったり、力があったり、あらゆる意味で他人から求められる存在になりたいと思う傾向が非常に強いのです。この欲望が私たちの行動を支配し始めると、サタンはその目的を達成するためにあらゆる種類の邪悪な手段を提供するようになります。私たちは、何よりも神からの賞賛を願うべきです。人がどう思うかは、本当に重要でしょうか？神の御心を実現するために、救い主は、最終的に父を除くすべての人を遠ざけるような道を歩まなければならなかったのです。神の栄光を自分に向けようとするのは、盲目的な思い上がりであり、傲慢の極みです。

対抗する美德 その2: 愛 (何に対抗するか: 神への愛に代わる自己愛)。神を愛すること (そして、その愛を世界に反映させること) は、クリスチャンの最高の美德です (第一コリント13章1-13節; 第二ペテロ1章5-7節)。私たちは、神に焦点を当て、神に感謝するために創造されたのです。

崇拜の対象 その2: 自分。上記の適切な焦点 (すなわち、神への愛) を移して自分自身に与えることは、事実上、神の代わりに自分自身を愛し崇拜することで、まさに悪魔が私たちにさせようとすることです。ひとたび自分を何よりも尊重するようになると、その自己愛を満たすために、簡単に罪深い行動 (自分に権利があると感じる名声、評価、達成、賞賛を得るために努力すること) に導かれるのです。このような道を歩むと、サタンの策略や罠にかかりやすくなるだけでなく、サタンにとって非常に有益な存在になる可能性があります。

主な問題点 その2: どんな業績もあなたを神にはしない。どんなに成功しても、どんなに権力や名声を得ても、決して「神のようになる」ことはありません。私たちは、自分の手で成し遂げたことや、勝ち取ったかもしれない名声に誇りを持ちますが、私たち人間は、実際には出来事の成り行きに影響を与えることができない存在なのです。世界の歴史の中で、神の包括的な計画と包括的な意志を離れて起こったことはありません (これからもそうです)。名声、有名人、成功は、しばしば私たちの目の前から消え去っていきます。なぜなら、神の力によって、神の意志に従ってなされたことだけが、時の試練に耐えるからです。神の栄光は永遠にとどまりますが、人間の栄光は朝霧のようにはかないものです。このため、現世で「神のようになる」という自己に栄光を与える約束は、幻想であり、実際、恐ろしい欺瞞です。

主よ、あなたはわれわれのために平和(=繁栄 NIV 訳)を設けられる。あなたはわれわれのためにわれわれのすべてのわざをなし遂げられた。(イザヤ 26 章 12 節)

3. 悪魔の第三の嘘：「神は私を必要としている」

悪魔のプロパガンダの第三の嘘についての一覧：

真実：神は私たちを必要としていません。

嘘：神は私を必要としている。

要するに真実は：御国はあなた(神)のものです。

要するにこの嘘は：千年王国を<自分達が>もたらすことは可能と言っている。

何を否定しているか：神が歴史を支配していることを否定し、自分が支配しようとしている。

何をもたらもたらすことになるか：客観的にも傲慢。

どのように表に現れるか：独善的な態度。

聖書の参照箇所 その3：

主の試練 その3：神を試みてはならない。

主の祈り その3：私たちを試みにあわせないでください。

第一ヨハネ 2 章 16 節：人生のおごり高ぶり。

対抗する美德 その3：希望(何に対抗するか：神の救いを求めないで人間の解決に期待することに対抗して)。

崇拜の対象 その3：サタン。

主な問題点 その3：王国をもたらすことはサタンの王国をもたらすだけ。究極の悪。

真実その3：神は私たちを必要としない。私たちが神を必要としていることを否定させるような、恐怖を誘発する嘘の次には、神と対等の立場を主張させる思い上がりの嘘があり、その次にはサタンが人類を彼の意志に屈させるために設立した、神を「助ける」ためという狡猾なプロパガンダ・システムの餌食になるように仕向けている第三の嘘が待っています：このシリーズの前の

回で述べたと思いますが、狡猾さは悪魔の戦略の特徴です。もちろん、先に確認したように、すべてのクリスチャンが主を喜ばせたいと願うのは正しいことであり、適切なことです。しかし、それは神の御心に従った場合です。パウロがダマスコに行き、そこにいたキリスト教共同体の指導者たちを逮捕し、裁判のためにエルサレムに連れ戻し、司法殺人に等しいことをしたとき、彼はともかくも、この神を冒瀆する宗派を撲滅するために働くことが、「善を行い」「神を助ける」ことになると思い込んでいました。後に彼は、イエス・キリストとその教会のために自分の人生を捧げ、最終的には命を失うことになりましたが、実際のところ、彼はイエス・キリストとその教会を迫害していたのです(使徒 9 章 5 節; 22 章 7-8 節; 26 章 14-15 節; ガラテヤ 1 章 13 節)。来るべき艱難時代には、「神の名において」同様の悪が普通に行われる事態になることでしょう。

人々はあなたがたを会堂から追い出すであろう。更にあなたがたを殺す者がみな、それによって自分たちは神に仕えているのだと思う時が来るであろう。(ヨハネ 16 章 2 節)

読者は、表向きは善と呼ばれるが実は悪であるというような、極端な事例を簡単に挙げる事ができると思いますが、このセクションで注意すべきなのは、一般的に「神を助ける」という、よりありふれた、はるかに目立たない、より巧妙な行動です。このような心の態度は、それ自体、神にとって不快なものです。神はいかなる助けも必要とはされません—彼は神なのです！そのような考えを持つ人はいつでも、神は私たちが必要としていないという明白な真実を見落としています。神は全能であり、あらゆる面で完璧です。誰も神や神のご計画に逆らうことはできません。しかし、それこそ悪魔が行おうとしていることなのです。このシリーズの最初で見たように、神は敵対者を正当に排除して、被造物の完全性を回復する方法を見つけることができないため、悪魔が宇宙の新しい事実上の支配者として君臨することを神が許さざるを得ないのだという虚しい希望が、サタンの反乱の前提としてありました。この「主張」において、「良くやった」者には「神を助けた」ということで、神が与えないような報酬を従者に与える英雄の役をサタンは演じようとしたのです。このような、宇宙の主に対してあからさまに歯向かい、その座を奪おうとする者についての記述は、ばかげていると思われませんか。そうであるなら、哀れな人間が「神を助ける」ことができると考え、**神の意思に反して傲慢にも**そうしようとするのは、どれほどばかげていることでしょうか。これが問題なのです:神は、私たちが神の意志に従って真の善を行うことを望んでおられます。—それは神が<元々>サタンから望んでおられたことであり、サタンは大きな祝福と満足のうちに、それを行うあらゆる機会があったのです。しかし神は、悪魔(あるいは私たち)が**神に代わって**、何が良いことかを裁定するのを容認されるつもりはありません。これは確かに微妙な点ですが、これは完全に神の意志に依存しているのです。神のみ心を行うことは良いことであり、真に「良いこと」です。神が望まれないことをするのは善ではなく、真に「悪を行う」ことなのです。地上のすべての者が何を良いと思おうが、それは**問題ではありません**。神様のご意見こそが重要なのです。神が良いと言えればそれは良いことであり、悪いと言えればそれは悪いことなのです。全ては神様の御心次第なのです。ですから、もし私たちがクリスチャンとして賢明で、本当に神を恐れるならば、神が何を望まれるのか、あるいは何をすることを望まれるのか(そして、何を遠ざけることを望まれるか)が、本当に唯一の問題であるべきなのです。しかし、本当に傲慢の極み、**客観的に**

も傲慢であることは、神を必要としない態度をとり、自分を神と同等だと思い、何か神を助けることができるかと考えることです。今、私たちは、必要とはしていないという態度と尊敬の念の欠如を表明しているだけでなく、思いの中で、神を自分よりも低くしてしまっているのです。私たちはそうしたのである。なぜなら、私たちは神を必要としないのに、神を助けることができるというのですから。そして、この冒流的な思いを持つ者にとっては、一神は何が本当に良いことなのかを理解できるほど賢くはないのです。しかし神は私たちに御心を語られなかったのでしょうか。いいえ、パウロが言っているように、神はそうしてこれらしました。

その声は全地にひびきわたり、その言葉は世界のはてにまで及んだ。(ローマ 10 章 18 節 (詩篇 19 篇4節))

預言者と使徒を通して、被造物から生まれた神への証人を通して、そして私たちの人生すべてを占めるほど膨大で深遠な聖書を通して、神はイエス・キリストにおける御心をはっきりと明らかにされました。もし私たちがそれを無視することを選んだり、それを探さないことを選んだとしても、神がそれに対して忖度して譲歩しなければならないというわけではありません。

嘘その 3: 神は私たちが必要としている。神を探し求めず、神の御心を求めないことは、必然的に、神がどのような方で、私たちに何を望んでおられるかについて、誤った推測をすることにつながります。サタンはこの傾向を計算に入れて、それを大いに利用します。例えば、世界とその歴史は、真の生ける神とは全く関係のない疑似宗教と宗教運動で満ちています(しかし、もしそのような嘘を信じている人が一人でも神を知りたいと願ったなら、神はご自身とその方法を明らかにしたでしょうし、そうされてこられたことでしょう)。神、神の真理、神の言葉に対する無知は、悪魔の最も強力な武器の一つです。なぜなら、サタンがこの地上で成し遂げようとするほとんどすべてのことは、彼の極悪非道な意志どおりの型にはめられた人間を通してもたらされなければならないからです。そして、人々を悪魔の意志に従わせる最善の方法は、まず神の意志について誤解させることです。ほとんどの場合、これはサタンにとって難しい問題ではありません。なぜなら、人類の歴史のどの時代においても、人類の大多数は神や神が言うかもしれないことに無頓着だったからです。いったん真の神のご意志が押しつけられると、神の真の善を、悪魔がでっち上げた代わりの「善」に置き換えることは、悪魔にとって比較的容易に達成できることなのです。この第三の嘘によって、サタンは気づかないでいる人類を自分の世界システムに取り込みます。神と真理を必要とすることや、神を求め、神の意志に従う必要性を一切拒絶した人間は、恐怖と自己中心性によって盲目になって、まるで神がご自身の意志を成し遂げることができないかのように、神から離れても善を生み出すことができるという、悪魔のプロパガンダを鵜呑みにしてしまうのです。

あなたがたは転倒して考えている。陶器師は粘土と同じものに思われるだろうか。造られた物はそれを造った者について、「彼はわたしを造らなかった」と言い、形造られた物は形造った者について、「彼は知恵がない」と言うことができようか。(イザヤ 29 章 16 節)

主に仕え、その過程で主の意志に従って、私たちのためにあらかじめ計画されている善を成し遂げることは一つのことです。しかし、主がそれについてどう考えておられるかを無視して、何が善であるかを自分の傲慢な思いに基づいて決めることは、実際には「神を助ける」のではなく、悪魔が世界に対する支配を維持し強化することを助けることになるのです⁵⁸。

あなたがたの救われたのは、実に、[神の]恵みにより、[キリストを信じる]信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。決して行いによるのではない。それは、だれも誇ることがないためなのである。わたしたちは神の作品であって、良い行いをするように、キリスト・イエスにあって造られたのである。神は、わたしたちが、良い行いをして日を過ごすようにと、(たとえば、クリスチャンとしてそれらのことを成し遂げるようにと人生を生きるように)あらかじめ備えて下さったのである。(エペソ 2 章 8-10 節)

要するに真実は一その 3: 御国はあなた(神)のものです。適切な時に、神は約束されたとおりにご自分の王国を実現されます⁵⁹。イエス・キリストが再臨される時、メシアの鉄の杖によって支配される至福千年王国は、善と悪が非常に慎重に仕分けられる時となることでしょう。しかし、今のところ、キリストはまだ戻られていないため、私たちのこの希望は(それに付随して起こる私たちの復活の希望も)まだ成就しません(ローマ 8 章 22-25 節)⁶⁰。神は、ご自分の良しとされる時に、適切なタイミングで、私たちの助けなしに、完全な環境を地上に戻されるのです。

要するにこの第三の嘘は: 至福千年王国を<神なしで>もたらすことは可能であるということ。アダムとエバがエデンの園の完全な環境から追い出されたのは、彼らが神に対して故意に反抗したためであり、また彼らの罪が必然的にもたらした結果でした。このシリーズの<第三部>で見たように、人類が墮落してからも完璧な環境の中で命の木にアクセスして生き続けることは、良いことではありませんでした。アダムとエバ、そしてその子孫を神のもとに立ち返らせるのは、死という現実と、彼らが直面している厳しい生活だけだからです。罪深い人間が、何の努力も必要なく、死ぬ恐れもない世界で永遠に生き続けることほど、悪いことはないでしょう。園からの追放は、イエス・キリストにおける神の救済の計画が進展するために(そして、人類が神の求めておられる悔い改めに与る動機のために)必要だったのです。人間の努力によって、この地上に新しいエ

⁵⁸ 宇宙のあらゆる側面の全くの邪悪さについては、L.S.チェーフアー『組織神学』第2巻、59頁、84頁～、100頁参照。

⁵⁹ 千年王国については、「来るべき患難」の第6部「最後の出来事：千年王国と新しいエルサレム」をご覧ください

⁶⁰ 復活の時と方法についてはペテロの手紙シリーズ#20章参照してください。[第2ペテロ3章12節](#)は、この文脈でしばしば誤解されます：「神の日が来るのを待ち望み、熱望しています。」ギリシャ語の *speudo* は、何かに熱意を示す(多くの場合、スピードアップにつながる)という意味ですが、この原文では、神の国の到来を早める可能性を信者が持っていることを一切示していません。

デンの園を造るという希望を人類に与えることは、悪魔の最も重要な対抗策ですが、この嘘は可能ではありません(さらに、悪魔はそれを実現することには全く興味がありません)。罪深い人類は決して幸せになることはなく、満足することもなく、貧困、犯罪、病気、その他、私たち全ての物→者が持っている罪による様々な症状に対して、「勝利」を収めることは絶対にありません。そして、人間は間違いなく死を克服することはできません。神と神の意志から離れて世界を「より良い場所」にしようとする努力は、人間と悪魔の世界の性質上、失敗するように定められています。そして、そのような悪魔の嘘を信じて、精力的にそれを受け入れることは、気づかないうちに、しかし完全に反神となるのです。これは、慈善事業や善行に反対する所信ではありません。クリスチャンとして、神が与えてくださった仕事を、神が与えてくださった霊的な賜物を用いて成し遂げることは、霊的生活において成熟した際の正しい焦点であり、神が私たちに求める実、収穫なのです。しかし、私たちクリスチャンとしてなすべき生産はすべて、神の御心に従って、神の霊の力によってなされるものなのです。もし私たちの手段や目的が神様の御心から外れているなら、その結果としての「生産」は損なわれてしまいます。もし私たちが神と神の言葉に目を向け、神の真の御心を探し求めているなら、神は私たちを霊的に整え、御心に従って私たちのために用意されたなすべき正しい善い行いに導いてくださることでしょう。善行と称するものの正当性を見分けるための良いリトマス試験紙は、そのミニストリーの最終目標が、本当に人々を神に近づけ、神の栄光と助けられた人々の益になることであるかどうかを問うものです。キリストのために飢えた人々を養うことと、自分の個人的な満足と栄光のために彼らを養うことは全く違います。神は両方の努力を用いられるかもしれませんが(神の方法は本当に発見できず、驚くべきものです:[ローマ 11章 33節](#))、神から離れて自分のエネルギーで「良いことをした」人が、神から承認を得たと思わないようにしてください。私たちは「神を助ける」ことはできません。まるで、神が一瞬にして地上を筆舌に尽くしがたいエデンにすることができないかのように！私たちは「神を助ける」ことはできません。私たちが神の良いわざを共有する機会を与えられたのは、完全に神からの贈り物です。しかし、もし私たちが、すべきでもない仕事に手を出して自分の手柄にしたり、あるいは、さらに悪いことに、主の御心に反することをやって、それを「良いことだ」と見なしているなら、それは自分を欺いているだけで、悪魔の嘘を受け入れていることになるのです。

何を否定しているか その3: *歴史を通してなされてきた神の支配を否定し、それに取って代わろうとすること。* イエス・キリストは唯一の真の善であり、神のすべての解決策の中心であり焦点ですが、悪魔はそれに取って代わろうと望んでいます。イエスから離れて「善を行う」こと、さらに悪いことに、イエスを否定しながら「善を行う」ことは、歴史と一人ひとりの人生に対する神のご計画の全目的を覆すこととなります。なぜなら、私たち罪深い人間が陥っている苦境に対する解決策は、ただイエス・キリストの中にしかないからです。イエス・キリストと十字架上の御業への信仰によってのみ、私たちは救われ、この世の特徴である罪、悪、病気、死から解放されるのです。神から離れて善を行うことができると主張し、神がずっと以前に悪を完全に焼き尽くすために、完全な破壊の印をつけた世界を改善することができると主張することは、本質的に救い主も神の助けもいらないと主張しながら、ただこれらのつまらない活動によって何とか「神を助ける」ことができると傲慢にも宣言することなのです。

何をもたらもたらすことになるか その3: 客観的な傲慢さ。この世界の問題を解決するために神を助けることができるという態度は、実はそこに、神を取って変える必要があるという考え方があるのです。「結局のところ、神はその仕事をしていない。世界にはまだ貧困と無知と苦しみがあるのではないか？」サタンは、自分が「最も高い者ようになる」と宣言するとともに、高いところ(=神の場所:[イザヤ 14 章 14 節](#))に「座す」ようになるとおごり高ぶっていました。私たちが神を必要としなくなった後、私たちは神のようになるのです。神のようになった後、私たちは神にとって代わるのです。この歪んだ思考は、まさに悪魔が陥ったものであり、彼は今、人類にそれを売り込んでいます(そして恐ろしいほど大きな成功を収めています)。これは客観的な傲慢さ、つまり、異常な自尊心を誇示しているどころか、宇宙の真の支配者を貶め、隷属者として見下そうとするプライドです。しかし、真実は、主が私たちすべてをお造りになったのであり、私たちが主のために「できる」ことなど全くないのです。

だれが、主の心を知っていたか。だれが、主の計画にあずかったか。また、だれが、まず主に与えて、その報いを受けるであろうか。(ローマ 11 章 34-35 節)

どのように表に現れるか その3: 独善的な態度。私たちがイエス・キリストを信じる時、神は信仰によって、私たちを義と認められます(アブラハムが信仰によって義と認められたのと同じように:[ローマ 4 章](#))⁶¹。このようにして、信じる者はみな神の義を持つようになります。それは厳密に、私たちが何かを行ったからではなく、キリストが成してくださったことによる恵みによるものです([テトス 3 章 5 節](#))。ですから、私たちが自分で磨き上げた義によって、神が助けられたり、支援してもらったりすることはありません(また神が<助けてもらったから>表彰状をくださることもありません)。神や神の指示なしに、世界をより良い場所にしようとするのは、しばしば自分自身や自分の行動に対して、良い気分になんてさせてくれるものです。神への正しい応答と神に対する独善的な侮辱を識別させるものは、それが神の御心なのかどうかということです。カインとアベルは共に神に犠牲を捧げました。カインの努力は、神が望まれたものでなく、神が要求されたものでなかったため、拒絶されました。カインは果物や野菜を捧げましたが、それは神が来るべき御子の犠牲について語るものではありませんでした。一方、アベルの努力は、まさに神が望まれたこと、神が望まれたことであり、要求されたことであったので、受け入れられました。アベルの動物の犠牲は、神が私たちに代わって支払われる代価であるイエス・キリストの死の予型であったのです。アベルは御言葉と神様の御心に従って行動しました。一方、カインは神が言われたことを無視し、何をするのが良いかを自分で決めました。彼は、神は助けを必要としてはおらず、私たちには神の助けが本当に必要であるということに気づかず、「神に何かを与えてやって」神を助けようと思

⁶¹ [ヤコブ 2 章 14-26 節](#)の「行いによる義認」は、真の信仰から生じる結果が、その信仰の深さと現実を示すことと関係しています。ヤコブが言っていることは、律法の業によって義とされる者はいない([ガラテヤ 2 章 16 節](#))という聖書の真理に反するものではありません。事実、ヤコブが挙げたアブラハムとラハブの例は、(疑いを招くような状況にもかかわらず)神の御言葉を信じ、それに基づいて行動した人の例です。

っていたのです。何も知らない人が見れば、カインが自分の手の労作を捧げたことは「良いこと」に見えるに違いなく、神がそれを拒絶したことは衝撃的なことに思えるかもしれません。(創世記 4章 6-7 節)。しかし、この自分で作った善の背後には、独善の悪が潜んでおり、それが突っつかれると、彼の罪は殺人へと爆発しました。カインは弟を殺すことによって、自分が神の御心などには本当は関心がなく、自分の思いのままにしたいということに関心があっただけであることを示し、最初に「逆らった」とき、彼は直ちに、神の御心を正しく行った人(すなわち自分の弟)を攻撃対象として破壊しようとし、それによって自分の独善的意図をあらわにすることになったのです。

カインのようになってはいけません。彼は悪しき者から出て、その兄弟を殺したのである。なぜ兄弟を殺したのか。彼のわざが悪く、その兄弟のわざは正しかったからである。(第一ヨハネ 3 章 12 節)

律法による自分の義ではなく、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基く神からの義を受けて、キリストのうちに自分を見いだすようになるためである。(ピリピ 3 章 9 節)

カインの義のように、この世の多くの人々は、「神のために」していると思いながら、自分の義を迫り及ぼして、神から全く離れて「善を行って」います。しかし、カインの犠牲のように、そのような働きは主には受け入れられません。「神を助ける」どころか、神の意志から離れ、神の霊から離れて行われることは、本当は神のためではなく、自己のために行われるのです(だから、悪魔の罠に陥ってしまうのです)。神は誰が本当にご自身の者であるかを知っておられますが、悪魔の世界では、正当な善行が、その人の独善と悪を覆うイチジクの葉であることを見分けるのは、しばしば困難なのです。

こういう人々には使徒、人をだます働き人であって、キリストの使徒に擬装しているにすぎないからである。しかし、驚くには及ばない。サタンも光の天使に擬装するのだから。だから、たとえサタンの手下どもが、義の奉仕者のように擬装したとしても、不思議ではない。彼らの最期は、そのしわざに合ったものとなる。繰り返して言うが、だれも、わたしを愚か者と思わないでほしい。もしそう思うなら、愚か者あつかいにされてもよいから、わたしにも、少し誇らせてほしい。(第二コリント 11 章 13-16 節)

聖書の参照箇所 その3:

主の試練 その3: 神を試みてはならない。悪魔は、主が神殿のてっぺんから飛び降りてみるように言いましたが、それはやって「良いこと」のような巧妙な誘いかけでした。サタンが指摘したように、聖書にはメシアのための神の救いの約束が記されています。悪魔の提案していることをするならば、1) 神の約束が有効であること、2) キリストが本当にメシアであること、3) キリストが恐れず、父の約束を完全に信頼していること、を証明することになると悪魔はほのめかしていたのです。これは私やあなた方にとっては、大きな誘惑とはならないとしても、主にとっては、非常に

微妙なテストだったのです。主は、はるか下にある岩を見下ろしながら、たとえそこに転落しても御父が御自身を救ってくださることは確かに信じておられました。事実、このテストに合格できる者がいるとすれば、聖書を完全に理解し、キリストの信仰を持つ者だけでしょう。主は、サタンが求めに応じることは、正しいことをいわずらに間違った方法で行うことになることとわかっておられました。＜悪魔の勧めを行っても＞誰も助けることにはなりません(サタンは結局、キリストの信者になるつもりはありませんでした)。キリストにとっては、悪魔に「証明」することで、神(と御自身)の正当性を証明することができたら良かったかもしれませんが、イエスはこの問題を理解しており、その要求に全く動かされることはありませんでした。しかし、私たちは、誰かが作った条件で「証明せよ」と言われたら、どんなに誘惑されることでしょうか。私たちは主の例に倣い、神を立証するという名目で自分自身を立証する誘惑を避けることが重要です。神は私たちの助けを必要としません。私たちは、たとえ私たちが世の人々の目に「悪く見える」としても、神はご自分の方法で、ご自分の適切な時に、私たちとご自分の正当性を証明することができ、またされることを理解しなければなりません。キリストは、この世の承認の問題(あるいは承認されないという問題)に何度も直面することになりました。キリストは人々を癒し、食物を与えられた時には賞賛されましたが、いつもしておられたように、彼らに真実を告げられた時には、彼らはそのために彼を憎み(ヨハネ6章66節参照)、主が彼らのために死なれた時、彼らは主を拒絶したのです。

主の祈りその3: 私たちを試みに合わせないように導いてください。サタンの偽善は、その世界的なシステムにおいて非常に巧妙で、すべてにまん延しているので、キリストは「悪者」とその組織的誘惑に対し、神の導きと守りを求めて毎日祈るようにと助言されました。すべては、善と悪を知るための知識を持つことは良くはないかい?という、悪魔のエバに対する誘惑から始まりました。アダムとエバが墮落して身を隠すためにイチジクの葉を使ったようなことは、＜神を真に信じてなどいないのに口では＞「神が助けて下さる」と言うようなものです。私たちの最初の両親が必要としていたのは、自分たちのために死んでくださる救い主であって、自分たちの罪をイチジクの葉で覆い隠すような浅はかなことではなかったのです。クリスチャンがよく行っている宣教活動においても、真に善であると思われる行為が、深く危険な悪を覆うイチジクの葉に過ぎない場合があまりにも多くあります。ナチズム、共産主義、そして反キリストが行うであろう政治運動も、すべて世間に対して立派な顔をしています。その裏側には死者の骨しかありません。クリスチャンとして、私たちは他人の罪や悪を共有することに特に注意し(エペソ5章11節; 第一テモテ5章22節; 第二ヨハネ11章)、「悪者」とその最も巧妙な罠である「偽善の罠」から、私たちが救い出すために日々警戒していなければなりません(マタイ6章13節; 第一テモテ3章7節も参照のこと)。

[神が彼らをゆるして下さることを望み…<よく教え…>]一度は悪魔に捕えられてその欲するままになっていても、目ざめて彼のわなからのがれさせて下さるであろう。(第二テモテ2章26節)

第一ヨハネ 2 章 16 節 その3: 人生のおごり高ぶり。 第一ヨハネ 2 章 16 節の3番目の要素で扱われている罪深い行動には、私たちが人生ですること、持っていること、あるいは存在を認められてほしいという過度の欲望(目の欲望)のほかに、もう一つのレベルがあります。名声、評価、賞賛を欲することは、どんな罪深い根拠であれ、主観的な傲慢さであり、受動的なものです。しかし、パリサイ人たちが施しを発表するためにラッパ手を雇ったように、神のために行ったことを積極的に誇示することは、もっと悪いことで、自分がどれほど優れているかを誇示するために手を伸ばし、世間に対して(そして神に対して)自分の正しさを証明する、客観的な傲慢です。キリストは、真の奉仕とは神に対する謙遜な応答であることを明確にされました(マタイ 6 章 1-18 節)。表向きは「神を助けるため」ですが、実際はこの最高の傲慢さを満たすためだけです。それは、自分の意志が神の意志だと思い込む傲慢さ、つまり、あなたが正しいと思うことは何でも、神は真に正しいと認めなければならない、自分の正義を確立したいというあなたの欲は、神とは全く関係がないけれど、神はとにかくそれを尊重せざるを得ないのだ、という傲慢さです。

対抗する美德 その3: 希望(何に対抗するか: 神の救いを求めないで人間の解決に期待することに対抗して)。 真のクリスチャンの希望は、涙の伴う現世を越えて、御子を信頼して従うすべての人に神が約束しておられる、祝福された未来に目を向けさせます。私たちは、この腐敗した体の復活、労苦と涙の終わり、そして、鉄の杖で世界を支配し、あらゆる悪しき敵を足の下に踏みつける主人の再臨を待ち望んでいるのです。キリストが戻られるとき、物事は素晴らしいものになります。キリストが戻られるまでは、「戦争と戦争のうわさ」(マルコ 13 章 7 節)があります。聖書の中で神が明確に語られていることですが、御子の直接の介入によってのみ達成されるものを人類が達成することができるという考えは、完全に神を冒瀆しています。さらに悪いことに、罪深い人間の計画と実行による「より良い世界、良い世界」というこの考えは、まさに悪魔が最も大切にしている計画です。サタンは私たちのことを全く考えていないので、実際に何かを達成することではなく、私たちに信じ込ませようとしている嘘をただ飲み込ませることに精力的に働きかけているのです。人間自身の手による完全な世界という考えは、歴史的に(そして将来的にはさらに大きなものとなることでしょう)、悪魔がこれまでに考案したどの計画よりもとんでもない偽りの善、反神的「善」(さもないと悪として知られているもの)を使ってきました。バベルの塔を造り上げようとしたこと、すなわち人類が皆一つの「善」の目的のために協力する夢は、必然的にその根底に一つの恐ろしい目的、すなわち神から自らを切り離すこと-サタンが仲間の天使たちに提案した元々の目的-がありました。神に望みを見出さない者(人間に望みを託して脇道にそれた人たち)にとって、神につながれていることを投げ捨てようとするのは自然なことです(詩篇 2 篇 3 節参照)。真の希望は現世を越えて見ますが、偽りの希望は、冒瀆的で傲慢な偽善行為によって「地上の天国」をもたらす人間の解決策に目を向けさせ、必然的に(神を無視したすべての原因の避けられない結果として)正義と真の善を必ず足元から踏みにじることになるのです。

崇拜の対象 その3: サタン。 悪魔は、多くの仲間の天使たちを率いて神に反抗したとき、神の制約から解放し、より良い世界をもたらすと約束して、そのように行動しました。彼は自分の行為を「善」であると見なし、この種の偽りの善を受け入れるすべての人々は、神の善や聖書に定

められた本来の正しい真理に従う善ではなく、気の向くままに起こされる自己流の独善によって、神を礼拝しないばかりか、創造主を新しい礼拝対象であるサタンと交換しているのです(ローマ1章25節)。これは悪魔のいつものやり口です。つまり、自分の好きなことを何でもして、それを善と呼ぶのです。神の律法と神の真の善を否定することは、必然的に人を悪魔の手先、家臣にすることになるのです。

主な問題点 その3： もたらそうとしている国といらのはサタンの王国にすぎない。究極の邪悪な国。神から離れた真の「善」というものは、実際には存在しません。神の被造物である私たちは、神から真に独立することは不可能です。私たちは従うことも、反抗することもできますが(それぞれのどんな程度の段階でも)、何をするにしても神との関係はそこにあります。私たちが良いことであると宣言しても、主の助言と御言葉から全く離れて、主の計画や御心を無視して行うことは、実は全く良いことではなく、悪いことなのです。私たちは神の王国をもたらすことができません。主が適切なときにそれをもたらしてくださるのです。神はすべてのクリスチャンに賜物を与え、それを正しく、謙虚に神に応答して用いる機会を与えてくださっています。傲慢に自分の道を行くことは、どんなに多くの人が褒めてくれても、どんなにお金や労力を使っても、神の善を生み出すことにはなりません。それは、無意味なのです。サタンは自分がスポンサーとなる改革活動が、最終的に何一つ成功しないようにする特別な権限を有しているのです。彼のこの世の王国の支配は、神を除外して分裂と競い合いに夢中にさせることによって支配を強めているのです。サタンは、その偽りの善がどのように定義されようとも、あらゆる面で、あらゆる場所で偽りの善を推進します。このような状況において、真の神の善とサタンの偽りの善とを見分ける唯一確実な方法は、神の御心を求め、神の言葉を追及することです。例えば、組織化されたものは個人的に動機づけられたものよりもさらに疑わしいものです。神の言葉によって知らされ、育まれた謙遜な信仰の歩み以外に、偽りの善の災いから逃れる方法はありません。

4. 悪魔の世界統合システム：

上記で扱った三つの基本的な嘘が、サタンが世界を支配するためのプロパガンダシステムの根幹を成しています。この三つは(上記の順序で)深化し、根付くと、相互に補強し合う働きをします。

嘘その1： 悪魔は(人生の不安やプレッシャーを使って)必要性を貪欲へ向けます。

嘘その2： 悪魔は(主観的な傲慢さを使って)自己認識を自己崇拝へ向けます。

嘘その3： 悪魔は(客観的な傲慢さと独善を使って)私たちの神への欲求を擬似的な善への欲求へ向けます。

嘘が、サタンの世界システムの基礎にあります。彼は、仲間の天使の多くを嘘によって誘惑し、支持者を獲得しました。アダムとエバを嘘によって墮落させ、地球を再び支配するようになりました。そして、嘘によって全人類を陥れ、宇宙を支配しています。悪魔のプロパガンダに対して、私たちは共通の反応、いわゆる貪欲、高慢、独善という反応をしてきましたが、それらは罪と悪の統合システムを造り上げ、その極みは混沌以外の何物でもありませんが、それがいわゆる「人類の歴史」と呼ばれるものです。人間の歴史は、神が歴史の中で進めている救いの計画とは対照的に、神の視点からは全く進歩的ではなく、実際、本質的には退廃への道を辿っているのです。邪悪な者の組織とその働きかけがなければ、これは必ずしもそうはならなかったことでしょう。世界規模の悪に対する神の阻止としての(典型例である)大洪水や、また善悪を知る木による墮落によって善悪を見分ける力(つまり、良心)が増したことによって、善良で正しい人間の賢明な努力によって、人類は「前進」するか、少なくともその衰退を遅らせることになりましたが、人類と人類の文明は、エデンの園からの追放以来、ずっと加速しながら、下降線をたどり続けているのが現状です。私たち人類が過去よりもより良い状態にあるという誤った思い込みが広く流布していますが、それは神の見解でも、あるいはヒューマニズムの道徳的見解でもないことは確かです。神に対する真の信仰は、世界の歴史上かつてないほど稀で、希薄な状態になっており、途方もないあらゆる種類の悪が創り出され、それがかつて無かったほどはびこり、氾濫してしまっていると言えるでしょう。この傾向は、これから始まる暗い艱難期中、私たちの主の再臨まで続くでしょう。現在の世界は、かつてないほど自己規律や自制心がほとんど無くなったことを誇りにしていますが、同時に犯罪や罪、明白な悪が増加し、これらの悪の働く機会が増加している(それらを正当化する力が増しています)のに、何を誇り、どうしてより進歩を遂げているなどと考えることができるのでしょうか。もちろん、「人類が成し遂げたこと」という観点から見れば、明らかに違いはあります。私たちは変化の時代に生きており、技術的・経済的、社会的・政治的、さらには宗教的な変化の時代の中にあります。そして、実際、ほとんどのクリスチャンは、これらのうちのいくつか(たとえば、オカルト活動の増加、聖書に対する真の信仰の弱体化)を明らかに悪いものと識別できていますが、進歩を装った変化の多くのものも、決して良いものとは言えないものです。

一例を挙げれば、最近の報告では、インターネット上でポルノや性的倒錯行為に費やされる時間が、他のどの用途よりも多いことが示されています。イクシス<本サイト>では、多くの読者がインターネットを通じて、こうした<御言葉の>学習にアクセスしています。また、道徳的に害のない利用法はもちろん、他の肯定的な利用法もありますが、このテクノロジーによる情報の「スーパーハイウェイ」が、サタンによって最も攻撃的な方法で利用されているという事実は疑う余地のないことです。テクノロジーは道具ですが、罪深い人間が手にする場合、よく道徳的にあいまいなものになってしまいます。そこに、罪深さ、自己愛、そして最終的には積極的な悪へと向かわせる世界システムが加わると、テクノロジーは悪魔の意志を加速させる手段に過ぎないものとなります。私たちはラッドライト<Luddite: 1811年から1817年頃、イギリス中・北部の織物工業地帯に起こった機械破壊運動に加わった手工業者-ウィキペディア>ではありません。私たちはテクノロジーを止めることはできませんし、止めようとも思いません。確かに、私たちはテクノロジーを神の仕事のために、そして私たち自身の仕事のために利用します。しかし、テクノロジーを過度

に称賛することは愚かなことです。なぜなら、歴史上のほとんどすべての「進歩的」勢力がそうであるように、テクノロジーも実は悪魔の世界支配を強固にし、人類の奴隷化と破壊の計画を前進させるのに使われているのが現実だからです。

先に述べたように、悪魔が最も望んでいるのは、「善き」世界統一政府の確立です(ここでは、人間の自由を保護するために神が元々備えて下さっているすべての抑制が取り除かれる可能性があります-そうした現象は、大艱難の暗い時代まで神はそうなることを許されないでしょう)。この邪悪な夢の実現は、こうした物質主義的な「進歩」のため、かつてないほど近づいています。その理由の一つは、このような技術・文化の進歩は、靈的退廃を必然的に伴うからです。その理由は単純です。自分自身と人間の能力に頼れば頼るほど、神と神が私たちのためにしてくださるすべてのことに関心を持たなくなるのです。技術的、科学的な「進歩」は、道徳的な進歩を全く必要としません。実際、この点に関する私たちのすべての達成の業績(宇宙の創造主のされていることと正直に比較してみるなら、言うまでもなく極小)は、人類を神から遠ざけ、自分達が物質界を支配しているという誤った感覚を生み出すのに貢献してきました(相変わらず死は残り、苦しみは、場合によっては強まっています)。もし私たちが、人生の真の靈的現実(何よりもまずイエス・キリストの血による罪の赦し)に注意を払っていないなら、このテクノロジーへの依存は神への信頼を弱めることになりかねないのです。

科学的、技術的、社会的、文化的な人間の進歩が究極の価値であるという神話を鵜呑みにすることは、悪魔が新しいバベルの塔を建てるのを助けることに過ぎません。⁶²(神への信仰の代わりに)技術を信奉し、(神の解決の代わりに)政治的解決に望みを託し、(神と御子の犠牲の代わりに)人類の文化的業績へ執着するのは、地上に天国を築き上げるという悪魔の本心が様々な形に変異したものです。しかし、神を方程式から除外することは不可能であるばかりでなく、無謀なことです。神だけが人類の真の必要、すなわち赦し、靈的な平安、永遠の命を満たすことができるからです。サタンが提供する地上の楽園の再建は、死を免れることができない罪深い被造物にとっては、まったく馬鹿げた話です。いや、これほども多くの人がこの神話を信じていなかったのなら、馬鹿な話として済ませていたかもしれません。しかし神への不信を公然と誇示しながら、同時に罪深い人間の「進歩」を無条件に信じるのは、不条理の極みというものでしょう(神の創造のあらゆる面において、神は御自身のための数えきれないほどの証人をお持ちです)。悪魔が提供する偽物の生命の木は、単に偽りの希望を提供しているに過ぎないのです。進歩に酔いしれて、私たちは、この地上に新しい偶像崇拜のシステムを確立しようとしています、その背後には新しい神がいます。それは悪魔なのです。

サタンの世界統合システムは、人間生活の縦糸と横糸のすべてにその触手を伸ばしています。私たちのこの研究のためには、悪魔の影響が最も顕著に現れているもので、人間が経験する3つの良く知られている分野に集中すると役に立つでしょう。

⁶² このトピックについては、このシリーズの第5部をご覧ください。

1) 宗教とオカルト: 悪魔が神の真理に一番真っ向から反対するのは宗教とオカルトの分野であるため、この分野はおそらく人間の世界に浸透したサタンの影響力の中で最も明白なものです。

イエスは彼に言われた、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。(ヨハネ 14 章 6 節)

イエス・キリストは救いの唯一の道です。キリストの十字架以前は、アダムとエバとその皮の衣以降(動物の犠牲によって象徴されるキリストの働きを意味する)、キリストを求める人々は十字架の約束を待ち望んでいました。キリストの十字架の後、私たちはそこでの救いの御業を振り返りません(聖餐式に記念されます)。しかし、十字架の前でも後でも、キリストは常に神への唯一の道なのです。他のすべての宗教、オカルト系、教義、グループ、カルトなどは、偽りの道です。神に近づくには、神の方法で行わなければならない、神の道は狭い道で、唯一の真の道である御子イエス・キリストです。御子に対する純粋無垢な信仰だけが、救い、罪の赦し、そして復活の約束をもたらすのです。これは、善行や自己犠牲や儀式によって達成されるものではありません。また、いかなる団体に所属することによっても達成されません。救いは、キリストを信じる信仰によってのみ与えられるのです。

私たちの住む世界は超物質主義的ですが、人間には霊的な面があり、この本質的で深い部分が根本的に満たされる必要があるのです。しかし、悪魔は人間の霊性への欲求を知っていて、万華鏡のように様々な代替手段を開発しました。それらは、堅苦しい伝統的な宗教から、突飛で神秘的な活動や陰謀論的な活動まで、多岐にわたります。悪魔はすべての人のために何か、イエス・キリストの真理以外のもので、人間の霊的興味をそそるものを見つけようと躍起になっています。キリストを純粋に物事を中心に置かないあらゆる宗教的活動は、まず初めからサタンをそこに置くことになるのです。なぜなら、創造主を求める生来の欲求を静める、そのような活動は創造主からの分離を永続させるだけだからです。

組織は、悪魔の偽宗教への鍵の一つです。悪魔は、人々が個人では決してしないことを、集団ではすることをよく知っています。これに付随して、同様に重要なことは、もし多くの人々が高度に組織化された方法で何かを行っているならば、その事業には正統性の雰囲気を与えられ、あたかも正統派であるかのような風格を持ち、神とキリストが実際には全く存在せず、組織にあらゆる点で何か悪が漂っているという事実、新入会員や古参会員の目を曇らせるのに役立つという原理です。このような宗教団体のメンバーが大勢になり、その勢いと活発な状態に到達すると、まがいものの団体が世間に対して霊性に関する虚像を示すこととなります(実際には、神は彼らの中に全くいないのに)。また、一度何かに関与し、長い間「悪いもの」にかなりの資金を投じた場合、それまでの嘘を信じ続けるようになるというのは、人間の共通の欠点です。もし、「自分は騙され、いいカモにされていた」ということを認めれば、馬鹿にされるだけでなく、すべての犠牲が無駄だったことになるからです。このような理由から、組織は悪魔の格好のターゲットになるのです。正当で、もともと神を敬うキリスト教のグループでさえ、サタンの侵入に屈することがあり、

またそれは歴史的に見てもそうでした。後継の信者や指導者が、最初の創設者ほど熱心で明確な考えを持つことはほとんどなく、伝統や組織が神の言葉と同等かそれ以上に重要になるとき、悪魔が足場を築くのは簡単なことになるのです。

異教徒、カルト、オカルトなど、組織化された疑似宗教を結びつける共通の要因がいくつかあり、その組み合わせは様々です。まず第一に、これらは、悪魔と一緒にあって、イエス・キリストの福音の力を否定することによって、信じようとする人達の「心を見えなくし」([第二コリント4章4節](#))、彼らがキリストにおいて神に立ち返って救われる前に、神を求める心から福音の「種を奪い取」ってしまうのです([ルカ8章12節](#)):⁶³ほかにもこうしたものから派生した、イエス・キリストを通しての神の真の崇拜に対する、サタンの代替物においてしばしば見られるものの特徴に次のようなものがあります。

- ・「秘密の教義」、神秘、難解なものを強調する。
- ・死の刺を過少視しようとし、最後の審判を否定し、地獄を否定する。
- ・別の神や神々に置き換え、聖書が唯一の真の神について述べていることを曲解して、別の神々と同じであると主張。
- ・「神になる」または「神のようになる」、あるいは人間界を超越することを約束する。
- ・救い主の必要性を否定し、業や輪廻転生に置き換える。
- ・神との真の交わりではなく、儀式やお決まりの形式礼拝に重点を置く。
- ・聖典よりも感情や恍惚とした行動を強調する。
- ・奇異で、疎外的、孤立的な行動をする。
- ・他の意見に不寛容で、真の聖書の権威に基づかない独断論を主張する。

キリストを信じる真の信者たちの群れの中にある偽りの教えは、特に欺きに満ちた悪魔の攻撃であり、特別な、個別の治療が必要です。キリストの体である普遍的な教会(純粹にイエス・キリストに従う人々)は、当然のことながら、人類の他のどの層よりも厳しい圧力と陰湿な攻撃を受けています。サタンはしばしば、信心深い人々を迫害し破壊することができないため、偽りの教師と偽りの教義に回帰して、キリストを信じる人々を真の道から引き離そうとします。教会のどの時代にも(そして実際、園の蛇以来)、神の言葉の真理に対する純粹な信仰を損なう、偽りの教師と偽り

⁶³ このトピックの詳細については、特別研究資料『聖書を読みなさい：クリスチャンの基本的な権利と責任』の「カルトの特徴」を参照してください

の教義がありました。この終わりの時にはこの陰湿な現象が激化する傾向が聖書に予言されています。

この重大な問題について警告を受けることは、信仰者にとって重要なことであることは言うまでもありません。読者はこれらの聖句に注意深く目を通す必要があります([コロサイ 2 章 16-23 節](#); [第一テモテ 4 章 1-5 節](#); [第二テモテ 2 章 23 節-3 章 9 節](#); [第二ペテロ 2 章 1-22 節](#)も参照のこと):

さて兄弟たちよ。あなたがたに勧告する。あなたがたが学んだ教にそむいて分裂を引き起し、つまずきを与える人々を警戒し、かつ彼らから遠ざかるがよい。なぜなら、こうした人々は、わたしたちの主キリストに仕えないで、自分の腹に仕え、そして甘言と美辞とをもって、純朴な人々の心を欺く者どもだからである。(ローマ 16 章 17-18 節)

こういう人々にはにせ使徒、人をだます働き人であって、キリストの使徒に擬装しているにすぎないからである。しかし、驚くには及ばない。サタンも光の天使に擬装するのだから。だから、たとえサタンの手下どもが、義の奉仕者のように擬装したとしても、不思議ではない。彼らの最期は、そのしわざに合ったものとなる。(第二コリント 11 章 13-15 節)

[私たちは霊的に成長しましょう]... こうして、わたしたちはもはや子供ではないので、だまし惑わす策略により、人々の悪巧みによって起る様々な教の風に吹きまわされたり、もてあそばれたりすることがなく、... (エペソ 4 章 14 節)

しかし、御霊は明らかに告げて言う。後の時になると、ある人々は、惑わす霊と悪霊の教とに気をとられて、信仰から離れ去るであろう。それは、良心に焼き印をおされている偽り者の偽善のしわざである。これらの偽り者どもは、[自分達が虜にした者達に] 結婚を禁じたり、食物を断つことを命じたりする... (第一テモテ 4 章 1-3 節前半)

彼ら[偽りの教師ら]の口を封ずべきである。彼らは恥ずべき利のために、教えてはならないことを教えて、数々の家庭を破壊してしまっている。(テトス 1 章 11 節)

しかし、民の間に、にせ預言者が起ったことがあるが、それと同じく、あなたがたの間にも、にせ教師が現れるであろう。彼らは、滅びに至らせる異端をひそかに持ち込み、自分たちをあがなって下さった主を否定して、すみやかな滅亡を自分の身に招いている。また、大ぜいの人々が彼らの放縦を見習い、そのために、真理の道がそしりを受けるに至るのである。彼らは、貪欲のために、甘言をもってあなたがたをあざむき、利をむさぼるであろう。(第二ペテロ 2 章 1-3 節前半)

その目は淫行を追い、罪を犯して飽くことを知らない。彼らは心の定まらない者を誘惑し、その心は貪欲に慣れ、のろいの子となっている。彼らは正しい道からはずれて迷いに陥り、ベオルの子バラムの道に従った。バラムは不義の実を愛し、([第二ペテロ 2 章 14-15 節](#))

偽り者とは、だれであるか。イエスのキリストであることを否定する者ではないか。父と御子とを否定する者は、反キリストである。([第一ヨハネ 2 章 22 節](#))

そのわけは、不信仰な人々がしのび込んできて、わたしたちの神の恵みを放縱な生活に変え、唯一の君であり、わたしたちの主であるイエス・キリストを否定しているからである。彼らは、このようなさばきを受けることに、昔から予告されているのである。([ユダの手紙 1 章 4 節](#))

これらの偽教師の本質的な特徴は、上記の箇所から要約することができます。

- 1) 彼らは常に存在していたが、教会時代の終わりに近づくにつれ、より顕著になり、より多くなり、より影響力を持つようになる。
- 2) 彼らは正義を装っているが、実は罪に染まっている(ただし、これは白く塗られた墓の禁欲的な見かけで覆われているかもしれない。[マタイ 23 章 27 節](#))。
- 3) 彼らは自分たちの利益、利点、快楽を目的として、信奉者を純粋に世話するのではなく、家畜のように利用している。
- 4) 彼らは聖書にはないことを教えるが、それは信者を獲得し、自分たちの目的を促進するために作られたものである(聖書の根拠を主張することはあるが)。
- 5) 彼らは主のしもべであると偽っている(実際は自分自身とサタンにしか仕えていないが)。
- 6) 彼らはイエス・キリストを救い主として否定する(彼の名で話を埋め尽くすことはあっても、彼の名への信仰による救いを否定する)。

この最後の特徴である「キリスト・テスト」は、偽教師を見分けるための最も基本的で不可欠な基準ですが、ペテン師たちが主の名を利用しようとするにつれて、その採用はますます微妙な問題になってきています。「神」や「キリスト」という言葉が簡単に口から出てくるからといって、その人が神の御言葉に示された神の御心に従って、神とキリストを信じ、従っているという保証にはならないのです。⁶⁴ チェーファー(L.S. Chafer)が指摘したように、「彼らを買収した主人を否定」しても、偽教師が必ずしもキリストという人物を否定することを意味してはいない—彼らはただ

⁶⁴ 「聖書を読む：クリスチャンの基本的な権利と責任」の「キリストテスト」参照

(内密に)キリストの働きと私たちを罪から清めてくれるキリストの死の必要性を否定する(あるいはキリストの真の人間性を否定する、あるいは神性を否定するなど)かもしれません。⁶⁵ なぜなら神を慕うように見せかけながら、実際には神を否定する方法が多くあることは事実だからです。偽善の繭で彼らの嘘を包み、彼らの偽りの教えに明るく輝く「白塗り」の覆いをかけ、鍋の外側、墓の外側はきれいにしても、内側には醜悪なものがあるのは、すべて偽教師の特徴であり、主自身が注意するように警告しています(参照:[マタイ 24 章 4-28 節](#); [ヨハネ 10 章 1-18 節](#))。結局のところ、聖書のキリスト教だけが神のものであり、それ以外はすべて悪魔のものなのです。唯物論と迷信の誤った両極端の間にはさまれて、神の言葉の真理は存在しています。

オカルト的な行い(宗教から簡単に、そして普通に切り離される)も、私たちの世界にますます広まり、アクセスしやすく、影響力を持つようになってきています。そのような行為や活動はすべて、それがどんなに無邪気に見えても、極めて危険なものです。占い盤や星占い、タロットカードから、自分の信仰が破壊され、悪魔の力に完全に取り込まれるまでには、一般に考えられているよりもはるかに小さなステップしかないのです。オカルティズムは、偽りの宗教よりももっと直接的にサタンを認め、サタンに忠誠を誓っているのです。それは悪魔と悪霊が、このようなあからさまな反神な儀式の背後に直接潜んでいることが、比較的明確に理解されているからです。このような活動の一部には、前述の占い盤、星占い、タロットカード、ブードゥー教、天使崇拜、悪魔崇拜、サタニズム、詠唱、魔法、魔術、呪文、(霊)薬、呪い、お守り、迷信的行動や振る舞い、何でも「運」に帰するもの、占い、「未来を見る」ことに関するもの、(神から離れての)ビジョンや夢占い、などが含まれています。霊媒、降霊、催眠術、恍惚状態、読心術、超能力、偽りの異言、「チャネリング」、トランス、サイコキネティクス、ドラッグ、心や意識を変えるあらゆる物質や活動、幽霊や吸血鬼に関するもの、墓地フェチ、などなどです。このような悪魔の直接的な関与の形態は、日に日に多くなってきています(そして、より一般的になってきています)。私たち人間は、このような活動に対する怒り、嫌悪、恐怖、疑いを失っているように見えますが、それは単にその拡大と一見表面的なレベルにおいてでも、これらのことに関与するのに十分愚かな人々が急速に巻き込まれる危険性を高めているに過ぎません。現実には、少しだけ悪と関わるなどということはありません。そのような戯れはすべて霊的な姦淫に相当します。

人は火を、そのふところにいだいてその着物が焼かれないであろうか。 また人は、熱い火を踏んで、その足が、焼かれないであろうか。([箴言 6 章 27-28 節](#))

そのようなことはすべて、正当な理由から聖書で禁じられています([申命記 18 章 10-12 節](#); [歴代志下 33 章 6 節](#); [エレミヤ 27 章 9 節](#); [ミカ 5 章 12 節](#); [ガラテヤ 5 章 20 節](#) 参照)。なぜならそれらの背後に、実際に悪魔の影響(ヤンネとヤンブレの事例参照: [出エジプト 7 章 11 節](#); [8 章 7 節](#); バラム: [ヨシュア記 24 章 10 節](#); エンドルの魔女: [サムエル記上 28 章 15 節](#); 罪の人: [第二テサロニケ 2 章 9 節](#))が存在するからです。この関連で、私たちはオカルト活動が、異教徒の

⁶⁵ 組織神学第 2 巻 106 頁。

偶像崇拜と非常に密接な関係があることに注意しなければなりません(こうした現象の再来の危機にあります)。聖書は特に偶像崇拜、つまり他の諸々の名前の悪霊どもの崇拜については特に厳しい立場をとっています。(申命記 32 章 17 節; 詩篇 106 篇 37 節; 使徒 8 章 9 節-, 13 章 6 節-, 16 章 16 節-, 19 章 19 節-, 第一コリント 10 章 20 節, コロサイ 2 章 18 節, 第二テサロニケ 2 章 9-10 節; 黙示録 13 章 14 節) ⁶⁶。

2) 政治と社会: 聖書は無法を抑制し罰するための組織的権威の重要性を明確に述べています(ローマ 13 章 1-7 節; テトス 3 章 1 節; 第一ペテロ 2 章 13-17 節)。さらに、別々の国が存在することは自由を促進し、人類が神を求め礼拝する機会を維持します(一つの世界の支配下では不可能です。創世記 11 章 1-9 節; 使徒行伝 17 章 26-27 節; 以下も参照のこと: ダニエル 10 章 13 節; イザヤ 14 章 16-17 節; エゼキエル書 28 章; 詩篇 2 篇; 黙示録 16 章も参照)。今千年紀は、政府の基本的な目的(権利の保護、悪人の処罰)が損なわれ、代わりに政府が悪の目的のために使われるという一連の不穏な傾向で幕を開けています。法における相対主義、犯罪者を罰することへの消極性、正義の腐敗の深刻化、政治的・社会的課題の司法領域への介入、正義の根本原理を無視して、社会問題に対処するために法と政治を利用すること、個々のケースを無視して誤った、個々のケースを考慮することなく、誤った、聖書的でない社会学の原則を一律に法制化すること。-スペース上、この問題をここで全て網羅して取り上げることはできません。信者は「時のしるし」(例: マタイ 16 章 3 節)を読み取り、周りで悪魔の勢いが増していることを理解するだけで十分です。そして、悪魔の策略にはまるような反応をしないことが大切です。サタンは現在、私たちの中にある独善的な闘争本能に訴える現代の社会的・政治的な数々の「大義」をもって、信者や立派な未信者を魅了することに大きな成功を収めています。信者が現代社会の退廃的な傾向の多くを見て慄然とするのは理解できますが、サタンはこの反応も巧みに利用し、退屈や刺激的な挑戦への欲望から、根本原因や唯一の真の解決策に関心を持たずに、社会の退廃の症状を攻撃するように人々を(特にクリスチャンを)説得できる時は、いつも喜んでいきます。イエス・キリストに立ち返り、彼と御言葉への信仰を通して彼との関係を深めること(そして、その信仰を私たちの生活や働きに適用すること)が、神のために「インパクト」を与える唯一の方法なのです。サタンのプロパガンダである三番の嘘を信じて、自分自身の独善的な努力によって「神のために」世界をより良い場所にしようとするのは、神からではなく、したがって悪魔の目的を促進させるだけなのです。

オカルトの議論と同様に、現代社会に芽生えた奇妙で反神的な文化的異常は、包括的に言及するにはあまりにも多く、数えきれないほどどこにでも見られます。おおざっぱに言えば、バンパーステッカーに書かれているようなことは、避けるべきもののリストに含まれているはずで、ベジタリアン、動物の権利、肉反対、毛皮反対、あらゆる種類の薬物使用、ギャンブル、性的異常、有名人崇拜、スポーツ選手や運動競技の美化、テレビに登場するもののほとんど(すべてで

⁶⁶ 偶像崇拜における星と墮天使の関連は、申命記 4 章 19 節, 17 章 3 節; 列王記下 17 章 16 節, 21 章 3-6 節; ゼパニヤ 1 章 5 節; 黙示録 9 章 1 節に見られます。

はないにしても)、あらゆる種類のファンタジー、ラジオから聞こえてくるものほとんど(すべてではないにしても)-まだまだ挙げられそうです。聖書は、人間の文化的な営みについて、良いことは何も言っていません(ただし、神を礼拝することについては、幕屋と神殿の建設と礼拝に限って、例外としています)。文化は必然的にある種の実在、つまり楽しむために人生のある側面を模倣することを伴います(そのレベルが粗野なものか、崇高なものか、その中間のものかは問わない)。そのような模倣はすべて、定義上、真実ではなく、本当の「リアル」ではありません。私たちが「見ている」のがディズニーであれ墮落であれ、そこには非現実の要素があり、人工的であり、具体的には嘘であり、嘘に注意を向けることは霊的な観点から見て健全なことではありません。確かに、そのような影響にさらされないようにするのは非常に難しいことですが、少なくとも、その影響があることを意識することは必要です。特にひどい例を挙げれば、SFは「面白い」かもしれませんが、(特に単純な人は)この地球上で現在私たちが従事している争いとは別の焦点が、神の御計画にあるかもしれないという恐ろしい反神の信念を持つに至ります。このような推測や信念は、神と、私たちが救うためにここに来られた神の御子に対する侮辱です。要するに、政治的、社会的、文化的な接触やつながりは、私たちが吸う空気や食べるものと同じように、この世で避けることはできませんが([第一コリント 5 章 9-10 節](#))、私たち信者は、それらが及ぼす影響と脅威を認識し、適切な慎みを持って接する義務があるのです([第一コリント 15 章 33 節](#))。

3) 経済とテクノロジー: 信者にとって経済とテクノロジーは、現代人の活動の中で、健全な距離間隔を維持することが最も困難な分野です。これらの力は、私たちが汗を流して日々の糧を得る必要性和分離できないほどに結びついているのです。そして、この二つの強力な力が、文化、政治、社会と絡み合い、サタンの統合システムを一種の抜き差しならない状況にしており、そこから完全に離れることは事実上不可能です(過去において修道院運動はこの点で失敗しているため、今日ではどれほど難しいことでしょう)。カイン(農耕:[創世記 4 章 1-18 節](#))、トバル・カイン(テクノクラフト:[創世記 4 章 19-22 節](#))、ニムロデ(都市化、特に彼の統一世界のジグurat 建設計画:[創世記 10 章 8-12 節](#)、及び[創世記 11 章 1-9 節](#))以来、科学、テクノロジー、そして「啓蒙」の悪魔的な促進によって、悪魔に利をもたらしてきました。現代の合理主義的物質主義は、実際、霊的で非物質的な次元に対するいかなる信仰も「無知」と見なすところまで来てしまっています。マスコミ、テクノロジーの進歩、経済のグローバル化は、統合された一つの世界、すなわち悪魔が自分の意志を実現する際に、彼を妨げるものは何もない世界(大艱難において完全に結実する運命にある恐ろしい展望です)という悪魔の夢に向かって、これまで以上に急速に進んでいます。信仰はこれらの分野の発展に反対するものではないのですが、技術、経済的進歩への依存とそれに対する信仰の増大は、神への信仰を損なわずにはおかないという事実があります-二人の主人に仕えることは不可能です。その最たるものが現代医学の現象でしょう。信者である私たちは、神の御心が最も重要であり([マタイ 6 章 10 節](#))、神の御計画は私たちの人生の様々な状況をすべて考慮に入れていることを理解しています([ローマ 8 章 28 節](#))。私たちは、神が癒す神であることを知り([詩篇 103 篇 3 節](#))、また、神が人生の必要や問題に対処する手段を与えてくださることも知っています([使徒行伝 10 章 15 節](#)参照)。信仰に忠実な信者にとって、現代医学はそれほど問題ではありませんが、問題は微妙なところではあります。一般の人々(そして医療

関係者)は、医療を新しい宗教、病院を新しい神殿、医師を新しい祭司、あるいは神と見なすことが、あまりにも容易です。なぜなら、私たちの死が最も深刻に感じられるのは、(明らかに)死の領域と死の恐怖(したがって、生命を脅かす病気)であり、まさにこの死への恐怖こそが、悪魔が人類を奴隷にするための主要な武器の一つだからです([ヘブル 2 章 15 節](#))。ちょうど、生活の経済的手段(衣食住)についての過度の心配が、悪魔によって恐怖を引き起こし、神への信頼を遠ざけるために用いられるように([マタイ 6 章 25-34 節](#)参照)、サタンは私たちの健康への脅威についての過度の心配を利用して、問題の解決策として神よりも薬に頼るように説得するのである。しかし、この二つの心配は似ていて、信仰によって克服しないと同じような結果をもたらしますが、健康を失うことへの恐れは、次の事柄の程度によって、霊的にはより危険度が高くなる可能性があります。1) 深刻な大災害のときを除いて、個人にとっては健康を取り戻すよりも基本的な生活手段を提供する方がはるかに簡単であり、2) 平常時の健康の脅威の結果は、より直接的でより悲惨です(言うまでもなく、より苦痛です)。医療技術の向上は、この霊的な脆弱性をさらに高めることになりました。過去の歴史において、医学の限界は、この問題をより明確にしています。つまり、神の助けなしには、癒しはありえないということです。信者の観点において、一世紀前の選択肢は単純なものでした: 可能な限り入手可能な医療を得--他の場合と同じように--しかし救出(癒し)を神に信頼することでした。紛れもなく、これは今日においてもなお課題です(そして正しい対処法です)が、しかし、医療効果の向上、結果に比例しない費用の増加(例えば死亡率は 100%であっても)、健康問題や懸念に対するメディアの病的なまでの偏向報道、患者にとって(保証はないが)利用できる「選択肢」の増加などは、病気に対する恐怖心の増大、医療に対する過大評価、それに伴う信仰への脅威--病気からではなく、医学という魔法の宗教への不健康な依存--などの傾向を作る助けになっていることは間違いありません。信者である私たちは、自分が死ぬことを知っています。しかし、それが物語の終わりではないことも知っています。私たちは、この腐敗した体で永遠に生き続けるわけではありません--そうしたいとも思いません。私たちが主の型に倣って受け取る復活の体は、私たちが求めたり想像したりするものを超えています([エペソ 3 章 20-21 節](#))。^{67 68} したがって、正当な健康問題に対処するために利用できる医療技術を賢く利用することは確かに害がありませんが、私たちはこのような体に留まっている間、神が備えて下さっていることを信じ、主の良い時にそこから離れることを確かに知っています。有害なのは、現在の医学界の現実的な圧力に屈することであり、(病気のためであれ、病気の恐怖からであれ)神よりも医学を信頼するという恐ろしい誤りを犯すことなのです。

5. 信者の視点: 信者にとって覚えておくべき重要なことは、私たちが神に従うことによって何かを「逃す」ことにはならないということです。悪魔の世界システムのすべてが、私たちが純粋で妥協のない信仰を行使するのを阻もうとします。あらゆる場所、あらゆる生活領域で、サタンの世界に響く歌は、神を本当に信じたり、神を本当に求めたり、神を本当に知ることから、そして、日々、神とともに本当に歩むことから私たちを遠ざけようとしているのです。悪魔の王国とは対照的に、

⁶⁷ 復活の体については、ペテロの手紙シリーズ # 20 参照のこと。

⁶⁸ 復活の体については、ペテロの手紙シリーズ # 20 参照のこと。 <本文に註 68 欠落>

神を信じること、神への深い信仰が原則であり、例外でなかった国があります。過去と未来のイスラエルの例は、(もちろん、現代の信仰あるユダヤ人のレムナント-生き残った人たちと共に)現代のすべての信者が見習うべき先例であり、私たち野生のオリーブの枝が接ぎ木されたのはこの元々植えられてあったオリーブの木です。この国は、(その歴史の中で多くの国民が)本当に神を知り、信頼していた国なのです! (例をわずかでも挙げてみるなら) ダビデの詩篇やモーセの律法、あるいはアブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ、ハンナ、エリヤなどをよく見てみると、過去の偉大な信仰者たちにとって、神がいかに現実的であったかがわかります。⁶⁹ この教会の最後の世代では、反「迷信」の科学技術の影響と世界的な情報の爆発によって、未信者の大衆の間だけでなく、悲しいことに信者と自称する人々の間にも、確かに「知ったかぶり」の態度と神を一般的に軽んじる態度を生じさせてきました。このように、神が本当には誰であり、何であるか、神の偉大さ、神の栄光を認識しないことは、まさに悪魔が人々の間に培おうとしている心の態度なのです。

到来する神の王国は、この世の王国が提供するものよりもはるかに望ましいものであり、神の栄光は、このはかない世界で私たち自身が受けるどんな栄光よりもはるかに満足のいくものであり、神の力はこの世の科学技術が生み出すものよりもはるかに現実的です。したがって、私たち信者は、この世の安い代替物に過度に注意を払い、真の王国、真の力、真の栄光を持っている方の代わりに、それらを拝まないよう注意しなければならないのです。信者である私たちは、今の時代を愛さないように([第二テモテ 4 章 10 節](#))、今の世界を愛さないように([第一ヨハネ 2 章 15 節](#))、そしてそれに合わせないように([ローマ 12 章 2 節](#))、代わりに神を愛し、神によって変えられるように([マタイ 22 章 37-38 節](#)、[ローマ 8 章 29 節](#))警告されているのです。私たちの焦点を神に合わせ続けること(そして悪魔の世界から遠ざけること)には、大きな利益があります([第一テモテ 6 章 6 節](#))。結局のところ、永遠の命にはどんな値段がつくのだろうかと、人は問うでしょう。そして、私たちが救いを確信した者であるなら、現世での最も劇的な業績やあらゆるものの取得は、本当に永遠の報酬のほんのわずかな、小さなものとさえも比べることのできるものではないでしょう。神の前に立つときのほんのわずかな賞賛は、この世で可能な限り声高に広く賞賛されるよりも、間違いなく価値があるのです。そして、もしこのことを信じるなら、そうであるかのように生きていくべきではないでしょうか。

V. サタンの戦術的方法論

サタンの世界システムについての研究のこの最後のセクションでは、人類を操るために悪魔によって使用される実際の方法と戦術を調べます。その前に、悪魔とその活動に関する最も重要な聖句を簡単に見ておくとよいでしょう。

⁶⁹ 例えば、創世記 42 章やサムエル記上 2 章では、日常生活における神の現実性、力、近さ、関与が想定されており、多くの現代人の見解とは大きく異なっています。

道ばたに落ちたのは、(福音の真理を)聞いたのち、信じることも救われることもないように、悪魔によってその心から御言が奪い取られる人たちのことである。(ルカ 8 章 12 節)

シモン、シモン、見よ、サタンはあなたがた(全員)を麦のようにふるいにかけることを願って許された。(ルカ 22 章 31 節)

夕食のとき、悪魔はすでにシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを裏切ろうとする思いを入れていた…(ヨハネ 13 章 2 節)

そこで、ペテロが言った、「アナニヤよ、どうしてあなたは、自分の心をサタンに奪われて、聖霊を欺き、地所の代金をごまかしたのか。(使徒行伝 5 章 3 節)

それは、彼らの目を開き、彼らをやみから光へ、悪魔の支配から神のみもとへ帰らせ、また、彼らが罪のゆるしを得、わたしを信じる信仰によって、聖別された人々に加わるためである』。(使徒行伝 26 章 18 節)

平和の神は、サタンをすみやかにあなたがたの足の下に踏み砕くであろう。…(ローマ 16 章 20 節)

すなわち、主イエスの名によって、あなたがたもわたしの霊も共に、わたしたちの主イエスの権威のもとに集まって、彼の肉が滅ぼされても、その霊が主のさばきの日に救われるように、彼をサタンに引き渡してしまったのである[引き渡すことをすでに決めたのです]。(第一コリント 5 章 4-5 節)

互に拒んではいけない。ただし、合意の上で祈りに専心するために、しばらく相別れ、それからまた一緒になることは、さしつかえない。そうでないと、自制力のないのに乗じて、サタンがあなたがたを誘惑するかも知れない。(第一コリント 7 章 5 節)

[わたしはゆるした…] そうするのは、サタンに欺かれることのないためである。わたしたちは、彼の策略を知らないわけではない。(第二コリント 2 章 11 節)

こういう人々にはせ使徒、人をだます働き人であって、キリストの使徒に擬装しているにすぎないからである。しかし、驚くには及ばない。サタンも光の天使に擬装するのだから。(第二コリント 11 章 13-14 節)

そこで、(私があまりにも多くの啓示を受けたために、わたしが度を越して)高慢にならないように、わたしの肉体に一つのとげが与えられた。それは、高慢にならないように、わたしを打つサタンの使なのである。(第二コリント 12 章 7 節)

かつてはそれらの[罪の]中で、この世のならわしに従い、空中の権をもつ君、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って、(永遠の光の中に生きておらずに)歩いていたのである。(エペソ 2 章 2 節)

だから、悪魔に攻撃の隙を与えてはいけません。(エペソ 4 章 27 節)

悪魔の策略に対抗して堅く立つことができるように、神の武具をすべて身に着けなさい。(エペソ 6 章 11 節)

だから、わたしたちは、あなたがたの所に行こうとした。ことに、このパウロは、一再ならず行こうとしたのである。それなのに、わたしたちはサタンに妨げられた。(第一テサロニケ 2 章 18 節)

その[背教者の]中に、ヒメナオとアレキサンデルとがいる。わたしは、神を汚さないことを学ばせるため、このふたりをサタンの手に渡したのである。(第一テモテ 1 章 20 節)

[牧師を任命する際] 彼はまた、信者になって間もないものであってはならない。そうであると、高慢になって、悪魔と同じ審判を受けるかも知れない。(第一テモテ 3 章 6 節)

彼女たちのうちには、サタンのあとを追って道を踏みはずした者もある。(第一テモテ 5 章 15 節)

一度は悪魔に捕えられてその欲するままになっていても、目ざめて彼のわなからのがれさせて下さるであろう。(第二テモテ 2 章 26 節)

このように、子たちは血と肉とに共にあずかっているので、イエスもまた同様に、それらをそなえておられる。それは、死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼし、(ヘブル 2 章 14 節後半)

そういうわけだから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ちむかいなさい。そうすれば、彼はあなたがたから逃げ去るであろう。(ヤコブ 4 章 7 節)

身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのようになり、食いつくすべきものを求めて歩き回っている。(第一ペテロ 5 章 8 節)

罪を犯す者は、悪魔から出た者である。悪魔は初めから罪を犯しているからである。神の子が現れたのは、悪魔のわざを滅ぼしてしまうためである。(第一ヨハネ 3 章 8 節)

また、わたしたちは神から出た者であり、全世界は悪しき者の配下にあることを、知っている。(第一ヨハネ 5 章 19 節)

1. 悪魔の名前: 聖書に書かれているサタンの名前はほとんどすべて、その性格と手口を端的に表現している名前です:

a. ルシファー: 「光を運ぶ者」を意味するこのラテン語の名前は、[イザヤ書 14 章 12 節](#)にあるヘブル語のヘイルル(הילל)の共通訳であり、明けの明星を指しています。これは悪魔の称号の中で唯一蔑称ではなく、反乱する以前の天使に対する神の代理人としての地位にちなんだものです。元来「光をもたらす者」であったはずの者は、「闇の君」となってしまう、イエス・キリストは、神の光を世にもたらす者として([ヨハネ 1 章 4-10 節](#))、「明けの明星」という名を得ました([第二ペテロ 1 章 19 節](#); [黙示録 2 章 28 節](#), [22 章 16 節](#))。⁷⁰ (参照:[使徒 26 章 18 節](#); [エペソ 6 章 12 節](#); [コロサイ 1 章 13 節](#))。

b. サタン: ヘブル語のサタン(שָׂטָן)は、敵意と対立を意味する言葉です。この名前によると、悪魔は敵([ルカ 10 章 19 節](#)参照)、対抗者([第一ペテロ 5 章 8 節](#)参照)、または敵対者([第一テモテ 5 章 14 節](#))です。

c. 悪魔: ギリシャ語のディアボロス(δ ι α β ο λ ο ς)は「中傷する者」「告発する者」を意味します。この元来の名前によれば、サタンは神の前では私たちに告発し、人間には神を中傷する者です([ゼカリヤ 3](#), [ヨブ記 1-2 章](#), [黙示録 12 章 10 節](#))。

d. 誘惑者: ([マタイ 4 章 3 節](#); [第一テサロニケ 3 章 5 節](#))。

e. 嘘つき: (そして嘘の父:[ヨハネ 8 章 44 節](#); [第一ヨハネ 3 章 8 節](#)も参照)。

f. 人殺し: (初めからそうである:[ヨハネ 8 章 44 節](#); [第一ヨハネ 3 章 8 節](#)参照)。

g. 邪悪な者: ([マタイ 5 章 37 節](#), [6 章 13 節](#), [13 章 19 節](#), [13 章 38 節](#); [ヨハネ 17 章 15 節](#); [エペソ 6 章 16 節](#); [第二テサロニケ 3 章 3 節](#); [第一ヨハネ 2 章 13 節](#)-, [5 章 19 節](#))。

h. 蛇: (どの言語でも、蛇やサーパントは、裏切り、危険、悪巧みを意味する。) その他にも、いくつかの関連する用語があります。龍(ドラゴン)、レビヤタン、ラハブなどは蛇の特徴に加え、巨大なサイズとパワーを意味します。

1) 龍(ドラゴン)(すなわち、非常に大きな蛇のような生き物。[黙示録 12 章 3-17 節](#), [13 章 1-4 節](#), [16 章 13 節](#), [20 章 2 節](#); [ヨブ記 26 章 13 節](#)参照のこと)。

⁷⁰ このシリーズの第一部をご参照下さい

2) レビヤタン(海の蛇:[ヨブ記 3 章 8 節](#); [詩篇 74 篇 14 節](#); [イザヤ 27 章 1 節](#))。

3) ラハブ(=海の怪物:[ヨブ 26 章 12 節](#); [イザヤ 51 章 9 節](#))。

i. ベリアル(Belial):またはベリアール(Beliar)。

j. ベルゼブル:この名前は、「ハエの支配者」という意味で、ヘブル語・アラム語の「主」という言葉(バル、ベル)とハエの擬音(zzzbhbh; 参照:[マタイ 12 章 24-27 節](#))から形成されています。ハエは、その厄介な性質と嫌な習性から、悪魔の良いたとえとなったのです。

k. いつわりの神と世界の支配者: これらの用語は、地球と人類の支配者になろうとする悪魔を表現しています。例えば、「この世の神」([第二コリント 4 章 4 節](#))、「この世の君」([ヨハネ 12 章 31 節](#), [14 章 30 節](#), [16 章 11 節](#))、「空中の権をもつ君」([エペソ 2 章 2 節](#))、「強い者」([マルコ 3 章 27 節](#))などがあります。

2. 悪魔の影響: 誘惑の手口: ほとんどの場合、悪魔の影響と悪魔の誘惑は、(直接的な攻撃や憑依がなくても)人間に関する目的を達成するのに十分です。そればかりか、ほとんどの場合、そのような影響と誘惑は、悪魔の直接的な関与を必要とさえしないのです。サタンが結集して築き上げてきた世界システムは、今やあちこちに見受けられる誘惑と社会に組み込まれた悪魔の影響力で溢れていて、地上でのその影響力を永続させ、その根を深く張らせていくために勢いよく稼働しているのです。神の介入がなければ、これ以上悪魔の直接的な働きかけがなくても、世界は完全な腐敗に至るまで墮落の道を歩み続けることになるだろうと想定できるでしょう。もちろん、サタンはこれで満足しているわけではありません。自分に差し迫っている神の裁きに対する、彼の唯一の希望は、地上の人々から信仰を完全に消し去ることです(本シリーズ第 5 部参照)。このため、悪魔が世界に対する支配力を強めるためにあらゆる努力をする中で、悪魔の影響力(世界システムを通して)と誘惑(人それぞれが罠に陥ること)が継続的かつ激化することが予想されます。悪魔が宇宙を支配するための体系的な戦略については、すでに説明しましたので、このセクションでは悪魔とその手下が信者と未信者を同様に騙(だま)して罠(わな)にはめ、自分の意志を実行するように誘惑する戦術に目を向けていくことにします。私たちに対する悪魔の「意志」はいろいろな形で現れますが、決まって言える一つのことは、どんな場合でも、神の私たちに望まれる御心に反しているということです([第二テモテ 2 章 26 節](#))。上で見たように、サタンは私たち一人ひとりの中に、罪の性質という潜伏した仲間を持っています([ヤコブ 1 章 14 節](#))。私たちに罪を犯させるように仕向けるのが基本的なやり方です。しかし、罪とは、淫らな行為だけではないことを忘れてはなりません。悪魔のプロパガンダ・システムによれば、自己崇拝の嘘(すなわち、嘘その 2:「私は神である」:主観的傲慢)と独善の嘘(すなわち、嘘その 3:「神は私を必要としている」:客観的傲慢)を信じる人が、結局は悪魔にとって最も有益な存在なのです。そして、サタンは常に「使える」人間を募集しているのです。悪魔が地上でやりたいことをすべてやることを神から許されているわけではないことについては、すでに述べました。そうでなければ、人類はとっくに完全に消滅させられていたはずでした(信仰の灯を消すための確実な方法

の一つです)。悪魔は自分の肉体を持たず、人間に憑依する能力も神によって制限されています(後述)。天使と人間の混血種を作ろうとした悪魔の試みは、洪水によって神によって打ち砕かれました(詳細は第5部で説明します)。つまり、地球と人間に対する彼らの物質的な影響力は限定されています。従って、悪魔がかつて支配していた領域を支配する最も効果的な方法は、人間にそれを代行させることです。サタンは、自発的またはそう仕向けられてか、また完全に知っていてか、あるいはあまり知らなかったとか関係なく、また悪魔の確立した嘘のシステムを信奉するか、あるいは単にその影響を受けていたかにも関係なく、いわば「彼の仲間に加わり」、世界の支配と指揮に貢献してくれる者達が、世界の歴史を通して常に存在していました。世界は「悪い者のひざの上に置かれてある」のですが、その理由の大部分は、悪い者がその支配を続けるのを手伝うため、多くの志願者がいたからなのです([第一ヨハネ 5 章 19 節](#))。

悪魔は、すでに存在している世界システムの影響を超えて、彼がターゲットにした人間を積極的に誘惑します。この件についての聖書の記述は限られていますが、ある基本的な原則は十分明確に記されています。

a. 標的を観察：神が天使の監視者を使わして地上を偵察させたように([ゼカリヤ 1 章 11 節](#); [6 章 5 節](#)参照)、サタンも自分に与えられている権力を使って、できるだけ多くの人間を「監視」していると考えて間違いはないでしょう。しかし悪魔が持っている私たちに関する情報の量を過小評価しないことは重要ですが、サタンの能力を過大評価しないことも重要です：神と違って、サタンはどこにでも存在できるというわけではありません。しかし、私たちが天使のような存在によって観察されていることについては、聖書を見れば明確です([ヨブ記 1-2 章](#); [ルカ 15 章 10 節](#); [第一コリント 11 章 10 節](#); [第一ペテロ 1 章 12 節](#))⁷¹。

b. ターゲットを絞る：私たちが知っているサタンの方法論からして(彼の抜け目なさからして)、サタンは自分の時を逃さず、機を見て敏捷に動くことが予想されます。人間を誘惑する際には、兵力を要することになるので、すべての人間が同じ程度の直接的な悪魔の誘惑を受けるわけではないと推測できるでしょう。悪魔が誘惑しようとする者たちの中で優先順位が高いのは、自分の影響力を拡大するために最も効果的に役立つ人々(金持ち、権力者、著名人、またはこれらの分野やその他の重要な分野で可能性を持っている人々)でしょう。サタンにとって特に重要なターゲットは、キリストを信じる寸前の人全般です：悪魔は彼らが信じる前に、彼らの心から福音の種を取り除くためにあらゆる努力をします([マタイ 13 章 19 節](#); [マルコ 4 章 15 節](#); [ルカ 8 章 12 節](#))。信者はおそらく誘惑の優先的標的であり、それと同様に、私たちが神にとって有用であればあるほど、サタンのリストの上位に位置することになると予想できます([ヨブ記 1 章 8 節](#); [ルカ 22 章 31 節](#)を参照)。悪魔が誘惑する対象を選ぶ際には、タイミングも重要です。私たちが最も陥りやすい誘惑や、誘惑の最適なタイミングを見極めることのできる悪魔の能力を過小評価すべきではありません。常識的に考えて、もし私たちが誰か(自分自身でも)を完全に秘密のうちに

⁷¹ この点については、本連載の第1回に加え、ペテロの手紙シリーズ#22をご参照ください。

好きなだけ観察することができるのであれば、その人の具体的な弱点や、その人を誘惑の圧力下に置くのに最適なタイミングを簡単に知ることができます([第一ペテロ 5 章 8 節](#))。一方、この点に関して悪魔の能力を過大評価しないことも重要です。全知全能であるのは神だけです。例えば悪魔は、私たちの心の中で何が起きているかを推測することしかできません。

c. **誘惑**：サタンは、人間、特に信者に対して、真理を歪め、正しい行動を妨げ、真理を学び適用する環境を乱し、神のもとに来て神に従うことを妨げ、信仰を乱し、証を壊し、神への有用性を低下させ、自分のための機会を創出するために、誘惑の戦略を積極的に使います([第一テサロニケ 3 章 5 節](#))。私たちは聖書から、偉大な信仰者でさえもこのような方法に屈することがあることを知っています(例えば、ダビデはサタンに動かされて民を数えることをしました：[歴代誌上 21 章 1 節](#))。しかし、悪魔は全能ではないことを忘れてはなりません。そして、神は、この点に関して、私たちが耐えられる以上の圧力をサタンにかけさせることは許さないとっておられます([第一コリント 10 章 13 節](#))。

悪魔の誘惑の方法論の最も重要な点をまとめると、次のようになります。

1) **欺き**：悪魔が誘惑してくる時には、まず嘘がそこに潜んでいると言えるでしょう。欺きは効果的な誘惑のやり口です。([創世記 3 章 13 節](#); [ヨハネ 8 章 44 節](#); [第二コリント 2 章 11 節](#), [11 章 3 節](#), [11 章 14-15 節](#); [エペソ 6 章 11 節](#); [第二テサロニケ 2 章 9-12 節](#); [黙示録 12 章 9 節](#), [19 章 20 節](#), [20 章 3 節](#)と [10 節](#))。

もし私たちが真理を知り、神を恐れ、誘惑に負けることの結果を考えるなら、悪魔のやり口に引っかけられて負けてしまうことが、信仰と人生に破壊をもたらし、どんな悲惨な結果を刈り取ることになるかを理解するはずで、それがわかっていたら、私たちは決してそんなことはしないことでしよう。

サタンは(悪霊の手下どもを使って)誘惑する際、真実を覆い隠すことにあらゆる努力を払っています。このことは、人間の最初の体験事例であるアダムとエバを見れば明らかです。このシリーズの第 3 部で、私たちの最初の両親が罪に落ちたことについて、サタンが彼らを欺いて状況を誤って判断させなければ、アダムとエバは決して罪を犯すことはなかったであろうという結論に至りました。悪魔は、ある罪は罪ではない、または、ある罪は必要だと示唆したり、あるいは単に「見逃したら惜しいことをしたことになる」という提案をすることがありますが、この最後の場合でさえも、私たちは目の前に手に入れるようにと置かれた褒美の虚しさと神に背くことによって確実に起こる痛ましい結果について、目をくらまされているのです。

2) **言葉による誘惑**：人を罪に誘惑する最もうまいやり口のの一つは、他人からの提案や励ましです([第二ペテロ 2 章 18-19 節](#)参照)。人の心には、自分では決して採用しない(あるいは、おそらく思いもよらない)けれども、他人の提案は熱心に受け入れるように仕向ける何かがあります。ペテロが主に対して、主が死を受けなければならないという考えを捨てなさいと言ったのは、

(主が言われたように:[マタイ 16 章 23 節](#)) 悪魔が他の人間の口の言葉を利用して罪を犯させようとする例です。

3) 視覚的な暗示: 時には、誘惑の対象(または、人が欲望するものに密接に関連するもの)が見えるだけで、罪の性質が動き出すことがあります。私たちのマスメディアの世界では、罪を誘発するイメージがあふれています。(例えば、広告はほとんど完全に私たちの自然な欲望をかき立てることに向けられていることを考慮してください)。私たちの抵抗力を試し、最も良いタイミングで最も魅力的なイメージを与えることは、悪魔にとって容易なことです。[\(ヨブ記 31 章 1 節; 詩篇 101 篇 3 節; 第一ヨハネ 2 章 16 節\)](#)。

4) 潜在意識下での暗示: 意識下での暗示も悪魔の武器です([歴代志上 21 章 1 節; マタイ 16 章 23 節](#)も参照の事)。私たち自身の心に浮かぶ罪深い邪悪な「考え」(そのうちのいくつかは、悪魔から来たものです-私たちの罪の性質は、その対話に簡単にはまりやすいものです)に思いを留める事は、真理の道から離れるように誘う他人のあからさまな言葉に耳を傾ける事と同じ様に全く不必要です。しかし、罪と悪に対して寛容になっているなら、次第にそのようなコミュニケーションに対する感受性が高まり、悪魔の教義への直接的な経路が築かれていきます([エペソ 2 章 2 節; 第一テモテ 4 章 1 節](#))。

5) 強制: サタンは「公正に」行動するようなことはしません。サタンは利用できるすべての手段を使います。誘惑の手段として特に効果的なのは、状況による圧力です。喪失感、恥ずかしさ、不便さ、傷を負うこと、人の信望を失う事、死、恐怖を引き起こすものに対する恐れは、サタンの手中にある強力な道具です。正しいことをする(あるいは悪いことを避ける)ことによって生じるかもしれない恐ろしい事柄を暗示することによって、悪魔はしばしば私たちを罪と悪(神様の御心から離れること)へと誘導することができます([ローマ 8 章 15 節; 第二テモテ 1 章 7 節; ヘブル 2 章 14-15 節](#))。

6) 安心感: 間違っただけの行動をしている可能性がある場合、同じような行動をしても悲惨な結果に至らなかった人の事例はいくらでもあるように思われますが、神は完全な正義の裁判官ですから、そのような見方は誤りです(悪人が最終的にどのような報いに与るかについては、[詩篇 37 篇](#)と [73 篇](#)を参照の事)。罪と悪に対する神の罰の原則に疑問を投げかけるような、見かけだけの事例に加え、悪魔は常に、私たちのしていることが「大丈夫」であると言葉で安心させてくれる人たちを供給します。結局のところ、誰もがやっていることで、それが「本当に」間違っているかどうか、誰が判断できるだろう。そして、とにかく、それはあなたのせいではないし - あなたはたまたまそのような状況に置かれたにすぎない。このような間違っただけの安心感は、その人の決意をぐらつかせ覆す傾向があります。しかし、このような言い訳、相対化、責任回避、神のせいにするのは、決して罪や悪の行為から私たちを免責するものではありません。信者として、私たちは自分が気にかけている人たちの決意をぐらつかせて罪を犯させないように、細心の注意を払うべきです(これはあまりにも頻繁で、しばしば誤った愛から行われます: 私たちは独善的な動機から他

人の罪を非難すべきではありませんが、その決断の結果について彼らに誤った情報<偽りの安心感>を与えてはいけません。

7) 罪: 誘惑されたからと言って、それが必ずしも罪という結果になるわけではありません。罪は、私たち自身の自由意志によって、間違っただ道を歩むことを選ぶ時に起こります。ヤコブ([ヤコブ 1 章 14-15 節](#))はその仕組みを教えています。(自分の欲望によって)誘惑され、誘われ、捉えられて、その欲望は罪として実を結び(つまり、誘惑に屈する)、その罪によって神から離れ(霊的には死に)ます。悪魔は「初めから罪をおかしていた」([第一ヨハネ 3 章 8 節](#))ので、この過程をよく知っているのです。私たちは、誘惑に負けるのではなく(あるいは、負けたとしても、自分の罪を告白し、自分のやり方を変え、自分の過ちから立ち直って)、まさにこの悪い時代から私たちを救うために、キリストが私たちの罪のために死なれたことを思い出すべきです([ガラテヤ 1 章 4 節](#))。

8) 強化: 神様の赦しを求めず、自分の過ちを直視しない(悔い改め、告白し、自分の罪深いやり方を改めることによって)ことは、悪い行いにますますはまり込んでしまう傾向があります。その結果、私たちはますます神の愛と恵みの光に近づきたがらなくなります([ヨハネ 3 章 19-21 節](#))。そのままにしておくと、霊的に完全に盲目になり([第二コリント 4 章 4 節](#))、神に対して完全に否定的になってしまいます([ヨブ 21 章 14-15 節](#))。結局、私たちは悪魔に利用されるだけの存在になってしまうこととなります。

d. ケーススタディ(サタンのもっとも重要な誘惑):

1) アダムとエバ([創世記 3 章](#)): エデンの園で、サタンは未知のものに対する願望を、巧妙な嘘で掻き立てることによって欺きました(より詳しい説明は、ペテロの手紙シリーズ #27 とこのシリーズの第 3 部を参照してください)。

2) キリストの誘惑([マタイ 4 章](#)、[ルカ 4 章](#)): 最後のアダムであるキリストの 3 つの誘惑(上記と第 3 部で扱いました)には、悪魔の誘惑の戦略の概要が示されています。

a) 石をパンに: 正しいことを間違っただ方法で行う誘惑(食べ物は合法ですが、神の目的はキリストがこの期間、禁欲することでした)。

b) 地の王国: 正しいように見えますが、微妙に間違っていることをする誘惑(キリストは確かに来るべき王ですが、サタンの代理ではなく、その方法によってでもなければ、その時期でもありません)。

c) 飛び降り: 自分を正当化するために衝動的に行動する誘惑(何かを証明するために、神が自分を救出しなければならないという状況に神を追い込むことは、あらゆる点で間違っています)。

3. **悪霊の攻撃**:悪霊どもは限られた範囲内で、人や財産に物質的な攻撃をすることがあります。大洪水に先立つ無法時代には悪霊どもの直接攻撃が広く行われましたが(このシリーズの第五部を参照のこと)、それは将来の大艱難時代にも行われることになることなのでしょう(「来るべき艱難」シリーズを参照のこと)。現在の教会の時代には、この種の悪霊の活動はかなり限られているか、少なくともあからさまには行われていないように思われます。ヨブ([ヨブ記 1,2 章](#))やミカ([列王記上 22 章 19-23 節](#))、ペテロ([ルカ 22 章 31 節](#))やパウロ([第一コリント 5 章 5 節](#); [第一テモテ 1 章 20 節](#))がそうであったように、このような攻撃は明らかに神の許しのもとに限定的になされています。神は被造物を完全に支配しているので、悪霊が勝手に攻撃することはできません([エレミヤ 27 章 5 節](#))。

病気は悪霊の重要な攻撃分野の一つであり、病気と悪霊憑きの両方から区別されるべきものです。明らかに、多くの病気は悪霊は全く関与していません(しかし、いくつかの病気は、実際に悪霊の攻撃の結果です)。また、悪霊の働きに起因する病気の場合、その多くは悪霊憑きではありません([ルカ 13 章 11-16 節](#); [使徒 10 章 38 節](#))。ヨブとパウロはその優れた霊的地位のために患いましたが、神の特別な知識と明確な目的なしに患ったわけではありません(ヨブ 2 章 6-7 節; [第二コリント 12 章 7-10 節](#))。現在の使徒期後(ポスト・アポリステック)の艱難時代には、悪霊による病気が神の罰なのか、それとも優れた霊的達成の認識なのか、はっきりさせることはおろか、ある病気が悪霊の攻撃によるものかどうかさえ判別することは不可能です。新約聖書には、このような事例がたくさんありますが、当時、このような特殊な問題に対処するために特別な霊的賜物が適用されていただけでなく、このように激しく目に見える悪霊の活動が許された理由の大部分は、イエスの手による悪霊退治を通して、神の力とキリストの人としての御国の切迫した状態を示すためだったことを思い出すことが重要です([使徒行伝 10 章 38 節](#))。

弟子たちはイエスに尋ねて言った、「先生、この人が生まれつき盲人なのは、だれが罪を犯したためなのですか。本人ですか、それともその両親ですか」。イエスは答えられた、「本人が罪を犯したのでもなく、また、その両親が犯したのでもない。ただ神のみわざが、彼の上に現れるためである」。(ヨハネ 9 章 2-3 節)

4. **悪霊憑き** :悪霊憑きは、悪魔の攻撃の中でも特に悪質なもので、別個に扱わなければなりません。悪霊憑きでは、一墮天使(あるいは複数の)が道徳的な責任を負っている人間の体に住み着きます。そうすることで、悪霊は(その人の体を通して)その個人を大きく支配するようになります。悪魔が神に反抗する仲間を招集するために、肉体を手に入れることを主要なセールスポイントとして使ったことをこのシリーズの第一部で述べました。墮落した天使は、肉体だけが提供できる官能的な体験を渴望しており、神の抑制がなければ、このような憑依がもっと多く起こったと言ってよいでしょう。悪霊憑きは、憑かれた者の人格や意志を消滅させるものではありませんが、大きく抑圧することになります。例えば、ゲラサの悪霊に取り憑かれた人は、悪霊の軍団の抵抗にもかかわらず、救いを求めてイエスのところに行くことができました([ルカ 8 章 26-37 節](#)、[使徒行伝 16 章 16-18 節](#)も参照)。ユダは、(キリストを裏切る決意を固めた後、サタンに憑依され

ました。[ヨハネ 13 章 27 節](#)）、後に彼は(取り返しのつかない)後悔をすることになりました。占い師や巫女など(例えば、エンドルの魔女<口語訳では「口寄せ」>:[第一サムエル 28 章 3-19 節](#)の例にもあるように)、憑依した霊は自分達の体を、程度の差はあっても共有するようになることを示しています。あらゆる種類の悪霊による災い(上記参照)と同様に、悪霊憑きもまた神の許しの下に御心に左右されます。しかし、悪魔の攻撃や病気の感染とは異なり、悪霊憑きは憑かれた者の意志的な承諾を必要とします。⁷² 人は悪霊が入ってくるためには、それに「同意」しなければなりません。この同意は、会話の形である必要はなく、単に超自然的な大きな影響力を人生に許容する意識的な同意です。異教の儀式やオカルト、さらにはキリスト教以外の「立派な」宗教のある活動への関与は、明らかにこのプロセスを進め、取り憑かれる可能性をより高くすることになります。超自然的に設定された状況の中で、自分の意志を放棄するあらゆる行為(催眠術、ウイジャ・ボード<娯楽で交霊術に使う文字盤で日本のコックリさんに似ている>、タロットカードなどのような「社会的に受け入れられる」慣習でさえも)は、悪霊の侵入に対する抵抗力を弱めることになります。旧約聖書では、心霊術(必ず憑依を伴う)が強く禁じられており、憑依された者の最終的な責任を示しています([レビ 20 章 6,27 節](#);[申命記 18 章 10-11 節](#);[イザヤ 8 章 19 節](#))。麻薬やアルコール、その他の破壊的な行為に「はまる」のと同様に、悪霊に取り憑かれることは、必然的に後でその個人がその責任を負うことになり、後悔することになります。聖霊の宮となった信者は([第一コリント 3 章 16 節](#), [10 章 21 節](#) 参照)、悪霊に取り憑かれることから免れます。(イエス・キリストに従うことに反する行為として)あからさまに悪霊の影響に身を任せることがあってはじめて、完全に取り憑かれることになるとすれば、この見方は非常に理にかなっていません([エペソ 4 章 17 節](#)—; [第一テモテ 4 章 1 節](#)参照)。

主の[聖餐の交わりの]杯と悪霊どもの杯とを、同時に飲むことはできない。主の[聖餐の交わりの]食卓と悪霊どもの食卓とに、同時にあずかることはできない。([第一コリント 人 10 章 21 節](#))

悪霊憑きを終わらせるのは簡単なことではありませんが、神は今も被造物を支配しておられ、いつでも、どのような方法でも、そのようなケースを終わらせることができることを心に留めておく必要があります。また、神は祈りに答えてくださる神であり、熱心に神を求める者の祈りは常に神に一目置かれます([ヤコブ 5 章 16 節](#)後半)⁷³ エクソシズムの件についてですが、その言葉自体は聖書に登場しません。エクソシズムとはギリシャ語の「命じる/言い渡す」の名詞形で、「私はパウロが宣べ伝えるキリストの名によって命じる」([使徒行伝 19 章 13 節](#))というような意味合いを持

⁷² 汚れた霊につかれた「少年」のケースは例外とされることがあります ([マタイ 17 章 14 節](#)～、[マルコ 9 章 24 節](#)、[ルカ 9 章 37 節](#)～)。しかし、この言葉はギリシャ語の副詞 paidiothen を訳したもので、ここでは「子供の時から」ではなく、ギリシャ語でしばしばこのような区別をするために使われるパイス pais (παῖς) という単語に基づいて「思春期から」という意味です。

⁷³ 福音書に登場する最も困難な憑依のケースで、主が「このたぐいは祈りによるしかない」([マルコ 9 章 29 節](#)) と述べていることは記憶に新しいところです。

っている言葉です。ここに記されている事例においては、「エクソシスト(悪霊払いの祈祷師)」は信者ではないので、エクソシズム(悪霊払い)は効果がありませんでした。主がなさった例([マルコ 1 章 34, 1 章 39 節](#); [ルカ 4 章 41 節](#))は別として、主が王国を宣べ伝えるために派遣した十二人と七十二人の場合と([マタイ 10 章 1 節](#); [マルコ 3 章 15 節](#), [6 章 7 節](#), [6 章 13 節](#); [ルカ 9 章 1 節](#), [ルカ 10 章 17 節](#)参照)、パウロの命令によって、取り憑かれた奴隷少女から悪霊が出た場合([使徒行伝 16 章 18 節](#))以外には、信者が悪霊憑き(病気とは関係ない)に終止符を打った例は、聖書ではほとんどありません。最初の例は、キリストの王国の到来を告げるものです(当時のイスラエルはこの提供を拒否しました)。[使徒行伝 16 章](#)の出来事は、キリストの教会を設立する使徒的な働きの一部です。御国の七十二使徒、及び、教会の十二使徒に与えられた霊的な賜物と能力は、広範かつ独特で、彼らが果たすべき独特な務めに完全に合致していました。世界の歴史において、つまり神の視点から見た世界の歴史において、特別な賜物と特別な出来事が重要な時代に先行することはよくあることです(このシリーズの次の第 5 部参照)。例えば、モーセが出エジプトに際して行った例外的な出来事や例外的な奇跡を比較検討することができます。今度このような出来事や奇跡が集中するのは、キリストの再臨の間際(艱難時代)でしょう。しかし、現在では、そのような賜物や奇跡はほとんど機能していません。「悪魔に対する権威」は使徒とその仲間にもみ与えられた力(賜物)なので、「悪霊払い」は信者の正当な活動ではありません。悪霊憑きの疑いがある場合に対抗する唯一の武器は祈りであって、主が語られたように、これは最も強力な武器です([マルコ 9 章 29 節](#)参照)。神の力が関与されるなら、何でも可能なのです⁷⁴。

5. 信者への非難 :悪魔の攻撃の最後の、そして最も卑劣な方法は、完全に信者のために用意されています。サタンは、これまで述べてきたように、人間、特に信者を徹底的に観察し、集めた情報を最も効果的に利用します。信者への攻撃は、神の御前で非難することも含まれます。もちろん、神は全知全能であり、私たちの失敗をすべて知っています(実際、私たちや宇宙が創造される前から知っています)。しかし、「告発者」である(を意味する)悪魔は、神に従う者の罪と誤りを指摘することを喜びとしています。悪魔がそれをするのは、神の行動に矛盾があることをほめめかすためであり(もちろん、これは神を冒瀆する嘘です)、また、違反した信者を罰することによって、神に悪魔の仕事をさせようとするものでもあります。聖書は悪魔のこのような侮辱的な習性を多くの箇所ですべて述べています([ゼカリヤ 3 章 1 節](#); [ヨブ記 1-2 章](#); [第一ペテロ 5 章 8 節](#); [黙示録 12 章 10 節](#))。私たちはこの種の攻撃を過小評価すべきではありませんが、サタンとその手

⁷⁴ 例えば、キリストが一人の悪魔を遠くから追い払ったことを考えてみましょう ([マルコ 7 章 29 節](#))。悪魔を追い出すことは、どんな状況でも簡単なことではありませんし ([ルカ 11 章 18 節](#)の意味を参照)、必ずしも一度きりのことではありません。さらに七つの悪い霊を連れ戻した落ち着いたのない霊は、被害者の中に再び入り込みます ([ルカ 11 章 26 節](#))。あるケースでは、主は、悪魔が以前憑依していた人の中に再び入り込まないようにはっきりと命じられました ([マルコ 9 章 25 節](#))。悪魔の憑依は承諾によってのみ起こるものであり、追放された後であっても、キリストに立ち返らなければ、憑依の犠牲者が以前の行動に戻らないという保証はありません。

下は私たちを守る神の前では無力で、誰も神に逆らうことはできません。悪魔がもはや天の御座の前で、私たちを非難することができなくなったら、どんなに喜ばしいことでしょう(黙示録 12 章 10 節)。その時まで、聖霊(ヨハネ 14 章 16, 26 節; 15 章 26 節; 16 章 7 節)と私たちの義なる主イエス・キリスト(第一ヨハネ 2 章 1 節)が、私たちのための神の前の弁護者としていて下さることは、最も有益なことです。

6. 抵抗 : 教会の初期に使徒たちが特別な力を持って活動した時でさえ、今日よく言われる悪魔との真っ向対決であった「霊的戦い」でさえ、非常に限定的なものであったことを考えるのは有益なことです。これらの偉大な信仰者たちは、全体として現代の私たちと同じような(私たちがすべきである)活動をしていました。彼らは神を求め、霊的成長に専念し、神から与えられた務めに精力的に取り組み、善い戦いをしました。彼らは、目に見えない争いについて、(特定の身体的症状や病気など以外には)知りえない詳細を過度に気にすることはしませんでした。もし、上記のような理由であからさまな奇跡が頻繁に力を発揮していた時代にそうであったとしたら、今日、もっとそうであると言えるのではないのでしょうか。私たちは、差し迫る悪魔に対する神の勝利とその闘いにおける私たちの立場についての聖書の知識から、大きな励ましを受けています(ルカ 10 章 18 節参照)。それによって多くのことが説明されているので、目に見えない争いを考えるとき、この世界との中で生きる私たちは、聖書的で、神を求め、神を畏れる正しい視点を持つように導かれます。ですから、「書いてあることを越えてはならない」とあるように、オカルトの匂いのするものには距離を置くように気をつけ、決してそのような病的な魅力に惹かれるべきではありません。(第一コリント 4 章 6 節)

しかし、霊があなたがたに服従することを喜ぶな。むしろ、あなたがたの名が天にしていることを喜びなさい。(ルカ 10 章 20 節)

今日の世界において、悪魔と直接出くわすことは以前よりも少なくなっているように思われます。これは、当面は科学技術を使って信仰を弱体化させることに集中しようという悪魔の戦略的判断によるものでしょう。しかし、その理由の一部は、聖霊の抑制の働きによってそうされた神の主権的な決定にも起因しているようです(第二テサロニケ 2 章 6-7 節)。要するに、私たち信者がプレッシャーにさらされる時、そのプレッシャーの源(悪霊かそれ以外か)を正確に知ることはできませんが、神がどんな窮地においても私たちと共におられることは覚えているべきです。

わたしは確信する。死も生も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、高いもの(選民)も深いもの(墮落者)も、その他どんな(この地上の)被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのである。(ローマ 8 章 38-39 節)

また、目に見えない敵とともに、目に見えない多くの味方、神の天使たちが私たちのためにこの戦闘に従事してくれていることを保証する多くの聖句も慰めとなります(創世記 19 章 11 節; 列王紀上 19 章 5 節; 詩篇 91 篇 11 節; ダニエル 6 章 22 節; マタイ 4 章 11 節; マタイ 18 章 10

[節](#); [ルカ 16 章 22 節](#); [使徒行伝 5 章 19, 12 章 10-15 節](#); [ヘブル 1 章 14 節](#))。私たちは、自分の周りの霊的な戦闘の潮の満ち引きを感じることができず、戦場の中の一兵卒のように、自分のいる塹壕の外で何が起きているかは概念的にしか認識できないのです。このような状況下では、目に見えるものではなく、信仰によって歩み、神を揺るぎなく信頼するのを学ぶことが取るべき道です([詩篇 23 篇](#); [第二コリント 4 章 18 節, 5 章 7 節](#); [ヘブル 11 章 1 節](#))。神に近づけば近づくほど、霊的に成長すればするほど、この争いにおいて安全であり、目に見えるものに影響を与える祈りは、より効果的なものになるのです。この研究(とこのシリーズ)で取り上げた事柄をしっかりと理解すれば、聖句の一つ一つ、神との関係を改善する小さな機会の一つ一つが極めて重要であると確信できるはずです。なぜなら、私たちの目に見えるものの向こう側で、もっと大きな、包括的な戦いが繰り広げられているからです。どんな状況でも、特に敵である悪魔に直面したとき、神を信頼することが私たちの主要な防衛線となります。

主は真実なかたであるから、あなたがたを強め、悪しき者から守って下さるであろう。
([第二テサロニケ 3 章 3 節](#))

わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることです。([ヨハネ 17 章 15 節](#))

悪しき者からお救いください。([マタイ 6 章 13 節](#))

結論： 要約すると、私たちはこの虚しさに満ちた地上の霊的な戦場とも言うべき場所で、人生を生きているのを知ることは、気を滅入らせるどころか解放を与えてくれるはずです。この真理を知ることは、私たちを大いに「自由にする」([ヨハネ 8 章 32 節](#); [ガラテヤ 5 章 1 節](#)) のです。なぜなら、私たちはこのようにして、人生のすべての無意味なもの、世間が熱心に追い求めるもの、結局は満足を与えてくれず、本当は重要でもないものをはっきりと理解するようになるからです。私たちは、見えないもの([第二コリント 4 章 18 節](#))、すなわち永遠のものを信仰の目で見て、世界をありのままに見ることができるようになるのです。そして、私たちが現在悪魔の支配下にある世界の様々な場所において、個人的な勝利を獲得するにつれて、キリストの再臨の際サタンとその宇宙が完全に打ち負かされる時に、私たちは究極の勝利の獲得するようになるという確信を持つようになるのです。

悪魔の世界の虚栄を知ることは、その世界の悪から離れ、現世にある唯一の真の答えを得るために神に向かうようにという明確な呼びかけなのです。世界と悪魔は上手い偽りの答えを提供しますが、神だけが真理を持っています。悪魔の領域は広大な砂漠であり、そこには価値の無いもの、長続きしないもの、満たされないもの、誤った指針、空虚な無への果てしない行進しかありません—キリストを通して神においてのみ、私たちは真の方向を得ることができます。この砂漠のような、他のほとんどすべてが嘘である世界で、私たちは神とキリストの中に、冷たく澄んだ、清々しい真理の水を見出すことができます。

一以上 第四部 終わり

第五部「審判、回復、交換」では、サタン王国の敗北と神の王国による置き換えを歴史的にたどります。